

---

# 新戦記IDガンダム～世紀末の復活者～

庵瑠璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新戦記IDガンダム〜世紀末の復活者〜

### 【Nコード】

N0106H

### 【作者名】

庵瑠璃

### 【あらすじ】

対をなす二つのガンダムが誕生してから2世紀半経ったID200年。主人公レイジ・ヒイラギは、謎の試作機『コロナガンダム』に乗り、世界を揺るがす鍵となる……

## Unit001：復活の鼓動（前書き）

### 《本話の登場人物》

レイジ・ヒイラギ

本編の主人公。常時けだるげな目をしているが、何かと思いい悩む種がある『さすらいの思春期男児（自称）』。16歳。

ガルマン・アラーケ

連邦軍中尉。連邦ガンダム4号機シャドーを受領した熱血漢。17歳。

ビリー・カーガル

連邦軍新造戦艦シグヌスのあまりに若い工場長。明朗快活な作業服少年。15歳。

ネオン・ネイルバート

UU軍大尉。ポーンの部隊を率いる隊長。28歳。

アリスト・コーグエン

UU軍軍曹。ネオンの部下にして、隊長であるネオンを慕う。18歳。

フラグ、アイリス

ネオンの率いていたポーンの部隊員たち。

トシリア・ネイビー

連邦軍曹長。連邦ガンダム1号機アサルトを受領したガルマンの後輩。16歳。

ヴェルター・ヴァイタル

連邦軍少佐。連邦ガンダム3号機テトラを受領し、ガンダムパイロットにして最年長。36歳。

アカネ・ヤガミ

連邦軍大尉。連邦ガンダム3機などを積んだ戦艦シグナスの艦長を務める女性。32歳。

ルイ・アジエスター

連邦軍中尉。戦艦シグナスの副艦長を務める少女。機械系にめっぱう強い。17歳。

## Unit001：復活の鼓動

レイジは、目の当たりにしてしまった。大切な仲間が、黒いMSが、不吉な光と爆風を発しながら虚空に散ってゆくのを……。

『……あつ……そんな……ティアー……!!』

「どうあ?!」

レイジはベッドから跳び起きた。寝汗で寝巻が肌にへばりついていた。ここはヒイラギ邸。邸と言えるほど立派な家屋ではないが。部屋の四分の一ほどを占めるベッドから起き、脇のカーテンを開ける。部屋に優しく光が差し込み、一日の始まりを飾った。

：ちつ、またこの夢か。夢というのはつまり、この間まで居た戦友の夢だ。先の戦争で俺と同じくMSパイロットだった。

起きたばかりで眠たく半目になってる俺は、今何時だ？ 的な動作で枕元にあったデジタル時計を見てみる。

『ID1999年 3月29日 7:30』

……ありや、まだ七時半か。少し早かっただろうか。因みにいつもは、というより、ここ二日間十時起床だったんや。七時半はいくらなんでも早過ぎやな。

俺はレイジ・ヒイラギ。さしずめ、さすらいの思春期男児と呼んでもらいましょか。あ、ツッコミは無しの方向で。

洗面所に向かう。家の中はカーテンのせいで少し暗いが、隙間から陽の光が漏れ出ていた。

洗面所の鏡に向かう。俺の死んだ魚のような目が映る。そして、俺の白い、少し金の残った髪の毛に糸屑がついているのを確認し、無造作に取り除いた。

顔を洗う。朝一の水の冷たさは、瞼がめくれ上がるような爽快感がほとばしる。しかし、一秒と経たないうちにまた元の目に戻った。

起きて程なくして空腹のサインが催された。フライパンや油、まな板などを台所にセット冷蔵庫の中を覗く。

「えーっと、一昨日買ったほうれん草とベーコン……あった」

冷蔵庫からそいつらを取り出し、まな板の上に置く。フライパンに油を入れ、火を入れる。

まず、ベーコンを細かく切り、それをフライパンにぶち込む。

ジューツ

いい音といい匂いのハーモニーが朝のキッチンにて奏でられていた。

そして、まな板に横たわっているほうれん草を切った。ついでに、昨日の味噌汁の残りも温めた。

俺は今ワケありで一人暮らしやねん。ホントは相続とかわけのわからんアレで15歳の俺には家は持てないらしいんだが、つい先週まで戦争があつたんで役人の方々が細かいとこまで手がまわらないんやと。それに俺は、中身は思春期でも外見は無精髭を僅かに残し

た男だから25歳くらいには見えんじゃない？　つーかそれ、ただの剃り残しじゃね？　なんていうツッコミがくるかもしれない。

そんなことはさておき、飯が出来上がった。平らな皿に野菜炒めを盛り付け、茶碗にご飯を装い、さつき温めた味噌汁をお椀に注ぎ、ダイニングの無駄に大きい四人掛けのテーブルに配膳した。ダイニングにも朝の優しい光が差し込んでいて、とても穏やかな気持ちにすらなれそうだ。

ここはブリュッセル郊外。俺はこの出身。ではどうして日本食を作るのか。

昔俺には養母がいた。その養母が日本食が大好きだったのだ。俺自身も好きになったので、養母亡き今も、我が家の食卓の日本食はしっかりと踏襲されている。

「……いたあきあーす」

俺はけだるそうに挨拶し、箸に手をつける。食事のときいつも思う。これ、かわいい女の子が作ってたらなあ、でも俺の料理を越えられる人いなくね？　といったようなとめどない馬鹿げた妄想に陥ってしまう。

かわいい女の子、か。ティアには想いを伝えてなかったっけ。あいつには、何もできなかった。

馬鹿な妄想の筈が、辛気臭い話題がカミングアウトし、揉み消すように朝食を食った。

「にゅいあ〜」

眠い。飯を平らげて欠伸が出ってしまった。いつもより二時間以上早く起きたからだ。

「……寝よ」

俺はソファーに倒れ込んだ。

「……んあ……」

ソファーにねっころがっていた俺。頭をポリポリかきながらソファーからむくつと起き上がる。寝汗が酷い。またあの夢でも見たのだろうか。

そう思い、溜め息をつく。

「……ちッ」

過去を断ち切れない自分に苛立ちを覚える。まあ、ついー、二ヶ月くらい前の話なんだが。

しかし、そんなような日々が三ヶ月も続いた。そのうち忘れるだろうと思っていたが、ここまで引きずるのは流石に憂慮すべき事態だ。こんな日がこれからも続けば体が持たない。苦しさで心が潰れてしまいそうだ。

「……ッ！」

苛立ちでローテーブルをガン、と叩く。

俺はこんなにも小さい奴なのか、いつまでもねちねち引きずる女々



しい奴なのか。

思いを泥沼にしながら苦悶してする。ソファーに座っているながら、その泥沼に吞まれてしまいそうだった。

すると、外からカコン、という鈍い金属音が聞こえた。

「……………ビラかなんかか？」

ソファーから立ち、おもむろに表へ出てみると、うちん家のポストに何らかのチラシが挟まれていた。さっと取り出してみると、その正体はいろんな学校の案内のチラシだった。

家に帰りながらそのチラシを見てみた。ドアを開けようとビラを持っていない左手をドアノブにかけようとしたところ、これに目が留まった。

「『学校が全額負担！ S 特待生』……………だと……………？」

それはエリシオ学園。なんでも、外国語、数学、国語のテストが満点近いとなれるらしい。いろいろあってお金には困っていないが出費を減らせるのは賛成だ。それに、この嫌な生活から離れられるし……………。

「……………さて、ちょっと出掛けるか」

ドアノブを引き、適当に楽な恰好に着替え、財布を寝室にあるデスクの引き出しから取り出し、ビラを左手に家を出た。過去問購入のため本屋に行くのである。

あれから三ヶ月経った10月。MSには詳しいので建築検定の勉強にも興味があった。それと共にエリシオ学園の過去問研究もしていた。メチャクチャ難しいというわけではないが、満点は難しい。どこかでケアレスミスをしてしまう。因みに、建築検定は今月。

「…………ふあゝあ…………」

いかん、欠伸が出てしまった。もう0時か。デスクには建築検定の過去問。テキストは真っ白だが、ノートにはいろいろな図が書きなぐられている。

「ねみいゝ」

百獣の王のような大きな欠伸をし、ベッドに倒れ込んだ。

あれから更に三ヶ月が経った翌年ID2000年1月。いよいよ今月がエリシオ学園の入試。因みに建築検定は無事合格した。後は入試やな。

意外な関門。入試手続きであった。俺はエリシオ学園に出向いていた。受付の人と抗議している俺がいた。

「あの……保護者の方は……？」

「だから居ねえゆうてるやん。天涯孤独なの俺は」

「じゃあ、孤児院に入っして下さい」

受付のネーちゃんは融通の利かなそうな顔で俺をあしらった。

「やーなこった。つーか生活に困ってねーし。財産なら家に残ってるし」

「財産の問題では……」

受付のネーちゃんが吃った。

しばらく沈黙が続いた。このままじゃあ受けさせてくれんな。ならばあー！

「じゃあこうならどうや？ S 特待合格しなかったら不合格にしてええねん。それで文句ねえな？」

「！？」

受付のネーちゃんが目を丸くする。俺はネーちゃんの反応をしかと待っている。

「……わかりました。ではそのようにさせていただきます」

よっしやあ！

というわけで満点をとるしかなかった俺だった。ひえ〜大変や。他人事のように樂觀していた俺だった。

そして来たる1月27日。入試当日。俺は試験会場に来ていた。外はまだまだ冷えていて、吐く息は白かった。周りにはマフラー等の防寒具を着用して暖かそうに校舎敷地内を歩いている奴らが多いが、俺はあまり寒がらないので、防寒具の類は殆ど持っていない。今はコートも着ておらず、薄手のセーターを上に着ているだけだ。季節感がないとよく言われるが、残念ながら俺はあまり気にしない。さて入試。一発勝負。負けられない。……のだが、ギョルルルツ！

(腹痛かよおー！！！！)

試験開始30秒前、急に俺の腹が信号を出しやがった。薄着が祟ったのだろうか。うぬぬ、愚かな……。

(ぐう……負けられるか……！)

凄いい形相で腹を押さえながら問題用紙と解答用紙が配られる。配られた時前の奴が、どうしたのこの人？ 的な顔で見してきた。ぐう、ためえには負けねえからな……！

そんなこんなで三教科全て終了。穏やかな試験など俺にはなかった。休憩時間に駆け込んででも止まず……。

試験終了の瞬間にも駆け込んだ。そこでようやく落ち着いた。

……もっと早く落ち着けての！

やっと解放され、足取りが軽くなり浮遊感さえ覚えた。

校舎を出ると、外は正午過ぎの空で幾分暖かくなっており、浮遊感を覚えている今の俺にはうってつけだった。

さっき前の席だった奴がたまたまいた。髪はオーカーでセミロングの髪をした気さくそうな女だった。

「あれ、お前さっき……」

その女が右横から話しかけてきた。

「……ああ。うん」

「あんたどこの中学だったの？」

こんなことを聞かれた。

「ああ。俺行ってなかったから」

「え、じゃあ独学？」

そこ訊くのか？

「あ？ まあ……そうかな。貯金あったし」

「……へえ。そんなこともあるんだ」

理解度50%的な反応をする女。まあ知らなくて当然だ。111  
14歳の時の俺への多種の英才教育を知らねえんだからさ。

同月31日、俺ん家のポストにS特待合格の通知が届いていた。よく受かったよな、あんな状況で。そう思いつつ、自宅のソファで肩を撫で下ろす俺だった。

同年4月7日。世界を統べる地球連邦軍は敵軍であるUUの虎ユニバーズ・ユナイテッドの子『コロナガンダム』の在りか突き止めることに成功し、コロナ奪取作戦を敢行することになった。

地球連邦軍本部第五会議室。若干暗いその部屋には座っている数十人の士官と、前で立っている総司令官がいた。

「諸君、今日はよくぞ来てくれた。」

いかにも厳つそうなおじさんが、士官達の前で挨拶をした。

「諸君らが知っている通り、コロナは、ブリュッセルの廃棄寸前の倉庫に安置されている。なんとしてもあの危険なコロナを奪取するのだ！」

総司令は、右手に拳を握りながら力説する。

「皆の健闘を祈る！ 以上だ。但し、新造の強襲用戦艦『シグヌス』のクルーはここに残れ。それ以外の者は、それぞれの配置に戻れ。では、解散！」

だいたいの士官達はぞろぞろと部屋から出て行き、あつという間

にいらなくなってしまうた。残ったのは四人のみであった。

「……では、君達四人が中心になってシグヌスを指揮してくれ。……  
ヴァイタル少佐は、MSに乗るんだな？」  
「……はい」

物静かそうな、ダンディで背の高いおじさんが言った。

「……では、ヤガミ大尉、君をシグヌス艦長に任命する」  
「はい！」

茶色いセミロングの髪の毛をした、少女のような未熟な雰囲気が残っていないアカネ・ヤガミが答えた。

「……では、アジエスター中尉、君をシグヌスの副艦長に任命する」  
「了解しました」

無機質だが透き通るような声をしている、ツインテールで黒髪のアジアンビューティー、ルイ・アジエスターが答えた。この女性、顔とスタイルに関しては規格外の120点でも決して過大評価ではないが、他人との干渉をあまり好まず無愛想、というように、美貌を無駄にしまっているちよっぴり残念な子。

総司令の話は続く。

「ヴァイタル少佐、アラーク中尉、君達にはシグヌスのMSチームの指揮を執ってもらおう」

「……了解」  
「はっ！」

ヴァイタル少佐ことヴェルター・ヴァイタル、アラーク中尉こと

ガルマン・アラークの順に答えた。ガルマンは、オレンジに近い黄色の髪の色をした天パで、覇気を隠しきれていない男性。

「……では、シグヌスを発進させる!」

総司令のその言葉で、ブリーフィングは終了。

：俺はガルマン・アラーク。連邦軍中尉だ。たった今ブリーフィングを終えて、四人でシグヌスのある本部のすぐ外の船の発着場へと向かっている。

「少佐、」

「……なんだ？ 中尉」

俺はヴェルターさんに聞いてみたいことがあったんで聞いてみた。

「コロナって、どういう機体なんですか？」

「……私も詳しいことはわからない。……だが、危険なシステムが搭載されているということだけは……」

「……脳波が……」

「そつだ。一刻もはやく廃棄処分しないと手遅れになる」

そういったヴェルターさんは無表情であったが、どこか焦りを隠せない感じでもあった。

それもそのはず、コロナとやらは人間の脳波を刺激するセンサー



が付いてるとかでかなり危険な機体らしいからな。

「……………そうですね……………」

さっきまでゆったりしていたヤガミ大尉こと、アカネさんもヴェルターさんの言葉に神妙になっていた。

「……………とにかく、今は急ぎましょう」

あまり感情の籠ってない声で俺たちを促すルイ。この子、結構魅力的な女性だが、何を考えてるのかいまひとつよくわからない。うむ……………。

シグヌスを目の前にした。デカイ。以前に聞いた話だと、シグヌスは、戦艦にしては少し小さい方らしいが、やっぱり人間である俺からしてみればデカイ。整備兵達が、せわしなくシグヌス発進の準備をしていた。

シグヌスの中に入った。廊下では、連邦の灰色の軍服を着たクルーたちがせわしなく歩き回っていた。

「……………そーいえば、俺のガンダム、どんなんだ……………？」

新しく配備されることになった連邦製のガンダム。どんなもんか気になったので、真っ先に整備工場へ向かった。

シグヌスMSハンガー。ガシャーン、ガシャーン、と機械が動い

ている音が響いている。その中心に、水色の髪の毛をした元気に声を張り上げて他の整備兵に指示を下している男、ビリー・カーガル工場長がいた。

「よお、ビリー」

「おお！ ガルマン！ ブリーフィングオワタ？」

ビリーは気さくに答えるが、

「……なあ、いっぱいシツコミどころあんだけど」

「え？ おっ い？」

「ちげえわ！……！」

俺は激しく否定する。

「まずタメ口遣うな」

「ヤダ」

「清々しいくらいにストレートに言ってくれたね」

とりあえず殴っておく。

「殴ったね……親父にも殴られたことなかったのに……！」

「やかましいわ……！」

ああ、不毛だ……。心配だ……。こんなんで大丈夫か？ ウチら。こんな風に頭を抱える俺だった。

同日。ヒイラギ家では……。

「にゅいあ〜」

いつも通り、大きな欠伸をしながらレイジは起床した。寝室にあるカレンダーに向かう。

「ぬあ〜、あと二日で高校の入学式かよ……たりー」

：俺はカレンダーを見ながら欠伸混じりの声でぼやく。学校は楽しみや。でも入学式はかつたるい。

「んあ？ ……あれ、今日俺の誕生日じゃね？」

ID184年4月7日。これが俺の生年月日。

「てか誕生日とか一年更に年取るだけやん」

オッサンみたいな発想だが、これはれっきとした事実や。避けてはならない事実なんや！ ……て、何言っとるんや俺。

「……あ、そうだ。畑行かねえと」

俺の家は、去年の5月から集合家庭菜園を持ったんや。せやから収穫時期からしばらくの間は、野菜、果物にお金をかける必要がNothingやで！ 財布には優しいんやけど、腰には厳しいんや。屈むのが辛いんや、これが。

その家庭菜園についた。やっぱりこーゆーとこって、土のいい匂いがしていいよな。ちよつと堆肥のにおいがするのも、これはこれでアリなのかもしれんな。

俺は、畑に水や肥料をあげ、家庭菜園を出た。

「さて、ジャ　プと米でも買うか」

俺の足は近所にあるスーパーへと導いている。スーパーなのに普通に　ヤンプが売っているという変わったスーパー（てかスーパーなのか？）。

店内。広い。ここの配置を把握するのに三週間以上かかった。

スーパーという名に恥じず、食料品から日用品までいろんなものが置いてある。

出入口付近にあるマ　ジンとかと一緒に置いてあったジ　ンプとレジの近くにあった米20kgを買い、店を出た。俺はジャン　と米を両手に持ちながらえつちらおつちら家に向かった。

『あーるー晴れたーひーるーさがりー』

今の時刻はだいたいそんな感じ。ギャ　マンガ日和ではない。

「誕生日に米切らすとかないわ」

俺はぼやく。せつかくの誕生日に米が無いとか有り得へんやろ！  
？　え、どうでもええやんって？　そら言っちもつたら身も蓋も無えがな。

方言混じりにぼやきながら、俺はいつもの道をいつものように歩いている。物事に永遠はないというが、俺のこの日常はいつなくな

ってしまうのだろうか。

ドゴーン……！

どうやら言った次の瞬間にそれが起きてしまいそうである。

「なんや一体？ あの方角、もしかして……」

俺の家の方向じゃん！

そらを見ると、二機のMSが爆撃をしている。

「また戦争がしたいのか、アンタたちはア！ ……って、アレ？」

別に場にそぐわないわけではないが、なんかどこかで聞いた気がするが、気のせいだよな。

そう自己満足し、潮の香る海岸線沿いの道路を急ぐ。

家に行ってみると、屋根が吹っ飛んでる箇所がある。どうやら、ただ事ではないことが明らかになった。

「また戦争かよ……」

また戦争が起こるのは御免だ。もう二度と起こって欲しくない。もう、戦争で誰かが大事な人を失うなんて、まっぴら御免こうむる。

爆撃をしているMS『ポーン』2機のパイロットの会話。

「隊長、本当にこんなところにコロナがあるんスカね」  
「情報通りだとここだ」

隊長と呼ばれたパイロットは部下の質問に淡々と答えた。

「ううむ……熱源反応は……まだ……」  
「……そうか。引き続き搜索を続ける」  
「了解！ ……ん？」  
「どうした？」

隊長らしき人が部下の反応に疑問符を浮かべた。

「今通信が入ったんスけど、連邦のガンダムが三機こちらに向かっ  
てるッスー！」  
「なに！？ ……やはり三機なのか……」  
「え？ あ、そういえば、連邦ってガンダム五機製造したんじゃあ  
りませんでしたっけ？」

部下が隊長に訊う。

「一機は何者かに強奪され、もう一機は……連邦の機密事項らしい」  
「そうですか……じきに援軍が来まつせ。それを待ちましょう」  
「……そうだな」

隊長はまたも淡々と答えた。

一方の連邦のガンダムチームは。

：俺は、ビリーとの他愛のないヤリトリをしたあと、俺のガンダム、シャドーを受け取り、ヴェルターさんと後輩のトシリア・ネイビー曹長と共に出撃。もちろん、コロナ奪取のためである。

「ネイビー曹長、遅れるなよ」

「はい、中尉！」

トシリアは、従順そうに言った。眼下に広がる海がきらきら光っていた。

：ヒイラギ家が、ていうか屋根が吹っ飛んでしまったので、海沿いの道をとりあえず走っていた。

爆撃がやまない。自分のすぐそこにミサイルが落ちるなんて当然だった。

ミサイルや弾丸の雨の中、なんだかよくわかんない工場だか倉庫だかに行き着いた。見た感じ結構ボロそうだが、激しい雨宿りでも事足りそうな建物であった。

「……とりあえず入るか」

俺はその建物の中に逃げ込んだ。すると、薄暗い建物の中に、20m超のMSがずうん、と仁王立ちしていた。

「ムッファ……MS！」

驚いた。こんな近所に俺の嫌なMSがあるなんて。あいつも俺も乗っていたMSが……。

同じMSではないが、人間のおよそ十倍の大きさの巨人には変わりない。

「もう乗らねえって決めたんだが……」

だが外の爆撃は依然としてやまない。ここがぶっ壊れるのも時間の問題だ。

どうやら俺に選択肢はないみたいだ。

「……仕方ねえ」

俺はそのMSに駆け寄り、半開きになっていたコクピットハッチを開け、コクピットに乗り込んだ。機内のキーボードをタッチした。

「システム起動……」『無茶苦茶だ！　こんなOSでこれだけの機体を動かさうだなんて！』

……あれ？　おもつくそ　ラじゃん。

この機体、あまりにも酷いOSだったので急遽書き換えることになった。

「エネルギー効率悪すぎるだろ。こんなんじゃあ90%も熱エネルギーに変換されるじゃねえかよ」

なんだかわけのわからないことをいいながら、レイジはクイツクネスなキータッチを続ける。

「……よし、中枢のシステムはこれでOKだ。あとは、各部のシス



テムが起きるのを待つだけか」

…とりあえず一段落つき、俺は腕を組みながらシートに踏ん返り返った。コロナはいかにもシステムが起動しているような音をたて、コクピット内部のあらゆるところもチカチカ光り始めている。

ピーッ！

ようやく起動した。いつでも発進可能になった。

「アム……レイジ、行きまーす！」

柵を破り、開閉式の屋根のボタンを見つけ、ポチッと押した。頭上には、蒼く澄んだ空が広がっていた。

一方では、ポーンの二人組に援軍が八機来て、ポーン十機VSガンダム三機の戦闘体勢に入った。

「……連邦が来るというのならやむなしか。よし、フラグ、アイリスはコロナを捜せ。それ以外の者はは私に続け！ わかったな？」  
「りよ……たっ隊長！！」

隊長、いや、名前を明かすと、ネオン・ネイルバートにフラグと呼ばれた人物が悲鳴を上げた。

「どうした？」

「こ、コロナが……！！」

さつきもネオンと一緒にいた部下が声をあげた。その目線の先には、工場から姿を現したコロナがいた。

：コロナで、工場だか倉庫だかの開閉式の屋根を開け、外に飛び出した。海沿いに見えるのは、十機のポーンだった。

「オイオイ、さつきより増えてんじゃねえかよ」

さつきの量産型がなんか増えてるし、遠くにはなんかわけのわからん奴らが三機いるし、……なんなんだよこれ。

「武装は？ ……両手首の100mmビーム砲、頭部の80mmバルカン砲、両前腕部にビームサーベルとビームシールド……まあこれだけありゃ平気か」

そう言ってバーニアを吹かしたところ、

「何だコイツ?? フツーに遅エし!」

少なくとも俺が慣れていた機体よりは全然遅い。下手すれば、この量産型よりも遅いかもしれない。武装が多過ぎるんじゃないか？

「なんか捨てられるやつ……って全部固定武装かよ!」

全ての武装が機体の一部となってしまうため機体ごと分解しないと外せないのだ。

「んんど臭エなア……」

ぼやくしかない。外見は結構カッコイイのに、これじゃあ砲台のような運用しかできない。敵も『俺』を討とうと一斉にきている。

「ええい、やるしかねえ！ 少なくともガ タンクよりは動ける！」

やるしかない。乗っちゃったからには。

だが相手のコクピットやエンジンを破壊するまでではない。メインカメラと四肢さえ破壊すりゃ相手は十分動けなくなるはずだ。

「とうあ！」

V字斬りで相手のうち一機の四肢を切断。漫画版のVガ ダムのアレみたいな感じである（多分）。

「な、何だ！？ このパイロット……あのコロナを動かすなんて……！！！」

敵のMSはダルマ状態になり、地面に叩きつけられた。

「次だ！」

俺は牽制にバルカンを数十発撃った。もう既にわけのわからん三機がすぐそこまで来ていたがこの際放っておこう。

「くそっ……撤退する！」

隊長機は俺が斬った機体のコクピット部を持ち、他の八機も同様にいずこに去っていった。

「さて、あとは面倒臭そうな三機か……よりによって一番やな組み合わせが残っちまったな」

とぼやいたその時、俺の頭にある諺がよぎった。

「……『逃げるが勝ち』!」

方向転換し、逃げの体勢に入った。

「逃げるのかよ!」

スピーカーごしに相手のパイロットの声が聞こえた。覇気丸出しの男の声だ。と同時に、真っ黒いMSがバーニアを吹かして追ってきた。

「うおっと!」

やべえな。コイツで逃げ切れる気がしない。すぐに追い付かれちゃう。

「コイツで逃げ切れるのか?……ん? なんだこれ」

俺はコンソールを見る。するとなんかゲージが溜まってるのが見えた。

「……『Solar Power』?」

その文字と同時に『BOOST』というところにもカーソルがあったので、Enterを押してみた。

すると機体背部の閉じていた4対の羽が展開した。

「なんだこれ（あれ）！？」

レイジ、敵共にこの一言。

「……まーいいや、これならなんか雰囲気的に逃げ切れそうだ」

コロナは、今までは背中的一部分のみからバーニアを吹かしていたが、今度は八本の羽いっぱいバーニアを吹かしている。さっきとは比べものにならないくらい物凄いスピードが出ている。

：俺は加速時、思わず慣性の法則に逆らえずにのけ反ってしまった。

：コロナを逃がしちまった俺達連邦ガンダムチーム三機。

「ちくしょう……今度こそ……！」

俺は連邦ガンダム4号機シャドーの機内で拳を握る。

「……アラク中尉……」

トシリアは、無線通信を介して俺を案じてくれている。だが、答えられなかった。悔しい気持ちでいっぱいだった。

：俺はひとまず近所にある森の中にコロナを隠した。

「長くは持たんと思うが……」

またコロナを奪取しにくることは目に見えてるが、今はこれしか手段はない。

「さて、家、直すか」

俺は数ヶ月前に二級級建築士の免許を取った。道具と機材さえあれば家は応急処置はできるで！

てなわけでぶっ壊れた自宅に着いた。あー屋根吹っ飛んでるよーやーねえー。そこ、古いとか言わない。

「えーっと、日曜大工セットは……これか」

俺はちよっぴり大袈裟なかい箱の取っ手を左手に持って屋根の上に攀じ登った。屋根は、全体の三分の二くらい吹っ飛んでしまっている。

「……ちいとてこずるかなあ……」

トンカチを左手にぼやく。以前俺は両刀遣いだっただが、今はサウスポーである。昔は右手も左手も同じ感覚で使えた。『あの日』までは……。

「あー鉄骨足りんなー。んー参ったなあー……しゃーねーな、Z.O.i.t.にでも行つて鉄骨買つてくつか」

財布をポツケに入れ、のろのろと歩きだす。

「んあ……なんかなあ。てか、誕生日早々んでこんな疲れなくちやなんねえんだよ……こんなハプニングだらけの誕生日生まれて初めてd……いや、ちがうか」

そう言っつて俺は再認識する。そう、初めてじゃないのだ、こんなに忙しい誕生日は。もっとも、俺に物心なんてついていなかったみたいだが。

そんなことを思いながら、不安げな空を拝んだのだった。

## Unit002：偽りの力（前書き）

### 《本話の登場人物》

レイジ・ヒイラギ

本編の主人公。半ば不可抗力でコロナガンダムに乗ることになり、敵を退けたものの……。16歳。

ユキミ・サイン（New!）

本編のヒロイン。金髪碧眼の典型的な西洋系少女で、かなり活発な性格。15歳。

ガルマン・アラーク

連邦軍中尉。直情的な部分が隠せない血気盛んな青年軍人。17歳。

ビリー・カーガル

連邦軍新造戦艦シグナスの工場長。ガルマンとはほぼセットで行動しており、彼をしばしばからかう。15歳。

アカネ・ヤガミ

シグナスの艦長。女性らしく、気をいろいろなところまで行き届かせる。32歳。

ルイ・アジエスター

シグナスの副艦長。感情を込めず、必要以上のことは話さない少女。17歳。

シエラ・クリッジ（New!）

シグナスのCIC担当の少尉。橙色の長い髪を後ろ一本で束ねてい



る理系女性。 22歳。

ヘンリー・エルリック (New!)

シグナスのオペレーター担当の少尉。眼鏡を常時着用しており、声が精悍。 23歳。

## Unit002：偽りの力

：Zoiに着いた。ここは所謂、ホームセンターのような所だ。自動ドアが開き、中に入る。右には園芸用の商品が並んでいて、左にも似たようなのが並んでいた。土や草のにおいがするのも頷ける。今日は平日ゆえか、おばちゃんやオッサンの客が多く、店が何となくまったりしていた。

俺はたまたま目に付いた胡瓜の種の入った袋を摘み上げ、その辺で手に入れた籠に入れた。

「さて、次は鉄骨と」

ここに来たついでに胡瓜の種も買うことになってしまったが、気にせずに日曜大工の区画に進む。

店の案内に従い、果たして鉄骨も売っているコーナーに着いた。が、デカイものが置いてあるこの区画は別物で、何か倉庫みたいな薄暗い所だった。天井が高いこの区画には、人は殆どいない。自分の足音も響き、鉄のにおいも鼻につく中、寸法のメモを取り出す。

「こいつにするか」

ぴつたりなサイズこそなかったが、『大は小を兼ねる』の理論で、寸法より少し大きいのを取り出した。大きけりゃ、切断すりゃええんや。そいつらを右手に五本ほど担ぎ、左手には籠を持っていたが、胡瓜の種だけだったのでその辺に適当に放置した。誰かが片付けてくれるさ、きつと。

会計を済ました。店の人とこんなやり取りがあったような。

「あの、（鉄骨を）お持ち帰りです……？」

「そうだけど、何か？」

「……大丈夫なんですか？」

「ああ。アイ・アム・ア・ストロングマンですから」

「いや、そんなに爽やかに歯を見せられても……」

「違う違う、『見せる』じゃなくて『魅せる』だ。そこ大事だから！」

「……は？」

というわけで帰ってきたのだった。俺は五本の鉄骨を担いでえっちらおっちら海岸線を歩ってきた。正直、少し恥ずかしかった。周りの人メツチャ見てたんだもん。まあ、配達料は0円ということでは

「さて、続きといこうか」

腕を捲くり、作業再開！ と思ったが、どっと疲れが出た。ちょっと今日は体に無理をさせすぎたみたいだ。

「……今日はムリやな」

俺はテキストにたまたまあったプレハブを壊れた屋根に被せて、降りて、寝た。

翌朝。昨日と何ら変わらない朝がやってきた。レイジはまたも早くに目が覚めた。

「ふあゝあ……んあ、7:00? またも早過ぎやな……」

眠たげに目を擦り、朝の一連の習慣をおもむろに遂行し、朝食を作った。高速の早さで出来上がり。

「いたあきあーす」

：おいしくいただく。無言で箸を進める。

昨日という一日を振り返る。家庭菜園で野菜達に水をあげて、スーパーでいろいろ買った。んで、MSが出てきて、コロナとかいう奴に乗って駆逐した。Zoitも行っているいろいろ買った。んで、寝た。

とりあえず誕生日らしくなかった一日だったのは保証できる。まあ、ケーキも誕生日パーティーもいらないけどね。

「ごち」

ヒイラギ式のごちそうさまである。なんで略すのかはの理由は敢えて割愛。

歯を磨く。俺はクリア リーンで磨いてる。

歯磨きを終え、少し瓦礫の散らかっているリビングのその天井にあるプレハブを見る。

「流石になあ……いつまでもプレハブなのは」

「ビミョーやるな。というわけで、」

「続きやるか」

日曜大工セットを片手に、屋根に登った。鉄骨は上に置いてあるので、そのまま作業に取り掛かった。

鉄骨を並べてみる。

「……あ、色微妙にちげえわ」

気にすることではない。どうせ鉄骨なんて外から見えないもん。んなわけで、作業開始！

「んー……こうした方がいいのか？」

今の俺は、試行錯誤している人を絵に描いたような人物であろう。鉄骨を照合し、適当な大きさに切断している。資格はあるが、こーゆーのは初めてだから、気持ち慎重になってしまう。

「……あつ、きた」

鉄骨がいい具合にはまった。どうやら切断加減がどんぴしゃりだったみたいだ。

「うーし、この調子！」

ちよつぱり調子に乗っちゃった感が否めないが、調子を崩さずに作業を続けた。

同じころ、軍港からまだ発進していないシグヌス。コロナが起動したという騒ぎで、クルー達は昨日よりも慌ただしく、騒がしい様子である。

そんなごたごたなシグヌスである中、ブリッジも何となく落ち着かない様子だ。

「おい、コロナが起動したらしいぞ。知ってるか？」

「ああ」

というような会話が交わされる中、連邦ガンダム4号機シャドーのパイロット、ガルマン・アラーク中尉が入室してきた。副艦長であるレイ・アジエスター中尉がそれに振り返り、彼を手招きした。彼女は、彼に話があるようだ。

「アラーク中尉、何故コロナを取り逃がしたのですか？」

「……こっちの調査不足だ。コロナがあんなに速い機体だとは聞いていなかったんだ……クソッ！」

…俺は、副艦長であるレイ中尉に悔しさを隠せずに答えた。

「……悔やんでも仕方ありません。次の対策を考えましょう」

レイ中尉は無機質に答えた。中尉のフットワークの軽さは120ノ100点だ。だが、もう少し物腰柔らかに言ってもいいと思うのだが。

「アラーク中尉、」

艦長こと、アカネさんが俺を呼んだ。

「なんですか？ 艦長」

「その……ブリュッセル工場区周辺に民家があったでしょう？ その調査をロールアウトしたての戦闘機『トラヤヌス』のテストも兼ねて行ってきて欲しいんだけど、いいかしら」

「ああ……はあ」

曖昧な返事をする。その理由は……

「……あつ、アラーク中尉はそういえば、戦闘機の操縦……苦手なんだっけ？」

そうなんだよ。MSは得意だが、射角が狭く格闘攻撃が困難な戦闘機は苦手だ。でも、

「MS戦闘にならないのなら、満足に操縦できます」

まあ、ホントのことだし。

「そう？ 一応工場長のビリー君を同伴させるけどね」

「ああ、頼みます」

俺は軽く会釈してから整備工場へと足を運ばせる。

廊下。出発間近でさっきよりもせわしなく兵たちが歩き回っている。さっきもそうだが、コロナのことでかなり話題になっていた。敬礼をしてくれる兵士もいるが、コロナの話をされると、俺達が確

保出来なかったのが気まずくてきびきびとした返事を返せないでいた。その度に、兵士たちに訝られたが、そんなものはスルーした。

整備工場についた。相変わらずガシャーン、ガシャーン、という音が響いている。ハッチの方向に目を向けると、戦闘機にしては若干大型な戦闘機があった。あれが噂のトラヤヌスだろうか？

「ビリー！」

遠くからビリーを呼ぶ。

「なんだーい？」

「トラヤヌスのテストをする！同時に、地域調査もする！」

「うん……テストはいいけど、地域調査ってなんどえ？」

「田舎モンかお前は」

ツッコんだあと、

「戦闘区域に民家があった。そこに調査に行く」

「あいよ。トラヤヌスならいつでも出れるぜい」

「そうか。んじゃ、行くぞ」

俺は、ビリーに導かれ、トラヤヌスに向かった。やはり、ハッチの近くにあったちよい大型の戦闘機がトラヤヌスであった。

「では、行くぞ」

『了解です、アラク中尉。お気をつけて！』



機内モニター越しにオペレーターであるヘンリー・エルリック少尉の精悍な声と、彼を特徴づけるメガネが目立っていた。明るそうな印章だ。

「トラヤヌス、出るぞ！」

大空に飛び立ち、閉じていた羽根を広げる。このままブリュッセルに急ぐとしますか。

「どうだい、トラヤヌスは？」

「うん、悪くないな」

後ろにいるビリーに調子を聞かれる。俺達は今、ブリュッセル上空を飛んでいる。この辺は被害がなかった住宅街。

「この辺結構民家多いよなあ」

助手席に座っているビリーは下を見ながら呟いている。

「この辺りからか……」

工場区。海岸線沿いにいっぱい建物が並んでいる。爆撃を受けた痕跡が所々残っている。でも、その殆どが家ではない。民間の工場ばかりだ。

すると突然ビリーが、

「おい、あそこに誰か人がいるぞ！」

タメ口を使ってるが、今回は見逃そう。

「どこだ？」

「ほら、海岸沿いの道路のあたり……なんか穴の開いた屋根の上にいる奴」

下を指差しているビリー。俺も操縦桿を握ったまま下をしてみる。

「え、うーん……あれか！」

白髪の男が屋根を直している。爆撃でやられたのだろうか？

「あの辺で降りるぞ」

「おう」

トラヤヌスを降下させ、近くの森林に着陸させた。緑が陽光に映えていて、何となく穏やかな気持ちになれた。

「よし、着いた」

「んー気持ちいい！森林浴いいねえ」  
「だな」

と、エンジンを切る寸前、おかしなまでのエネルギー反応があった気が……。気になってもう一回エンジンを入れてみようとするが、

「どうしたんだよお、ガルマン！早くいかんとどっか行っちゃう  
かもしないよーさっきのあんちゃん」

「んああ、スマン」

またあとで調べるか。ということ、ビリーを追った。

「ガルマンしっかりイ〜」

「悪イ」

素直に謝っておく。タメ口のことは後で言っただけか。

：さて、半分くらい屋根直ったし、コーヒーにすつか。屋根を直していた俺レイジは、家にあつたインスタントコーヒーを入れ、屋根の上で休憩。

日がだいぶ南中に近づいたが、まだまだ正午というには早過ぎる青空。程よく雲があり、とても澄んでいた。

「ふう、ツカリタ……」

ツカリタ＝疲れたである。

「そら、蒼いな……」

俺は気がつくときらを見ている気がする。そのたびに感傷的になつちまう。

とその時、静かな安らぎをぶつた切る威勢のいい声が休息の邪魔をした。

「オイ！ その白髪！ 屋根から降りてこい！」

あれ、この声どっかで聞いたことあるような……あ、

『逃げるのかよ!』

あいつか。あの黒いの。

「ああん？」

ふて腐れて語調を荒げる。威勢のいい声を出す金髪のおんちゃん  
は構わず、大声を出す。

「降りてこい！」

「ガルマン、そこまで言わなくていいんじゃない？」

「なんか胡散臭いんだよコイツ」

人を見た目で決めてはいけない。俺は激しく思ったのだった。

「疑わしきは罰するべからず」

俺はそう言いながらしぶしぶ屋根から降りた。

「……俺は裁判官じゃねえぞ」

半分冗談を込めて言ってみたが、意外にもノツてくれた。一応冗談きくん、この金髪のおんちゃん。

「んじゃあ何？ 東 ガス？ ああごめん、ウチン家オール電化だ」  
「k」

「料金請求違うわ！ てめえん家の事情なんか知らねえよ！」

「んじゃあ、アダ トサイトの請求？」

「利用してんのかよ！」

「R16のやつなら」

「アダルトじゃねえよ！」

「「あ」」

俺と隣にいる水色の髪の奴がハモる。コイツとは気が合いそうだ。

「……なんだよ」

金髪のやつ、いや、ガルマンって呼ばれてたっけ、が俺達に不服そつに言った。俺は言っちゃった。

「俺がせつかく」 『で一文字隠したのによオ、明けてにしゃがつて』

「そーだそーだ！」

おい、水色の奴、どっちの味方だ？

「う、うるせーよ！」

ガルマンとやらはもみ消すように言い返すが、どう見ても「」の勝ちである。

「んじゃあ聞くけど、どの辺からアダルトなんだよ？ 具体的に説明しろよ」

いじめると面白そうだから敢えてイジってみる。

「ああ？ 『具体的に』？」

「んああ、R18とR16とでは何が違うんだよ。線引きはどの辺だよ」

「し、知らねーよ、そんなの！」

残念ながら、それはこちらには悪あがきにしか見えない。もっとイジッてみるか。

「ホントは見てんだろ？」

「見てねーし！ 俺まだ17歳だし！」

「軍人なら許されるって！」

「そーだよガルマン！ …… って、えっ？ なんでお前……軍人ってわかったの？」

水色の奴に聞かれてしまった。しまったな、こっちのボロが出ちまったか。

「んあ？ 勘だよ。わかるんだよ俺には」

聞き覚えのある声だったってのもあるが、戦士か否かはすぐにわかる。目が違う。水色の奴はガルマンとは少し違うな。

「……お前、タダ者じゃねえな。私服の俺を一目で軍人ってわかるなんてよ」

「隠し切れてないぜ。いろんなモンが」

「いろんなモンって、なんだよ」

「剥き出しの覇気、獣のような鋭い目、実はむっつりスケベなツラ」  
「オイちよつと待った！！ 最後なんだよ最後！！？」

「あれ、違うの？」

「はあ！？」

なんと、俺と水色の奴が八毛った。それにガルマンが激しく動揺している。おもれえな、ガルマン（こいつ）。そして水色の奴、さつきから言ってるがどっちの味方だー？

とその時！

ドゴーン！

昨日と同じような爆音がした。ガルマンはキツと表情を変え、水色の奴は驚き慌てふためいている。

「白髪！ どっか安全なところに避難しろ！」

そういつて二人組はどっかへ行った。俺は何をしているのだろうか。こんなのにんびりとあいつらを見てていいのだろうか？

（コロナに乗るか）

屋根の上の工具キットやコーヒーを一旦下げ、昨日隠しておいた森に急行した。

…やっとトラヤヌスに着いた俺ガルマンとビリー。起動したつい

でにさっきのエネルギー反応を調べてみるが、ビリーが焦っていた。

「ガルマン、早くしてくれよ！ こっちも墜とされちまうよー！」

「んああ、すまん、今すぐ離陸させる」

エネルギー反応の主が気になるが、今はビリーの言う通り戦闘区域離脱が先決だ。

(くそう……なんだったんだありや……)

非常に気になるが、恐らくはコロナ。再調査が必要だな、これは。

…またコロナを奪いにきたのか？ そう思って隠した森へと足を運ばせる。

「くそう、やはりきたか」

予想はしていたがやっぱり奴らが来た。

「昨日より多いな……」

昨日と比べ何倍もの数のMSがそらを覆っている。



某資産家豪邸。その資産家の娘、ユキミ・サインがいた。

：つまんない。いっつもいっつも使用人の人達は私のことをお嬢様お嬢様って呼んで……馬鹿の一つ覚えみたい。

ちよつと散歩に行っただけでお母様に怒られるし。

ちよつとアニメとか映画のDVD買っただけで問答無用で全部取り上げられるし。

私は囚人じゃないんだから。私がかしたの？ こっちの生活になつてから、随分退屈な生活になつてしまった。なんで私こんなに束縛されなきゃならないんだろう。

従兄弟のアンソニーも軍人になっちゃったし。パパはもう今は……。

身近な男の人がいない。物足りない。男の執事も使用人と同じで馬鹿の一つ覚えみたいだし。

そんな時！

ドゴーン！

お外で爆音がしたの。ちよつとびっくりけど、このお家から脱出する最高のチャンス！

私は部屋のドアを乱暴に開ける。一目散に玄関へGO！

「お嬢様！ どちらへ！？」

私の逃げ足は……そうねえ……ウェイブ イダーくらいに速いんじゃないかしら？ 大気圏突入という名の家出を果たし、外に出た。でも、外で何が起こってるのか、今一つ分かんなかった。

「……あれ、なにかしら？ 空が賑やかあ」

ユキミは非常に呑気であった。家を出られた喜びの余り、空では戦闘が起こっているというのに何も感じなくなってしまうているらしい。

：俺はコロナを再起動する。

「動いてくれよ……」

コロナのツインアイが青色に光り、木々のなかからずうん、と立ち上がった。

「さて、いっちょ行くか」

羽を出していないので、バーニアを吹かしても遅い。

「こゝ、コロナが出てきました！」

UU軍パイロットがおどおどする。

「きたか…コロナ…！」

前話にも出てきた隊長がキツと表情を変えた。

「総攻撃だ！」

隊長の掛け声で、およそ四十機ほどの部隊が一斉に動いた。

「はあ……久しぶりにキビシー戦いになりそうだなア」

…うんざりだ。またMSに乗ることになるなんて。俺はこのMSパイロットという呪縛から逃れられないのか……？

だが、戦わなきゃならん気がするんだ。というより、この機体に対して嫌なほどに違和感を感じない。なんでだろう……？

とやかく考える間はない。そう思考を停止させ、前に向き直る。

「うおおー！」

コロナの両腕を前に突き出し、一門ずつのビーム砲をドシューウドシュー撃つ。何機か墜としてしまった。

「……」

命の営みが、今、確かに消えたんだ。でもんなこと考えたら戦争なんてできるはずがない。相手だって死ぬ覚悟だ。それに背くようなことをすれば自分が死んでしまう。

俺にだって、まだやりたいことがある。まだ結婚すらしていない

のに、人生を終わらせるのはあまりに虚しいだろう！？ ……あれ、これだけ？

敵の半数を撃破完了した。残りは動きのいい奴らだ。そうそう当たってくれない。

「くそう、どうすりゃいいんだよ……ん？」

コントロールパネルをみると、またしてもなんかゲージが溜まっている。しかし今度は項目が、

『BOOST』

『CANNON』

のように二つあった。『CANNON』の項目が増えていた。

「『CANNON』って何だ？ ……まあいい、今はこいつを使ってみるしかないか」

『CANNON』にカーソルを移動し、Enterを押した。

すると、羽根が展開されたのは一緒だが、今度はいくつかの小さな穴がそれぞれの羽根に一直線上に開いた。

：コロナはキャノンの発射体勢に入った。この時、俺に攻撃してくるやつは確実にKYだろう。

ピーッ！

どうやらいつでも発射できるようだ。

「いけえ！」

トリガーに指をかける。

ブアアアアアア      ！！

太く黄色い何本もの光が戦場を貫く。

「逃がすか！」

コロナは照射しながら射線を振る。この時、レイジは完全に以前の彼に戻ってしまっていた。無慈悲に敵を倒し、返り血を浴びていた白い鬼を駆っていたあの頃に。

「ぐおおあ……………」

「うおお……………」

「ぎいやああ……………」

UUのパイロット達は次々とやられてゆく。

「……………だいたい倒したのか……………？」

コロナは呆然と立っていた。キャノンを発射したオレンジの羽根がぼつつと金色に光っていた。それはまさに光冠<sup>コロナ</sup>だった。

シグヌスメインブリッジ。艦長アカネ・ヤガミは、シグヌスの発進はまだかまだかと、髪の毛をしきりにいじっていた。その様子は、苛つきすら感じさせられた。

しかし、ブリッジから黄色い光線が見えた。力を授けられた者の何本もの光、コロナのキャノンだった。

「え、あれは……!?!」

他のブリッジクルーも気付き、CIC担当がそれを分析する。

「艦長、あれはコロナのビーム砲です!」

「何ですって!?!」

CIC担当、シエラ・クリッジ少尉の報告にアカネも驚く。オレンジの豊かな髪が一本に束ねられているシエラは、更に補足する。

「恐らく、戦艦クラスの威力を持っているかと思われます」

「……とんでもない機体ね……」

あまりに驚いて乗り出していた身を正し、艦長席に深く腰掛けると、オペレーターのヘンリー・エルリック少尉が、その精悍な声をあげた。

「トラヤヌス、帰還します!」

「彼ら、無事帰ってきたのね」

アカネはとりあえずホツとしたのだった。

シグヌスハッチ付近。何人もの整備兵が見守る中、トラヤヌスが着陸していた。

「ガルマン、あれヤバくねえか？」

「タメ口使うな」

今一つノリの悪い会話を交わしながらトラヤヌスから降りてきたビリーとガルマン。

「コロナ、どうなっちまうんだろうな」

「……そうだな」

：あんなのが連邦の敵に回ったら堪ったもんじゃない。俺はビリーの言葉に満足な答えを出さなかった。

「……にしても白髪のアイツ、いい奴だったよな」

「どこがだよ！ てゆーかテメエも一緒になってやってんじゃねーよ！ テメエどっちの味方だよ！？」

「あっち」

「ぶざけんなよ！..！」

ビリーの脳天に空手チョップをお見舞いした。二人が何の話をしているかはわからないが、何だか可笑しくて笑っている整備兵達もいた。

## Unit 003：既視感（前書き）

《本話の主な登場人物》

レイジ・ヒイラギ

本編の主人公。成り行きでコロナガンダムに乗ったにとしては出来すぎたMS操縦技術を持つアンニユイ・ヒーロー。16歳。

ユキミ・サイン

本編のヒロイン。自分の家に懐いておらず、とにかく外出が好きな活発少女。15歳。

ネオン・ネイルバート

UU軍大尉。ポーン部隊の隊長で、コロナガンダム奪取のため部隊を率いていたが……。28歳。



## Unit003：既視感

「なんなの、あれ？」

：蒼い空に黄色い何本もある太いビームが。一体なにかしら？  
家出て来れたのはいいけど、あたしユキミ・サイン、どうしたらいいの？ でも、間違っても家には戻りたくない。

「新しい花火かしら？」

ちよっぴり楽しそうだから見てみよつと。あたしは、ひたすらに空を眺めていた。

コロナの四対の羽根の光がおさまり、呆然と立っている。コクピットの中のレイジも呆然としていた。

「何だ……このMSの力は……？」

：俺は思わず言葉を漏らしてしまった。

ピピピッ！ ピピピッ！

機内のアラートが鳴る。まだ敵が残っていたのか？

「ちい！ 懲りない奴らめ！」

再びコロナを動かす。残りの三機のポーンに向かってバルカンを連射する。

「……そこだ！」

：三機のうち、一機が隙をみせたのでビーム砲を発射。見事命中。撃破。

「あと二機か」

そう思ったときだった！

下の道路で民間人がうろついているではないか！ 危ないよ！

：あたしはただひたすらに空を眺める。

（久しぶりにお墓参りに行きたいな……）

きっとパパが待ってる。もう何年も行ってない。行ってあげなくちゃ。

そう思った時、

「きゃあー！」

マシンガンの流れ弾が飛んできた。まずい、これは逃げないとあたいは本当にパパの所へ逝ってしまうかもしれない。

マシンガン……嫌な思い出が脳裏を過ぎったが、今は思い出してる暇はない。

「くそっ、民間人がいてもお構いなしかよ！」

：俺は金髪の女のもとへコロナを急がせ、即座にシールドを張った。マシンガンやミサイルから彼女を防いだ。

：私が体を伏せていたら、

「その女、下がってる！」

と赤い機体のスピーカーから男の人の声が聞こえた。この状況下、逆らう理由もないので、

「はい！」

この男の人の言う通り、素直に茂みへ引き下がった。赤い機体……もしかして、シヤア！？

：俺はシールドを張ったまま敵機二機に特攻を仕掛けた。二機のうち一機のパイロットが叫ぶ。

「来るな、来るなあ！」

「そついわれてやめる奴がいるか！」

死ぬ覚悟のない民間人の命を守る方が優先だ。来るな、と連呼したほうのポーンにシールドを放っぽり投げ、投げたシールドがヒット。

「ぐあああああ！」

ポーンはそのまま海に真っ逆さま。

「責様よくも！」

もう一方のポーンがきた。シールドを回収して、ポーンに向き直った。

「いい加減にせい！」

襲ってきたポーンの、斧を持ったライトアームを左のサーベルで斬り落とす。

「まだまだ！」

ライトアームを失ったポーンは尚も突撃をやめず、こちらにタックルを仕掛けて来た。

「いい加減にせいッ！」

こちらも迎え撃つように、胸のあたりにキックをお見舞いした。タックルの勢い虚しく、自機コロナに蹴られたポーンは文字通り蹴飛ばされた。

「どうおッ！ ……くそう、覚えてる！」

ポーンのパイロットは悔し紛れに撤退したが、俺に追う気はない。

：MSが私を助けてくれたの。でも、以前にもこんなことあったような気がするの。

あれは、一年以上前だったかしら？ 私のお家の近所が爆撃を受けて避難してるとき、私がたまたま鍵を落としちゃったからみんなよりも少し逃げ遅れちゃったの。私はみんなに追い付こうと必死に走った。けど、大木が道路に倒れて逃げ道が塞がれてしまった。そんなときに限って流れ弾がたくさん落ちてきた。

とても怖かった。さっきのなんて比じゃなかった。その時は、服が半分くらい焦げ、足も少し火傷を負った。

そんなボロボロになった私に、白い騎士のような機体が！

「早く逃げろ！ 死ぬぞ」

その白い機体は、右手にはシールドを翳し、左手の方は、大木をわしづかみにして私の逃げ道を確保してくれた。

「あ、ありがとうございます！」

「いいから早く行け！」

そのお陰で私は無事避難でき、怪我は脚部の軽い火傷で済んだ。火傷ってわかった親は大騒ぎしてたけど。なんて大袈裟な。

そんなわけで、私はまたしてもMSに助けられてしまったのである。

パイロットさんにお礼を言わなくちゃ！

私はずうん、と仁王立ちしている赤いMSに向かって言った。

「あの、助けて戴き、ありがとうございます！」

「んああ。てゆうか、なんでこんなところにいたんだ？」

あれ、なんだかあの人と声が似てる気がするけど、単なる気のせいかな？

「……爆音が聞こえたので、なんだろうって思いました」

：その女の子は悪びれた風もなく呑気なことを言ってきたので、流石の俺も呆れた。

「火の雨の降る日に散歩とは……たいそうずぶてえ根性してんなあ」

：似ているかと思っただが、気のせいだったかも。あの人は話し方がもつときつい感じだったから。状況が似てたからデジャブを起こしただけなのね。

でも、

「あっ、あのう」

「なんだい？」

「私、あなたのお顔も見たいわ。コクピットに乗せてくれませんか？」

「別に構わんが……容姿はあんまり期待しないほうがいいと思うぞ」

やっぱり、あの時の人とは、話してる雰囲気から別人っぽいわ。でも、顔くらいは見ておきたいな。

『掴むぞ』

男の人の声が聞こえる。

赤いMSが屈んで、左腕がゆっくりと私のところに近づいてくる。私は両腕を挙げる。

赤いMSの指が……

きゃあん、エッチ……。

赤い……MSのお……胸部にい……っう……いたあ……。

「……大丈夫か？」

…俺はいろんな意味で心配した。だって、急に喘ぎ始めんだもん。…見ると、白の中に、凝視しないとわからないくらいほんの僅かに金色が残った髪の毛をした青年(?)が私を怪訝そうに見ている。

「えっ？」

なんでだろ？　なんか変なことしちゃったかな？

この白髪の人は私より年上っぽいかな。私をコクピットに乗せると、この機体がガシャンガシャン歩きだす。

「ホントに……大丈夫か？」

「うん、モーマンタイよ」

「なぜに中国語？まーいや、早くお家に帰んな」

「家には……」

(…………?)

…その女の子はどこか俯いている風だった。見てる様子だと俯くような暗い子ではなさそうだが……？  
冗談混じりでこう言ってみた。

「……借金取りが来るのか？」  
「何ですか？ 借金取りって」

その女はきよとんとした顔で言った。うん、違うみたいだな。

「あ、そうだ！ あなた、お名前は？」

「……レイジ・ヒイラギ。見た目は思春期、頭脳はオッサンだけだな」

「あ！ それコナ でしょ！ ちょっと違うけど」

そこツッコむんだ。想定外。

「んあ、ああ、だいたいそんな感じ」

「ギヤ マンガ日和〜ジャジャーン」

……あ、そーゆーことが。そのオープニングを引用してくるとは。そう理解できるのに数秒かかってしまった。

…ちよつと話してみたんだけど、レイジさんとはなんだか話題が合いそう！ それに、パパと同じく白髪なのも気になるなあ。まあ、聞くのは野暮だけだね。

「……あんたの名前は？」



今度はレイジさんが私の名前を訊いてきた。

「私？ ユキミ・サイン！ よろしくね！」

「サイン？ 歴史の教科書にそんな貴族がいた気がするなあ」

「……帰りたくない……」

：ユキミ、また俯いている。自分の家がそんなに嫌なのか？ てことは、家まで送り届けようともそれは無駄足だな。

ええい、苦肉の策じゃ！

「じゃあ少し俺ン家に寄ってくか？ 家の修理まだ終わってないけど」

「……！ うん……！」

まるで、『遊園地に行こうか！』と親に言われた子供がはしゃぎ喜ぶ様子であった。

「……」

ユキミはその俺の態度にきよとんとした顔で首を傾けながら、黙り込んでいる俺の顔を覗き込んだ。

「……んああ、行こうか」

コロナを止め、しゃがませ、コクピットハッチを開ける。

「わーい！」

ユキミは、ぴよいん、という効果音がつきそうな仕草でコクピッ

トから飛び出した。パンツ見えそうだった。

見た感じは俺とそう歳は変わらなそうだけど、あどけなさがしっかり残っているようだ。いや、ただあどけないわけじゃなさそうだ。時々俯いている様子を見ると。

「レイジさんのお家どこお？」

「ちよっと早いよ、てかちよっと待ってて」

「ぶ〜」

ユキミは膨れっ面&唇を尖らせる。不覚にもかわいいと思ってしまった……。実際かわいい子だけどね。

俺はコロナを隠すために、どっからか持ってきたでかいカモフラージュシートをえっちらおっちら運んだ。そいつを適当に広げるため、ユキミにお手伝いを要請。

「あー、そこ押さえててくれイ」

「うん！」

思ったよりも快く引き受けてくれた。

「しっかり押さえてろ〜」

「きゃあー！」

ガバツ、とコロナを包む。勢い余ってユキミが吹っ飛びそうになっていた。またパンツが見えそうだった。

「ぶ〜」

またしても膨れっ面。普通にかわいいわ〜。こう思った俺は負けた気がする。

パンツ見えそうになってお冠なのか？ いや、違つと思つ。そう  
だと思いたい。」

「いろいろスマンな。ありがとな」  
「……」

口を尖らせたままこちらを凝視。膨れっ面の中にも、お礼を言わ  
れた嬉しさが混じっていた。

「こつちだよ。おいで」  
「うん！」

立ち直り早いな。気が楽でいいけど。

中途になってしまった屋根改修。今回に関しては、被害は殆どな  
かった。

「お家、壊れちゃったの？」  
「んああ、参つたよホントに」

後頭部をポリポリかくが、かいてみても屋根は直らない。

「手伝つ？」  
「いや、特には……。なんか押さえてってくれるだけでいいよ。そん  
時になったら指示するからそれまではなんかテキトーに茶でも飲ん  
でて」

「はいー！」

小学校低学年みたいな返事をするユキミ。明るい子だね。時々明らかかな影が見える時があるが、今はそいつは流して作業再開しますかね。

屋根に上がり、金づちを手に作業再開した所に、ダイニングをうるついているユキミが問うた。

「何があるの？」

「紅茶とかない？」

片手間でユキミに尋ね返す。

「うーん……………あ、これ!？」

何やら引き出しを物色していたが、果たして見つけたらしい。

「んあ……………ああ、それ」

俺は手を止めてユキミの方に首を伸ばした。

「あ、コーヒーの飲み残しもある!」

ユキミはテーブルに放置した俺の飲み残しも見つけた。

「え、ああ。それ俺のかわ」

「飲んじゃお」

「……………えっ？」

それって所謂、間接キス？

しかし、俺に有無を言わせないが如く、ぐいっと冷めたコーヒー

を飲んだユキミ。

「ぬるいッ！ もう一杯ッ！」

「青汁の宣伝かい」

一緒にいてかなり楽しそうな子だった。

俺はひたすら作業を進める。四分の三程度修理が終わっている。

時刻は十四時くらい。昼下がりに。

ユキミが紅茶を飲みながら話しかけてきた。

「そついえば、レイジさん」

「んあ？」

「パパやママはいないの？」

「パパママ？…顔も知らねえなア」

「え…………？」

：あたしっしたら、聞いちゃマズいことを聞いちゃったかしら…………？

「…………ごめんなさい、レイジさん…………」

「んあ、何が？」

何の気無しに聞き返してきたレイジさん。

「…………気にして…………ないの？」

「だってしょうがねえじゃん。いねえモンはいねえんだから」

「あ…………そつ…………」

レイジさん、ただ者じゃないかも。MSに乗って満足に戦ってる時点でその言葉は当たり前なんだろうけど、それを抜きにしても、だ。

「ああ、んな気イ遣わなくていいからな。てゆうか寧ろ俺、人から気イ遣われるようなたいそうな人間じゃないから」

なんて自虐的なんだろ。でも、おどけて言ってくれてるのがかえって気が楽だった。

「ありがとう……」

：他人の女性から礼を言われたのは初めてだ。不覚にも嬉しくて少し照れてしまった。だって、ねえ……こんな可愛い子に言われたら、そうもなるだろう？ 照れ隠しに、紅茶の味を聞く。

「んああ、紅茶うめえか？」

……げっ、コイツ金持ちの娘だっけ？ 俺ん家の出すＴバツ……いや、ティーパックの紅茶、マズイに決まってんだろ。

「いや、いい感じですよっ！」

お嬢さーん、素直にマズイって言っても、  
イインダヨ！ グリーンダヨ！

「いや、あの、正直に言っただけいいんだからな？」

俺は冷汗をかきながら言う。

「正直？」

「……うん」

「今のじゃ、ダメなんですか？」

「いや、そーゆーわけじゃないんだけど……」

どう聞けばいいんだろう？　ことばって、難しいな。

「私の家の紅茶は、なんか味が濃くて。これくらいがちょうどいいのよ」

「んああ、そうなんだ……」

これ、素直に喜んでいいんだよね？　てゆーかユキミ、ことごとく自分ん家否定してんな。そんなにヤなのか？

「今日、ここに泊まっていいですか？　……レイジさん優しそうだし……」

「……はい？　今、なんと？」

今の俺ときたら多分相当マヌケなツラしてんだろうな。それもそのはず、かなりアヤシイことを聞かれたんだから、当然やる。

「……ダメですか？」

上目遣いでユキミが首を傾げる。その瞳がうるうるしている。やめてくれ！　思春期の男にその瞳は刺激的過ぎる！　反則だ！　I t i s a r e d c a r d ! レッドカードで即刻退場レベルだ！

もうとにかくそのぐらいに俺の頭が沸点に達していた。

「いや、いいけど、お客様用のベッドとかないぞ？」

「毛布さえあればキッチンでも寝ます！」

謙虚だなオイ。

「一応予備の布団くらいはクローゼットにあるけど、うーん、どこで寝かせようか？」

「寝るところがいい？」

「どこでもー！」

そーゆーの一番困るんだよな。

「うーん、困ったな」

「……あ！レイジさんとおんなじ部屋でおねんねしたい！」

「………へ！？」

「なななななんと？」

「レイジさんのこと、もっと知りたいから！ お話したい！」

はあ………今夜は多分徹夜だな。

「………嫌ですか？」

でもこんな美少女の要望をあつさり断るわけにはいかない！ チャンスだ！ これはチャンスだ！

「いやいや、そんなことナアイツ。ロイヤル・ナアイツ」

………何言っとするんや、俺。ぜってーヒイてるだろ。そう思って恐る恐るユキミの顔を見ると、特に表情は変わっていなかった。



そして、聞いてきた。

「マグ モン？」

あ、気付いてくれた。よかったわ。

「デ モン知ってるの？」

「あたしデジ ンも好き」

ホントに金持ちの娘か？ なんで金持ちの娘がアニメ見てんだよ。

「DVDボックス買った」

どっだけやねん。思わず苦笑してしまった。

「でも、全部取り上げられちゃった」

「あれま、お気の毒に」

まあ、金持ちの家だったらそうだろうな。

「マグナ ンカッコイイよね」

「なんか今から思うとアカ キミたいだね」

しまった、またやっちまった。ユキミがガンダムSE シリーズ Dを知つ  
てるかわからんのに。でも、案外知ってるかも。

「ヤタ カガミ？」

はい。やっぱり知ってました。ホントに趣味が合うかもな。

「ああ、そうそう」

初対面の女とアニメで盛り上がるのかよ。なんかヲタイ。でもなんでだろう。なんか初対面って感じがしない。なんでかわからんが、そんな気がする。

「そういえば、フレイドラ ンの股間のところ、なんかもっこりしてるよねえ」

…… オイ！ 乙女がなんてこと言ってんだ！ びっくりしたわ！

「あれ ちんちんかなあ」

いや、全く意味ないトコ隠してるから！ 接頭語消しても意味ないから！

なんだか、ユキミにツッコんだら負けな気がしてきた。

「そう思わない？ レイジさん、」

うわ、俺に振ってきた！ 助けて〜！ ヘルプミー！

嗚呼、不毛だった。お互いろくに面識がないのに、アニメだ、いや下ネタだ……。

どんだけやねん。

結局、ユキミは俺と同じ部屋で寝ることになってしまったらしい。

とりあえず屋根の修理が終わったので食料調達に行くことにした。  
ユキミが、

「私も行くー!」

と言った。

「アクセサリーとかは買わんぞ」

「ポテチ買いたーい!」

「ああ、そんぐらいなら」

……いや、ホントに金持ちの娘か？

シヨッピング。とユキミは言うが、多分君が想像しているシヨッ  
ピングとは違うと思うよ。

スーパーに着いた。ジャ　プが売っている例のスーパーである。

「ここだ」

「へえ〜でっかい!」

無邪気な声でスーパーの外観の感想を述べた。

「いつもここに来てるの?」

「まあな」

「……じゃ、入ろー!」

ぐいぐい腕を引つ張られる俺。俺、実はヘタレ属性なんだな。

スーパーの中でもユキミといろんなことを話した。ユキミはおしやべりなんだな。

しかし、どうしてもこれだけは気になったので訊いてみた。

「訊いちや気に障ると思うけど……君ん家って、サインの大富豪なんでしょう？」

「うん、そう。でも、そんなにいいものじゃないわ。自由が拘束され、それが足枷になってお友達もできないし……。もう、孤独そのものよ」

ふーん。いろいろあんだな……。

「……でも、私、気にしないの。ご飯もちゃんと食べられますし、それで今はいいの」

明らかに作った笑顔だった。そんな笑顔、見たかない。

「……無理してないか？ あんた」

「えっ……？」

虚を突かれたような顔をするユキミ。悪いが、チクチク突かせてもらっぜ。

「今の生活に、あなたは満足してねえんじゃねえのか？」

ユキミは少し黙り込んだ。

「どっつして……わかるの？」

明らか凶星でしょ。

「顔にでっかく、ZEBRAMATTーのマジックで『不満だ』って書いてあるぞ」

「……うふふ！ レイジさんって、おもしろい人ね！」

「あんたもいい勝負だと思うが……。まあ何にせよ、彼女の偽りのない笑顔を見てホツとした。」

「さっ、お買い物続けましょ」

ユキミは足をズイズイと運ばせるが、

「ユキミ様！！ ここにいらっしやいましたか！！」  
「！？」

俺の脇にいる少女は、物々しい男共の声に驚きと嫌悪の顔を見せていた。ギャラリーもメツチャこつちを見てる。

「お母様が御心配なさっております。お帰りになってください！」  
「いやッ！」

ユキミは男共の腕を振り払う。

「ユキミ様！」  
「ヤなものはヤ！」

ユキミは必死に抵抗。そして、板挟みになってる俺。

It is dilemma!





逆立ってるわよ」

といっても、ジャン ル大帝のアレみたいにはなってはいない…  
…等。

確かにちよつと頭に血が上っちゃった感じだったので、嘲笑気味  
におどけてみた。

「……どお？ カッコイイ？ んまあ、『オバサン』にカッコイイ  
って言われても、ペ・ヨ ジュンみたいに笑顔を向けるなんて虫ず  
が走るから俺には無理だけどな」

「っ……………！！」

オバサンは、

この小僧……………！

と言わんばかりに握りこぶしをわなわなとさせている。

しかしレイジはそんなのを真っ向からシカトして、ユキミのケ  
ータイを、「ちよつといい？」的な仕草をしてユキミに了承を得て  
受け取り、赤外線通信を用いてお互いのユーザー情報を交換しよう  
としていた。

「……残念だが登録に失敗した…。…スマンな……………」

「レイジさん……………」

レイジは、ケータイをユキミに返す。

「んじゃ、またどっかだな」

レイジは右手にはビニール袋を、左手は後ろ手に手を振り、去っ  
て行った。ユキミは両手にケータイを持ち、レイジの背中を見続け



た。

「レイジさん……」

「さあ、帰るわよ……」

母親はユキミの腕を引いて連行。ユキミは俯いたままだった。

ユキミは自分のベッドになっところがり、尚も俯いたままだった。執事が、

「ユキミ様、お食事ですよ」

……と言っても完全無視。本来ならレイジさんと一緒に食べるはずの夕食だったのに……。

私は普通に話せるお友達ができて嬉しかったけど、これほど自分の母親に自分の心を踏みにじられて……悲しいよお。お友達をつくることって、そんなにいけないことなの？ そう思いながらケータイをパカッと開く。アドレス帳を見る。決して多くはない登録件数をもつアドレス帳の中に、

『名前：レイジ・ヒイラギ』

電話番号：××××××××××××××××

Eメールアドレス：××××××××××××××××××××××××……』  
があつた。

「否！ 否である！！ 勃てよ国民！」

……あれ、もしかして、誤植した？

一方のレイジは、余りに余った食材を脇に、夕飯を作っていた。

：俺は結局、いつもと変わらぬ夕飯を食つことになった。  
ふと思った。

そんなことがあってもコロナ（あの機体）は誰にも渡したらダメだ。そんな気がする……。。

そんなとき、料理をしている俺の脇でケータイが鳴った。なんやろっ？

メールを着信したらしく、受信ボックスを確認すると、

『書面でははじめまして！ ユキミ・サインです!!』

今日はいろいろとありがとございました!!

これからもよろしくね!!』

天使からのメッセージが。

女の子にしては絵文字も顔文字もない非常にシンプルなメールだっ

た。まあ、絵文字はこのサイトのシステム上表示できないからしょうがないのだが。

偏見かも知れないが、女の子は結構そーゆーのに凝りそうなのに、ユキミは真っ向からの例外。そーゆーのを使うのに慣れていないのだろう。本当に友達が少ないんだな。自分勝手ながら、彼女を憐れんでしまった。

さて、気持ちを切り替えよう。いつまでも湿ってるのはイヤなので、ワン　ー式に、

バン！

《TO BE CONTINUED》

これに特に意味はないヨ。

## Unit004：倦怠（前書き）

### 《本話の主な登場人物》

レイジ・ヒイラギ

本編の主人公。アンニュイな雰囲気を出しているが、人並みの恋心は持っているもよう。16歳。

ユキミ・サイン

本編のヒロイン。本話には名前だけの登場。15歳。

ネオン・ネイルバート

UU軍大尉。ポーン部隊の隊長にして無事帰還を果たした。毅然とした態度を崩さない無骨な軍人。28歳。

アリスト・コーグエン

UU軍軍曹。ネオンの部下で、フランクかつ皮肉っぽい雰囲気が特徴。18歳。

カナリー・リエン（New!）

レイジの通う高校の同じクラスの隣席の少女。どこか懐っこく明るいメガネっ娘。15歳。

サラ・ライゴウ（New!）

レイジやカナリーの同級生。気さくでざっくりとした性格で、オーダーの髪をした姐御肌体質の少女。16歳。

コニイ・レイブン（New!）

カナリーやサラの同級生。生真面目な性格で、ヒステリックな一面

も持つ。  
16歳。

## Unit 004 : 倦怠

「ふあゝあゝあ……」

：朝6：30、俺ことレイシ・ヒイラギが起床。

今日4月9日は高校の入学式がある。俺はいつものように飯を作り、歯を磨き、顔を洗った。

今俺は高校に行くため、学ランに着替えている。

「あゝ激しくかつたるいわゝ」

式典つてのは変に堅苦しくて嫌だ。さつさと新学期始まらんか、なんてぶちくさ文句を言っってしまう。

全ての身支度を終え、鞆を担ぐように持って家を出た。

優しいそよ風に撫でられる。春が来たんだと俺は改めて実感した。……色んな意味で。単に気候が暖かくなっただし、何と言っても昨日は随分可愛い子と知り合っただし。

彼女、もといユキミの明るい笑顔と俯いた暗い顔が印象的だった。普段は元気いっぱいの子だけでも、どこか儂げな表情もする、とても魅力的な女の子だった。

恋愛は、愛の粘膜が作り出した幻想だなんて言う人がいるが、俺は、んなの知るかよ、という感じである。細けーこと考えてる暇あったら、彼氏彼女を見つけたる努力しろよ、なんて言いたくなる。……って、何で朝っぱらから説教？

皮肉にもグッドタイミングで来てしまったバスに乗る。

俺は視線を窓の外へ向ける。バスはひたすら海岸線を走る。手前

のガードレールの支柱だけが早く過ぎ去ってゆき、遠くの海は殆ど動かない。

エリシオ学園。俺はどうやらこの生徒になるらしい。他人事みたいに言ってみたが、俺の気持ちは何も変わらなかつた。

桜吹雪の中、俺は学校の近くのバス停でバスから降り、アンニユイな足どりで鉄の校門を通過する。他の入学生らしき人達もいる。どいつもこいつも、緊張と期待、希望に満ち溢れた顔をしている。

平凡が無味乾燥に見える。

俺はやはり、MS乗りという呪縛から解放されないのか？

俺がここに来ることによって、ここが無になるのではあるまいか…  
…？

……めんどくせ。コマケー事考えんのやめよ。

校門を通過し、中庭のテントの中に、先公達が長机に座っている。俺が一番手前のテントにある受付にいるネーちゃんに自分の名前を言う。

「手前から五番目の先生から名札をもらって下さい」

とネーちゃんに言われた。どうやら俺は一年E組らしい。

俺がネーちゃんに案内されて歩いた場所には、メガネをかけた三十半ば頃の男がいた。

「お名前は？」

「……レイジ・ヒイラギ」

「ヒイラギは……つと、これが」

男は、ズラーっと並んだ名札を指で追って、ついに俺を見つけってしまった。

「どもっす」

テキトーに会釈してテントから離れ、俺は校舎内へと足を運ぶ。

その校舎はといえば、さほど古くなく、あまり年季の入っていない白い壁がシンボルだった。

日本の大半の学校とは違い、靴を履いたまま校舎に突入した。ローファアを履いているのだが、ローファアは水虫がでやすくなるとかで嫌なんだよね。実際、足が汗で蒸れてる感覚があり、嫌にべとついていた。

(キモ)



新学期早々文句ばつかりの俺だった。ま、ローファー着用義務は式典の時だけだから我慢するけどさ。

縁がステンレスでできたガラスのドアを開け、突き当たりにある階段を一階分昇り、右側に教室がずらんと並んでいる。

一年A組、一年B組、一年C組、……と、廊下に突き出てるプレートに書いてある文字を順番に追う。俺はE組のプレートを見つけ、そこの教室に入る。

俺は到着するなり、黒板を見る。座席表があった。俺の席は、七列六行ある机のうち（黒板を前とすると）左から三番目の列の一番後ろの席らしい。割と真ん中つてのが癪だが一番後ろならいいや。

俺はその席に移動、到着。荷物を机の上に起き、椅子を引き、sit downした。

顔を全く動かさずに周りを見つめる。既に数人が席に座って入学式を待っている。俺の右隣にも、メガネをかけた赤い短髪でモミアゲを垂らした女がいた。なんかこつちを見てる気がするが、今は眠いのでスルー。

てなわけで、オヤスミー。

……えっ、私？ 今来た白髪の大きい男の子の右隣、カナリー・リエン。

今日からいよいよ学校。戦争も一旦終わったし……あ、そういえば昨日と一昨日、UUのMSによる爆撃事件があったんだっけ？ 謎の機体が鎮圧したらしいけど……。

話しやすそうな前の席の子にこのことを話してみよう。そう思っ  
て、背中を突いてみる。

「ねえ、昨日のニューズ見た？」

「えっ？ ああ、うん、見たよ。MSだった？」

存外フレンドリーに対応してくれた。「ああ？ ふざけんよ」  
的なノリで返されたらどうしようかと思っちゃった。

「うん……また戦争起きるのかな？」

「ま、細かいこと考えてもしょうがないっしょ」

「そ、そうね！」

黄土色のウェーブの髪をした前の子は相槌を打ったあと、前の黒板を見た。

「あんた……カナリー・リエン、っていうの？」

「えっ？ ああ、うん」

「あたし、サラ・ライゴウ」

「よろしく、サラ」

「よろしく！」

私は早くも一人友達を作ってしまった。寝息が聞こえたのでその方向を見てみると、隣の白髪の男の子が、机に突っ伏して爆睡していた。

「……それにしても隣の子、さっきからずっと寝てるよね」

私は寝ている白髪の男の子の方を見ながら言う。

「んん？ んーっと、こいつは……レイジ、ヒイラギ？」

サラが座席表にある彼の名前を読み上げる。

「知り合いなの？」

「うーん、なんか入試の時、もしかしたらあたしの後ろの席だったかも知れない」

「え、そうなんだ。偶然だね！」

そんなこともあるんだな。

「それにしても、入学式から居眠りなんて、全然緊張してないよね……いや、あたしたちもだけどね」

確かに、入学式早々友達作ってワイワイ駄弁っているのも、緊張感がないと思われるよね。

「うん、そうね……」

『ミイラ取りがミイラ』とはよく言うけれど、私達は今まさにそれだった。

そうこうしているうちに、この教室にも生徒がぞろぞろ集まりはじめたのだった。

先生が来た。空席は一個だけ。左から二番目の一番前のユキミ・サインさんの席。どうやら家庭の事情で学校に来れなくなってしまうらしいのだが、ホントかなあ……？

案の定、というべきか、先生はヒイラギ君を見て注意する。

「ヒイラギ、……ヒイラギ！」

はい、ヒイラギ君うんともすんとも言いません！ みんなはヒイ

ラギ君を見てるんだろっけど、席が隣の私も自ずと見られている気がして落ち着かない……。

「……う……ん……」

ヒイラギ君は暢気にも寝言をぐいよぐいよ言った。うんとは言ったけど、すんとは言ってない。

「いい加減にしろ」

「……ぬう……あ……」

百獣の王ばりの大きな欠伸をしながらやっと起きた。私を含めるクラスのみんながクスス、と笑っている。

「……んあ、さっきのメガネ先生やん」

関西弁まじりのイントネーションでゆっくりと顔を上げていた。

「メガネ先生じゃない、グランシスだ。……どういうつもりだ。入学式から居眠りとは」

「どういうつもりって……寝たいから寝てただけやけど？」

クラスのみんなは更に笑う。もちろん、私込みである。

「……もういい。もうすぐ式が始まる。しゃんとしろ」

「ういー」

ヒイラギ君はけだるそうに答えた。この人、一体何者なんだろう。隣の席の私は、彼を向いたまま硬直していた。

：入学式……はつきり言ってたるい。んなのやんなくても入学できるし。入学式の会場の設営とかをやった人に対してはホントに同情できる。だって、新入生の中に俺のような変な奴がいるのだから。

体育館のすぐ外の廊下。そこには既に俺ら一年E組を含めた新入生たちが待機している。

「ヒイラギ、ちゃんとやれよ」

「へーい」

グランシスとやらに釘を打たれたが、ちゃんとやれって、入学式で何をちゃんとやりやいいんだよ。どうせただ座ってるだけだろ？しかし俺は、建前で「へーい」と返したただけだった。

：ヒイラギ君って、なんか不思議君。いつもは倦怠感丸出しでイイ雰囲気出してるけど……果たしてそれに留まる人なのかしら？

私達E組が入場。保護者の方々や、来賓の方々皆揃って私達の入場を拍手で送っている。

保護者の方々はともかく、なんで来賓の方々も祝うのだろうか？必要なくなかない？

この緊張感の無さから、ヒイラギ君のことが言えない気がしてきた私だった。

全員着席。辺りを見渡して見ると読者の皆様の日本とは違い、色とりどりの髪の毛の色があるが、白髪なのはうちのクラスのヒイラギ君だけである。白にポリシーを持っているのだろうか？ 特に髪の色にこだわりとかを持っていそうな顔はしてないけど……。

：俺レイジは、グランシスとやらにちゃんと言われたこと（100%自己解釈）を実行していたものの、式典はやはり眠い。学長挨拶とか、来賓挨拶とか正直いらぬ。特に後者。

「~~~~であります」

何だって？

もう俺の知った話ではない、と話を聞くことを放棄した。来賓挨拶など消えて無くなれ、などという危険思想を並べていたら、もう挨拶が終わろうとしていた。まあ、もう終わるから許してやるか、と随分偉そうなことを心中で呟きながら他の人達に合わせて礼をしたのだった。

：入学式が無事終了した。ヒイラギ君は、けだるそうに窓の外を眺めている……と思つたら、頬杖をついて寝てた。

そんなに寝てると、脳みそ溶けるよ？

ヒイラギ君以外の人はさっきの私とサラみみたいに、仲良くなれるんじゃないかなを見つけてはこの前のMSの事件のこととかを話していた。やっぱりその話題だね。ホントに、この世界はどうなつてしまうのだろう。まあ、今を楽しむしかないよね。

というような楽観的結論に達したところで、担任が入ってきた。

「みんな、さっきの入学式は立派だった。流石はエリシオ学園の生徒だ」

何を以って流石なのか分からないけど、とりあえず今はヒイラギ君のことはスルーみたい。

「さて、みんな仲いいみたいだし、早速班長決めをするか。んじゃ、このように班に分かれるー」

先生は座席表にマジックで境界線を引いて指示した。それに従って私達は机の向きを横向きに変える。

しかし、ヒイラギ君はまるつきし興味がないようだ。てか、ぶつちぎりで爆睡中。なのでヒイラギ君の机だけ明らかに正面を向いたままにいる。

「ヒイラギ、またお前は寝てんのか」

メガネ先生はもう呆れていた。私もメガネだけど。

「まあいい」

メガネ先生は、遂にヒイラギ君を放置！

「リエン」

……あ、私か。完全にノーマークだった。油断大敵。

「あ、はいー」

「てきとうに起しとけ」

「あ、はい……」

どっちのてきとうだろ…？

いい加減という意味のてきとうなのか、きちんとの意味のてきとうなのか。平仮名なので分からん。

てことで『てきとうに』ヒイラギ君を起こすことにした。

「ヒイラギ君、起きなよ」

私は彼の丸まった背中を叩く。

「……………ん……………」

少し体が動いただけで、また動かなくなってしまった。

「……………」

どーしよ。全く起きる気配もしない。これは、彼のいる空間だけが違って、異空間にいる彼を私が起こすなんてムリな話。そんな感じだ。

私達の班が、班長決めをしているときも、全く異空間から戻って来ず……。サラがいよいよ焦れて、

「……………んも！ もうこいつが班長でよくね!？」

「いや、流石にそれはマズイでしょ」

一応ツッコんでおく。まあ、嫌がらせにも程があるからね。

「それに、普段からこうして寝ている人を班長になんて出来ないわ」



サラの前の席の人、つまり班の形にしている今はサラの右隣の真面目そうな女の子が言った。名前はコニイというらしい。

「そ、そうだよね」

サラが納得した風と言う。まあ、ごもつともな意見ですよね。

「……でも、起こした方がいいわ。班長を決める大事な時間なんだから」

いや、止めた方がいいかと。

「リエンさん、起こし方が甘いです！ 起きなさい！ ヒイラギ君！」

コニイさんがヒイラギ君の体を揺するが復讐が恐そう……。案の定、というべきか、ヒイラギ君が不機嫌そうに起きた。

「っ、なんだよ……せつかくマイワールドを満喫してるところをよお」「いや、マイワールドって何？」

ツッコんだのは、もちろんコニイさんではなく私。多分、今の私ときたら相当マヌケな顔をしていると思う。

「今は班長決めの時間です！ちゃんと起きてなさい！」

なんてヒステリックな……。

「嫌い」

「煩いとは何ですか!？」

「あーあーうるせ。……それよりも赤髪の人」

……あ、私か。またしてもノーマークだった。私はスキだらけなのだろうか？

「そう、あんた。下校の時間になったら教えてくれい」

いや、ツツコミどころいっぱいあるんですけど。

結局、ヒイラギ君はまた寝てしまい、彼は班長決めに果たして参加することはなかった。コニイさんは終始彼を起こそうとしたが、焼石に水。今度こそそうんともすんとも言わなかった。

そして、この班の班長決めのシメは、

「もう班長は生真面目なコニイでよくな？」

というサラの発言により、私達が四班の班長はコニイに決定。当の本人は満更でもないみたいだ。ヒイラギ君以外の男子は、ほぼ空気に化していて、碌に何も話さずに机の向きを戻すことになってしまった。寧ろ、寝ていたヒイラギ君の方が目立っていたのだった。

みんなの机が前に向いたところで、帰りのホームルームが始まった。

「明日はいつも通り、8:30の登校だ。遅刻するなよ」

先生は、連絡事項を私達みんなに通達。

「それじゃあ、解散！ お疲れ様でした」

先生の号令で、クラスのみんなの動きがバラバラになる。

あ、そういえばヒイラギ君を起こすんだっけ？

「ヒイラギ君、帰りのホームルーム終わったよ」

ヒイラギ君の背中をつつく。

「……んあ、オワタ？」

「……いや、何故にニチャン？」

「んん、気にしたら負けやん……」

起きたばかりなので、語調がゆっくりだ。ホントにヒイラギ君は不思議君。

「明日いつも通りの登校だって」

「んあ、わかった。あんがとな」

「ああ、うん……どう致しまして……」

：俺がそう答えると、なんかもじもじし始めた。

なんでや？（島 紳助風に）

「んじゃあな。また明日」

「うん、バイバイ」

なんかさつき俺に向かってキーキー騒いでたヒステリック女よりも全然話しやすい。癖がないところが、彼女の感じの良さを出して

いるのだろう。

下校。そらは昨日一昨日の戦闘が嘘みたいにばかり晴れている。といつても、もう夕方頃なのでそらが茜色に染まり始めている。

紫がかつたそら。

高い雲。

なんて壮大で美しいのだろう。こんな景色をみていると、今自分の考えてることがちっぽけで虚しいものだと思わせてしまう。例えば……

MSはいつ来るのか。

宿題なんだっけ。

ドラマの録画すんの忘れた。

卵買っの忘れた。

この全てがどうでもよくなってきてしまった。 帰ったらとりあえず直ったばかりの屋根の上に昇って、日が暮れるまでそらを眺めていようか。

帰宅。荷物を置く。また外に出る。屋根に攀じ登る。ねっころがる。

先程見たよりも赤みが強くなっている。この赤みが、広大な哀愁の色を滲み出していた。

こんな日がいつまでも続けばいいんだけどな……。

そういえば、カナリーとかいうやつに、

「また明日」

つつたけ。

また明日。

一見ごく当たり前に聞こえるが、実はそうでもない。こんなご時世じゃ。『明日』はひよっとしたらないかもしれない。

……という話は、よくあるよね。

日が完全に暮れた。もう家内に入ろう。夜露は体に毒だつてばあちゃんが言ってた(嘘)。おもむろに立ち上がり、屋根からひよいと降りる。

ドアを開け、家内に入る。ソファの上に放置してあったジャプを読む。

「あ〜ねみい〜」

呑気にもあくびをしてしまった。学ランを着たまま、ジャプを読み耽っていた。

「…………そろそろ飯作るか」

現在18:03。頃合いだな。

俺はおもむろにジャプをローテーブルに置き、ゆっくりと体を起こす。倦怠感がいくらかすす飛び、俺が歩み寄った冷蔵庫からにんじんと玉葱、ピーマンを取り出した。

「……今日は野菜炒めだ」

そう決意(?)したとき。

「おい！ その料理してるヤツ！ 玄関まで来い！」  
という聞き覚えのある声が聞こえてきた。  
招かざる客〓ガルマンだ。

「オイ！ なんで俺が変な等式に組み込まれてんだよ！」

ドア越しにツッコまれる。

「なんだよ、またあんたらか。ウチ借金は無いぞオ」

「いや、オレ借金取り扱い？」

「『すいません！ あともう一週間だけ……』」

「『もう待てねえんだよ！』……ってバカ！ どのドラマだよ！！  
俺金目的じゃねえから！」

「じゃあ、なんだ？ 電気だ」

「だから金目的じゃねえつつつてんだろ！ 何回いえあわかんたお  
めーは！」

「5723回」

「即答かよ。しかもなんでそんなに細けエんだよ」

「男は黙ってマヨネーズ」

「意味がわからん！ なんで急にマヨネーズなんだよ！」

「つーわけで卵買ってきてくれない？」

「どういうわけで卵を買ってこなけりゃなんねえんだよ！ マヨネ  
ーズと卵あんまカンケーないだろ！ しかも客をパシンのかよ！」

「マヨネーズの原料に卵があるからや。ついでに、招かざる客〓ガ  
ルマンやから」

「しつこいわ！ だからなんだよその等式！ 俺に対する嫌がらせ

「？」

「他に何かあるんや！」

「ああ、そうだよな……って違うわ！ 危つくテメエのペースに呑まれるトコだったわ！」

レイジとガルマンが、扉越しにとめどないやり取りをしているところに、同伴していたビリーが横槍を入れる。

「なあ、ガルマン、不毛じゃない？」

「何を今更なことを」

「だって、ドア越しただよ？」

「……まあ、確かにな」

：あゝじれったい。目の前は奴の家だというのに！

そもそもなんでコイツの家に来たかと言っと。

理由は簡単だ。奴を、コロナのパイロットとして、我らが母艦シグヌスに来てもらうためだ。

……の筈だったのだが……。

「ていうことなんだ、話だけでも聞いてくれ」

「ていうことなんだってお前、プライバシーから引用してんじゃねえよ」

「いやそこは包めよ！ オブラートに！」

「卵買ってきてくれたらいいよ」

「だからなんでそうなるんだよ！ そんなに卵が食べたいのかよ！」  
「うん」

「即答だなオイ」

「ホラ、卵買ってきてくんないんなら帰った帰った！」

「せめて、ドアくらい開けてくれよ」



「やだ」

「……生憎、テメエのままごとにつき合ってる余裕はないんだ……」

…そういつたガルマンは懐に手を突っ込む。

……！？

Bannon!

家内に鉛玉が入る。オイオイ正気かよ？

「ついて来ねえってなら、力づくで連れていく」

「……ほう」

「オイ、ガルマン、やりすぎだよ!」

「そのくらい俺は本気なんだよ」

「ガルマン……」

「さあ白髪の野郎! 一対一サツといくか!」

…掛け声を入れてみるが、中から返事が聞こえない。

「…オイ! なにしてやがる!」

「うっさいわボケエ!」

「どうあッ!?!?!?」

急に Bannon! と扉が開き、ガルマンの顔面にヒット。ダウン。

「あれ? ガルマン(むつつりスケベ)は?」

「……ダウンしたよ。君のおかげで」

「んあ? ああ、ホントだ」

…見ると、屍と化したガルマン(むつつりスケベ)が虚空を仰いでいた。

「てかそのルビの振り方おかしいでしょ」

「気ニシナイ」

「……………今日は退散すつからさ、この辺にしといてよね」

「そりゃこつちの台詞だ」

「だよね……………迷惑かけたな」

「ホントだよ」

「……………立場的に言いづらいんだけどさ、うちら連邦軍に入ること、考えといてくれよな」

「……………魔がさしたらな」

「……………ふっ、じゃあな」

水色の髪をした男が、ガルマン（むつつりスケベ）を担いでいずこに去っていった。

）  
）

ば。  
コロナがポーンを駆逐したあと、その駆逐されたポーンといえ

そのポーンのパイロット、ネオン・ネイルバート大尉は、満身創痕のポーンを母艦であるダイオギニスに着艦させ、たくさんの整備兵等に囲まれながら、コクピットからリフトワイヤーで降下した。

「ネイルバート大尉！ お怪我はありませんか！？」

「少し擦ってしまった。なに、自分で処置するさ」

「いえ、一応診させて下さい！ あなたの健康が第一です！」

救護班員が、ネオンを処置室に連れていき、ジャケットを脱がせ、

擦り傷をした右腕を消毒した。

「わざわざ済まないな」

毅然とした態度を保ってはいるが、果たして自分でもできた処置をしている救護班員にも特に責め立てることもせず礼を言った。

「いえ」

満更でもない顔で返した救護班員。

「……あ、異物が入り込んでますね」

救護班員はピンセットを取り出し、傷口から異物とやらを取り除いた。ネオンは少しばかり右目をつむった。異物の正体は、擦り傷をつくった部品の欠片だった。

「もう平気ですよ」

「うむ」

キズテープを貼られた右腕を少し押さえながらMSデッキに戻るネオン。

ネオンがMSデッキに戻ると、彼の乗っていたポーンは解体されていて、骨が露になった人体模型のような形相だった。

彼の存在に気付いた整備兵がネオンに寄ってきた。

「ネイルバート大尉、あれはちょっと修理は難しいです。ですので、

大尉にはロールアウトしたてのあちらのMSに乗り換えて頂きます」

整備兵が、大破した彼のポーンとは反対側を指した先には、鮮やかなブルー一色に統一された、ポーンに似た機体が佇んでいた。

「あれは……」

「ポーンZ型です。ポーンのカスタム機ですね」

ポーンカスタム（ポーンZ型）は、比較的ズンぐりしたポーンの体型とは少し違い、いくらかスタイリッシュな外見になっていた。

「ポーンを全面改修した機体なのですが、ちょっとコストが割高で……ですが大尉なら、その性能を十分に活かせると期待していますよ」

整備兵はネオンをヨイシヨするように言った。

「……わかった。慣らしをしてもいいか？」

「ええ、お手柔らかに……」

慣らしとは、戦闘シミュレーションのことである。

「アリスト。新型機の慣らしの相手をしてくれ」

「へいへい、やられ役を演じればいいんすよね」

アリスト・コーグエン。Unit001にてもこのネオンと一緒にポーンに乗っていた男である。地味な顔をしているが、卑屈っぽい顔がいやに似合っていた。

「本気でかかって来んか」

「わかってやすよ」

後頭部を掻きながら洪々とシミュレーターに座ったアリストだった。

）  
）

：はあ……ハードだったわ。ドアぶっ壊す勢いでガルマンを吹っ飛ばしちゃったし。俺、あんなドロップキックできたんだ、なんて下らんことを考えながら飯を食べ、風呂に入った俺レイジはベッドにぶっ倒れこんだ。

今日もいろいろとありすぎた日であった。とても眠い。オヤスミ  
！。

## Unit005：蒼き疾風（はやて）

：明くる4月10日の金曜日。今日も俺は、ガッコに行くために6：21に起床。またも寝起き特有の倦怠感に見舞われるが、あまり気にしない方向で。

俺のボサボサで白髪な頭をポリポリかく。起きたばっかりなので、きつと目も死んでいることだろう。

「んあ〜……また変な夢見たわア〜メツチャmelancholy  
」

melancholyの意味がわからない人、

「自分で調べなさい！（お母さん風に）」  
と答えておこづ。

気がつくと、目の前にはフライパンの上でお野菜達が狐色に染めてジュージューいい音を出していた。

正直、野菜ぶち込んだ覚えがない。油を入れた覚えもない。そもそも、フライパンを取り出した覚えもない。

俺、若年性のアレなのだろうか。まあ、いいやな。気にしたら負け。

それぐらいに料理することが当たり前になっっている、というのであれば、俺は100%自己満足に陥れる自信がある。

……っていうのは全くもってどうでもいいことなのだが。

飯が出来上がった。野菜炒めを皿に盛る。湯気がおいしそうな匂いと共に野菜炒めの皿から立ち上っている。

ご飯の盛られたスーパードで買った茶碗と、味噌汁の入っている漆の塗られたお椀、さっきの野菜炒めの皿を置いて、全ての配膳が済んだ。

「いたあきあーす」

うつむ。やっぱり惨めだ。他に誰もいない空間の中で挨拶すんのは。

俺は野菜炒めを頬張りながら遠くにうつる海の漣なみを見つめた。

俺の視力は両目共に2.0以上なので遠くはよく見えるのだが、俺の目は微弱ながら遠視が入っている。たまに近くの文字が見つらい時があるが、デスクワークに支障はないため、あまり深刻ではない。

飯を食べ終わった俺は、洗面所へ行く。歯を磨き、うがいをし、洗面所から出る。寝室に戻り、寝巻から制服に着替える。鞆に荷物を詰める。鞆を担ぐ。全ての出発準備が整った。

昨日と変わらぬ心地よい春風が頬を優しく撫でてくる。茂みの向こうに、バス停のある海岸線沿いの道路が見えた。今度は、少しだが冷たい潮風が吹き付けてきた。バス停にもう既に二人ほど並んでいる後ろに俺も並んだ。

先頭はばあさん。杖を持ちながら優雅な立ち住いで待っていた。次に並ぶは、小太りの中年のおっちゃん。きちんと糊のきいたスー

ッを身に包んでいるが、体型も相俟って少し丸くなってしまっている。

今日もよい天気だ。まだお日さまは座っているが、程よくある雲と澄んだ青空は　　少なくとも俺にとっては　　退屈させないほど綺麗だった。

そんなこんなでバスが低いエンジン音を吹かしながら停車した。俺は前の二人に続いて整理券を取り、後ろの方の席に座った。

今日もまた漣を見つめる。

漣って、オシたりヒイたりしてるところが人の恋のようだ、なんて無茶ぶりの直喩をする人がいる。

ヒイたりすることによって、一体何が得られるのだろうか？

二人の距離がどんどん離れていくばかりではないのか？

一緒にいられるなら、とことん一緒にいればいい。なんでヒイたりするんだ。自らの意思でヒイたりするなんて最低だ。近づきたくてできないことさえあるのに。

……そうだ。俺は最低な人間だ。ヒイたりしたから、あいつは……。

……って、これジャンルラブノベじゃないし。なんでこんなこと言ってたんだし。てか辛気臭。やめよ、朝からこんな話題。



終点から三つほど手前のバス停で降りた。降りる客には、俺と同じくエリシオ学園に向かう生徒も何人かいた。

そして、バス停から歩くと更に多くの生徒がいた。

歩いてる人。

チャリに乗ってる人。

友達と話しながら歩いてる人。

パンを頬張りながらチャリをこいでる人。

男女いちゃつきながら歩いている奴ら（憎い）。

みんな平和そうだ。でも俺は、とてもではないがこの平和を享受しきれない。

みんなはあのMSの襲撃を何とも思わんのか？ 再び悲惨な戦禍が訪れるとは思わんのか？

……ちつ、また辛気クセえ話をしちゃった。

まだまだ桜が散り切らない校庭を横切り、校舎に入る。まだまだ学校に慣れていない生徒もいるせいか、流しやトイレを利用する数人がいる廊下には、どこか緊張感が漂っている気がした。そんな廊下を突っ切って一年E組に入る。

「あ、おはよう、ヒイラギ君」

隣の席の、前の話で親切にも寝ていた俺を穏やかに起こしてくれた赤髪の女があいさつしてきた。

「んああ」

「宿題、考えてきた？」

「えっ、そんなのあったっけ？」

「え、聞いてなかったの？」

「だって地の文に書いてないんだもん」

「いや、あの、地の文とか……」

：私は今、ヒイラギ君の大人の事情に首を突っ込んだ発言に絶句している。

「んじゃ、昼飯の時間になったら起こしてくれい」

「……え？」

「四限オワタら起こしよ」

「いや流石に遅すぎでしょ！」

私は人目を憚らずに思わずシャウトしてしまった。

一応これだけは言っとかないとなんか負けた気がするから言っておく。

「もう、ちゃんと自己紹介考えておきなさいよ？　それが宿題」

「うい〜」

と言って、ヒイラギ君は異次元世界への扉を開けた。そんなに寝てるとホントに脳みそぐちゃぐちゃになるよ？　そこに、

「おはよ〜」

今来たばかりのサラが朝の挨拶をしてきた。

「あ、おはよ」

「……何、また寝てんの？」

サラは寝ているヒイラギ君を見ながら呆れた風に言った。

「うん、昼になったら起こさせて……」

「コイツ人間じゃなくてナマケモノなんじゃねえの？」

「ナマケモノなんて失礼でしょ！ 髪型的にはどっちかかっていうとヤマアラシでしょ！」

「いやそつちも十分失礼でしょ！」

ボケとツツコミ。これが成立するかしないかで、お互いの仲が問われる。ボケっぱなしだとボケた人がこの上ない孤独感に苛まされることになる。

そんなことはどうでもよくて（よくない？）。

キンコーンカーンコーン……

チャイムが鳴った。もう既にほぼ全員が来ていた。でも、またしてもサインさんは来ていない。

どんな人なんだろう……気になる。  
ガララッ！

スライド式のドアが小気味よく開く音がした。

「おはよう」

メガネ先生が来た。まだ名前覚えてないや。

「今日の限目はみんなに自己紹介してもらおう」

中指でメガネを直しながら話を続ける先生。

「それと、事務的な連絡だが、保健調査表月曜日までに提出してもらおう。忘れるなよ。帰りにももう一度言うが」

あ、まだ書いてないや。明日、じゃないや、月曜日には忘れないようにしないと。

「……以上だ。休み時間にしろ。調査表今出せる人は出しに来い」

何人かの人は出していたが、私とサラはまだ出せない。コニイは出していた。

「流石コニイ、早いね」「何事もギリギリはダメ」

黒いポニーテールを揺らしながら言う。キャラ的には、私よりコニイの方がメガネが似合う気がするのは私の単なる先入観だろうか。

「……また寝ているの?」

コニイは、明らかに嫌そうな目で、異次元世界からまだ帰ってきてそうにないヒイラギ君を見ながら言った。なにも嫌そうにしないで……。

「今は寝かせておけば? 今すぐに起こす理由もないし」

一応コニイに言うしておく。なんか今にも起こしそうだったから。

私は頬杖をついて退屈していた。

「カナリー」

前の席のサラが腰を捻って話し掛けてきた。

「ん、何？」

「コニイ、スーパー優等生らしいよ」

「えっ、そんな急に言われてもピンと来ないよ」

「コニイ、S特待らしいよ」

「……えっ、うそ！ 三年間授業料、施設費、教材料、など全部タのS特待!？」

驚きだ。コニイがそこまで優秀な生徒だったなんて。

「学年六百人中でコニイと誰かだけだって」

「へっ、スゴ。その『誰か』って誰だろうね」

「さあねえ」

サラも私と同感という風に首を傾げていた。

キーンコーンカーンコーン……

一限目の始業のチャイムが鳴った。それでもヒイラギ君は一向に起きる様子がない。

「……いい加減にしないで、ヒイラギ君！」

ありやありや。ヒステリック・コニーが発動しちゃいましたか。

「リエンさんも手伝いなさいよ！」

「えっ、あたしも？」

「当然よ！ 隣の席でしょ！」

「は……はあ……」

私のメガネのレンズが白くなり、右下にズレる。

結局、そうは言われたもののコニーを全く手伝わず、私は完全なる傍観者であった。

「リエンさん、何してるの！ 早く手伝ってよ！」

「はあ……」

起こしても無駄だと思うけど……。そう思いながら変わらぬ曖昧な返事をする。つか、逆襲が怖い。ふと、周囲を見渡してみると、周りの人たちがガン見でこちらを見ていた。明らかに迷惑そうな目で。特に何もしてない私もジロジロ見られてるのがすごい不慣れなだけ。

まだヒイラギ君を起こそうとしているコニーの背中を突き、一応言ってみる。

「あの、周りの人、すごく迷惑がってるよ？」

確かに、ヒイラギ君のしてることも肯定できないけど……。空気、読もうね？

「……」

コニイはあたりを見渡す。大半の人が、そんなのどうでもいいじゃないよ、的な目でコニイを見ていた。

「……………ごめんなさい……………」

コニイは大人しく着席した。  
途端に教室の空気が硬直した。

しーん……………

私、こういうのダメなんだよね。息がつまるっていうかなんと言  
うか。  
そんな中で、

「ぐー、すー……………ぐー、すー……………」

ヒイラギ君のいびきだけが異様に響く。  
長閑だ。<sup>のびやか</sup>

今の彼からは雄大な山に囲まれた草原を連想させられてしまう感じ  
だった。

……………ちよつと大袈裟だったかな？

メガネ先生が教室に入って来た。

「……………つ、またヒイラギは寝てんのか」

もうヒイラギ君は完全に問題児扱いだね。舌打ちしてるし。

「リエン、起こせ」

「え、私ですか？」

「隣の人だろ」

「ああ……はあ……」

さっきと変化の欠片もない反応をしてしまった。

「ヒイラギ君、起きた方がいいんじゃない？ みたいな？」

自分でも思っただけど、私ヒイラギ君を起こす気あるのか？

「……ん、ん……？」

あ、起きた。……なんで？

なぜか私が起こすと不機嫌な反応をしない。嬉しいからいいけど……  
…（恥）。

「昼は流石に遅いよ」

「……ん、しゃあねえな……」

ヒイラギ君は、ううん、と伸びをした。

「ご苦労、リエン」

「ああ、はあ……」

またもテキトーな返事をしてしまった。メガネ先生は皆に向き直り、いつもの調子に戻る。

「それじゃあ、自己紹介。アリストから順にどんどんやってけ」



というわけで、自己紹介が始まってしまったのだった。

）

「次、リエン」

「……あ、はい」

私はメガネ先生に呼ばれて教壇に昇る。遂に私の番が来てしまったのである。

「こんにちは。カナリー・リエンです。えーっと……特に何かあるわけでもないフツウの人です……」

言いづらい。てか、人の前で話すとか苦手だ。

「えーっと、趣味は……あの……機械とかいじるの好きです」

「ア ロじゃん！」

あるクラスメートにツッコまれた。いや、別に狙ってないけど？

「えーっと……もう話すことないんで、終わりにします、」  
「清聴ありがとうございます」

ツッコミがあった時点で清聴じゃなかったけど、気にしてはいけない。

「……少し短いな。まあいいか」

やっぱり短かったかー。

「次、」

という風に、自己紹介はどんどん続いてゆく。

）

「次、ヒイラギ」

「ういー」

ヒイラギ君はおもむろに椅子から立ち、教壇へ向かった。いつもかったるげなヒイラギ君が何を話すのだろうと、ちょっと気になる私。

「……特にないんで終わりにします」

のっけからシメの言葉かい！

「……いくらなんでも短すぎないか？ というより名刺すら言っていないだろ」

「次の方、どうぞ」

それ、先生の台詞でしょ！

「ヒイラギ、俺と会話する気ないだろ」

「ぐー、すー……ぐー、すー……」

早ー！ もう寝てるし！ てかそもそもただけでもう席着いてるし！

「……しょうがない。コニイ・レイブン」

「はい」

コニイが呼ばれ、彼女は壇上にかかる。さっきから思ってるんだけど、これ何順？ 結構めちゃくちゃな気がするけど？

「みなさんこんにちは。コニイ・レイブんです」

コニイはキリツとした顔で言った。

「私はエリシオ学園中等部から内部進学しました」

あり、そうなんだ。あたしは外部から受験したパターンだけど。

「わからないことがありましたら気兼ねなくお尋ね下さい」

多分ヒイラギ君はそれの該当者ではないんだろうな。

「得意な教科は数学です」

あたし数学ダメだわ。物理系は好きだけど。

「苦手な科目は……家庭科です」

えっ、意外。じゃああたし料理ならコニイに勝てるかも？

料理は自分的に自信あるし。てか、お弁当自分で作ってる時もあるし。

「……最後に。皆さんで楽しいクラスにしましょう」

まあ、つまんないよりはいいよね。

コニイで全員が自己紹介を終えた。

「よし、じゃあ……もうすぐチャイム鳴るから、終わりにする。次の時間から抜き打ち実力テストをやるぞ」

……え!?!? きいてないよ!!

『抜き打ち』だからしょうがないのか?

他のみんなも『えー!?!?』みたいな反応をしていた。そりゃそうだ。だが、コニイは別に平気そうな顔をしてる。いいなあ。そーゆー人は。

一方のヒイラギ君は……相変わらず寝てる。テストだから起こさなきゃまずいよね……?!

「ヒイラギ君、」

つつん、と背中を突いた。

「……んあ……?」

メチャ眠たげにこちらを見てくるヒイラギ君。

こわいごめんこわいごめんこわいごめんこわいごめんこわいごめんこわいごめん……

恐怖と謝罪の言の葉を心中で連呼しながら恐る恐る言った。

「……次、抜き打ち実力テストだつて」

「……処世術の抜き打ち実力テスト……？」

「いや、わけわかんないよそれ。どうやってはかんのさ」

私のメガネのレンズが白くなり、右下にズレた。けれど、恐怖感は一気に吹き飛び、メガネも直した。

「……んあ、わかった。あんがとよ」

といてヒイラギ君は、

「用を足しに」

といて教室を一旦出た。

来たる二限目の実力テストその1。教科は外国語。私にとって一番順当に点数が取れる教科だが、あくまで順当。とりわけて自信があるわけではない。

若干張り詰めた空気の中、外国語の試験の問題冊子と解答用紙が前から回ってきた。どんな問題が出るんだろう？ と思っているうちに、メガネ先生が、歯切れのよい開始の合図を発した。

テスト終了。やっぱり順当止まりな感触だった。とりあえず、肩が痛くなった。

今隣を見てみると、テストが終わってぐったりしたのか、また寝ている。そういえば、ヒイラギ君って、成績はどうなんだろう？

こーゆータイプって、全くできないか、めちやくちやできるかにわかるよね？

三限目。教科は数学。

因みに私の数学は、一次函数で止まった。え、『函数』じゃなくて『関数』だつて？ 辞苑で調べてみれば一発！  
ファイトオツ！ 一発！

ケイ・コギが出てきそうな話題を振りかざす私に緊張感などなかった。

そんな緊張感が皆無（虚無）な状態で数学の問題冊子と解答用紙が配られた。

よおい、スタート！

）

テストは終了。……爆死した。小問集合でも半分以上空欄、それ以降の大問3つの記述問題は白紙。予想点数はせいぜい40/200だなあ。

そんな私に反して、コニイはものっそい余裕そうな雰囲気だ。顔がメチャ座ってる。

一方の隣のヒイラギ君はまたしても睡眠。余裕だなあ……。

四限目。教科は国語。……まあ、ノリでいけるだろうと安易でか

つ根拠の無い見通しを立て、試験開始。

ノリでいけると思った国語だったが……案の定というべきか、感  
触的には惨敗。

アイロニーとかユートピアって何よ！ せめて注釈くらい載せて  
よ！

……というわけで、それらその他の言葉の意味が分からなかった  
ので、その文章のデキは微妙極まりなかった。

）

帰りのHR。実力試験がどれももつさりした感触だったんで、何  
だかモヤモヤせずにはいられなかった。

コニイの方を見てみる。余裕そうな表情でサラと話している。一  
方のヒイラギ君は……案の定寝てる。この人のあだ名は、ぶうちぎ  
りで「三年寝太郎」に決定！

みんなも何となくぼやいている中、メガネ先生が教室に入って来  
るなり、ヒイラギ君の方を一瞥したが、

「……よし、帰りのHRを始める」

なんとスルーした！ 先生、現実から目を背いちゃダメだよ！

「重ねて言うが、保健調査表月曜日までに必ず持ってこい。いいな

「？」

あ、忘れてた。ちゃんと持ってこなきゃな。

「明々後日の月曜日もいつも通りの登校だ。遅刻するなよ。はい、解散」

その声で、みんなはガラガラと席を立ちはじめ。一方で、ヒイラギ君は依然として起きずにいる。帰りの時間だから起こさなきゃダメだよな。

「ヒイラギ君、学活終わったよ？」

つんつん、と背中を突いた。

「……んあ、終わった？」

目を擦りながらむくつ、と起き上がったヒイラギ君。起きたところで、必要事項を連絡。

「月曜日もいつも通りの登校だって」

あとこれも言っておかなくちゃ。

「あと、保健調査表の紙も月曜日提出だって」  
「んああ、わあった」

そう言つと、ヒイラギ君はのそっ、と立ち上がって鞆を担いで歩いていった。



「……悪いな、起こさせて」

だって、私以外の人（特にコニイ）が起こしたら統計上不機嫌に起きるじゃん。

）

：帰宅。俺はガツコの前にあるバス停へ向かっている。

なんでリエンが起こすと自然に起きるかって？ そこは……黙秘権を行使させてもらうってことで。

ここで、

「やーい、リエンのこと好きなんだろ！」

なんて思う人は、小学生レベルの思考だよな。

……えっ、違う？

それは置いといて。

昨日は午後までガツコがあったが今日は四限で終わった。

テストがどうだったかって？ まあ、いいんじゃないね、別に。ほとんど順当に答えられたし。

バス停に着いた。もう既に何人が並んでいた。俺はその列の後ろにつく。

暇なんでケータイをいじる。魔がさしてアドレス帳を見た。

『ユキミ・サイン』

そういえば、彼女とは同じクラスなんだっけか。家庭の事情だか何だかで来てないみたいだが。……まあ、あの母ちゃんならしょうが

ないのか？

バスが来た。因みにこのバスは後ろ乗りである。そしてワンマン。俺はバスに乗るなり、後ろの方にあつた空席に座り、再びケータイをいじる。メールを打つために。

『Fromレイジ

Toユキミ

件名：

本文：なしてガッコに行つてへん？』

俺は、いろんな方言がまじつたメールを打つ癖がある(？)。メールはおよそ一分くらいですぐに返ってきた。

『Toレイジ

件名：メールありがとう！

本文：お母様が行かせてくれないの……(泣)』

あの母ちゃんのせいだろうと予想したが、ズバリ的中した。俺のインスピレーションが意外に当てになるとわかって、しばしの優越感を味わえた。

しかし、その優越感に浸る間もなく、メールがもう一回来た。

『Toレイジ

件名：

本文：どうして学校行ってないって知ってるの？』

あ、そっか。ユキミは知らないのか。

『トヨキミ

件名：

本文：君と同じ学校同じクラスだからだよ』

すると次は、数秒で返ってきた。意外にキータッチスピードは速いのもかもしれない。

『トレイジ

件名：明日行く！！

本文：』

オイオイ、間違えて件名に本文書いてるぞ。どつりで速いわけどか、明日休みだし！

『トヨキミ

件名：焦るなって(汗)

本文：明日学校休みだぞ？』

どうやら猪突猛進型の女の子みたいだ。まあ、そつでもなけりゃ、あんな状況で家出なんてできないよな。

『トレイジ

件名：うそお！？

本文：うそお！？』

件名と本文が同じやぞ？

『トヨキミ

件名：

本文：また今度ね( ^ - ^ ) / 』

『TOLREIJI』

件名：

本文：うん！』

その文が書いてある液晶画面を見ると、俺はおもむろにケータイを閉じる。

バスの車窓から漣を見つめる。

とても穏やかだった。強い葛藤の中にいる俺にはそう見える。

もう人が死んでゆくのは見たかない。だが、あれに乗らなければ何一つ守れない。あれに乗らないとなんか落ち着かない。

だとしても、あんなのに乗っても結局は人殺しと何にも変わりやしねえんじゃねえか……？

……やめよ。こんなメンド臭え話。

バスを降りた。ここ最近はずっと晴天が続いている気がする。

さんと照る太陽、高い雲。こんなに雄大なものを見ているから、俺はテキトーな人間になっちまったのかもしれない。

いや、違う。見てしまっただ。あいつの、墓場を……。

あーもう！　なんで気がつくと鬱チツクな展開になるんだよ！  
作者の野郎、覚えてるよ。

帰宅。しよつと思ったら。

「ああ、やっと帰ってきたか」

俺の家のドアの前には、見覚えのある奴らが待ち伏せをしていた。  
ガルマンとビリーだ。

しかし、まともな相手をする気はないので、俺なりに取り繕って  
みた。

「……誠に申し訳ありませんが、本日の営業は終了致しました。」  
了承下さい」

「いや何の営業だよ!？」

…俺ガルマンはやっとレイジとアプローチできたってのに、畜生  
……惚けやがって。

「儲かりまっか？」

「それが商売あがったりなんですよ」

って！　なんで（ビリー&レイジの）ショートコント繰り広げて  
んだよ！

「おいビリー！　なんで勝手にショートコント繰り広げてんだよ！」

「つまんねえな。地の文と殆ど一緒じゃねえか」

「だから地の文とか言っつなアアアアアア！」

はあ……。毎回こんなに叫んでたら脳神経がぶつつりと切れちまうよ。

「じゃあ叫ぶなよ。読者もシラケるだろ」

「ヒトのプライバシーに勝手に介入すんな！　そして大人の事情に障る発言するなアアアアア！」

嗚呼……。やんぬるかな。

結局、一旦退却することになった俺ら。

「なあ、今度はいつ説得に行くんだよ！」

トラヤヌス機内で、はしゃぎながら俺に問うてきたビリー。

……てか、

「……お前、まさか、俺があいつにイジられんのを楽しみにしてないか？」

「……今更？」

ケロツとした顔で言ったのけたビリー。

「開き直んな！！」

俺の基本的人権が侵害されている気がしてならない。

「『気がして』というか、実際そうだよ？」

「だからヒトのプライバシーに介入すんなよ！　てゆーかさりげな

くヒドくね!？」

はあ……俺は生まれてきてよかったのだろうか？

ダイオギニスMSデッキ。シミュレーターで模擬戦をしていた男性が二人いる。一方はポーンカスタム（ポーンZ型）に乗るネオン・ネイルバート大尉、もう一方はポーン一般機に乗るアリスト・コーグエン臨時作業員。

「隊長、ちよつとは手加減して下せえ」

アリストはネオンを隊長と呼ぶ。崩れた敬語を使っていることから、『微妙に』敬意を払っていることが伺える。

比較的砕けた口調のアリストに反して、ネオンは毅然としていた。「得体の知れない新型だったのだ。手加減はそもそもできるはずがないだろう」

「……へいへい、わかりやしたよ」

卑屈っぽく言うさまがやはり彼に似合っていた。

「ところで隊長、次の作戦にダイオギニスは出撃しないって本当なんすか？」

「ああ、そうみたいだな。さしずめ我々は、コロナとやらの奪取のみが目的であったからな。連邦のガンダムとやらは畑違いということだろう」

「……そうつすか」

両手を後頭部にやったままZ型を見上げるアリスト。ネオンも同じく、鮮やかなブルーで彩られたZ型を仰いでいた。



Unit006：輝る虚像（前書き）

今回、ちょっとレイジの生い立ちを覗けます。

## Unit006：輝る虚像

：俺か？ UUの新型戦艦ダイオギニスの作業員、アリスト・コーゲン特技兵だ。

さつきまで、隊長ことネオン・ネイルバート大尉と、隊長の新型を相手に模擬戦をしていたんだが、コテンパンにしてやられたんだ。ちくしょう、もっと手加減してくれた方がいいのに。同じポーンでも勝てる気がしないのに、ポーンの新型が相手となりゃ、鬼に金棒、勝てるわけがないだろうに。

そんなわけで、俺のポーンを負かした新型のポーンを仰いでいた。

「にしても、綺麗なカラーリンググッスね」

「ああ。私の異名にぴつたりだ」

「『蒼き疾風』、ツスカ」

そう、このネオン隊長の異名は『蒼き疾風』。この目の前にある新型ポーンのスカイブルーはまさに隊長のパーソナルカラーだった。どうやらこの新型ポーンは、『ポーンZ型』、またの名を『ポーンカスタム』というらしい。背中アタッチメントに追加装備が可能で、しかもそれが戦うステージによって換装できるといったシステムがあるらしい。今はまだロールアウトしてないみたいだが、主に推力増強が目的らしい。

それにしても……

「まだBASは非装備なんスよね？」

「ああ」

「それでポーンよりスピードが一枚上手とは……」

そのシステムの名こそ、『Back - Additional - S

ystem』である。その高性能さが祟って、量産は見送られたそ  
うだ。

「それにしても……この艦は堅苦しいッス」

「仕方なかるう。アリスト。お前こそ、それよりも作戦参謀第二課  
に呼ばれたのではないか？」

「……あッ！ いけね！ どうもッス、隊長！」

やべ、忘れてた。急がないと。

：部下であるアリストの、焦りつつ走り去る姿を見送った。まだ  
BASがロールアウトされていない今、私はまだしばらくは従来の  
ポーンに乗るのだろうか、などと考えながら、翼を未だ授かってい  
ない蒼き巨人、ポーンカスタムを拝んだ。

「……偵察、つすか？」

第二ブリーフィングルームにて、参謀から任務を授かったアリ  
ストが聞き返す。しかし、その彼の態度が気に入らなかつたのか、  
無造作な褪せた茶髪をした三十代前半頃の参謀、デルテム少佐は

「そつだと言ってるだろ。何度も言わせんな」

「へえ……」

どうも腰を低くしているアリストに苛立ちながら、デルテム少佐  
は詳細を話した。

「どうやらそのガンダム2号機はベルリン工場に秘匿されているらしい。所詮噂でしかないが、これが本当なら、我々が異端の連邦ガンダムのうち一機を破壊できる」

デルテムは話を続ける。

「そこでだ。お前一人で行かせてもいいが、ついでにテストも兼ねて、ポーンZ型を随伴させる」

「ポーンカスタム……では、隊長も……？」

「ネイルバートのポーンはコロナにやられた傷が深く、次の作戦までに修復が間に合わん」

ダイオギニスは、ガンダム三機を積んだ連邦の新造戦艦シグヌスにもうじき近づくところだった。それに強襲をかけるつもりだったが、ネオン・ネイルバートのポーンは前述の通り出撃できない状況にある、とデルテムが補足したのだ。

「まだ、BASもロールアウトしてませんしね……」

「メカニック達には、お前のポーンにレドームを付けさせている。

優れた索敵能力を持ってして、ガンダム2号機を破壊してくれ」

「了解っす！」

アリストはビシツと敬礼し、デルテムから下がっていいという指示を受け、退室した。

(……ま、まだガンダムがあるって決まったわけじゃないけどな)

側頭部を人差し指で掻きながらMSデッキに急いだ。アリストがデッキに戻る最中、艦内はけたたましいサイレンが鳴っていた。きっと、シグヌスとやらに攻撃を仕掛けるのだらうと思っていた。

アリストが去った第二ブリーフィングルームに残ったデルテム少佐は、椅子を窓まで引き、深く腰掛けた。窓の外には、日の光にきらきら光る海が見えた。

「ネイルバート、貴様にデカイ顔されちゃ困るんだよ」

海に黄昏れるように、ここにはいないはずのネオンに厳しい言葉を言った。

「何、私のポーンはまだ直らんのか」

「申し訳ございません。まだ……」

MSデッキにて、ネオンに絡まれている整備兵が頭を下げている。

「では、こちらで出る」

ネオンはポーンZ型を指し、そちらに歩いて行くこととするが、

「まだ無理です！ BASがロールアウトしてないんですよ!？」

「構わん」

「困ります、まだ我々も本機を理解してません。もし損傷しても修理ができません!」

整備兵が粘り強くネオンを引き止めようとする。ネオンの方も、それもそうか、と思い直したが、やはり不満だった。そこに、アリストが戻って来た。

「隊長、ポーンカスタムでテストするそうツス」

「おお、実戦テストか」

「いや、そうではないんス……」

アリストは恐縮そうにし、しかし話を続けた。

「俺は、連邦ガンダム2号機とやらの偵察任務をつかまったりやした。それに隊長が随伴しろと、デルテム少佐が……」

「……そうか、少佐が……」

思い詰めたような顔をするネオンには、諦めの色も混じっていた。

「……仕方ないか」

「すいやせん、俺が何か言えれば……」

「……軍は縦社会だからな」

ネオンはポーンカスタムに歩み寄り、ポーンカスタムに乗り込んだ。  
だ。

「アリストも早く乗れ」

「ういつす」

アリストは、後頭部にレドームを延ばしたポーンに乗り込んだ。こちらの右手には、マシンガンよりも狙撃に向いたアサルトライフルを携えている。

他のポーンは出撃準備をしており、次々にダイオギニスから発進

していった。

デルテムはとっくに海を見るのをやめていて、既にダイオギニスのブリッジに移動していた。

「ダミー艦を出せ！ 敵の目を欺く！」

デルテムの命令で、ダイオギニスの青い艦底部から何やら物体が顔を出したかと思うと、ムクムクと膨らみはじめ、ダイオギニスそっくりの飛行船となった。

今回この飛行船型ダミーに使われた気体は水素。通常、飛行船に使われる気体はヘリウムだが、このダミー艦は使い捨てであるし、旅客が目的でもないため、安全性を考慮する必要がない。寧ろ、同艦を撃墜した敵機を、水素爆発で巻き込むことも期待できる。

ダミー艦の操縦は、ダイオギニスから遠隔操作するため、味方を巻き込まないように位置を調整することもできる。

計二機のダミー艦は、次々に出撃してゆくポーン達に、まるで金魚の糞のように尾行したのだった。

その頃、ヒイラギ家では。

：明るる土曜日。俺は部屋の四分の一ほどを占めるベッドから、起床時特有の倦怠感と朦朧とした意識の中で何となく起き、目を擦

る。

そういえば昨日は家に入るまでが大変だった。招かざる客とビリーが来たお陰で。

ウチの艦に來い。

一緒に戦ってくれ。

今の連邦は違う、本当に平和を望んでいる。

などという御託を並べられた(全部by招かざる客)。

そんなこと言われても、軍と名乗っている時点でその最後の言葉に説得力はゼロなんだがなあ。

そんなわけで俺はいつも通りに飯を作り、食べる。食べながら遠くに映る漣を見る。今日は少し漣の様子がおかしい気がするのは俺の気のせいだろうか？ どこかいつにない激しさを感じる。それを見てか、俺自身も胸騒ぎがしてきた。

その時だった。俺が薄々予知していた事が起きたのだ。

ドォーン！

近くの工場が爆発した音。MSの仕業か。

「……久しぶりにあいつの出番か……」

残った飯を急いで食べきり、コロナを隠している森の中へと走っ



た。

：よつす。俺はビリー・カーガル。ここ戦艦シグヌスで工場長をやつてる者だ。久しぶりの登場で忘れてしまった読者の皆様のためにもう一度説明すると、このシグヌスは連邦がガンダム五機と同時に開発した強襲用艦。

想像がつきにくい人は、木馬や足付きなどをイメージすれば、それは大方的外れではないと思われる。

「つてオイ！ 読者とか言うな！ しかも木馬とか足付きとかやめる！」

ガルマン（・アラーク）がお決まりのタイミングでツッコミを入れてきた。

「じゃあネエル・アーガマ」

「マイナーだなオイ」

「アルビオン」

「木馬と似てね？」

「ラー・カイルム」

「ガンダムやり・ガズイは積んでねえぞ」

「ピースミリオン」

「全然違う」

「フリーデン」

「てかしつこいわ！ ただ戦艦の名前を列挙してるだけじゃねえか！」

戦艦じゃダメかあ。じゃあこれならどうだ！

「アプサラス」

「戦艦ですらねえよ！」

何なんだよあ。もういいし。

「全く、このビリー・カーガル、ガルマンと一緒に居続けて四十年

……」

「四十年って何だよ！俺らそんな生きてねえし！」

俺達がそんなとめどない応酬を展開しているその最中、艦内に警報が鳴り響いた。

『敵部隊接近、敵部隊接近！ 総員、第一戦闘配備！ 繰り返す、

……』

どうやら今回も後手に回ったみたいだ。

「……だってよ」

「ああ。ビリー、機体のチェックは終わってるか！？」

前は損傷が殆どなかったから、三機とも万全だ。

「ばっちりだぜ！」

「タメ口やめろっつもの！」

俺は気さくに答えるが、ガルマンにはいまひとつお気に召さなかったようだ。ノリの悪い奴。

：ビリーと他愛のないやりとりをしたあと、自機である連邦ガンダム4号機シャドーのコクピットにどかっと座り、OSを立ち上げた。

『Federation - Gundam . 4th』

という表示が出た後、各システムがいかにも起動しているような音を上げていた。

艦長もといアカネ・ヤガミ大尉がモニターの小画面に映る。

「今回は敵艦もいるわよ。たった二隻だけど侮らないで。まだこっちには、戦艦以外のまともな戦力が三機しかないから。いいわね！？」

「了解すす！」

俺達隊員はさっさと次の行動に移った。

俺は自機をカタパルトに向けて歩ませていた。その時、足元に人がいた。自機を引き止めているようだったので、足を止めて話を聞くことにした。

「ガルマン！」

俺を呼んでいたのはビリーだった。

「何だ？」

「あれ持ってけよ！」

ビリーは向こうを指差した。

「あれは……対艦刀？」

「シユベルト・ゲベル！」

「違うだろ！ Sストライクじゃあるまいし」

「ま、とにかく、あれ持って行きなよ！」

「わかった」

シャドーを20mくらいある対艦刀が立て掛けてあるところへ歩ませ、ライトアームで取った。

「うまくやれるかな……」

：俺もといトシリアは、俺の機体、連邦ガンダム1号機アサルートの操縦桿を握りながら不安の言葉を漏らした。前回はほとんどまともな戦いにもならなかったため、今回が実質上初めての实战だ。足を引つ張らないようにしないと。

自機アサルトの足をカタパルトに乗せる。鈍い振動の後、ガチャツと固定されたような振動もコクピットに響いた。もうじき発進だ。

『ガンダム1号機、アサルト、発進準備完了！ 発進、どうぞ！』

オペレーターのヘンリー・エルリック少尉の爽やかな声が機内に響く。それに合わせて、俺も操縦桿をしかと握る。

「トシリア・ネイビー、アサルト、発進します！」

オーソドックスなビームライフル、シールドと艦隊戦用装備の肩部ミサイルポッドを装備したアサルトガンダムが出撃。

続いて、ガルマンの乗る連邦ガンダム4号機シャドーも出撃。

『ガンダム4号機、シャドー、発進準備完了。発進、どうぞ！』

「ガルマン・アラーク、シャドー、出るぞ！」

真っ黒い、大型の剣を持ったシャドーが出撃。どうやら、大型の剣は標準装備ではないみたいだが。

『ガンダム3号機、テトラ、発進準備完了。発進、どうぞ！』

「……テトラガンダム、ヴァイタル、出撃する！」

両手にライフルを持ち、口に穴が開いている（レイーのツオンみたいな感じ）濃紺のテトラが発進。直後に変形した。平べったい戦闘機のような形だ。

148

そして、こちららも。

「シグヌス、発進！」

アカネが艦長席に座りながら声を張り上げて言った。操舵手であるアドルフ・シュテルン少尉は慎重に舵を取り、シグヌスを浮上させた。

：俺はヴェルターさん、トシリアと共に出撃。敵の戦艦の数こそ

少ないが、MSの数は二十数機。三機だけで大丈夫なのか？  
そんな杞憂をいつまでもしてはいられず、敵部隊が見えてきた。

「気を抜くなよ」

「了解です！」

つつても、三機だけであんに突撃すんのは、まさに『飛んで火に入る夏の虫』だ。  
とにかく、戦艦<sup>アタマ</sup>をおさえないと……。

「私が敵部隊を攪乱する。アラク中尉はその隙に敵艦を」

「了解です！」

早速この対艦刀の出番が来たようだ。刃渡りに桃色のビームをほとばしらせ、いつでも斬れる準備をした。

「ネイビー少尉は後方援護をたのむ」

「了解です、少佐」

その言葉を聞くと、ヴェルター少佐の駆る濃紺の可変機のガンダム3号機テトラがファイターモードに変形し、戦闘機のような機体をバレルロールさせながらミサイルで攪乱し始めた。

（今だな……！）

ヴェルターさんの指示通り、敵部隊をかい潜るべく、対艦刀を振るう。

「邪魔だ、どけえ！」

ヒートアックスを振ってきたポーンに、両手に持つ対艦刀で対抗する。

ガキイン、という鋭い音を鳴らし、対艦刀のパワーでよろけるポーン。今の俺の狙いは敵艦であるため、よろけた敵を敢えて追撃せず、敵艦に直行させた。

後にしたポーンは受け身を取ろうとしていたが、ガンダム1号機アサルトのビームライフルで撃墜されていた。

「……」

先程まで刃を交わした奴が死んだと思うと、急にセンチメンタルになってしまいが、何やってんだ俺！ と頭を掻きむしり、敵艦を改めて見据えた。

目の前に敵艦を捉えた。そのまま敵戦艦の艦底部から切り裂こうと対艦刀をしかと握り直そうとするが、不思議なことに対空砲火が一切飛んで来ないのだ。

(なんだ、攻撃してこないのか……?)

だが、何もしないのでは何も始まらないと思い直し、両手に持った対艦刀を思いっきり振りかざした。切り込みを入れようと対艦刀を艦底部に触れた瞬間、いとも簡単に、いやなんの手応えも無しに艦底部が切れた。一瞬あまりの手応えの無さに訝ったがその時、艦から異様な爆発が起きた。

「ううおあッ!?!」

爆発に巻き込まれないよう直ぐさまその場を離れるが、爆風が追い風となって機体を航行不安定にさせた。

「ちい、何なんだよあれは!？」

……まさか、あの艦はダミーだったのか？

そう思っている間に、航行不安定になっている自機シャドーに近づいてきたMSが。

「くそ、つけあがるな!」

対艦刀で振るい、ヒートアックスを持ったポーンを押し返し、よろけたところを今度は逃がさずに胸部一閃突いた。ポーンは動かなくなり、対艦刀を抜いた。しばらく落下したあと、ポーンは海上で爆散した。

しかし、ポーン共が次から次へと撃ってくるマシンガンに装甲がじりじり削られる。

「ええい! きりがない!」

いちいち対艦刀を振っていたのでは身が持たないので、もう一隻の艦を今度は複合兵装ランスビーム砲モードで撃墜し、ポーン共をまとめて爆発に巻き込もうとするが、やはりそれを邪魔しにかかる。

「くそッ、鬱陶しいんだよ!」

複合兵装ランスに持ち替えることもままならずそのまま対艦刀を振り回すが、大きすぎて小回りが利かず、自機シャドーはキレイのいい動きができないでいた。

「ッ、こんなお荷物!」



ヒートアックスを振りかざしてきたポーンに対し正面から受けて立つのはやめ、空振りした後死角に回り込み、ようやく対艦刀を腰部スカートアーマーにマウントでき、背部から複合兵装ランスを取り出し、薙刀状にランスを形成した。

「てええやッ！」

薙刀を真下から突き立てる。ポーンは後ろに回避したが、股間部の装甲を削り取れた。

「とどめだ！」

今度は正面から薙刀を突き立てる。

しかし、機内が急な振動に襲われる。思わず頭をシートに打ち付けてしまったが、バイザーをしていたため、自分は石頭だと自負しているためあまり痛くはなかったが、薙刀突きは失敗。後ろを振り返ると、ポーンは右手にバズーカを担ぎ、その砲門から煙がゆらゆらと出ていた。

「くそッ、なんなんだよコイツら！」

バズーカを撃ったポーンに向けてランスのビーム砲を撃つが、あっさり避けられてしまった。

「ツツツ、どうなってやがる！」

「中尉、大丈夫ですか!？」

ランスをきちんと組み直し、ビーム砲をもういっちょ撃つたところに、ガンダム1号機アサルトに乗るトシリアの声が聞こえた。

「今んところは大丈夫だが……」

「数が多過ぎますよ！」

「わかっている！」

ビーム砲を撃つが、一向に当たらない。トシリアのアサルトの方も芳しくないみたいで、肩部ミサイルポッドを数発放つても有効打を与えられずにいた。

俺、トシリアともにお手上げ状態だった。

「どおあ!?!」

アサルトの装甲にポーンのバズーカが被弾し、コクピット内に衝撃が響く。被弾した右ののショルダーアーマーが少し焼け爛れた。

「いてえっ!?!」

ライトアームの肘関節部にアサルトライフルが被弾し、小爆発したシャドー。スパークが走り、ライトアームはもう使えそうになかった。

一方、敵部隊の攪乱を担ったヴェルターの駆るガンダム3号機テトラは、単純な軌道でしか飛行できないファイターモードから変形し、MS形態で粘り強い応戦を見せていた。

頬部のビームバルカンで敵を牽制し、敵が動きを止めたところにライフルで仕留めた。

次の敵には、最初から両手に持ったライフルで牽制し、動きを制限していた。敵は肩のシールドを構え、その隙に抜刀する。シールドを翳した状態のまま、ヒートアックスを右手にテトラに突撃する。

テトラは構わずライフルを撃たんと右のライフルを構えるが、脇からのマシンガンの連撃で、ライフルを撃とうとしていた右のマニピュレーターがひしゃげてしまった。

「くっ………！」

正面から来るポーンからの回避も間に合わず、咄嗟に真つ赤な口部高エネルギービーム砲を噴いた。口径や収束率の大きいビーム砲は、ポーンのシールドでは防ぎきれず、本体にまでビームが貫通する。突撃の慣性でやや前に来るものの、刹那爆散した。

「……きりがいな」

まだあと数十機も残っているのにも関わらず、一機を倒すのにいちいちこんなに時間をかけていたら、ガンダムとはいえ装甲とエネルギーギーが持たない。

ガルマンやトシリアは相変わらず芳しくない状況にあった。回避すれども多角的に攻められているゆえうまくかわしきれず、装甲は毒が回るようにじりじり削られ、機体のパワーもイエローゾーンに突入し、ビーム兵器も下手に使えない。もはや消耗戦と化していた。

「ちくしょう、どうすれば………！」

ガルマンが歯を食いしばったその時だった。

ブアアアアアア………！！

：黄色いごん太のビームが戦場を流れた。このシャドーのモニターでもはつきり確認できた。このビームは……！

「こ……コロナ……？」

黄色く太い火線は、敵部隊、敵艦共に焼き払っていく。さっきまで俺達を散々苦しめた奴らが、一瞬にして黄色い火に焼かれた。

ビームが止む。ビームの源の方を見ると、金色に輝く八枚の羽を広げた赤いガンダムがツインアイを鋭く光らせながらこちらを見ている。

「あれは……コロナ！」

俺の言葉は確信に変わった。

「……つたく、世話焼かせやがって。連邦の士官ともあるつ者達が聞いて呆れる」

このけだるそうな声……間違いなくレイジだ。

「レイジ！ なぜ!？」

トシリアが訊いた。知り合いなのか？

「おおー。君はトシリアか。久しぶりだな」

「今まで、何してたんだよ!？」

「そいつは後だ。まだ敵は来るぞ」

そういつてレイジはコロナの両手を前に突き出し、ビーム砲を連射し始めた。その命中率、まさしく百発百中だった。

「すげえ……どこでこんな技術を身につけたんだ？」

素人とは思えない射撃技術だ。そして、

「うぉあー！」

左のサーベルで敵をぶった斬った。同時に背後からきた敵を右のサーベルで串刺し、薙ぎ払った。見たところ、接近戦の技術もかなり高いと見た。

……一言で言つと、スキがない。

戦闘終了。5vs約40という圧倒的戦力差の中、コロナのお陰で圧勝した。

「レイジ、やっぱお前すげえよ」

トシリアがレイジを褒めた。

「目の前にある戦いの火種を吹き払っただけのことさ」

素直じゃねえな。

「なあ、共に戦ってくれたんだからよ、ウチに来いよ」

こつちに来てくれない方が不自然だ。そう確信しながらレイジに提案する。

「ウチって、シグナルって戦艦？」

「シグヌスだ！」

「てか俺、学生なんだけど？ 学徒出陣ですかコノヤロー」

「……意味違くね？」

我ながら珍しく冷静にツッコむ俺だった。

「……あんたらと同盟組むってんなら断りはしない。だが、一緒に戦艦に乗ってあーだこーだすんのは御免だ」

そう言ってコロナはいずこへ行ってしまった。……わからない。

「……レイジ、お前は一体何を考えてんだ……？」

俺にはさっぱり分からない。

帰還。レイジのコロナのお陰で、三機とも損傷軽微で済んだ状態で作戦は大成功。

「おかえり！ ガルマン！」

ビリーが俺の乗っているシャドーを迎えてくれた。

「対艦刀どうだった？」

「悪くない使い勝手だったぜ。まあ、ちと取り回しが悪かったくらいかな」

「そうか。まあ、ゆっくり休めよ」

相変わらずタメ口だが、今更ツツコむのは遅すぎる気がする。

シャドーから降りた俺は、アサルトから降りたトシリアと話していた。

「お前、そういえばレイジの知り合いなのか？」

「ああ、はい。二、三年前、軍の訓練学校での同級生でした」

「そうか。でも、なんであいつ軍に来てないんだ？」

「さあ……なんででしょうか。僕もさっぱりわかりません。あいつが卒業して以来さつきまで全く会っていませんでしたし……」

トシリアが顔を下に向けた。

「そうか……」

「学校では、腕のいいパイロットとしていい評価を受けていたんですよ」

トシリアは再び顔をあげて明るく話す。

「だろうな。あんな化け物をまるで自分の手足のように動かしてたもんな。じゃあ、あの卓越した操縦技術は訓練学校で？」

「いや、来た頃にはもう既に……」

「……そうか」

ますます謎だわ。

「でも、あいつ……ホントに、昔からなに考えてるかわかんないやつなんですよ」

「……うん、大いに頷ける」

「ですよね（笑）」

「いや（笑）って何だよ！活字ネタやめろよ！フツーに会話してたらこんな面倒臭エやり取り成立しねえだろーが！」

嗚呼。またエネルギーシユ・ツツコミをしてしまった。俺の脳神経、マジで大丈夫かな？

不安だわあ……。

：俺レイジはコロナを収容すべく、森にいた。コクピットハッチを開け、機体から降りる。四次元ポケットから出した（嘘）シートを機体に被せ、帰宅。

「あゝ同盟組むって言っちゃったよ」

後悔が入ってんのか入ってないのか自分でもよくわかんない感じで言いながら帰宅。飯を作るべく、手を洗って台所に立った。

…ふと思った。

そーいえば最近募参り行ってないな。明日あたりに行くか。そんなことを考えながら冷蔵庫から野菜を取り出している俺だった。



というわけで明日、(義理の)母親の墓参りに行くことにした。

明くる日曜日の朝。なにやらレイジは墓参りの支度をしているそつだ。まだ6:00にもなっていないが、眠たそうな顔を一つもせずにせつせと準備をしていた。

6:45。支度が終わったのか、レイジは黒スーツで両手に花束を持っていそいそと家を出ていった。彼のきびきびとした仕草やきちんとした格好、綺麗な目つき。これはどうということなのだろうか？

：俺は花束を両手にバスを待っている。いつも学校に行くんで使ってるバスと同系統のバスだが今回は逆方面のバスを待っている。

バス停に立ててある時刻表と自分の腕時計を見た。もう一分以内にくるはずの時刻だった。

案の定、すぐにバスが来た。ドアが開く。整理券を取る。後ろの方の席に座る。荷物を適当に置くと、俺はいつもの如く漣を見つめた。いつもとは逆方面なので少し遠いが見えないことはない。昨日とは違い、穏やかな漣だった。

レイジは、乗っていたバスを降り、両手に花束を持ちながら歩いていった。

(もう一年ぐらい行ってないんじゃないか?)

そう呟いて彼は『MANA・ALMERIA』と彫られてある墓前に立ち止まり、花束を供え、屈みながらこう言った。

「……すみません。僕はまた同じ過ちを繰り返そうとしていますが、あのガンダムは誰にも渡せませんし、僕に必要なものなものです。どうかお許し下さい、お母さん……」

と言い終わったところに、

「……あら? あなたは……?」

後ろから女の人の声がした。

「あなたは……」

レイジは透き通るように美しかった目をいくらかいつもの眼光のない目に戻しながら言った。レイジの後ろにいた女の人は、なんとユキミ・サインであった。

「……君も墓参りかい?」

「ええ。私のお父さんの……それにしても奇遇ですね。またこうして会えるなんて」

とユキミは右の小指を立てた。

「……なに、その小指……?」

「指切りげんまんって知ってますか?」

ユキミは小指をそのままにニコニコしながら首を傾げる。

「いや知ってるけど……それとこれ、どー関係あんの？」

「……なんでしようね。私もよくわかりません！」

「いやそんな笑顔で言われても。もうちょい自分の言ったことに責任持とうぜ……」

レイジはズレたスーツを直しながら冷汗をかいていた。

「……うふふつ、レイジさんって面白い人」

「うん、君も十分面白いけどね」

「……あたし、久しぶり。こうやっておともだちと普通に話すの。

昔は違ったのに、今は金持ちで……私が金持ちの子供というだけで、みんな私と普通に話してくれなくて……」

ユキミの俯いた風は、どこか切実さを醸し出していた。レイジは『昔は違った』という言葉に引っ掛かったが、ユキミの過去をほじくることはしなかった。

「……そうかい」

そうだけ言ってレイジは遠くに連なる青々とした山脈より果てしなく高くて晴れたそらを仰いだ。

「……俺、そらを見んのが好きなんだよな。こいつを見てると……なんか、こんち俺のやってること、考えてること……そいつら全部がちっぽけに思えるんだ」

レイジはとても澄んだ顔でそらを眺め続けている。

「そうなんですか……あたしも暇があったら、この空、仰いでみま  
すね」

「……そうか」

そう言ったレイジは、少しだが微笑んでいた。スーツ姿にいつも  
よりはおりている髪もあいまっていつにない精悍さがあった。

「……レイジさん」

「んん？」

「ずっと前から気になってたんだけど、Unit003のとき、な  
んでアドレス帳への登録が失敗したって言ったの？」

：ツッコみたい箇所が一箇所だけあるが、ツッコんだら負けな気  
がしたのでそのまま答えることにした。

……とその前に。

「……今日あなたの母ちゃん来てる？」

ユキミはブンブンと首を横に振る。ふわふわで長くて黄色い髪の毛もゆさゆさと揺れていた。

「今日は無理言って一人で来たの」

「そうか。んじゃあ……」

レイジは話を続ける。

「あん時『成功した』なんて言ったら、あの母ちゃんだったらすぐ  
にでも君のケータイを取り上げて俺のデータを消すと思ったからだ  
よ」

「さっすがはレイジさん！」

「……いや、俺の何を以って流石つつつてんのか今一つよくわかんないんだが」

俺はユキミの言葉に冷汗をかいていた。

「うーん……なんかレイジさん、不思議な貫禄がある！」

君も十分不思議ちゃんな気がするけどね。貫禄て……やはり俺はオッサンなのね。

「ごう、何て言うか……うーん……何か、揺るぎないものを持っているっていうか」

「揺るぎないもの……」

「うん！ あなたになら、ついてってもいいかなって」

こんな美少女にそんなこと言われたら、大抵の男は好き放題いろいろやっちゃうぞ？

……え、卑猥だって？

「そつえばレイジさんは歳いくつですか？」

「んあ、16だけど？」

「ええっ！！？」

目と口をこれでもかかってくらいにOPENしているユキミ。一体、今の俺の発言のどこにサプライジングポイントがあったのだろうか？

「……なぜにそんなに驚く？」

「だって、私とほとんど同じ年なんだもん！」

うんと年上だと思ってたのか？ てかこの前のメールのやりとりの時点で同じ年だってわかるだろ。

「だってレイジさん、担任の先生かと思ってたんだもん」

おーい。俺のプライバシー聞いてたでしょー。まあ俺見た目は青年（？）だけど心はオッサンだからね。

……あ、オッサン認めちまった。

「……明日、絶対学校行くから、絶対待っててね」

「おう。頑張れい。待ってるぜ」

「？」

ユキミは俺の言葉にきょとんとしていた。

……不覚にも可愛い。こりゃ負けた。

「母ちゃんを説得すんだろ？」

「そうですね……でも、多分聞かないと思います」

ユキミは下を向きながら答える。

「……どうするんだい？」

「脱出します！」

「……うん？」

「明日の朝、誰にも気付かれずに脱出します！」

「……ああ、そういうことか」

たったの5文字の意味を理解するのにユキミの説明経由でやっとわかった。俺は理解力がないのだろうか？ ちょっと自分に自信が無くなった俺だった。

「……そういえば、レイジさんは……誰のお墓参りに……？」

少し沈んだ風にユキミが訊いてきた。

この子、死という言葉に対してナイーブなんだな……きっと。よほどその父親のことが好きだったのかな。俺は義理でも父親はいなかったからよくわかんねえけど……。

「……義理の母親だよ」

「義理の……？」

「そう……七年前にな」

そうだ。七年前の俺の誕生日はマナさんの命日。今でもあの時を思い出すと思わず涙が出そうになる。

「……レイジさん、両親だけじゃなくて義理のお母さんも……」

そう言ったユキミは泣きそうだった。感情移入してくれるとは。優しいんだな、この子は。

「両親は顔も知らないし、墓の場所も知らないけどな。父親は俺が生まれた時には既にいなかったらしいし、母親は俺を産んですぐに死んじゃったらしい」

「もう……いい……うっ……うっ……」

泣きしゃぐりながら俺のスーツに埋まった。

「……親の顔も知らないなんて……うっ、かわいそう……」

……なんかすっげー罪悪感。こんなに可愛い美少女をこんなに泣

かせてしまったのだ。

……謝った方がいいよね？

……え、シリアスぶち壊しにも謝れって？ それは……作者に言うてくれ。

「……………」

「う……うん、むしろ、レイジさんのこと……もっと知れて、嬉しかったよ……」

泣きながらそう言うユキミ。いや、だから……泣かないで？  
舗ひろ じゃないけどさ。

「いや、男として面目が立たないからさ……」

「……知ってる？」

「ん？」

ユキミは泣き目で急に尋ねてきた。

「舗ひろ しには『泣いていいよ』っていう歌もあるんだよ？」

おーい！ また俺のプライバシーに勝手に侵入したでしょー！  
て、へえ〜。そーなんだ。

「トリビアでやってたの！」

泣き目泣きつ面が少し残っているが、偽りない笑顔で言った。俺はそれを見てホッとしたのだった。



帰宅。夕飯を作る……前に、着替える。いつまでもスーツはキツイ。物理的にも精神的にも。

俺はいつもの水色のＴシャツ（同じのを何枚も持っている）を着、綿パンをはいた。

「さあて、飯作っか」

そう言ったレイジの目は、いつもの眼光がほとんどない目に戻っていたのだった。

## Unit007：戦慄の鎖

……なんだここは？

俺もといレイジは激しく問いたくなつた。

俺が目覚めたら、何だかよく分からんところで寝ていた。薄暗い部屋の中、朦朧とした目で周りを見てみると、何て言うか……向こうにメチャきれいに片付いている机があつた。

いや、きれいつていうか……そもそも俺の寝室、あんなところに机あつたか？

俺の寝室の場合、机はベッドの枕のすぐ右横にくつついてる感じであつた筈だが、今のこの部屋は、右側にあるのは同じだが、ベッドから全然離れてるし、枕から右90度じゃなくて右45度くらいの位置に机がある。

「……どーなつてんのこれ」

単調な口調でぬうっと起き上がる俺。

きつと寝ぼけてんだ。

そう思つて電気を付けようとするが、やっぱりいつものところにスイッチがない。

俺は半分も開いてない目で俺なりに一生懸命探した。すると、机の上に変なモンがあつた。

「……リモコン？」

テキストにスイッチを押してみる。俺は押した次の瞬間、確信した。

「……ここ、ゼッター俺の部屋じゃねえ」

だって、リモコンで電気が点灯したんだもん。そんなにハイテクな電気、ウチにはございません。

「……一体ここはどこだ？」

外に出ようとするが、白く無骨なスライドドアっぽいものが俺の行く手を阻む。

どんなドアかって？

ホラ、アレよ。ガンダムとかによく出てくる戦艦の個室のオートロック式のドアみたいなやつだ。

……ん、待てよ？ 戦艦？ ひょっとしてこっつて……

「……シグナルって戦艦??」

「シグナスだ!! なんかナルツとした感じで気持ち悪いだろうが……」

ドアの向こうから、覇気を隠し切れないあんちゃんの声がする。

……ん、待てよ？ 剥き出しの覇気？ ひょっとしてこの声って……

「……ムツツリスケベ？」

「誰がムツツリスケベだ!!」

あ、やっぱりそうか。この激しいツツコミはガルマンに間違いない。

「……っ、開けるぞ」

ピシユウ！ とドアが開く。

声だけではなく、顔も見たことある奴だった。同時に、見たことがない人も隣に立っていた。

ガルマン（ムツツリスケベ）は相変わらずの血気盛んな目をして  
いるが、隣にいるツインテールの女は、無機質な表情をこちらに向  
けているだけだった。いけ好かねえ奴。

そいつの口からこんな言葉が発せられた。

「レイジ・ヒイラギ二等兵、本日よりあなたはシグヌスのガンダム  
パイロットになってもらいます」

女はやはり無機質に言って除けた。

……てか、何者なの？

「……あの、どなた？」

「……私は、この戦艦シグヌスの副艦長を務めるルイ・アジエスタ  
ー中尉です」

まるで機械が話すような無機質を醸す副艦長さん。でもなんだろ  
う、ガルマンと並ぶとなんか絵になってる気がする。てことは、  
もしかしてガルマンの……

「……この人、ガルマンのカノジョ？」

「えっ！？ ちちち、違うわー！」

ううん？ あからさまに赤面しているように見えるのは気のせい？

……ま、んなことはどうでもよくて。

「てかさー、今日学校なんだけど？ ガールフレンドとの約束もあ  
りだけ？」

「コキミは今日は必ず学校に行くと言っていた。俺は彼女の約束を無下にしたくねえのによ。」

「……お前には本当にすまないと思っている」

ガルマンは、珍しく畏まった風に言った。  
「てかそもそも……」

「何で俺こんなところにいんだ？ 寝てる間に俺ん家に押し込んで俺をまるごと連れて来たってか？」

「……そうだ。コロナも一緒にな」

申し訳なさそうに答えるガルマン。  
「なんだか調子狂うな。」

「……一緒に戦ってくれるだろ？」

「やだね」

ふざけんなよ。

「何故だ？ 何で一緒に戦ってくれないんだよ！？ お前だって、

UUのMS部隊を殲滅してたじゃないか！」

「坊やだからさ」

「いや、真面目に答えろよ！」

半分キレてた。シラケるんだよね、こーゆーの。

「あーあ！ せめてケータイくらいありゃいいのになー！」

わざとデカイ声で主張。

「……わかったよ。ケータイ持ってきてやるよ」

ガルマンは、少し諦めた風だったが、俺の嫌味を受け入れてくれたところか、要望にも答えてくれた。

「えっ、マジ？」

「お前にはここに居てほしいからな。あ、お前は来るなよ。脱出するかも知れないからな」

「んじゃあとさ、草加せんべいと、赤穂の天塩せんべいと、胡麻せんべいと、コーヒーゼリーと、海老せんべいと……」

「注文多いわ！！　っーか何で日本のお菓子ばかりなんだよ！！

もうええわ！　わからんからお前ついてこい！」

「わーい」

「……」

：なんかものすんげー敗北感を味わった。情に任せて取りに行くなんて言わなきゃよかった。かなり後悔モンだわ。

整備工場。相変わらずガシャーン、ガシャーン、という機械が動く音が聞こえる。

「ったく、注目が多いぜ……そんなに持ってきて何すん……」

とレイジに向かって何か言っただつもりだが、

「うん、何が？」

という、レイジじゃない人間が答えた。  
何故にビリーがいる??

「おい、何でお前がいるんだよ」

「いちゃ悪いかよ」

うん、そろそろタメ口やめてもらおうか。

「……てか、お前そろそろタメ口やめろ」

「ヤダ」

その次の瞬間、世紀末的悲鳴が整備工場内で響いた。

それを聞いていたレイジは、ガルマンのもとから離れていて、コロナのコクピット中で、スイッチとコード打ちこむためのキーがあるデバイスに、コロナのコンピューターに接続しながらキータッチをしていた。

「……ビリー、どうしたんや?」

片手間にそう呟いた。

MSには、自爆装置というものがある。機密保持や兵站が尽きた時の最終手段など、用途は限られていないが、基本は遠隔操作での自爆はできない。しかし、何らかのプログラミングを施せば可能である。

「……よし、終わった」

レイジは、コロナに備え付けてあるキーボードをしまい、接続用のコードを外し、半開きのハッチを開け、コロナから降りた。する

と、虚空を眺めながら泡を吹いているビリーが、整備工場の中大の字になって仰向けに倒れていた。

「ガルマン……お前、何した？」

「んん？ ちょっと」

レイジが訊いたのを、笑顔で答えるガルマン。

「お前のその『ちょっと』の程度でかくね？」「そうかい？」

ガルマンは満更でもない顔で答えた。

：俺は今、レイジとビリーを連れてトラヤヌスでヒイラギ家に向かっている。運転席には俺ガルマン、後部座席にビリーとレイジが仲良く座っていた。

「でけえ戦闘機やな」

レイジが呟く。

「これ単体でビームライフルを装備できるんだぜ」

いつの間にか全ての傷が治ってるビリーが補足。

「にしても、レイジって煎餅が好きなの？」

「大好きや」

「おおっ、きつぱり言うねえ」

「……ああそうそう、俺ん家、家庭菜園持ってさ、それとかどう



するつもりなんだよ。お野菜たち枯れちまうぜ？」

レイジが俺に訊いてきた。

「どうするっつわれても……どうしようもできないだろ」

「勝手に連れてきてきといて何や、その無責任な態度は。野菜だって生きとるんやぞ？」

「……誰か近所の人に育てて貰えばいいじゃねえかよ」

「……ッ、……」

レイジが舌打ちをし、トラヤヌスの窓の下に広がる海を見下ろす。何をそんなに苛ついてんだよ。育ててもらっくんじゃダメなのかよ。

いつもの森にトラヤヌスを着陸させる。木々がトラヤヌスの着陸に際して揺れている。

「うーん！ やっぱ森林浴はいいねえ」

両手をうっんと挙げ、オッサン臭いことを言うビリー。

「……」

レイジは、綿パンのポケットに手を突っ込んだまま、不機嫌そうな顔でそっぽを向いている。

「……さ、行こうか」

「おうー」

「……」

伸びの状態から戻すビリーと、相変わらずそっぽを向いたままのレイジ。二人ともついてきてはくれたが、レイジは一向に機嫌が良くならない。

……そんなに嫌なのかよ、戦艦に乗ることが。

ヒイラギ家に到着。レイジが鍵を開ける。

「さあて、まずはケータイか」

「入んな」

突如レイジから無機質な声が発せられる。

「外で待ってる」

今、レイジには逆らえなかった。逆らったら、戦艦に戻ってくれないかもしれないからな。  
こんな軍人、他にいないよな……。

「ああ、スマン……」

「……………」

レイジは無機質な眼差しで俺を一瞥したあと、無機質にドアを閉めた。

「レイジ、気イ悪くしちゃったみたいだな……」

ビリーはドアを見ながら悲しげに言った。

「育ててる野菜たちに、愛着があったのかもな……」

ビリー目線を下ろしたと同時に、沈黙が流れる。

沈黙したからか、後ろの方からザザア……

という漣の音が聞こえた。特にすることもないので、振り返って道路に歩み寄ってみた。

ガードレール越しに漣を見ている。俺の主観であるかもしれないが、なんだか何となく雑に見える。ザアツと砂浜の砂を打ち付けるような感じに。

「ガルマン、なんで海なんか見てんだあ？」

遠くからビリーの声が聞こえる。

「んああ、今行く」

と言って、ガルマンがレイジの家の前に戻ろうとしたら、バスが横切ったので一旦待ち、過ぎてからビリーのところへ行った。

そのバスは、レイジが普段登校に使う便であった。

レイジは、何やら身支度をしている。学ランを着ている。

(……ち、ふざけてるぜ)

不機嫌な顔全開でボタンを閉める。

「さて、行くか」

鞆を担ぎ、スタスタとドアに向かう。

：俺とビリーが締め出されてから早10分が経過した。ドアノブがガチャ、と動く。

「おお、レイジ……ってお前そのカッコ……ウゴツ!？」

レイジの裏拳が俺の鳩尾に入った。

「お、お前……!？」

悶えながらレイジの意思を確かめる。

「俺は軍が嫌いだ。テメエらなんかについていくかよ」

もう一発裏拳を喰らう。

もう俺に意識はなかった。

「……悪く思っなよ」

「れ……レイジ!? 何やってんだよ!？」

ビリーはこの暴力的なシーンに対し明らかに仰天していた。

「ビリー、あの戦闘機の操縦はできるな？」

「んあ、ああ………勿論」

ビリーは予測もしていなかった質問をされ、多少戸惑いながら答えた。

「……俺が夕方帰宅するまでに、コロナを森に戻しておけ」

「……………えっ？」

「さもなければ……………こいつでコロナの自爆装置を起動させる」

…するとレイジは、スイッチとコードを打ち込むためのキーがあるデバイスを取り出した。

多分、あれが自爆装置の起動デバイスだな……………。

俺は息を呑んだ。

「……………わかったな？」

「んあ、ああ……………わかった」

渋々答える俺。

今の俺には、ガルマンをトラヤヌスまで運び、連れて帰ることしかできない。レイジに反抗することなんて出来るわけがない。

反抗したら、本当に自爆されたらみんなが犠牲になる。

いや、そもそも反抗できたとしても、ガルマンを揜伏せられる程の腕力を持つ奴になんか勝てるわけがない。

こいつ、何者なんだ……………？

俺は、気絶しているガルマンをレイジから受け取り、ガルマンを担ぎ、トラヤヌスに向かった。けれど、言いたいことがあったので、これだけはどうって、ガルマンを担いだままレイジに振り返る。

「……………でも、俺の中では、レイジは気の合う友達だって思ってるからな」

俺は向きを直し、俺の今の任を全うすべく歩み出した。

(友達……か)

：俺は先程乗った、いつもより一本遅いバスの中でビリーの言った言葉を心中で呟いた。

ちと過激なことをしちまったかもしれないが、ああでもしなけりゃ抜けられなかったろうし。つーかそもそも入隊願もしてないのに連邦入れたなんて冗談じゃねえよ。

ガルマンを担いだビリーは、トラヤヌスに乗り、自分の任を全うすべく戦艦シグヌスに向かってる。

「……ん、あれがレイジの言ってた野菜畑……？」

：俺は、トラヤヌスから見下ろした景色の中、内陸部にある小さな畑を見つけた。ひょっとして、こいつを守るために戦ってるのかも……？

バスに乗っているレイジは、いつものように漣を見つめていた。やはり浮かない顔である。

：多少罪悪感が拭い切れてないまま、学校に着いた。やはりみんなは学校じゅうで呑気に騒いでいる。なんでも文化祭が近いとか。

そんなわけでE組に入る。今日は一本遅いバスに乗ったんで、いつもよりは遅い。だが、これはいつも通りだった。

「あ、おはよう、ヒイラギ君」

隣のカナリーが挨拶をしてきた。

「んああ」

「……どうしたの？ 何かあったの？」

俺の顔を伺いながら訊いてきた。

「チンピラに絡まれた」

「……えっ？」

カナリーは片眉を上げながらメガネをずらす。

「全部裏拳で鎮めた」

「……へえ……」

：私は、ヒイラギ君の話を聞いたが、いろいろと返答に困ってる。裏拳って何だかわかんないし、寧ろ村健？ って聞き返したくなるし……。

バイオレンスなことにあまり縁がなかった私にとっては、想像がつかなかった。

：8：30。登校終了(?)のチャイムが鳴った。今日もユキミは来ていない。

おいおい、くたびれ損じゃねえかよ……。

わざわざ戦艦から無理矢理降りてきたってのに……何やってんやあのユキミの母親らしきオババは！

俺は頬杖をつきながら、陽光が虚しく反射している空席　もと  
いユキミの机を見つめる。

ユキミはいつになったら自由にさせて貰えるのかねえ……

その頃、ビリーの操るトラヤヌスはもうとっくに着艦していて、  
ビリーはガルマン共に降ろしていた。それを見た整備員は、

「工場長……中尉がどうかしたんですか!？」

「ああ、虎の子あんちゃんに逃げられちゃった」

「あの白髪の男に?」

「そう……それで、夕方までにコロナを森に戻しておけって……」

「本当ですか?」

「でないと、こいつ、自爆させるだってよ……」

「!?!」

ビリーがコロナを親指で指したのを受けて、整備兵の顔が一気に  
青ざめる。

「……ガルマンを医務室に頼む。俺は艦長達に報告する。まだ夕方  
までは猶予がある」

「わ、わかりました!」



整備兵は医療班を呼び、医療班はガルマンを担架で医務室まで運んだ。一方のビリーはブリッジまで急いだ。

…ブリッジに着いた。

「や、ヤガミ艦長！」

「どうしたの？」

「レイジを逃がしてしまいました……俺の責任です」

「何ですって!？」

ヤガミ艦長、もといアカネさんは驚きの顔を隠せていなかった。

「それで!？」

アカネさんは俺に続きを促した。

「夕方までにコロナを森に戻しておけ、と。さもなければ、コロナを自爆させると……」

「!？」

ブリッジにいるほぼ全クルーが口を半開きにし、目を丸くしていた。その中で、ルイ副艦長が、

「……はったりの可能性もあります。整備班に確認を急がせて下さい」

「ごく冷静にルイが言った。

あの時のレイジの目はハッターリじゃなさそうだったが……。

「カーガル工場長」

俺を急かすように有無を言わせないように念を押すルイ。

「……無茶だ」

「……？」

ルイは俺の言葉に対して怪訝そうに、いつもは平坦な表情を曇らせる。

「……自爆装置は時限式じゃねえんだ。爆発シーケンスはあいつが握ってたんだ」

「……つまり、彼の任意でいつでも自爆させることができる、ということですか？」

その副艦長さんの言葉に無言で頷き、話を続けた。

「そんな一触即発なモンいつまでも置いときたくないだろ……？」

俺は今すぐにでもコロナを森に戻りたいんだよ。俺はもう……人が死ぬのを見たくないんだよ」

「……では、なぜ彼を止めなかったんですか？」

「きつとあいつも……戦争なんて起きて欲しくないって思ってたんだよ」

その時、俺の頭の中には、トラヤヌスから見えた野菜畑が脳裏を過ぎった。

「……だから、俺達が返さなかったら……その戦争の火種の一つであるコロナを自爆させるつもりなんだ」  
「……」

副艦長さんは黙り込んでいたが、いまひとつ理解していない風だった。

「……あいつも、気付いているのかも知れないな……もしかしたら、自分が戦争の火種になっているのでは、と」

「……そんなことはありません」

無機質にルイが否定する。

「安直に誰の手でも届くようなところにコロナを放置したUUも十分に非があります。今回はUUの自業自得と考えていいでしょう」  
「あんだ……」

ルイは俺の言葉を気に留めた風もなく、右側にあるインカムを取り、整備工場に繋がった。

「整備班全クルーに通達します。只今からコロナの自爆装置の確認作業を……」

馬鹿野郎！ 誤爆したらどうするつもりだ！

「今すぐコロナを返せ！！」

俺は怒りに任せて副艦長さんのインカムを横取りしていた。

「確認作業はいい……今すぐコロナの返還作業に移行しろ」  
「カーガル工場長！」

副艦長さんの声などに構わずに続ける。

「工場長命令だ。今すぐ取り掛かれ」

「カーガル工場長！ 勝手なことをしてもらっては困ります」

もうその時には、俺はインカムを切っていた。

「……どうせいいだろ？」

「……？」「この辺で戦闘が起きれば駆け付け付けてくれるんだらよ」

「……しかし、あの機体を手放す訳にはいきません」

確かに、いろいろと面倒そうな機体だけど、だからこそ、今はレイジの言う通りにしないとヤバいことになりそうなんじゃないかよ……。

「もともと連邦<sup>ウチ</sup>の機体じゃないし、いつ自爆するかわからない爆弾同然のコロナを、いつまでも持つてるわけにはいかないだろ」

「……艦長、どう思われますか？」

副艦長さんはアカネさんに意見を求めた。

「……機体関係は全てカーガル君に任せているから、私からは返答出来ないわ」

「……」

副艦長さんは黙り込んでいた。

「……では、失礼します」

敬礼し、ブリッジの自動ドアを出た。

整備工場まで急いだ。

俺は、コロナの自爆装置の件でそわそわした雰囲気は漂う廊下を駆け抜ける。  
すると、

「……あ、ベリー！ コロナの自爆装置の件、本当なのか？」

トシリアが話し掛けてきたが、生憎急いでるので、

「あー、ごめん！ あとにしてくれ！」

「あ……あぁ……ごめん」

スマン！ トッシー！

といわけで、そのまま整備工場に急いだ。

整備工場に着いた。

コロナだけ少し大きいからか、それともあの中にえもいわず恐ろしい爆弾があるからか、赤い巨人だけが異様に禍々しく見える。

「おーい！ 進んでるかー？」

声を張り上げて言う。

「工場長、重くてなかなか動かせません！」

「コロナ（そいつ）の重量はいくつくらいなんだ？」

作業用アームで動かしづらいなんて、コロナはそんなに重いのか？

「80tは超えています！」

「ええっ！？ そんなにあんのかよ！」

「ここに運んできたときみたいにガンダム二機で運んだ方が早いです！」

「そっか。わかった」

「じゃあねえな……ガンダム1号機アサルトのトシリアと、ガンダム3号機テトラのヴェルターさんに頼むか。」

「とそこに、」

「ビリー！」

「トッシー、ちょうどいいところに！」

「トッシー、ちょうどいいところに！」

「……地の文と一緒にだね」

「そうだな、アハハ！……って、え？」

「それはいいとして、」

「そうそう、トッシー」

「うん？」

トシリアは、全体的にくりんとした髪を揺らしながら首を傾げる。

「あのさ、コロナを森に戻すことになったんだ」

「そうなんだ」

そう言ったトシリアに疑問の顔はない。

「その運搬作業を……アサルトで手伝ってほしいな、なんて」

「……別にいいけど？」

「マジで？　ありがとな！」

「いやいや」

そう言ったトシリアは少し照れていた。

てなわけで、ヴェルター・ヴァイタル少佐の自室である503号室の目の前にいるわけである。

あゝ……緊張するな。

ヴェルターさんといえば、このシグヌスの中でも有数の古参兵さんで、なんつっても百九十センチは下らない長身と、軍服の上からでもそれに似合った筋肉が見える体型。百七十センチもない俺からしたら尻込みモンだぜ……。

だが俺とて工場長だ！　何を臆するかビリー・カーガル！　突撃あるのみ！

この勢いで、503号室の呼び出しブザーを鳴らした。

「ビリー・カーガル工場長です。お話があってここへ参りました」  
「……入れ」

実年齢以上の貫禄のある声が部屋の向こうから聞こえた。

「失礼します」

横つちよのボタンを押し、スライド式のドアを開ける。

ヴェルターさんの部屋は適当に片付いているが、部屋全体がコーヒーの香りにモワツと包まれていて、何だか学校の職員室みたいなニオイがした。

「どうかしたのか？」

丸テーブルに添えられたチェアに腰掛けているヴェルターさんに早速本題を急かされた。

「あの……コロナを地上に戻したいんですけど……」

と、しどろもどろしながら言ったところに、ヴェルターさんは俺が次言うべきことを先取りするように、

「……私に手伝えと？」

「はい。恐縮ですが……少佐のテトラで……」

連邦ガンダム4号機テトラ。ヴェルターさんの愛機で、濃紺のボディをした可変機である。運用がピーキーゆえ、ベテランのヴェルターさんに譲渡されたというのはとても納得のいく話だ。

しかし、

「……断る」

「えっ？」

物事は思い通りにいくわけではないと思いついた瞬間だった。

でも、ここで退がっていられない。なんせ、今は爆弾を積んでる



ようなもんなんだから……！」

「ヴェルターさん、頼みます！」

意気込んで頼み込んでみたが、ヴェルターさんは淡々と話を持ちかけてきた。

「ではなんの為にここにコロナと彼を連れてきた？」

「それは……」

「……確実にUUを破るためだろう」

そうか……この人、たしか十三年前にUUのせいで奥さんと娘さんを失ってるんだっけか……。

もうここには居づらくなり、退室時の最低限度の礼儀を払い、廊下に出た。

といわけで、ヴェルターさん勧誘にあえなく失敗。

「はあ……」

嫌な溜息が出た。

「どつすんだよ……」

俺は廊下をとぼとぼ歩きながら途方に暮れた。  
刹那、俺はとんでもないことを思い付いた。

「こつなったら……！」

俺はスイッチが入ったように整備工場に急いだ。ヴェルターさんは拒否、ガルマンはまだ寝てる。となれば、俺が運ぶしかない。もとより、俺がレイジを逃がしたから、俺がコロナの返還を急がせたから、こんなことになっちまったんだ。これは自分で收拾をつけなきゃダメだよな。

といわけで、整備工場に到着。いくつもの機械がメカの周りで動いている。アサルトの方を見ると、コクピットが半開きになって、その中にトシリアがいた。

そして、連邦ガンダム4号機シャドーに向き合う。漆黒のボディに、赤や黄色のラインが鮮やかに横切っている。

「……ガルマン、借りるぜ」

……と、意気込んだその時。  
ぐうぐう

俺の腹の虫が鳴く。

「……やっぱり飯食うか!」

流石に空腹には勝てないなあ。

腹が減っては戦はできぬ、コロナの運搬は後回しだな……。

…ユキミが中々来なくて若干テンションが下がり気味な今日の俺

もといレイジ・ヒイラギは、授業中も眠れずに、虚ろな目でユキミの席をずっと見つめていた。せめてユキミが来る時くらいは起きてなきゃ、と思っっているからである。

だが、苟しくも今日はずっと起きていなくてはならなかった。完全に睡眠不足で頭が痛い。

よって本日、珍しく放課後まで一度も怒られなかった。

俺がそんなのだったので、学活前、右隣のカナリーからこんなことを言われた。

「……珍しいね、ヒイラギ君がずっと寝てないなんて」

おい、俺の様子に集中するんじゃないやなくて授業に集中せえや。

……えっ、説得力ないって？ それが大人なのだよ、少年（誰だよ）。

帰りのHRが終了。帰宅しようと思ったら、

「……えっと、文化祭で何をやるのか決めます。……ええと、ですからまだ帰らないで下さい」

という声が聞こえた。声の主はよく知ってる奴だった。右隣を見てみると、鞆はあるがやっぱり席は空いてた。

……なんでカナリーが？ 実行委員会か何かなのか？

「用事がある人は、言いに来て下さい」

一応、ある。場合によってはスイッチを押さなければならぬかもしれないし。

「リエン」

「ヒイラギ君？」

カナリーだけでなく、クラスメートの皆が俺に注目する。本来なら視線が気になるところだが、その、アレだ、気にしたら負けや。

「俺今日用事があるから帰るわ」

「……めんどくさいだけじゃないの？」

「何や、やっぱ俺ってそーゆー人間に見られてんの？」

「いや、『やっぱ』って……」

カナリーのメガネがズレる。ホントにこいつのメガネはよくズレるなあ。

「つーか、そもそもアンタが言ったことやろ。」

「……まあ何と言われようが、今日は約束があるから帰るわ」

「……うん、わかった。んじゃあさ、何やりたいかだけ言ってくれと嬉しいな、なんて」

え〜……何やろ。せやなあ……

真面目に答えても何の面白みもねえから、適当にこんなの挙げてみつか。

「禪祭ふんとし」

「……はい？」

カナリーはさつきよりメガネをズラす。メガネはもうズリ落ちそうだった。

「てことで」

後ろ手に手を振る。そんな時のカナリーの顔なんて知らねえや。

UU軍強襲用艦ダイオギニスから、連邦ガンダム2号機偵察任務を仕ったアリスト・コーグエンのポーンと、ネオン・ネイルバーのポーンカスタムが出撃し、今は海辺の森に着地していた。

アリスト機のバックパックには、有線ケーブルで頭部に外部接続されたレドームが装備されている。

一方ネオン機　ポーンカスタムには、縦長のX字の羽根を背中に付けていた。本来この四枚羽根は宇宙用の装備だが、まだ地上用の装備が届いていないため、その代用として背中に装備している。実際、この装備でも短時間の飛行は可能なため、空中戦でもなければ不自由はないようだ。

「……なんか、惨めッス」

いつもは皮肉じみた口調のアリストも、今回はいつになく沈んだ様子でネオンに愚痴を零した。

「何をいつまでくよくよしている。貴様も男だろう」

ネオンは尻を叩くようにアリストを激励した。

「……隊長、男って何スか？」  
「ん、唐突になんだ」

ネオンは予測せぬ問いに対し、思わず聞き返してしまった。

「いいスから、答えて下せえ」

ネオンは、そのアリストの促しに仕方なく答えてやった。

「……男は遅しく、のびのびと生きるべきだ」

「……じゃあ、女はそう生きちゃいけねえんスか？」

「む、屁理屈を並べるな」

少し頭ごなしに答えたネオンだが、それを見透かしていたアリストもいた。

「いえ、答えて下せえ」

「……それより、そろそろ作戦ポイントじゃないのか」

ネオンが無理矢理話を変えたのが、アリストには見え見えだった。

「（ちえ、つまんねえ奴）」

片手を後ろにやり、その手で頭をポリポリ搔く。

「聞こえているぞ」

「ええっ!？」

どうやら自分では気付かないうちに発声していたみだった。

「文句を言ってる暇があったら、レーダーを逐一チェックしろ」  
「ひいい、すいやせん……」

と縮こまったアリストだが、レーダーを見て一気に熱が引いた。

「隊長……困まれやした……」

「何、連邦か？」

着地した森の中、いかにもゲリラ戦が展開されそうな森の中、敵機の数多のビーコンがレーダー上に点滅していた。

「まずいな、こちらは非装備非装備だぞ……」

茂みの中から、いくつもの黄色いアイライトが妖しく光った。まるで、獲物を見つけた猛獣たちのように。どうやら、森の木々に紛れるためにしゃがんでいるようだ。

唾を呑み込むネオン。どうするかと冷汗をかきながら模索していた矢先、いつもはひょうきん者の部下が、

「た、隊長！ こいつら、ポーンッス！」

「何だと？ ではこいつらは鹵獲機か？」

「ええ。緑色のカラーリングから、おそらく……」

アリストが今乗っている正式ポーンはカーキ色。異色で塗装されているのは鹵獲機である可能性が高い。

草木に溶け込む鮮やかなグリーンたちが、もう臨戦体勢に入ったようで、もぐら叩きのもぐらのように一斉に姿を現した緑ポーンたち。

ならば、と言わんばかりに、碌に火器を積んでいないポーンカス

タムが一步前へ出た。

「隊長、無茶ツス！ 剣だけじゃ……」

現在ポーンカスタムの装備はコンバットソードのみ。熱を帯びて斬撃と溶断の両方を行うことが可能な剣である。

「勝算はある。アリストは狙撃用ライフルでバックアップを」  
「ええっ!?!」

アリストが驚愕したのと同時に四枚羽根のスラスターを吹かしたポーンカスタム。草木を激しく靡かせ、茂みの中にいる一機に曲線を描きながら急速接近する。

「もらった!」

ポーンカスタムは即座に敵の死角に回り込み、熱を帯びて赤く染まった剣で斜め上へと緑ポーンを切り裂く。右半身が斬り落とされ、そのまま右に倒れ込んだ緑ポーン。

するとポーンカスタムは、右手と一緒に取りこぼしたマシンガンをすかさず強奪し、半ダルマになった緑ポーンを、地面を突き刺すように赤い剣でとどめをさした。

「これでこちらも飛び道具を手に入れた」

どうやらポーンとポーンカスタムのマニピュレーターは互いに共通規格らしく、カスタム機といえど、互換性が保たれていた。

「アリスト、このまま殲滅するぞ!」



マシンガンを左手に、次の標的に突撃するポーンカスタム。

「さすが隊長だぜ……」

褒めたたえる一方で、驚き呆れ果てた様子で狙撃ライフルを構えた。

ポーンカスタムはマシンガンで敵を動かし、また、ジグザグに動きながら敵に照準を定めさせなかった。緑ポーンも焦れてヒートアップクスを手にし、ポーンカスタムの左側から斬りかかった。

「甘いッ！」

左側からヒートアップクスを振りかぶってくる緑ポーンに対し、右手に持ったヒートアップクスを右足で蹴り飛ばし、赤い剣でコクピットを貫いた。緑ポーンは脱力したように倒れ込んだ。

「次だ！」

次の標的にスラスターを吹かす蒼き疾風。

そう、蒼き疾風。

「おい、あの動き、『蒼き疾風』じゃないのか!？」

「間違いねえ！ UUの切り裂きジャックだ！」

緑ポーンたちからそんな無線回線が聞こえた。

「……ふ」

いつから自分はそんなに異名を持ったのだろうかと鼻で笑い、マシンガンを撃つ。

「ええい、だったらあのザコから！」

緑ポーンはアリスト機を狙ってバズーカを放った。

「ちきしょう、馬鹿にしゃがって！」

狙撃ライフルでバズーカを撃ち落とし、小さな爆発が起きる。爆風で数メートルほどノックバックするアリスト機。その隙を突いてか、別の緑ポーンのアサルトライフルでレドームを破壊された。

「しまった、レドームが！」

ちくしょう、と狙撃ライフルを向け、狙いはコクピットよりややずれたが、緑ポーンの右肩を、右手に持ったアサルトライフルごと持って行った。

「もういつちよ！」

狙撃ライフルを今度はコクピットを外さない直撃コースで撃った。しかし、横からマシンガンでメインカメラが破損した。

「えっ、ちよ、ふざけんなよ！」

慌てて補助カメラに切り替えた瞬間、緑ポーンが目の前で目を黄色く光らせていた。

「うぎゃあああああー！」

絶叫しながらバックブーストで逃げようとするが、ガコツと左手

で肩を掴まれ、ヒートアックスを振り上げた。

「うぁ……あぁ……」

アリストは喉元にナイフを突き付けられたように恐怖に怯える顔でギランと目を黄色く光らせた。緑ポーンを見上げる。

緑ポーンがヒートアックスを振りかざそうと勢いを付けた刹那、突如石のように動かなくなった。アリストはそのままの状態で見つめたが、その理由がすぐにわかった。緑ポーンの腹部が、赤い剣で見事に貫通されていたのだ。

「た……た、隊長！」

まさに命拾いしたアリストは、蒼いジャックに情けない叫び声をあげた。緑ポーンは目を閉じたように黄色い光を失せ、力無く倒れた。

「ぼやっとするな。敵はまだあと四機いる。一気に畳み掛ける！」  
「了解ッス！」

ポーンカスタムは尚もマシンガンを放ち、アリスト機はやや下がって狙撃ライフルを構えた。

ポーンカスタムがマシンガンで牽制するのを、緑ポーンはさっとかわし、バズーカを撃ってくる。ポーンカスタムも華麗に避け、避けたその動きのまま妖しい軌道で敵機に回り込み、逆袈裟斬りをお見舞いし、真つ二つにした。

ポーンカスタムは次の標的にマシンガンを放とうとする。しかし、銃身から乾いた音が出た。マシンガンが弾切れを起こしたのだ。

仕方なくマシンガンを捨て、ジグザグの軌道で緑ポーンに接近。コクピット内であちこちからかかるGに耐えながら、ポーンカスタ

ムの剣を再び発熱させる。

「せええやッ！」

やや後ろに下がった緑ポーンに、構えた赤い剣を右に薙ぎ、緑ポーンの装甲を溶かした。とどめに、コクピットを突いた。切り口から装甲が溶け出し、乱暴に剣を抜いた。

「あと二機……！」

ギランと緑ポーンを睨み付けるポーンカスタム。蒼い切り裂きジヤックに睨まれた緑のゲリラたちは、恐れ慄いたように一歩下がる。しかし、アサルトライフル装備機のパイロットが悲鳴をごまかす怒声をあげる。

「宇宙にいるべき輩に怯むな！ カーター！」

「お、おうよ！」

カーターと呼ばれたパイロットの乗るマシンガン装備機もジャックに向き直り、マシンガンをおもむろに敵へ向ける。標的はこちらを見たまま微動だにしていない。

（……動かないな。恐らくは、こちらが撃つまで動かんだろうな……）

コクピット内で目をしかめるウィルソン・カーター。落ち着け、と自分に言い聞かせ、引き金を引くのをじっと惜しむ。

しかし、元気づけてくれた相方が、先手を撃ってしまった。

「馬鹿ッ！ 迂闊に……！」

カーターが言い終わる前に、ジャックは一瞬にして、その赤い剣で相方を真つ二つにした。

「カーター……お前だけでも……」

相方の中途半端な遺言と共に、機体の爆発の光に散った。

「な……ナハートおおおおーっ！」

相方の名を絶叫するカーター。

仇討ち。ふとそんな言葉が思い付いたカーターだが、現在二対一と不利な状況。しかも敵にはエース機も紛れている。

爆発がおさまるころ、カーターは自機を後退させた。ゲリラ活動家の彼は、気持ちの切り換えが早かった。

「……ん、もう一機は退却したのか？」

緑ポーンの墓場と化した森の中、ネオンは機内で目をしきりに動かす。

「そうみたい……ッスね」

今回ネオンによって命拾いしたアリストも辺りをキョロキョロ見回す。

「……ん、帰還命令？」

「んえ、どうしたんスか？」

語尾をあげたネオンに訝るアリスト。

「アリスト、ダイオギニスに戻るぞ」

「えっ、偵察任務は……？」

「む、そちらには届いていないのか？」

ネオンはアリストに怪訝そうに問う一方で、ポーンカスタムを離陸させようとしていた。

「どうやら、さっきの戦闘で計器がイカれちゃったみたいで……無線が使えないんす」

「そうか……行くぞ」

「ういッス」

離陸したポーンカスタムに続き、頭部と背部が目に見えて損傷しているポーンもスラスターを吹かした。

「隊長、またもあなたに助けられちゃいましたね」

「……うむ」

アリストはどうやら以前にもネオンに何かしら助けられたみたいだ。

しかし、しばらくの沈黙の後、ネオンは思い出したように大きな声を出し始めた。

「いや、元はと言えば、貴様が屁理屈などを並べなければ、敵に遭遇しなかったどころか、任務も果たせたかも知れなかったんだぞ！」

「ええっ!？」

俺のせいだよ！ と今にも言いそうな顔で仰天するアリストだっ

た。

## Unit008：釈放

：カナリーに許可をもらい、帰宅している俺もといレイジ。日は傾きかけていて、雲間からオレンジの陽光が差している。学校の植木は、青々とした葉をさらさらと風に揺れていた。

「…結局、来なかったな…あいつ…」

放課後まで待ったが、ユキミは来なかった。

「…はあ…」

そらを見上げながらため息を漏らした。

視線を前に戻すと、五、六人の人だけがあつた。よく見ると、一人の人を取り押さえるように他の四、五人の人がいた。

その一人の人は、うちの高校の女子用の制服を着ていて、背は女の子にしては標準的な高さで、髪の毛は明るい黄色のロン毛で、瞳は碧く…。

「…ユキミじゃねえ？」

更に歩み寄つてみると…。

「もう！ 離してよ！ セクハラ！ セクシャルハラスメント！」

「セクハラじゃありません！ さあ、帰りましょう」

「痴漢撃退！」



ドオ！

痴漢呼ばわりされた男は、虚しくもユキミに背負い投げされた。

「…いい加減におし！ ユキミ！ 最近の貴方の素行ははしたな過ぎます！」

あ、ババアだ。おそらくこいつが元凶だな。

「何をいい加減にするのよ！ 私には会いたい人がいるの！」

自分の母親を振り払う右肘は、不幸にも母親の顔面にクリーンヒット。そして泡吹き&鼻血ダウン。

「ユキミ様！ お母様に何てことを！？」

「そこに顔面があつたからいけないのよ！」

正面に取り付いてくる男に右サマーソルト。  
…パンツ見えた（ニヤリ）。

「オゴツ！？」

「あう！」

サマーソルトされた男の悶える声と、ユキミの喘ぐ声が聞こえた。

「足つた〜」

右足を引きずりながら不満そうに言うユキミ。

「…全く、自業自得だわ！」

b y 鼻血ババア。

「黙れ！ 私の辞書に自業自得なんて言葉はないんだ！（男声）」

「なんて自分勝手なの！そして言葉遣いを直しな」

「自分勝手という言葉もない！（同上）」

…誰かさんの楽しい木造建築？

やばい。これはそろそろ第三者が介入しないとおさまらないぞ。

…この場合、俺。

「ヲイヲイお嬢さん、一体どうしたんですかい」

「この人達が離してくれな…レイジさん！」

ユキミは、拘束してる奴らをアゴチヨップやら肘うちだのを喰らわ  
せて俺に飛び付いてきた。

「…へえ、来てたんだ」

「来てたわよお。約束は絶対守るもん！」

20cm以上の身長差でも、ユキミの碧色の瞳からは、曲がること  
のない意志を彷彿とさせていた。

「…！ あなたは…スーパーにいた…」

byババア。

「お母様には関係ないでしょ！ あっち行ってよ！」

そう言ったユキミは、自分の母親を害虫のように拒絶していた。この子も、普通の思春期の女の子なんだな、と初めて思った気がする。…普通か？

「今日はレイジさんと一緒に帰る！」

俺の右腕を掴んだまま宣言。

…いや、あの…

「俺…今日…軽く用事があんだけど…」

「ダメ！ 一緒に帰るの！」

「ええっ？」

片眉を上げる俺。

「レイジさんこのバス？」

プシュウ、とバスが停車し扉が開く音が聞こえる。バスが来たんだ。

「んああ、そっだよ」

「乗ろ！」

ズイズイ引つ張られていく俺。すごいな、この子。20cm以上の身長差が全く意味を成してないが如しだわ。

ユキミにボコボコにされた男達は、ただ茫然と立ち尽くし、母親は、恨めしそうにこちらを見ていた。

そんな母親に、俺は余裕の表情でグッドサインをした。

その時、母親の顔は、より一層醜く見えたのは気のせい？

そんなこんなでバスに乗った俺ら。

「レイジさん　ンタマ好き？」

「……はい??」

「ギン　マ好き?」

「あの、ユキミちゃん、隠すところ考えようね?」

「…私が訊いてるのに…」

唇を尖らせて俯いたユキミ。

…男って、こういうの、ダメなんだよね。

「ああ、知ってるよ」

「ホントに!?!　近藤さんいいよね!」

トリツキーだな。

「ああ、いい人だよな」

事実を言った。

「レイジさんは誰がいい？」

「んん？ 俺は…辰馬がいいなあ」

「…あ、モジャモジャさん！」

…まあ、そうだけでも…。

「狙い撃つぜ！」

…さつきから珍発言を連発するユキミ。

二部に分けて放送してた中（厨）二病が主人公の作品の双子じゃないからね。

「…うん、ダブ オーはびみよくだったなあ」

…てか、ホントに金持ちの娘か？ 何でアニメばかり見てんの？

…でも、

「うん、同感」

「やっぱり!?!」

目を更に大きく開いて反応したユキミ。

「だよね〜。主人公中二病だし、なんかうやむやしてるし、なんか

ドロドロだし、主人公中二病だし、」

結局そこかよ。

人のこと言えないけどフルポッコだなオイ。

…というように、静かなバスの中で二人、ホントに他愛のない話を繰り広げていた。

バスの窓の外に映る漣も、軽いテンポで砂を打っているように見えた。

楽器で例えるならば、ピッコロが妥当だ。

ユキミのテーマ曲はピッコロを使った曲に決定！

俺は…：…なんだろ…：…？幼稚園とかでよく使った鍵盤ハーモニカかな？

：飯を食い終わった俺もといビリーは、整備工場のMSデッキに急行。

整備工場に着いた。俺の好きな機械のおいがモワツとした。

その機械のおいを体で受けながら、俺はシャドーの真ん前に立つ。

「…借りるぜ、ガルマン」

俺はシャドーに乗り込み、起動させる。

シャドーのツインアイが青く光る。

…機内の回線をアサルトに繋ぐ。

「トシリア、こっちは準備OKだぜ」

『その声…ビリーなのか!?!』

トシリアはひどく驚いていた。無理もないよね。

「ヴェルターさんは首を縦に振らなかったし、ガルマンはまだ寝てるし…。戦闘は無理だけど、機体のメカニズムを熟知してる工場長の俺でも、動かすことくらいはできるさ」

『…わかったよ…』

トシリアが、スピーカー越しでも戸惑っているのがよくわかった。

ついに、森にかえす時がきた。

…なんか野性動物みたいだな。

『(OP)MS発着デッキに、コロナ、アサルトと…シャドー?』

オペレーターの声が疑問形になる。

『(OP)一体誰が?』

「そういつことだ（ビリードス声）」

『（OPP）…わかりました』

よし！ 偽装作戦成功！

てなわけでコロナを連れたアサルトとシャドーが降下。

そんな様子を見ていたブリッジのクルー一同。

「…ん？ シャドー？ アラーク中尉は大丈夫なんですかね？」

「さあな」

その時！

「状況は！ どうなってるんだ！？」

事情を全く知らない金髪の青年が現れた。クルー一同は目を丸くした。

「…えっ、じゃあ…シャドー誰が乗ってるの…？」

「……………」

ガルマンは、みんなの様子がおかしいことに気付く。

「…艦長、これは…？」



「…今、シャドーが降下したのよ」

「…はい？」

「…事の全てを今言うわね」

アカネさんは、ガルマンにかくかくしかじかを話した。

「何だと!？」

かなり遅い反応である。

「一体誰が!？」

白々しいくらいに騒いでいるガルマン。

「…くそう、トラヤヌスで出る!」

「出てどうするのよ、」

「今すぐ引き返させる!」

「…」

アカネさんは止めなかった。

「…よろしかったのですか？」

ルイはアカネさんに問う。

「…きつと止めても、引き下がらないと思うから」

「…感情だけで行動すれば、いつか失敗してしまいます。近いうちに釘を打っておきましょう」

無機質に提案するルイ。

…くそう、誰だ…俺のシャドーに勝手に乗った奴は…！  
そう思いながら、整備工場目指して廊下をズイズイ歩いている俺。

整備工場に着いた。とりあえずビリーを呼ぶか。

「ビリー、トラヤヌスは出られるか!？」

声を張り上げたが、返事はない。  
…どゆこと？

「…ビリー! …どこだ!？」

…まさか…。

「あいつが…?」

なんてこった。あいつが乗っていたとは…。

「…ッ! くそ! バカやりやがって!」

トラヤヌスに駆け寄る。近くにいた整備兵に声をかける。

「トラヤヌスは出られるな？」

「あ、はい！ 問題ないです！」

「よし、ハッチを開けろ」

「わかりました！」

整備兵A（ツツコミ無用）は、ハッチ開閉ツマミへと駆け寄っていた。

ハッチが開いた。青い空が見える。

「…トラヤヌス、出るぞ！」

トラヤヌスは、シグヌスの後部からヒュウと出た。

…もうすぐ目標の森だ。現在時刻は15時。まだまだ余裕な筈だ。

「…しかしレイジ…一体あいつは何を考えてんだ…？」

トシリアが呟いた。

「…俺もわかんねえや。…でも、あいつも戦争は嫌ってる筈だぜ」

「……………そついえば…」

「…うん？」

「…こんなこと言ってたなあ」

『目の前にある戦いの火種を吹き払っただけのことさ』

「…ああ、Unit006でか！」

「…え？」

トシリアは返答に困っていた。

「…それより、レイジ、なんで今になって戦ってんだろ…？」

トシリアは思い詰めていた。

俺は咄嗟に、今日トラヤヌスから見えた烟が脳裏を過ぎった（本日は一回目）。

「…守りたいものが、あるからじゃねえの？」

「守りたいもの…か」

「『俺にだってわかってるさ…戦ってでも守らなくちゃならない』とがあることくらい…!』」

…ダメだ、うる覚えだわ。

「…アスン？」

よくぞわかってくれた!

「よくぞわかってくれた!」

「…また地の文と一緒にだね」

「いや地の文とか言っつな!」

…うん？ この声…？

「…シャドーに乗ってんのは…ビリーだな？」

トラヤヌスの回線から落ち着いた声が響く。ガルマンだった。

「…スマン、勝手に使っちゃって」

「ホントだよ！ 訓練も受けてない奴がこんなもん乗ってんじゃねえよ!」

マジギレしてるガルマン。

「こりゃマズイな…。」

「…。」

「…今すぐ代われ」

「…悪いけど下に降りてからにしてくれないかい？　ここはちょっと譲れないね」

「いい加減にしろ！　…今日の俺は気分が悪いんだよ…早くシヤドーをよこせ！」

「うおあー！」

トラヤヌスのバルカン砲を受けた。機内のアラートがビービー鳴る。

「何すんだよ！」

「とつとと降りろ！」

「やなこつた！　下に降りるまではね！」

「おのれ！」

「やめて下さい、中尉！」

トシリアがガルマンを制止する。

「素人の彼がここまで満足に機体を動かしているなんて、僕も正直驚いています。…けれども、中尉が心配する気持ちもわかります…。」

でも、今は、彼の言う通りにしてやって下さい」

「トシリア……」

すると、下には、レイジらしき白髪の男が誰かと一緒にバスから降りたのが見えた。

「あれ、レイジじゃないのか？」

「……ん？」

トシリアが目をししかめる。

俺は、シャドールのコンピュータを使って、レイジらしき白髪の男にズームインした。

けだるげな人相、ボサボサな髪の毛、大柄な体……間違いなくレイジだ。

「降下するぜ、トシリア」

「了解」

コロナを持ったアサルとシャドールは降下体制に入った。

……ユキミと一緒にバスを降りた俺。

……って、ちょっと待った。

「…なんで俺の家までついて来たの??」

「…この前、一緒におねんね出来なかったから…」

…マジで? マジで寝ちやうの??

「…ダメ?」

…ダメな訳がない。

…だが…

(同作者の作品のキャラ、トシユキ・ナガオカの台詞を引用させてもらって) ムラ ラとかしちやってもおかしくないよこのシチュエーション!!  
的な感じである。

そんな他愛のないやりとりをしている最中、上空に、黒いガンダムと白、青、黄のトリコロールカラーのガンダムが、コロナを連れて降下していた。

トシリアとガルマンが運んできてくれたのか?

「レイジ、約束の品だぜ」

…ん? じの声、ビリー?

「ビリー、まさか…」

「ちょっとね。ガルマンのシャドーを拝借させてもらったよ」

「…動かせんのか?」



「動かすだけならな」

どうやらこいつ（自爆装置）はもう御被箱みたいだな。そう心中で呟きながらプログラム解除のコードを打ち、解除を確認するとまた懐にしまった。そんなことをしているとき、

「レイジさん、この人たち、だあれ？」

「ん？ 用事」

「軽く用事があるって、このこと？」

「御名答」

「レイジさんのお友達？」

「えっ…？」

ちよー困る。この質問。先程まで自爆装置で脅していた相手なのに。

「うーん…どうなんだろ」

テキストに誤魔かしておいた。

コロナを連れた2機が着地。スラスターから出る推進剤（？）のせいで俺とユキミの髪が激しく揺れる。

「いやぁん！」

頭を押さえるユキミ。

…同時にパンツも見えそうだった（ニヤリ）。

「レイジ！ …ん？ 女連れ？」

「悪いかよ」

「…ねえねえ、その子カノジヨ??？」

嫌らしそうな目で訊いてくるビリー。

「…えっ？ カノジヨに見える??？」

逆に訊いてみた。

「見える×2！」

「あー ちょっと嬉しいわ」

隣を見てみると、少々恥ずかしそうに笑みを浮かべているユキミがいた。

…不覚にもかわいい。

「…ガールフレンドってのはそいつか？」

ガルマンがバイザーを持ちながらあのデカイ戦闘機から降りてきた。

「まあな」

「…まあいい、それは置いといて」

ガルマンの様子がいつもと違う。どこか険しい感じがする。

「…俺と勝負しろ！」

「……はい？」

「…聞こえんかったか？勝負だ！」

「…ロン！ 国士無双！」

「うわあ〜役満振り込んだよ〜…って違うわ！ 麻雀の勝負じゃないわ！」

「じゃあ何よ？」

「MS戦だ」

「…やだねったら、やだね」

「古！ 氷川 よしかよ！」

なんだ、いつものガルマンじゃんか。

「…ツ、くそ…テメエに鳩尾やられて気分が悪いのによ…」

「…んなこと言ったらこっちだってそうだ。無理矢理俺を戦艦に連

行しやがって…今日はこの子との約束があつたつてのによ…気分悪いのはお互い様なんじゃないかねーの？」

「ッ！……………」

ガルマンは黙り込んだ。

「今日はお引き取り願おうか。…麻雀の勝負なら受けてたつけどな」

「…よっしゃあ！ やってやろうじゃねえか！」

「…えっ？ マジでやんの？」

自分が提案したことであつたが、まさかホントにノツてくるとは思つてなかつた。

「当たり前だ！ ビリー、やるぞ！」

「えっ？ でも一人足りなくね？」

ビリーは戸惑っていたが、

「あの…あたし麻雀できます！」

ユキミが手を挙げた。

…って、マジで？ できんの？？ てかホントに金持ちの娘か？？？

てなわけで、俺、ユキミ、ガルマン、ビリーでガチンコ（？）麻雀勝負をすることになった。

トシリアは、アサルトで待機していると言っていた。敵が来たら知らせしてくれるだとか。  
…飯になったら声かけるか。

家のクローゼットの中にあつた箱に入った麻雀牌を取り出し、寝室から居間へと歩いた。居間には、既にユキミ、ガルマン、ビリーがいた。

「さあ、並べようか」

「えっ？ 電動じゃないの?!」

ビリーが驚きの声をあげる。

「ウチにそんなハイテクなものはありません」

きっほり。

「めんどくさいなあ」

「文句を言わない！」

ビリーにそう釘を打っておく。

配牌までも終了し、俺は理牌している。

一つ一つの牌を説明するのはかったるいからしないけど、なぜか九字牌が異様に多い。『中』なんかアッコってるしね。頑張ればホントに国士無双ができそうである。

・理牌が終わった。上家がレイジさん、トイメンが水色の髪の毛をした子、下家が…ムツツリスケベさん！

「おい！　なんでお嬢さんにもその呼び方が浸透してんの！？」

「だってレイジさんがそう呼べって言ったんだもん」

「…レイジ、」

「何か御用ですか？」

「開き直るな！」

・するとそこに、ガルマンのツッコミを遮るかのようにビリーが質問した。

「あれ、ルールとかどうする？ 食いタンアリとか先づけアリとか」  
俺が真っ先に答える。

「アリナシでよくね？」

「いや、どっちがアリでどっちがナシだよ」

「じゃあナシアリで」

「いやだからどっちがどっちだよ！」

「…んじゃあ、食いタンアリで先づけナシつつう方向で」

俺とガルマンのやりとりが不毛になると感じたのか、ビリーは無理矢理ルールを決めた。

逆にこういう奴がいた方が事が早く進むからいいよね。

「あとさ、ただ麻雀やるのはつまんないよねえ」

ビリーがなにやら何らかの意図をもって話をふっかけてきた。

「…レイジ、賭けてるのはどうだ？」

「何を賭けんだ？」

「そうだな…」

ガルマンが考え込んだところに、ビリーが、

「夕飯！」

「上等じゃねえか」

俺が賛成。

「…じゃあ、隣のお嬢さんがビリだったら、お前が夕飯奢れ」

「何だよそれ！」

…まあ、確かにユキミに奢らせるのは俺も癪だなあ。

「じゃあガルマン、俺が負けてたらガルマンが奢ってくれよな」

ビリーが甘えるように言った。

「はあ！？ ふざけんなよ！！」

「いいぜ。そーゆーことならお前の出した要求も受け入れてやる」

「…ほう…やってやるうじゃねえか…！」

ガルマンの背後にメラメラ…というテロップが出てきそうである。

こうして、四人（実質二人）の賭け麻雀が始まった（よい子はマネしないでね）。





Unit008：釈放（後書き）

すみません、引っ張ります。

UCR170009…密び瓶（短軸糸）

じつねびす。びせりび。

## Unit009：呼ぶ声

………てなわけであった麻雀。

一時ユキミがダントツビリ、ガルマンがダントツトップでこちらが劣勢だったが、ガルマンがユキミに数え役満を振り込み（しかも二回も）大逆転。そして俺が……

「ロン！（13面待ち）国士無双！」

をガルマンに振り込ませ、半荘が終了。勝負も終了。

「ガルマン！ 行ってらっしゃい！」

ビリーが嫌味を込めて言う。

「うるさい！ 何も言うな！」

とって、今夜の晩御飯である青椒肉絲チンジャオオロスの具材の調達に出掛けた。

青っぽい作業服を着たビリー、セーラー服の制服を着たユキミ、いつものTシャツ綿パンを上下に着た俺、と服装的にはかなり歪な組み合わせだったが……

「お嬢さんはどこでレイジと知り合ったの？」

「あそこの道路！」

ユキミは道路を指差しながら明るく答えた。

「レイジのことはどう思ってる？」

単刀直入だなオイ。

「おともだち！」

俺の右腕に飛び付きながら答えた。

ユキミのふわふわした髪の毛からフローラルな香がふわっとした。

「レイジ、お嬢さん絶対レイジのことベタ惚れだって〜」

てな風に意外と打ち解けてしまった。

「……………レイジ？」

ビリーが俺の顔を覗き込んできた。

……………あ、俺に言ったのか。

「んああ、何？」

「んだよ〜聞いてなかったのかよ〜」

「俺のスキル・オブ・スルー高いでしょ」

「……………なんかカッコイイ感じで言ってるけどあんまり誇れるモンじゃなくね？」

「!?!?」

「……いや、ムンクの『叫び』？」

的なりアクションをしたので、ビリーにツッコまれてしまった。

「……あ、トシリア呼んでくるわ」

「……ああ、わかった」

ビリーは、トシリアを呼ぶべく外にいるアサルトに向かった。  
ユキミと二人きりになった。

「……レイジさん、おともだちがいっぱいいて羨ましいなあ」

「……おともだち、ねえ……」

おともだちと呼べるのだろうか？  
先程まで殺そうとした相手なのに……。

「……レイジさん？」

無垢な眼差しを向けてくるユキミ。

この目は反則だ！ インテンショナルファールで一発退場だ！

てなわけですトシリアを連れてきたビリー。

「……久しぶりだな、レイジ」

「……そーだな」

「……レイジ、あんなに成績がよかったのになんで連邦に入らなかつたんだ？」

「……軍がきれーなんだよ」

「……じゃあ、卒業してからコロナに乗るまでずっと何してたの？」

「うーん……ネタバレになるからやめとくわ」

「いや、ネタバレって……」

「……ちやうど？」

「いや、あの……」

俺の言葉にトシリアが返答に困ってる。

「まだ話したくないのさ。話したくなったら話すわ」

「……わかった」

トシリアは納得した風だった。

ガルマンが帰って来た。

「はあ〜疲れた〜……」

両手に持った具材のたくさん入ったポリ袋をキッチンにやっと置き  
置いた。

ガルマンは肩で息をしていた。

「や〜い！ 軍人が情けないぞ〜」

「うるさい〜！」

「料理誰が作るの？」

ビリーが唐突に訊く。

「俺でいいよ」

俺が答える。

「いいのか？」

ガルマンに訊き返される。

「任しとけ」

「……………ねえ、ウノやるー！」

ユキミが提案。

「ああいいねえー！」

ビリーが答える。



「ウノなんて久しぶりだなあ」

トシリアも反対の色はない。

「よし！ 今度こそ！」

てなわけで、料理する俺以外全員参加となった。

：嬉しいなあ。いつばいおともだちができて。

こんなに嬉しいのは久しぶりね。

パパが遊んでくれた時以来だなあ。

「ドロー2！」

ビリー君が私に緑のドロー2を出してきた。

ムフフ、私の次のトシリアさん、ゴメンね！

「ドロー2二枚！」

「ドロー2三枚！」

あら、トシリアさんも持ってたんだ。

……てことは……。

「……くっそう！ 十二枚かよ！」

ムツツリスケベさん、ご愁傷様。

「だからお嬢さん、その呼び方やめてくれない？」

ゲームがヒートアップする中、お肉のジューシーな匂いが漂っていた。

お腹空いたよ〜。

そんなわけで、三回やった結果、ムッツリスケベさんが全敗！

「…………俺って…………俺って…………」

あー、落ち込んだじゃってる…………。

「人生そんなこともあるって！」

・民間人の女の子に肩を叩かれ、慰められてしまった俺。情けねえわ〜。

「もつすぐできるぞ〜」

・レイジさんの声がした。

「わーいー！」

てなわけで、お食事タイム！

レイジさんのお料理おいしそ〜！  
艶のあるお肉、お野菜、次々と立ちのぼる湯気。

・そろそろいただきますだな。料理してて疲れたわ〜。

「んじゃ、

」「頂き、マッスル！！」「」

ユキミ、ビリー、俺とで決めポーズを決めながらいただきますの挨拶をした。

「いや、何だよそれ！ いつ打ち合わせしたんだよ！」

「以心伝心」

「マジなのか！？ マジなのか！？ スゲー」

一人で勝手に喜んでる黄色いナマモノはこの際放っておこう。

「それ私のこと？」

哀しげな表情で訊いてきたユキミ。

「いや、違うよ?! あっちの方だからね!？」

「ムツツリスケベさん？」

「だからやめてって!」

「人生諦めが肝心！」

「この子見かけに寄らず結構毒舌家じゃん！」

てな風にこのメンバーにぶつちぎって馴染めたユキミ。

「……………こいつ、誰？」

ちよっぴり冷たく訊いてきたトシリア。

そういえばトシリア、女に自分のキョウダイが馬鹿にされた過去があるんだっけか。

「ううん……………友達？」

「……………そうか……………レイ」

「ううあ！？　なんだこれ！？　ゴホッ！　ゴホッ！」

ガルマンが咳をしながらシャウト。

「何だよこれ！？　めちゃくちゃ辛い……………ゴホッ、じゃんかよ！！  
青椒肉絲は……………ゴホッ、こんな辛くないだろ！！！」

「あーガルマンの皿には赤ピーマンの代わりに唐辛子入れたから」

「何だよその……………ゴホッ、地味な嫌がらせ！？」

「ウノに負けた罰」

「ペナルティーきついわ！」

てなわけだ。笑いをとったガルマンだった。  
彼曰く、

「テメエのせいだろが！」

だとき。

それからというもの、今夜はこの家史上初の賑やかさを誇り、ずっと話し声が絶えなかった。  
俺達は、なぜか双六をやっていた。

「うわーしくつた〜八回休みかよ〜」

「八回!?!」

「(猪) 八戒?」

「豚じゃない!」

「うわ、157マス戻れかよ……」

「157マス!? なんでもそんなに中途半端でムダにでかい数字なんだよ!」

「俺の自作なんだよね、それ」

「お前の仕業か!?!」

「名付けて、双六・オブ・レイジ」

「名付けてええわ！」

「やったー！ ゴールー！」

「えっ？ お嬢さん早くね？」

「これ見て〜」

ユキミがガルマンを指で導いた先は、あるマスだった。そこには……

『プレイヤーが女性の場合問答無用でゴールへ、男性の場合は、三回回ってワンと言ったあとロボットダンスを10分間踊り、体を30回くるくる回したあと、682マス戻れ』

「……このマス絶対止まりたくねえ……っというか三回回ってワンって言ったあとロボットダンスを10分間踊って体を30回転させる必要性がわかんねえよ！！ しかもそんだけやらせといて682マスも戻らせるのかよ！ 鬼畜にも程があるわ！」

「次、ガルマンの番」

「……わかったよ！」

と情性で振られたサイ。  
すると……

「……悪夢だ」

ドツボに嵌まってしまったガルマン。  
あーあ、ご愁傷様。

「……………」

ガルマンは嫌そうに立ち上がり、片足でクルクル三回転し、

「……………ワン」

と言って、次はカクカクダンスをし始めた。  
ずっとこんなを見てても不毛な気がしたんで、

「先やっちゃおうか？」

「……………賛成」

ほぼ満場一致、ゲーム続行。

「オイ！ ふざけんなよ！ そりゃないだろ！」

「まだ一分も経ってない」

「……………お前、鬼だな……………」

ガルマンは半ベソをかきながら答えた。

ガルマンは、8分間踊り続けたが、力尽きて寝てしまった。

「……トシリア、悪いがガルマンを艦に戻してくれないかな？ お前も来いだとか煩いからさ」

「……お前は行かないのか？」

「……残念だがその気にはなれない。……すまん……」

「……わかった」

トシリアは、ガルマンを運んでいった。帰り際に、

「……今日は楽しかったよ……ありがとう」

「……どう致しまして」

トシリアはドアの向こうに消えた。

「……残った二人で双六もつままないしなあ」

「……トランプやる？」

「賛成！！」

ユキミが明るく賛成。

そこに、トシリアが戻って来た。

「トシリア、ガルマンは……？」



「シャドーをオートパイロットにして艦に帰還させたよ。……やつぱりも少し一緒にいたいからさ」

「……了解」

「んじゃあ、ダウトだ!」

「イエーイ!」

「ダウトかあ……苦手なんだよね」

「よしてきた!」

ビリーの提案に、ユキミ、トシリア、俺の順に答えた。

「……てか、ガルマンかわいそうじゃね?」

「……俺もそうしたくはなかったが、そうでもしないとまた艦に連れてかれるだろ」

「……そうだな」

「……レイジさん、早くダウトやろっよ」

「んああ、ごめん! んじゃあやろっか」

「」「オー!」「」

トシリアもようやくユキミの雰囲気慣れたのか、一緒に掛け声を言っていた。

「ダウト！」

「お嬢さん、残念でした」

「んも〜！」

頬つぺたをぶ〜っと膨らませるユキミ。

「ダウト！」

「ち、バレたかあ……」

トシリアにダウトされたビリー。

「ダウト！」

「残念〜」

「マジかよ〜！」

ビリーが俺にダウトしたが、不発。

「ダウト！」

「……残念」

「嘘でしょ〜?」

トシリアが最後の一枚を出し、ユキミにダウトされるが、逃げ切った。

トシリア、ダウト強いじゃん。

彼曰く、

「トップは初めてだよ」

とのこと。

「ダウトオ!」

ビリーが力みながら言うが、

「ザンネン!」

「……お嬢さん、マジで?」

ビリーは30枚くらいのカードをこっさり持っていくことになった。

ダウトは、二人になった時点で不毛な戦いが始まるので、ユキミがあがって終わりになった。

現在 21:56。

ユキミは大丈夫なのか?

「もう帰るね。今日は楽しかったよ！　ありがとね、みんな！」

ビリーに握手を求めた。ビリーは嬉しそうに握手を返した。

次にトシリアに求めた。最初は躊躇っていたが、無表情で握手を返した。トシリアが握手を返した時は嬉しくなっていた。

「レイジさん、……………」

瞬間、俺の頬に温かいものが……………！

「……………じゃあね、バイバイ！」

あっさりとさよならを言うユキミ。

「気をつけて帰るんだよ」

「じゃあね〜！」

「……………さよなら」

俺、ビリー、トシリアの順に見送った。

「……………レイジ、何キスされちゃってんだよ」

「……………おかしいなあ……………おともだちの筈だが……………？」

「……………まあ西洋人は挨拶の仕方が派手だっていうらしいからねえ」

「そういつお前はどこなんだよ」

「俺は……オーストラリア」

「へえ、知らなかった」

「レイジは？」

「……わかんねえ。生まれ育ったのはこの辺だけど、明らかに白人種じゃないんだよね」

「見た感じ日系っぽいけどねえ」

「まあね」

「……そういえばトシは？」

「あれ、いつからそんなニックネームに？ ……まあいや、俺は……ロシア」

「へえ、色白いもんね」

「……そーいえばガルマンはどこなの？」

「ガルマン？ ……ええと、確かイタリアじゃなかったっけかな？」

「ふうん」

「……お嬢さんはどこなんだろうね」

「……多分イギリスだと思う」

「へえ」

サイン家って言ったらいギリスだもんな。

……あ、サイン家はイギリスの資産家です。はい。実在しませんが覚えといて下さい。

そんなことを話してるうちに22:00をとっくに過ぎていた。それに気付いたビリーは、

「パパに怒られちゃうよ」

「門限を破ってしまったガキかお前は」

「……でもまあ、頃合いかな」

トシリアが腕時計を見ながら言う。

「……そうか」

三人とも立ち上がる。

「んじゃあな！ レイジ！」

「またいつか！ レイジ！」

「おう、ベリー、トシリア」

ドア越しに二人を見送る俺。

さて、どうしようか。

……眠イから風呂入って寝るか。

てなわけで風呂にも入り、就寝。今日は疲れたが、結構楽しかった。  
おやすみ。

.....

『……………レイジ、……………レイジ……………』

(……………ん、なんだ……………?)

『……レイジ……来て……』

(……その声……ひょっとして……)

『……お願い……！……あたし……宇宙<sup>ウチウ</sup>で苦しんでる……痛い……  
……痛い……』

(……お、オイ！ ティア！)

……

「……はっ！」

目が覚めた。どつやら夢を見ていたようだ。

時刻を見してみる。0：23だった。

起きててもしょうがないので、また寝ることにした。



.....

『……レイジ……、お願い……宇宙そらに……来て……あたし……苦し  
しいよ……』

(……また？……で、なんで苦しいんだよ、ティア……？)

『……わからない……でも、なんだか……あたしがあたしでなくな  
っちゃうみたい……あ、あああああああ！』

(お、オイ！！ティア！……ティアー！！)

.....

「……あつ……」

俺は飛び起きた。急に『あいつ』が絶叫したから……。

……一体なんなんだ……？

さっきから宇宙そふに行けなんて……。

宇宙は『あいつ』の墓場なんだ。また不吉なことが起こりそうで怖  
いったらありやあしない。

……待てよ？ 『あいつ』の墓場……？

まさかまだあいつは死んでないのか……？

或いは『あいつ』の亡霊がのたうちさま迷ってるのか……？

次の日の朝。 5：02起床。 いつもより早い。

「そら……か……」

そう呟く俺の顔はどこか遠くを眺めてるみたいだった。

「……あいつ……まだ生きてるのか……？」

俺の顔に若干生き生きとしたものが入った。

「……だが、今すぐは無理だな……」

昨日の飯の残りをジュージュー温めながらぼやく。

「……お、そろそろか」

茶色い肉汁が泡と音を立てていた。

「いたあきあーす」

そういえば昨日ユキミを帰してしまったが、大丈夫だろうk

「……………ん〜いいにおい〜」

リビングから黄色いボサボサになっている髪の毛をした女の子かの  
そのそと歩いてきた。

……………つてオイ!!

「なんでいんの??」

「鍵ピッキングしたの!」

ボサボサな髪を直そうともせず、元気に答えるユキミ。ユキミは針  
金を数本持っている。

「……………その針金、どこから持ってきたの??」

「あそこのスーパーで買ったの! このパジャマも!」

確かに今ユキミは見覚えのない服を着ていた。

地は水色で、碧色の水玉模様のパジャマだった。

……………意外にも似合う。

「今日は学校一緒に行こうね〜」

ユキミはボサボサの髪をとかしながら言う。

「……もう飯できてるけど……昨日の残りでいい？」

「もちろん！ おいしかったもん！」

今にも跳びはねそうな仕草をするユキミ。  
こいつ、絶対ロリ系だな。

……という割には格闘技がうまい。特に柔道。

「……ていうか、昨日家に帰ったんじゃないの??」

「うーん？　なんか帰りたく無くなっちゃった」

「ヲイヲイ」

「ピンポンピンポン押しても出ないからピッキングしちゃったよ」

『しちゃったよ』で済むんだ！？　なんと末恐ろしい娘さんなんだ……。

てなわけでユキミと一緒に登校することになった。

またしてもバスの中で他愛のない話を繰り広げていたことは殆ど言わずもがなかな。

意外とこの時間が楽しかったりする。

ガッコに到着。

ユキミは、

「担任の先生誰なのか確認してくる！」

と行って職員室に飛び出していった。

飛び出す前に、教室では俺達の関係は内緒な、という風にした。なんか面倒なことになりそうだから。

ユキミは渋々受け入れてくれたのだった。

E組に到着。

いつも通りカナリーがいた。

「あ、おはよー」

「んああ、おはよう」

「……ねえ、禪祭って何？ ヒイラギ君のお陰で男子の半分が禪祭って言ってるんだけど？」

「ん？ 男全員が禪一丁になってお神輿担いだりするんだよ」

「お神輿って……なんて日本風な……」

「別名・漢祭（おまつり）」

「そっちのオトコなんだ……」

カナリーのメガネが白くなり、ズレた。

：ホントにヒイラギ君って不思議君だなあ。

なんだかめちゃくちゃテキトーに見えるけど、なんだか見えない貫  
禄を感じるんだよね。

……気のせいかな？

HR。あのメガネ先生が来た。

「えー今から実力テストを返却する」

げ〜！ 鬱だわあ〜。

てな感じで全員が返却された。

私は……

外国語 148 / 200

数学 32 / 200

国語 104 / 200

だった。

予想通り、数学が爆死した。

国語が思いの外取れていた。

ちなみに平均点は、外国語が86・2点、数学が65・8点、国語  
が100・4点。

メガネ先生がチヨークを持ちながら言った。

「えー実力テストの上位三人を前に書く。ちなみに一位と二位はこのクラスにいるぞ」

多分コニイはこれに入ってるんだろうな。

コニイが余裕そうな顔をしている。

黒板に三位から順に三教科合計600点中何点かも書かれた。

『三位・ジャネット・オークレー・552点』

……知らないや。

『二位・コニイ・レイブン・574点』

……えっ？ その点数で一位じゃないの？ じゃあ一位は……？

『一位・レイジ・ヒラギ・600/600』

……え〜！？ マジすか横須賀！？ 満点ですか！？

「っそ……？」

コニイも思わず声をあげていた。

「へえ〜あいつが」

サラも感心していた。

「……何だよあいつ……化け物かよ……」

ジョージ・ノイマンという奴もあんぐりしていた。  
そんな風に注目されているヒイラギ君は……

「ぐー……すー……ぐー……すー……」

寝てました！

「……というわけでヒイラギ、よくやつ」

メガネ先生が睡眠状態のヒイラギ君を確認し……

「……レイブン、よくやつた」

「……」

コニイは茫然としていた。

休み時間。サラに早速訊かれた。

「ねえ何点だった？」

病んでる私の口から言えるはずもなく……

「上の地の文見て……」

「地の文って何だよ！」



やっぱりツッコまれました。

「サラは？」

「うん？ 外国語が92点、数学が85点、国語が82点」

数学地味に平均よりも20点弱越えてるじゃん。

「カナリー数学以外結構すごいじゃん！ 特に外国語！」

まあ、外国語はちよっぴり自信あるからね。

ていうか、いつの間に地の文見てくれたんだ。

「……………納得いかないわ……………」

「……………へ？」

シリアスなコニイの声に対し阿呆な声をあげてしまったサラと私。

「……………あんなにだらしのない人が満点など……………不正行為に決まってるわ……………！」

「……………不正行為って、例えば？」

「……………カンニング」

「カンニングで満点とるってある意味凄くない？」

最もなことを言ったサラ。

「……テストの模範解答を盗んで写した」

「……あの……熱くなつてるところ悪いんだけど、……そうやって人に対してうたぐり深くなり過ぎるのはよくないと思うよ？ それに、そもそも抜き打ちのテストだったんだから解答なんて以つての外だと思つよ？」

「……リエンさん……」

「カナリーいいこと言つねえ」

サラに揶揄をこめて言われた。

「えっ、そんな、思ったこと言つただけだよ」

本当のことだもん。

「どれどれ、メガネ外してごらんよ」

「やだ、やめてよ！」

何で急に??

私の抵抗虚しくメガネが外されてしまった。  
視界がぼやける。見えづら。

「……へえ、結構可愛いじゃん！ その顔ならヒイラギもオツケ  
ーしてくれるよ！」

……へ？ どゆこと？ オツケー??

「コクっちゃんよ!」

……へ? コクる? ナニソレ? ドウイウイミ?

「その可愛い顔なら大丈夫だって。ヒイラギのこと好きなんですよ?」

「ち……違うよお! そんなんじゃないって!」

「あら、カナリーちゃん、お熱でもあるんでちゆか? お顔真っ赤でちゆよ?」

「む……………」

「やっぱり凶星だ」

「くやかましいなあ…………おちおち眠れねえじゃねえかよ」

おっと! トップ成績保持者が起床(?!)

「…………ホラ、コクっちゃんよ!」

ひそひそ話で囁いてくるサラ。

「あゝもう! 違うってば!」

今日一日中こんな感じだった私でした……。はい。疲れました。



## Unit 010：解放の翼（前書き）

更新遅れましたf(^| ^;) これから遅くなってしまつかも  
しませんが、どうか見捨てずに温かい目で見守ってやって下さい。

## Unit 010：解放の翼

：今日一日を振り返る。私もといカナリーは昨日夜中の2：00までネットサーフィンをしていたのでぶっちやけすぎく眠かった。いつも居眠りをしているヒイラギ君の気持ちがよくわかった気がした。何に対しても無気力感が走るあの感じのお陰で。

目の奥が痛い。メガネを掛けているのが辛い。メガネを外す。うとうとする。そして、寝る。たまに先生に起こされてはまたこの流れを繰り返す。そしてまた起こされる……

のループであった。一限目から六限目までこの流れが止むことはなかった。

てなわけで（どんな訳だ）今は帰りのHR。今になってようやく睡眠によるループ地獄から開放された。

今までずっといなかったサインさんが今になって教室に入って来た。どうやら実力試験を受けていたらしい。

……なんつーか、女の視点から見ても可愛い……。それ故か、殆どの男子がサインさんに興味を示している風だった。ところで、サインさんの成績はどうなんだろう？

「……ねえ、あの子がサインさん？」

サラが尋ねて来た。

「そうじゃない？」

「……なんか天然そうな顔してる。しかもなんかなんとなく上品な感じするし」

「あー、家庭の権限デカそうだからね」

「なんでそう言えるの？」

「『家庭の事情』で休んでたんだよ？　なんか裏にありそうじゃない？」

「あ、確かに」

てなわけでメガネ先生が来た。

「……サイン」

「はい」

「テストだ。先生達で急いで採点した。……素晴らしいな」

答案用紙を返されたサインさんは少し驚いたような顔をしていた。席が離れてるから点数は聞けないなあ。

そんなこんなでHR。

「え、明日までに文化祭に必要な物品の大半を買い占めておけ。わかったな」

はあい、というけだるそうな返事をするE組一同。

私は文化祭実行委員会企画部だから仕事はたくさん。

クラスの意見をとって何をやるかの報告、ステージでの出し物的なもの参加者の調査……。

「リエン、総務委員と協力して何をやるかをまとめて何が必要かを大方決めといてくれ」

急に話を振られたので驚いてしまった。

「……あ、はい！」

メガネを中指で直しながら慌てたように答えた私。

魔がさしたので隣を見てみると、……はい、ヒイラギ君お休みモードですね。

その時！

「ユキミ様！ いた！ やつと見つけました！」

という声が教室じゅうに響いた。

一体何なの？ 他のクラスメイトの人も騒然としていた。

そう思つて声がした右後方をみると、『部隊』という名前が付きそうな服装をしている男三人が物騒な雰囲気をもんもんに出しながらドアに立っていた。

と同時に、ヒイラギ君のアホ毛がピン、と動いた。



……それはアンテナですか？  
対するサインさんは、

「やばー！」

の一言を残して、窓から飛び降りた。

………つて、ええ！？

二階であるこの教室から！？

「あ、ユキミ様！」

とって男達は駆け出したが、

「させねえよ」

という無機質な声が左側から。

同時に、

「ううわっ！？」

先頭を走っていた男がヒイラギ君に足を引っ掛けられ、ズデツと大胆に且つ派手にコケた。続いてあとの二人もドミノの逆バージョン的な感じでズデズデツとコケた。クラスの少数の人がクス、と笑っていた。

「き……君は、ユキミ様の……！」

一番下になっている男が、無様な姿で言った。

ヒイラギ君って、サインさんとなんか関係あるのかな？

その時、若干私の嫉妬心に火がついたが、そんなことを思っている

暇はなく……。

ドゴーン！

爆音がした。

またMSの爆撃……？

「「いやあああああ！」「」

爆音にパニックになっている人が何人かいた。  
そんな中、

「カナリー、俺の荷物預かっててくれ！」

その言葉を残したヒイラギ君は、いつもののんびりした雰囲気を思  
わせない速さで教室から駆け出して行った。

：また爆撃か……。UUに素直にコロナを渡せば済むことなんだ  
ろうが、どうも渡す気になれん。かといってコロナを無条件で自爆  
させる気にもならん。  
なんでだろ？

んなことはどうでもよくて。  
ガツコの駐車場に着いた。

なんと俺の正面には、キーが差しっぱなしの灰色のボールが。

「なにがし某先生、使わして貰うぜ！」

ドアの鍵が開いてたので、そのまま乗り込み、ユキミ追い掛け&コ  
ロナ搭乗のために、ルボのエンジンを付け、クラッチを踏み、ギ  
アを『1』に入れ、サイドブレーキを下ろし、アクセルをおもっく  
そ踏み込み、ボル はスキル音を立てながら急発進した。

：教室から飛び降りてなんとか逃げてきた私。鞆？ 置いてきち  
やったよそんなもん。

さて、どうしょ？

……ひたすら逃げる！

そう思っつて校門を出て、一気に駆け出した私。

と……！

「ユキミ！ あなた今までどこ行つてたの!？」

げっ、お母ちゃんに見つかった。

「秘密!」

「秘密じゃないでしょ！ もうどこにも行かせません!」

「やよ」

軽くあしらつて逃げようとしたら、  
キイイイイイツ!!  
という派手なスキル音がしたの。見たことない車が私の前でドリ  
フトしながら急停車。

「ユキミ、乗れ！」

なんとレイジさんなのでした！

「うん！」

私はボ　ボの後部座席に座った。車はタイヤが摩擦するスキール音とマフラーを吹かす音とともにまた走り出した。

…どうにかユキミを見つけれられた。そう心中で呟きながら海岸線に沿っている道路をボル　で走らせる俺。

「レイジさん運転できるの??」

「荒いけどな」

「ジェットコースターみたいで面白〜い！」

……ユキミのその比喻が俺の胸を締め付けてしまった。

「…………レイジさん？」

バックミラーはユキミの訝し気な顔を映す。

「どっつかした？」

惚けるしかなかった。

「……う、ううん、なんでもない！」

無理にテンションを戻すユキミ。

……まあ、こんなところで細かいこと気にしてらんないか。

今俺らは爆撃の真っ只中である。何度もハンドルを切ってミサイルとかを避けているのだ。ハンドルを切る度に鋭いスキール音が鳴る。軽くドリフトしてるし。

コロナを置いている森に到着。ボル を森に乗り捨てて、

「ユキミ、乗るぞ」

「うん！」

コロナのハッチを開け、コクピットに乗り込んだ。ユキミも続いて乗り込んで来た。……パンツまる見え（ニヤニヤ）。

「きゃあん！……レイジさんのえっち……」

……赤面しながら軽くうふんと言うユキミ。てか、エロいだろ。

「いや、その……なんか、すまん」

「うん………」

この子、こんなにお色気キャラだったっけか？

そんなおいしいんだかおいしくないんだかよくわかんない出来事は置いて。

「しっかり捕まってるよ」

「うんー！」

さっきのお色気ムンムンの雰囲気をももの見事消し去っているユキ  
ミ。

……俺の幻覚だったのだろうか？ うわーだとしたら俺相当妄想癖  
激しいじゃん。

やっちゃったわ〜。

……んなことはどうでもよくて！

コロナがツインアイを青く光らせながら森の中からぬう、と出てきた。爆撃をしているポーン全機が一斉にコロナをロックオンした。

「くそう……ニュータイプになり損ないの地球人の分際で……！」

ポーンのパイロットは、コロナに向かって恨めしそうに言った。

：まだ羽根は出さずに温存する所望だ。単なる射撃戦にスピードや瞬発力はさほど必要ないからだ。

コロナの掌部ビーム砲を構え、敵機を撃墜していく。

レイジもといコロナの射撃命中精度は、ビーム砲のビームがまるで敵機に引き付けられるかのようにどンドン当たっていた。

……それにしても、

「……ッ！ 敵が多過ぎる！」

コロナの掌部ビーム砲を連射し敵機を撃墜していくが、一向に減らない。

その中で、こちらに真っ正面に向かってくる機体が。ユキミも感づいたらしく、

「れ、レイジさん！」

「くそう……『バルカン！』」

「……ドボン・ガツシュ！」

なんか違う！

バルカンを撃つたことにより、特攻してきた敵機は怯み、その怯んだところで掌部ビーム砲で撃墜した。

その時、  
ピー！

という音がコロナのコクピットの中で響いた。SPSである（わからない人はSpecial Unit 001をご参照のこと）。

「なんの音？」

「秘密兵器が発動可能の合図さ」

「あの黄色くておっきいビーム！」

「そゆこと」

「使っちゃうの？」

「……仕方ないさ」

やらなきゃやられる。こんなのは当たり前だ。

ソーラー・キャノン撃つべく、コロナは八枚の羽根を展開。  
羽根が金色に輝き始める。

羽根に内蔵されている砲門が全て開くと同時に光の粒子が舞った。  
もう発射可能のようだ。

「いけええあ！」

ブアアアアアー！！

黄色く太い火線が戦場を塗り潰した。MSをも……。

：そんなこんなで敵機の大半を撃破完了。パネルを見ると、残りは僅か一機。青いポーンだ。



「……ありや隊長機だな」

「ラゴウ？」

「いや、四脚じゃないから……」

すると、青いポーンのパイロットらしき音声が。

「コロナのパイロット！」

「なんだ？」

答えてみた。

「……声が若干若いな」

「おじさんだあれ？」

「む、女！？なぜ女が！？」

「この機体複座型なんだよ」

「嘘つけ！ コロナは元々は我が軍の機体だったんだぞ！」  
そういえばそうだったか。

「……貴様ら、何者だ？」

「さすらいの思春期男児」

「いや聞いてねえよそんなこと！」

「難しい年頃の思春期少女！」

「いやだからそんなこと聞いてねえって！」

……しかし子供がMSなど……こやつら少年少女兵か？

「貴様らは連邦の士官か？」

「違うね」

「何？」

「俺は……軍がきれーなんだよ！」

コロナがサーベルを出しながらまっすぐこちらに向かって来た。流石はガンダム、威圧感が違う。だが私ネオン・ネイルバートとてタイマンは何度となく勝ってきた。こんな所で尻込みする訳にはいかん！

「受けて立つぞ、若造！」

…青いポーンは実体剣を抜刀し、俺の突撃を迎え撃つようにバーニアを吹かした。

一対一<sup>サン</sup>か。久しぶりだな。なんて呑気なことをいつてられる程優勢ではなく、防戦一方である。先程キャノンを使ってしまったため、放熱しきるまでは羽根が使えないのだ。

「ほらほらどうした！ 先程までの威圧感は偽りのものだったのか！？」

コロナとは対象的なスタイリッシュなフォームで華麗に剣を振るってくる。対するこちらは一振りが大きく、振った後の隙が大きい。

「くそ……どうすりゃいんだよ……」

コロナは、重装甲な故にタイマンが苦手だ。幸いサーベルはあるけれど。

「……ふん、そのいい装甲が仇になって小回りが利かんか、そらあ！」

敵パイロットの嘲笑と同時に、隊長機は剣を振りかざしてきた。

「ぐう……」

神経を研ぎ澄まして回避をするが、コロナが思うように反応してくれない。ライトアームが損傷した。

「もらったー！」

ポーンが斬りかかる。

「レイジさん！」

「……でやられるかよー！」

ビギーン！

コロナのツインアイが青から金に変わる。更に、横一本線が入っているが閉じていた冷却口部（人間でいうと口）が開き、中から黄金の粒子を吐き出していた。そして、  
バアン！

コロナを覆っていた赤い装甲板やオレンジの八本の羽根が一気に剥げ落ちる。

「な……なんだこれは……？」

色褪せた金色、寧ろ銀色に近い色をしていて、ポーンよりも細く鋭角的なフォルムをしたガンダムらしきものが……。

「……なんじゃこれ？」

：なんか急にこーなっちゃったんだけど？ 因みに今、コロナのO Sは全く動いてません。勝手に動いちゃってるわけですね。

「レイジさん、これナドレ？」

「いや、違つと思つ、おそろしく」

「……のって、ッ！コんだら負けだよね。」

「……まあいいか。兎にも角にもこいつなら何とかいけそうだぜ！」

背中からは四対の光の筋が出た。これが推進力だろうか？  
そして開かれた口からは太い真っ赤なビームが発射された。

「ううあー!!」

ポーンのライトアームがそのビームによって焼き払われた。

「次だ！」

脱皮コロナは黄金の光の粒子をたくさん舞わせながら四対の黄金の羽根を展開し、ポーンに突撃。

「……くっ、悔しいがここは撤退する！」

ネオンは無くなったライトアームの繋ぎ目の部分が火花を放っている自分の乗る青いポーンを撤退させた。

「おいちよつと待ってくれよ。そんなに早く撤退しちゃったら脱皮  
コロナの活躍が」

「もう活躍せんでいいわ！ 私の機体が持たん！」

「諦めたらそこで試合終了だよ」

「めんどくせーんだよー!!」

軽くショートコントをってしまったレイジ&ネオン。

…まあなんにせよ敵が撤退してくれたし、一件落着だな。

「大丈夫か？ 怖くなかったか？」

「怖いよりも……気持ち悪い……ウプ」

乗り物酔いですか。……つて！

「おおおい、ここで吐くなよ？」

「……ダメ……おえ、」

「おおおおおい！ あ——！！！」

ユキミの名誉の為にここから先は記さないこととする……。

「……ごめんなさい……」

ユキミはコクピット内清掃をしながら罰が悪そうに謝っていた。コロナを急遽家の近くまで歩ませ、家からお掃除グッズを持ってきたのである。

「まあしょうがないよ」

操縦桿を雑巾で拭きながら言う俺。

「……それにしてもレイジさん、どうしてあんなに操縦が上手なの？」

「以前にもMSに乗ったことがあるからだよ」

「どんなMSだったの？」

白くて鬼のような機体、とは言えずに、

「……あんまり覚えてないや」

と誤魔かしといた。

「知りたいなあ」

スクリーンを雑巾で拭きながら唇を尖らせるユキミ。ユキミは表情豊かでホントに面白い。  
コクピットの中は、クレンザーと雑巾が混ざったにおいでいっぱいになっていた。

ふと、俺が心配になったこと。

(OS、イカれてねえよな……?)

考えると急にぞつとしてきた。コンピュータは取り外して別個で掃除したが、アレのせいでやられた、なんてことないよな……?

そんな不安いっぱいのまま、コクピット内清掃は終了。あとは自然乾燥をしばし待つだけ。

「疲れた」

近くの森の草の上で足を投げ出し大の字になるユキミ。

「……」

俺は気が気じゃなかった。OSがイカレてないか、ということまで。

だいぶコクピット内が乾いたので別個で掃除したコンピュータを取り付け直し、起動してみた。  
すると、通常では有り得ない事態が発生した！

「Windowsってなんだよおおおおおー！……！」



## Unit 010: 解放の翼(後書き)

明日から一週間修学旅行へ行ってきます。その間、ケータイは家に放置しますのでご了承下さい。では、行ってきます！

放置しますけれども感想は下さいねっ。必ず一週間後にお返事がかかります！

Unit 011: 無力(前書き)

やっと更新できました(^-^);

## Unit 011：無力

これはレイジが ルボに乗るよりも前の出来事。

「なんでこんなところにいんだよオオオオオオ！！！」

戦艦シグヌスの中の、自室である504号室でシャウトするガルマン。

「えーっと、レイジん家で変な双六やってて、俺が最悪なマスに止まって、三回回ってワンって言ったあとロボットダンスして……あれ、その後682マス戻ったっけ……？」

…ベッドの上で自分の記憶をひもといていく俺。

「ビリーいるかな……？」

のそのそと起き上がり、整備工場に向かう俺だった。

「はて、俺は一体……？」

頭をぼりぼりかきながら廊下をすたすたと歩く。

整備工場に到着。

「ビリー……！」

「おおガルマン！ やっと起きたか！」

「これはどういうことだ？　なんで俺はいきなり自分のベッドで寝てたんだ？」

「そーいうことだ」

「いやわかんねえよ！　その『そーいう』を説明しろよ！」

「自分でUnit009見返せば？」

「なんで俺がそんな次元を超えちまうようなことしなくちゃなんねえんだよ！」

などと、いつもと変わらぬ不毛なやりとりに陥ってしまった。

……てか、マジでなんで？

ベルリン工場区。ここには、連邦の工場から運ばれた連邦ガンダム2号機が保存されている。

何故運ばれたのか？　2号機の実戦テストの際、本機は膨大なエネルギーを消費するので機体本体のジェネレーターのみでは賄いきれず、本体のジェネレーターとは別のジェネレーターも取り付けられるべきだと連邦側が判断したため、唯一ベルリンのみで開発しているサブジェネレーターパックを取り付けるべく運ばれた次第なのである。このことは連邦の機密事項であり、Unit001でUUの兵士が言っていたのはまさにこのことだったのである。無論、当時その兵士はその機密事項の詳細は知らなかったが。

そんなところに、作業服を着た作業員と思しき男が自分の雰囲気  
を消しながら工場区を歩き回っていた。

「2号機はこの辺のハズだが……」

手に持ったレーダーを見ながら呟く作業員。

『ピー』

レーダーが鳴った。

「ん、ここか？」

と言って足を止め、何やら変なメガネを掛け始めた。どうやらX  
線を使ったメガネらしく、建物の中も筒抜けに見えるハイテクメガ  
ネ。

「間違いない、ガンダムだ！」

『UU』と書いてあるX線メガネを外し、合点がいったように喜  
んだ。

「すぐにネオン隊長に知らせないと」

作業員、いや偵察士アリスト・コーゲンはそう言ってその場を  
さっさと去って行った。

「よかったね、この小説ギャグ要素もあって」

「ホントよね〜」

：…という会話をしている俺レイジとユキミ。なんでこんな会話をしているかというと、

「次のカットでOSがWindowsじゃなくなってるんだもん」

「『G・U・N・D・A・M』っていうOSになってたもんね」

「それはそれでバグってる気がするけどな」

「SEEDだもんね〜」

バグったコロナのOSは今度は『Windows』ではなく、『General Unilateral Neuro-Link Dispersive Autonomous Maneuver』が。

てか、著作権大丈夫か？ 福田さんに怒られないか？ ま、俺が心配することじゃないか。

「……ユキミ、ちょっと話したいことがあるんだ」

「ゲボ吐いちゃってごめんなさい」

「いやもうそれはいいから……」

「私お嫁に行けない!」

「お願いだから俺の話を聞いて?」

少し笑いが混じった声で宥める俺。

「うえええええん！」

半分本気で泣いていた。

「もう！俺が嫁にもらうから泣くなよ」

「！」

急に泣き止むユキミ。そして満杯の希望の籠った目でこちらを見ている。

「……あり？俺変なこと言った？」

「……？」

すると刹那、ユキミが俺の体にダイビングしてきた。

「俺の嫁〜」

「いや、それ女の子が言う台詞じゃないでしょ」

おかしいことを言う本人は満更でもなくダイブをやめない。

「……しばらくこのままにさせてあげるか……」。

UUはアリストのお陰でついに2号機のありかを見つけ、ベル

リンに総攻撃を仕掛け、2号機奪取作戦に出た。

その作戦を敢行することになった新生ジェノサイド部隊。旧ジェノサイド部隊は先日レイジの駆るコロナに一掃されてしまったのである。その新生ジェノサイド部隊の拠点とする戦艦はダイオギニス。隊長は誰かというところ……

「我々は遂に連邦G兵器の在りかを突き止めた！ 今度こそガンダムを奪取するのだ！」

先日レイジに負けたネオンが声高らかに大パネルを指しながら言う。そう、この男こそがジェノサイド部隊隊長ネオン・ネイルバートなのである。

「隊長、今度こそ白兵戦は仕掛けないで下さいよ」

今回、2号機を在りかをつきとめたアリストが半目になりながら言う。

「何を言うか！ 私が白兵戦を仕掛けなかった出撃はない！」

「ガンダムは侮れませんよ」

「わかっている！」

大丈夫なのこれ？ 的な雰囲気の流れているままブリーフィングが終了。ダイオギニスの中は一気に慌ただしくなる。

ネオンはダイオギニスのMSデッキにいた。



「ポーンは改修してくれたか？」

「はい、ばっちりです！」

ネオンはある整備兵と話していた。

「今回はポーンの背部に取り寄せたばかりのジェットブースターを取り付けました。これにより地上ではガンダムに対抗しうる運動性と長時間の稼動が可能な筈です」

「わかった。ありがとな」

ネオンはそう言つてポーンカスタムのコクピットに乗り込んだ。

ネオンはポーンカスタムを発着リニアカタパルトへと歩ませ、ポーンカスタムの足をカタパルトにガシャン、とのせた。

「ネイルバート、ポーン、出るぞ！」

ポーンカスタムは大空へと翔んだ。

シグヌスは当然これに黙っているわけもなく、三機のガンダムを  
出撃させることにした。

「いいわね？ 何としてもサイサリ…… 2号機は絶対に取りられちゃ  
ダメよ」

「艦長、G P O 2ではありません」

ガルマンがアカネにツツコむ。

「てへ、ごめんねっ」

…正直心配になった。艦長が2号機の名前を間違えるなんてさ…  
…。サイ リスじゃないっての！

そんな感じで出撃。シャドーに乗った俺はMS発着デッキへと足を運ばせる。

トシリアに声をかける。

「行くぞ、トシリア」

「はい、……」

「？ どうした？」

「いや、何でもないっす」

「ならいいんだが……」

何か思い詰めた風だったトシリア。

…アラク中尉に声をかけられた俺。考え事をしていたのでいまひとつ気乗りしない返事をしてしまった。

何だろう……？ 何だかすごく懐かしい感じが……？

出撃前だというのに郷愁とまではいかないがそれに近い感情が無性に湧いてきた。

そんな中で出撃。

「トシリア・ネイビー、アサルト、行きます！」

アサルトを乗せたカタパルトデッキが火花を放ちながら高速でアサルトを大空へ誘導した。そしてアサルトは大空へ放たれた。

ベルリン工場区。そこには既に反UUの非軍事組織『メラゾーム』というゲリラがいた。その中に、割と背が高めの女性、というか、年頃の女の子ナリア・オーエンがいた。

「いいか！ もう既にUUがこのあたりに来ている！ あとは作戦の通りだ！ 各員の健闘を祈る！」

隊長らしき人がナリアを含める他の隊員に向かって声を張り上げた。

「ガンダムを見つけたら即刻強奪するのだ！」

どうやらUUはベルリン工場区に2号機があることに気づいたらしく、レイジにコロナを強奪された逆恨みとして2号機を強奪しようとしているらしい。

「ナリア、お前は立派な作業員だがお前とて女だ。無理はするな」

「……」

無言を保ったナリア。どうやら寡黙な女の子らしい。

UUのMS部隊がベルリンにやってきた。

「いいか！ 工場に近づけさせるな！」

：何とも無茶な作戦だ。MS相手に生身の人間が勝てるわけがないだろう。だが私とてUUを恨んでいる。UUなどが地球に来たから私ナリアは孤独の身になってしまったのだ。

UUのMS部隊がやってきた。マシンガンに弾の入ったマガジンをこめる。

「ナリア、死ぬんじゃないぞ」

「……」

こんな所で死んでたまるものか。そう思いながら隊長に無言で頷いた。

その時だった！

「あぁッ……………」

「リゼルダ！」

隊員が一人、ポーンのマシガンにやられた。

「くそっ……………」

隊長が齒軋りをする。

「ナリア、お前は逃げる！」

「……………」

「お前は女だ！ 何もここで死ぬことはない！ 悪いことは言わない、早く逃げる！」

「逃げようにも外は戦場。逃げ場なんてどこにもない」

「……………それもそうだな」

隊長は納得と妥協の籠った返事をした。

「……………では、付き合ってくれ」

「……………望むところだ」

そう返事をし、先程のマシンガンを構え、ポーンのメインカメラ目掛けてマシンガンを乱射した。

案の定、ポーンのカメラ部は割れ、しばらく右往左往していた。私はすかさずバズーカに持ち替え、コクピット部に狙いを定めて撃つた。

ポーンのコクピットハッチがバズーカの弾の爆発で焼け爛れ<sup>ただ</sup>、湯気が出ていた。

「流石だ、ナリア！」

「……もう一発……！」

と言つて構えた瞬間。

「ナリア！ 危ない！」

気がついた時は遅かった。隊長はこの世の者ではない屍と化していた。マシンガンの弾が隊長をあの世へと誘ったのだ。

「……ッ！」

自分はなんて無力なんだ。  
守られなければ戦えないのか。

そんな思いに駆り立てられ、マシンガンを持ちながらその場を去った。

ガンダムはどこだ………？

そう思う最中、ミサイルやらマシンガンの弾やらがたくさん飛んできていた。

「く、きりがない!」

そう思って走りながらマシンガンを構えるが、

「ううあ!」

ミサイルの爆風に耐えられず、近くにあった工場に跳ね飛ばされた。そして乱暴に不時着した。しかし、その工場の中にあつたものこそ……

「ガン……ダム……」

深紅のボディを纏い、筋骨隆々とした人間を思わせるような重装備さ。ミサイルポッドやら大型ランチャーやらが積まれたその機体は見るからに砲撃戦に向いた装備だった。私は迷いなくガンダムに乗り込んだ。

「システム起動………ほう、中々だ」

バグだらけのOSを書き換えたあと、ガンダムのコントロールパネルが示すポーンとは桁違いのパワーに声をあげた。

「……アテナというのか」

連邦ガンダム2号機、またの名をアテナというガンダムを起動。

ツインアイを黄色に光らせ、ミサイルで乱暴に工場を壊し、工場内から顔を出した。

「2号機が出てきました！」

ポーンのパイロットが叫んだ。

「ほう、先手を取られたか」

先日レイジに負けたネオンがダンディに言う。

「2号機に集中砲火だ！ コクピットを狙え！」

その怒号で百機を超えるジェノサイド部隊は一斉にアテナに斉射した。

対するアテナは、右肩部のビームガトリング砲や左肩部ミサイルや脚部ミサイルを撃ち、マシンガンの弾やミサイルを相殺していた。

「……しつこい！」

背部にマウントされていた大型ランチャーを構え、照射を始めた。砲門から溢れんばかりの真っ赤なごん太ビームを惜しみなく照射。

「ぐおお……」

「あああ……」

ポーンが次々と撃墜されていく。



「……………」

アテナはそのまま砲門を動かし、曲げ撃ち。

「ぐああ……………」

「うああ……………」

その頃、シグナスのガンダムチームは。

「やべえ、もうU.U.いんじゃない……………」

ガルマンが言葉を漏らす。

「ん、何だ！？ 高エネルギー反応が……………う！？」

：ヴェルターさんが言いかけた瞬間に、赤いごん太のビームが流れてきた。ヴェルターさんのテトラはFモードのままバレルロールをしながら回避に成功。……………いや、回避してもらわなくちゃ困るけど。

そんなことより。

「今の赤いビームは……………？」

「……………おそらく2号機だ」

「2号機……………！？ ……………ツ、先手を取られたか……………」

「……わからない」

俺は悔しさで齒軋りをしたが、ヴェルターさんは答える術がないようだった。トシリアといえば、

「……行かなくちゃ」

と言ってアサルトのバーニアを吹かした。……っ！

「おいトシリアー！！ 迂闊に前へ出るな！！」

トシリアが聞く耳を持つわけもなくベルリンの工場区へと突っ走っていった。

「ネイビーを追っぞ」

ヴェルターさんが促す。

「そっつすね」

テトラの後を追うようにシャドーを進めた。

照射終了。ジェノサイド部隊の残存機は数十。

アテナはランチャーを背部にマウントし直し、腰部マウントからハンドガンサイズのライフルを二丁取り出し、射撃を始めた。アテナの射撃命中精度はレイジの駆るコロナに劣らないほどであった。

「2号機のパイロット、中々やる……っ！」

ネオンが呟く。

「こいつなら、白兵戦で！」

ネオンはポーンカスタムのコンバットソードを抜刀し、アテナに特攻した。

「白兵戦……恐れ入る」

アテナは右手のライフルをしまい、脇腹部からサーベルを取り出した。

「ほう……土道をしかと心得ているな、ガンダム2号機のパイロット！」

「……ぬかせ」

「む、少年の声？ いや、女？ その声はどちらともとれる」

「……」

ナリアは無言のままアテナのサーベルをポーンカスタムに振りかざした。ポーンカスタムは負けじとソードを振り、アテナのサーベルと軋み合った。

「貴様何者だ？」

「……名乗るまでもない」

「いいから申してみる」

「……ナリア・オーエン」

「ううむ……男か女か微妙な名前だな」

「女で何が悪い」

「ほう……女だったか」

「何が悪いと言っている」

「別に」

「変態が」

「いや私まだ何も言ってないぞ!？」

緊迫感が薄れていく最中、

「ぐお」

アテナが被弾した。

「ええい、一騎打ちの邪魔をするな! 味方であるうがこれ以上は許さんぞ!」

ネオンは味方ながらこんな警告をする。

「隊長、白兵戦マニアもいい加減にして下さい」

「白兵戦マニアとは何だ!？」

「よそ見をするな」

ナリアがそう言いながらアテナがポーンカスタムに斬りかかる。

「おっと油断大敵」

ネオンは咄嗟にポーンカスタムのコンバットソードでアテナのビームサーベルを受け止める。またしても剣同士が軋み合う。

「ふむ、女にしてはやるな……」

「ぬかせ」

「ふん、とことん強がるがよい!」

ネオンが不敵に笑った次の瞬間、ポーンカスタムは軋んだ剣をバチツと離し、再び斬りかかった。

「ぐう」

流石のアテナも一瞬怯み、額のブレードアンテナが斬り落とされる。

「ふん、まだまだだ!」

そうネオンが言い、さらにポーンカスタムはアテナに斬りかかる。ナリアはふと諦めた。

(私も……隊長のように死ぬのか……?)

そう思った刹那、ポーンカスタムは目の前からいなくなっていた。

(どっということだ……?)

レーダーを頼りに左側を見ると、青、黄、白のトリコロールカラーをしたガンダム、アサルトがポーンカスタムをぶっ飛ばしていた。

「2号機のパイロットさん、怪我はないですか？」

ナリアにとっては聞き覚えのあるはずのない声がスピーカーを通して聞こえた。

一体何が起きたのかと言うと。

アテナに斬りかかったポーンに横槍を入れるようにアサルトが高速でタックルをした。

その際ネオンは、

「ぐおあ!？」

ネオンは激しい振動に痛みと驚きの混じった声をあげたのだった。

そしてトシリアがナリアに話し掛けたという次第なのである。

「……機体損傷率37%、パイロットの私は異常無し」

とトシリアの配慮に無機質に答えた。

「よかったあ。じきに援軍が来ます。……あ、それより、あなたは連邦の方ですか？」

「反Uのゲリラ組織の一員。だが先刻、私を除いて全滅した」

「そうですか……」

「……敵は侮れない。油断するな」

「わかりました」

トシリアはアサルトを再び構えさせる。

・よくよく考えてみたら俺おかしいよなあ。どこの誰だとも分からなかったのに助けて、あまつさえ結構気軽に話し掛けちゃったし。俺のインスピレーションが敵じゃないって教えてくれたのかなあ？……考えすぎか。兎にも角にも味方っぽい感じでよかった。

「へえや！」

アサルトでポーンカスタムに斬りかかる。

「ぐう、流石に二対一は厳しいか……」

ポーンカスタムは潔くバックブーストし、納刀し、ビームライフルに持ち替えた。

「逃がすか！」

ヘッドバルカンを撃ち牽制する。

「小癩な！」

ポーンカスタムは軽く回避行動をとり、ライフルを撃ってくる。

「くっ、」

即座にアサルトのシールドで防ぐ。ビームの飛沫がシールドで飛散した。

「おのれ、流石はガンダム、中々しぶとい」

相手パイロットがそっぴいながらポーンカスタムは更に間合いを離し、単独での戦闘は諦めた風に部隊の中へと戻って行った。それでも、ポーンカスタムだけ青いのでやはり目立つわけで。

「いいか諸君、これからの単独行動は一切許さない！」

「あなたが先頭を切って単独行動をしていましたけど」

「煩い！」

と今一つ威厳のない命令を受けた部隊。……こんな奴らなんかにゼッター負けたくねえ！

「うおおおおお！」



「迂闊だ、前へ出過ぎるな！」

この時、2号機のパイロットの声は聞こえなかった。

「1号機が特攻してきたぞ、放て！」

隊長機であるポーンカスタムのパイロットの怒号と同時に部隊の弾幕が！

「うおおっ！」

咄嗟にシールドを構える。弾幕があまりにも厚いので、シールドを構えながらの特攻は無理だ。防ぐので精一杯である。

「ち、あの馬鹿が……」

ナリアは舌打ちをしながらアテナのランチャーを構える。

「……隙だらけだ」

カシン……

アテナのランチャーの砲身は乾いた音をたてた。

「……パワー切れなのか？」

コントロールパネルをみると、アテナのパワーはほぼ限界であった。

「ランチャーを使いすぎたか……くそっ、」

ガッ、とモニターを殴った。

「私も迂闊だった……」

ネオンはそのことに感じいたらしく、

「2号機はパワー切れのようだ！ 一気に叩き込め！ コクピットを狙え！」

と叫んだ時だった。

「させるかよオオオオオオ！！！」

半分我を忘れていたトシリアのアサルトがポーンカスタムにノーガードで再特攻。アサルトがビームサーベルを抜き、おもつくそポーンカスタムに斬りかかる。

「な、こやつ！」

咄嗟だったので肩のシールドでサーベルを受けたが直ぐに焼け爛れ、使い物にならなくなってしまった。

「1号機、乱心したか……？」

訝しげに独り言をいうネオン。すかさずポーンカスタムも抜刀させ、タイマンを挑もうとした。

「面白い！ 受けて立つぞ」

そんなことを言い切らないうちにアサルトのサーベルとポーンカスタムのコンバットソードが軋み合う。アサルトは軋んでいる剣をよそにポーンカスタムにサマーソルトした。

「ぐう」

ネオンは声を漏らし、ポーンカスタムの左胸部の装甲が乱暴に剥がれた。

「うおおあ！」

アサルトは更にサーベルをポーンカスタムに振りかざし、ポーンカスタムは必死に回避行動をとるが左足を斬り落とされてしまった。

「く、撤退する！」

「隊長！ 2号機の方はもう……」

「いいから撤退だ！ 体制を立て直す！」

威厳を保てたネオンの命令で、残り十数機しかいないジェノサイド部隊は撤退していった。

## Unit 011：無力（後書き）

こっそり題名を変えました。題名が変わってもよろしく願いします。

Unit 012: 旅立ちの晚霞(前書き)

ノリと勢いで更新しました(汗

後書きの形式を大きく変えました。気が向いたらでいいんでそちらの方も閲覧していただけると嬉しいです。

## Unit 012：旅立ちの晩霞

：UUのMS部隊が撤退した。もう一機のガンダムが完全に停止していた。先程あれだけ暴れれば当然だが……。

有線通信すべくもう一機のガンダムに近づき、私のアテナのマニユピレーターをそいつに触れさせた。

「なぜ私を庇った？」

そう問い掛けてみるが、気絶しているのだろうか、返事はなかった。

「……」

機体のパワーも僅か。どうしようもなく手持ち無沙汰になってしまった。

するとその時。

「トシリア、トシリア！ 大丈夫か！？」

という無線通信が機内に響く。このガンダムのパイロットはトシリアというのか？

「……！ 2号機……」

黒いガンダム（ガンダムMk-1ではない）のパイロットが言葉を詰まらせていた。

「……黒いガンダムのパイロット、一体何者だ？」

疑問なので訊いてみた。

「我々は地球連邦軍所属の戦艦シグナスのガンダムチームだ。その1号機も我々の仲間だ。返してもらおうか」

堅苦しく連邦の士官らしき人物が答えた。

「ちょうどいい。このアテナ、連邦製のだろうか？」

「……そうだが……？」

「アテナの補給を頼む、……というより、志願したい」

「……お前こそ何者だ？」

今度は逆に訊いてきた。

「反UUの非軍事組織『メラゾーム』の一構成員……だが、先刻を以って私以外は全滅してしまった」

「そうか……お前もUUに対して……？」

「そんなところだ。あと、その1号機とやらのパイロットも気絶している。早急に帰艦することをオススメする」

「わかった。2号機は自力でシグナスへ行けるか？」

「自力では絶望的だ。如何せんパワー残量が僅かしかない」

「わかった。じゃあ君はあの3号機の背中に乗って……」

と言つて3号機に振り返った風だったそのパイロット。

「……」

3号機とやらのパイロットは渋々受け入れている風だった。

「じゃあ俺は1号機を運ぶから」

そう言つて黒いガンダムはマニピレーターからワイヤーを出して1号機を縛り、持ち上げた。私も残り僅かのパワーのアテナを歩ませ、3号機に近づいたところ、

「……エネルギーパックが付いていないな」

3号機のパイロットが初めて口を開いた。声の調子から、歳は30代後半か40代前半くらいだった。人の父親をしてもおかしくはない年齢だ。

「エネルギーパック……？」

「アテナは、エネルギー消費量が尋常でないことからこの工場に運ばれて、それはもう取り付けている筈だが……？」

「少佐、僕が探してきます」

黒いガンダムのパイロットはそう言つて機体を工場区内へと歩ませた。



「……名前は」

3号機のパイロットに名を訊かれた。

「……名乗るまでもない」

「……そうか」

男はそれ以上言及してこなかった。

「……私も忘れ物がある。それを取りに行ってくる」

「……わかった」

機体をしゃがませ、ハッチを開け、コクピットから飛び降りる。

忘れ物。説明するのも忘れていたが、私はいつも黄色い小さな雨傘を持っている。

元々は私のものではない。

それは私がまだ幼かった頃。

ちようど今と同じような状況になったときに、独りぼっちになって

雨に打たれていた。あの時も私だけが生き残った。涙と雨が混ざり合っ  
てぐしゃぐしゃになったのをよく覚えている。

泣き止んでしばらく経ったとき、当時のナリアと同じくらいの年頃の長靴を履いた男の子が黄色い雨傘を持ちながら駆け寄ってきた。

「君、迷子なの？」

「……………」

ナリアは答えなかった。迷う以前に帰る場所がないのだから。

「そんなにずぶ濡れになったら風邪引いちゃうよ。女の子は体が冷えやす  
いっていうし」

「……………」

いたいけな目で少年を見つめる幼少ナリア。

「……………傘、持ってないの？」

「……………」

幼少ナリアは無言でコクン、と頷いた。

「ううん……………じゃあ、僕のをあげるよ！ 大丈夫、パパの傘に入れて貰  
うから」

ナリアの状況を知る由もない少年は無邪気に傘を渡す。

「……？」

ナリアは傘を受け取るが、使い方が分からずに傘を横にしたり逆さまにしたりしていた。

「ああ、ここを持つんだよ」

少年は、貸して、と言って再び傘を持って見せた。

「……」

幼少ナリアは変わらぬいたいけな目で少年を見る。

「さあ、持ってごらん」

再び手渡された傘。幼少ナリアはしばらく傘とにらめっこしたあと、ようやく傘を持った。ナリアの用心深さが伺えた。

「そう！ 大事に使ってね！」

少年は無邪気な表情を幼少ナリアに向ける。幼少ナリアは、傘越しにいたいけな目で少年を見送った。

：それ以来、今となってはかなり小さくなってしまった傘を、出撃の時以外は必ず手放さずに持っていたわけである。

今回、もう生きては帰って来れないという思いで出撃したが、結局また生きてしまった。

しかし、せつかく生きているのなら、あの雨傘は絶対に手放したくはない。あの雨傘を持っていけば、いつかまたあの少年と会えるかもしれないから。顔も殆ど覚えていないし、向こうもおそらく私のことなど忘れているだろうが……。でも、これを持っていると、どこか温かい気持ちになれる。戦いをして、無心で引き金を引き続けている私にとっての唯一の安らぎなのだから。

私は、コンテナに立てかけてあった少し薄汚れた黄色い小さな雨傘を手に取り、アテナに帰った。

：昨日鞆を放置したまま行方不明になったヒイラギ君。そして、その彼にその鞆を預かってくれと頼まれた私力ナリー。

これ、どうすんのさ？　と思いつつ腕を組み、自分の部屋でヒイラギ君の鞆に向き合う私。

「ううん……ヒイラギ君の家わかんないしなあ」

そういえば今日の学校でサラにこんなことを言われた。

「今日カナリーの彼氏来てないじゃん」

「なんで彼氏なのよ!?!」

「顔真っ赤にしてまちゅよ?」

「……………」

「そういえば昨日あの彼氏のバッグ持って帰ってたよね?」

「そ、それは頼まれたから……………」

「カナリーは顔を真っ赤にしながら弁解した」

「いや、なんで地の文みたいな言い方してんの?」

「カナリーはいつものペースに戻してツツk」

「いやもういいよ!」

という私の乙女心（自分で言うか?）をいたぶる発言を朝っぱらからぶつけられましたよ。

「カナリー、ご飯」

「はあい」

私はお姉ちゃんと二人暮らし。両親は戦争で亡くなり、一時はお姉ちゃんもろとも戦災孤児になり、孤児院に入っていた。けど今はお姉ちゃんが働くようになり、稼ぎも中々なので今は賃貸のアパートに住んでる。私の保証人はお姉ちゃんなんです。なので、私はお姉ちゃんには頭が上がらないですね。

そんなお姉ちゃんことエレンは今23歳。私と八つ違うんですね。

「何？、最近なんか色気づいてんじゃない」

「うん？ 桜の花なら色気づくどころか結構散っちゃってるけど？」

お姉ちゃんが野菜のソテーを盛ってある皿を置きながら話し掛けてきたのを、箸を一旦止め、窓の外に視点を変えて答える。

「違うわよ。カナリーのことよ」

「へ？ あたし？」

思わずマヌケな反応をした。

「彼氏でもできたの？」

「カレシ？ ナニソレ？ 枯レテ死ンダノ略？」

「ふふつ、相変わらずカナリーは面白いわね」

上品な笑顔を見せるお姉ちゃん。なんつーか、フェミニンだなあ。憧れるなあ。お姉ちゃんみたいなフェミニンな女性になりたいなあ。

「……で、彼氏はどんな子なの？」

「だから違っつてば！」

箸を止めて抗議。

「まあカナリーもメガネ外せばかわいいもんね」

「いやだからさ……」

私はいじめられっ子なのだろうか？

リエン家のたった二人の団欒と温かな光は夕日に染まった景色に溶け込んでいた。

レイジの胸ダイブをやめないユキミ。レイジはいい加減、思ったので、

「……うん、ちょっと真面目な話するから離れてくれる？」

レイジは目つきをいくらかマジにしてユキミに言った。

「……？」

ユキミはそれに感づいたのか、きょとんとした顔をしながらレイジを離れた。

「……俺、宇宙に行こうと思ってんだ」

「宇宙探査？」

「いや、真面目に聞いてくれる？」

今回は冗談なしのようだ。

レイジは話を続ける。

「宇宙ウチウにやり残していることがあんだ」

「……」

やっと真面目になったユキミ。

「それを埋める為に、こいつと一緒にあがる」

レイジは装甲板が剥げ落ちたままのコロナを親指で指しながら言った。

「……ここからは浮ついた気持ちじゃ足元すくわれちゃう」

いくらか黒目を多くしながら神妙な顔で言うレイジ。

「……こんなことに、お前を巻き込みたくねえ」

目を哀しげに細めながら漏らすように言った。

「……もうお家に帰って、ゆっくり休んできな」

「やだ」



ユキミは即答した。

「……なんでだ」

「……だって、レイジさんに助けられて今の私がいるんだもの。そのレイジさんから離れた方が死ぬ確率が高くなる、んじゃない?」

「……なぜに疑問系?」

レイジは片眉をひくひくさせながら冷汗をかく。

「私は、レイジさんとバイバイするつもりはない!」

「……」

レイジは困った風に溜め息をついた。

「まだ一緒におねんねしてないし!」

「そこかよ!」

遂にいつものペースを戻したレイジ。

「……我が儘かもしれないけど、私も連れてって」

「……女は戦場に出るべきじゃない」

「」の際女として見なくていいわ!」

「……はい?」

思わずマヌケな顔をするレイジ。

「レイジさんはその方が気が楽なんですよ？」

「ううむ……………」

レイジは夕日で茜色に染まった原っぱの上で困惑。

(……………やんぬるかな)

妥協したレイジだった。

「んじゃあさ、この剥げ落ちた装甲板とかを取り付けの手伝ってくれる？」

「もちろん！」

…ユキミはがばつと立ち上がりながら答えた。あ、パンツ見えた。

「早くやりましょ！」

ユキミは俺のやましい妄想とは裏腹の明るい反応をした。

その明るい笑顔が夕日に映えていて思春期男児には眩しかった。

雨傘の回収を終えたナリアとエネルギーパックを持ってきたシャドーが揃い、シャドーはアテナの背部にパックを装備させた。同

時に、ナリアも例の雨傘を持ちながらアテナに乗り込んだ。

「アテナのパイロット、パツクは装着した。もう動けるだろ？」

：有線通信を通して黒いガンダムの声が聞こえるが、いくら操縦桿を動かしても一向にアテナが動かない。

「何やってるんだ？ もう動けるだろ？」

「……動かん。動かんどころかパワー残量も僅かなままだ」

あのパツクはハツタリなのか？

「おかしいなあ……」

黒いガンダムのパイロットは首を傾げた風だった。そこに、

「エネルギー回路を変えてみる」

3号機のパイロットが私に提案。

「……またOSから書き直しか……」

私がキーボードをいじることにより、コンソールも活発に動き出す。

「エネルギーポンプを本体に切り替え……これのできた筈だ」

Enterを押すと、(本体)エネルギーが一気に回復し、満足に戦艦に行ける量になった。

どうやらこのエネルギーパックはデフォルトでは機体本体のジェネレーターではなく、ランチャーやビームキャノンなどのエネルギージェネレーターへ直結していたようだ。

機体本体のジェネレーターと火器用のジェネレーターが別個だとは不思議だ。後で問い質す（ただし）必要がありそうだ。

「戦艦までは」

「そう遠くない」

私の質問に3号機のパイロットが答えた。

私はアテナのバーニアを吹かさせる。

「10分とかかるまい」

「……」

3号機のパイロットは補足するように私に言った。

どこか3号機のパイロットに親近感をおぼえるのは気のせいだろうか？

北海洋上。海が夕日で朱く輝いていた。  
すると、

「……？」

「トシリア、気付いたか！？」

黒いガンダムのパイロットが叫んだ。

「ちゅ……中尉……」

「もう終わったぜ」

「……っ！ 2号機のパイロットは!？」

私ならここにいる。

「大丈夫。今一緒に飛んでるぜ」

「っ……よかった……」

「なんであんな無茶をしたんだ？」

「……感情の赴くままに行動することに異義はないです」

「どこぞの自爆マニアじゃねえんだからさ……」

黒いガンダムのパイロットは冷汗をかいている風だった。

確かにヒ ロ・ユイの無鉄砲さには感心させられる。

「……もうすぐシグヌスだぜ」

黒いガンダムのパイロットはトシリアとやらを促す。

私視点でストーリーが進むと、ムードがいくらかシリアスになる気がするのはいさだかだろうか？

「いや、あの……」

「なんだ、黒いガンダムのパイロット」

「いや、もう名前教えるからさ、流星にその呼び方は」

「……確かに。作者も面倒だろう」

「いや作者とか言うなよ！！ 小説を何だと思ってんだよ！！」

というわけで、黒いガンダムのパイロット＝ガルマンという等式が成り立つそうだ。

「なんで俺いちいち何らかの等式に当て嵌められなくちゃなんないの？ てか俺まだ名乗ってないし」

「そーいうことだ」

「いやだからその『そーいう』を説明しろよ！ 何？ 流行ってるのそれ？」

意外と冗談の通じそうなガルマンという男であった。

：つーわけで（どんなわけだ）、装甲板貼り直しの作業をしているユキミと俺。

「レイジさん、暗くなってきちゃったよ」

舌つ足らずで甘いユキミの音がコロナの反対側から聞こえた。さ  
ら、

「へあつぶし！」

大胆なくしゃみの音も。

「……………一旦飯にすつか？」

「うん……………ズズツ」

鼻を嚙<sup>す</sup>りながら答えるユキミ。

「今日の晩飯はうどんだぞ〜」

「おうどん！」

ユキミは喜んでいた。

「あたし日本食大好きなの！」

「ああ、そう？」

「……………ていうかつどんって日本食だっけ？」

「……………知らん」

「……………まいつか！……………ズズツ」

またしても鼻を嚙ったユキミ。おいおい大丈夫かよ？

「……家入ったら鼻かんだ方がいいかも……」

「いっばい出そうー!」

「いや、言わんでええからそんなこと」

無邪気に言われるとどうしても控えめなツツコミになってしまう。ユキミは俺のツツコミに対し満更でもない様子で俺ん家のドアの鍵を針金二本で開ける。……何なのこの子？ てか寧ろ破壊工作員とか向いてんじゃないかね？ ある程度の自己防衛は出来るし。させようとは微塵も思わないが。

針金二本で開けられた自宅。ユキミは鼻のことも忘れてはしゃいでる。

「あーレイジさんのお家。75年振りな気がするわー」

「いや、俺達どんな関係？ てか君今日の朝居たじゃん」

「……あ、鼻かまなきや。ティッシュどこ？」

鼻を押さえながら家内を無駄にドタバタ走り回っているユキミ。

「ここだよ」

リビングにある、ソファで囲んだローテーブルの上にあるティッシュ箱を指す。いつも煎餅やらジャプやらを置いてる場所なのだ。

「Oh! There is tissues box!」



「この小説ここにきて初めて国際色出したな」

「いやこの小説とか言うなよ！ てかオメーらホント小説を何だと思ってるんだよ！ てか俺も小説って言うっちゃったし！」

「ん？ この無駄にうざったいシツコミは……」

「ちーん、あ、ムツツリスケベさん！」

「いやだからそれガチで言うのやめてくれない？」

「面白みがあるじ……へあつぶしゅー！」

「なんかくしゃみされたんだけど!？」

「ちーん、レイジさん、おうどん早く食べたいよ」

「ああ、すまん。今すぐ作るわ」

「……」

スルーされて可哀相な感じになってるガルマンをよそに、あまり申し訳なさげに返事をしたレイジはうどんの具材をキッチンに揃える。

「レイジさん、」

「うん？」

片手間で相槌を打った。

「……なんでムツツリスケベさんのことムツツリスケベって呼んでるの?」

今更!?

「ん? ノリだよ、ノリ」

「韓国海苔?」

「いや、俺韓国つつたっけ?」

「おいしそうだから言ってみたの!」

話飛ぶなオイ。

にしても……

「君ホントに地味な物が好きだね」

「これぞ日本のわびさびよ!」

「いや意味少しちゃうと思う」

冷汗をかく俺。 对ユキミだとほぼ100%俺がツッコミにまわってしまっなあ。

「私、東洋が好きだから! 特に日本!」

ユキミは無邪気な顔をしながらふわふわした黄色い髪の毛を揺ら

す。

「まあ、確かに日本はいいところらしいしね」

「ヲタク文化の発祥地だし！」

「そこなの!？」

激しく驚愕する俺。視点がシュール過ぎるわ。

そんなこんなでうどんの完成。

「わあ〜おうどんだ〜」

「今日の夜は冷え込むらしいからね、たとと食べな」

「いただきます!」

ユキミはうどんに汁をぴちゃぴちゃ飛ばしながら麺をちゅるちゅるすすする。

「汁飛んでるぞ」

「ん〜?」

途中で麺をすすするのをやめて麺をぶらんぶらんさせながらこちらに向いた。

「……いや、君、ホント……うん、やっぱりいいわ」

「なによ〜」

とユキミは言いながら麺を歯で噛み切り、唇を尖らせていた。

「……あ、そういえばさ、装甲板の取り付け、どうする？ 明日にする？」

「明日だと多分手遅れになるから……食べたらずぐやる！」

「手遅れ？」

俺は怪訝そうにユキミに問う。

「多分私を追ってこっちにくるわ。手を打つなら早い方がいいわ」

「……なら、早急に着替えとかの準備もしないとならんな」

「着替え？」

「今回は長くなる。着替えは必要でしょ」

「まあね」

ユキミがそう答えるのを確認し、俺はうどんのお椀を両手に持ち、残り少なくなつた具材をじゅるると飲んだ。

「じちそーさん」

「……そういえばさ、レイジさんの料理するお野菜って味濃いよね」

ユキミは麵をじゆるじゆる啜りながら言った。

「あーうちん家有機野菜育ててそれを使ってっから」

「勇気野菜？」

「有機な、って口答じゃわかんねえじゃねえか」

「まあいいや、と息を置いてから、」

「うちん家家庭菜園借りてたんだよな。そこでいろんな野菜を育てたわけなんだが……」

「……？」

続きを知りたそうな顔をしているユキミ。……かわいい。

「これから一時解約の電話をする予定なんだ。しばらく離れるからね」

「うーん……採れたの送ってもらえばいいじゃない！」

「産地直送のノリですか」

静かなツツコミを挟んで、

「てか、実は今はもう何も無いぜ。全部収穫しちゃって」

「いつ？ どの章にも書いてないけど？」

「なんか随分具体的なところまでツッコまれたな……うん、あれだよ。みなの見ぬ間に実は収穫してました」 的なノリだよ」

「ふーん」

従順そうに答える。ツッコミはなしk

「……テキトーじゃね？」

遅い！ 勢いで椅子からズデツと落ちた。ユキミには一本取られた。

「ああっ、レイジさん大丈夫!？」

マジ顔で心配してくれてるユキミ。大袈裟だなあ。いや、てか俺のリアクションも大袈裟だったかな？

「なんとか」

「はあくよかった」

安堵の表情を見せるユキミ。この前も言ったけど、ユキミの表情変化、豊富だよなあ。

「……うどん、食べ終わった？」

「あ、まだだ！」

急いで席に戻り、昔のテレビでよく出てきそうな麺を空中でじゅるるとやるなんかアレ（テキトーだな）的なスピードで食べ終わ

り、

「さあ、準備しましょー！」

満面の笑顔で尻餅をついたままの俺を促す。

「……………だな」

むくつと立ち上がり、電話の受話器をとり、番号を打った。

一方のユキミは何故か俺ん家に放置してたあの水玉模様のパジャマとかをどっからか持ってきたりユックに詰めていた。……………って、

「どっから持ってきたの？」

「あそこー！」

「バリバリ俺のじゃん！」

「ダメ？」

哀しげな瞳を浮かべるユキミ。男って、こーゆーのに弱いんだよねー。

「いや別にいいけどさ」

「やったあー！」

無邪気にはしゃぎながら荷物を詰め始めるユキミを余所に、中途になってしまった電話のプッシュを再び続けた。

こうして俺達二人は長旅の準備にいそいそしているのだった。



Unit 012：旅立ちの晩霞（後書き）

レイジ「いやあ、明日から出発だねえ」

ユキミ「そうねー！」

ガルマン「……って何このコーナー!？」

レ「三人の雑談コーナーだよ」

ガ「雑談コーナー!?! 何だそりゃ?？」

レ「てなわけで次回予告です」

ガ「ああ、そういうの?？」

レ「時に、2199ねん」

ガ「ってそれ違うアニメだろが！ しかもそれ予告じゃなくてあらすじの言い文句じゃねえか！」

レ「お前それ、元ネタわかんない人にとっては相当辛いツツコミだぜ?？」

ガ「いやお前からぶっかけたんだろが！」

ユ「てゆーかこれ、元々そーゆー小説じゃね？ ね、ムツツリスケ  
べさん」

ガ「いや、それフォローになってるかどうか微妙だから……てかマジ呼び方変えてk」

レ「てなわけで、次回もよろしくう！」

ガ「邪魔すんなy」

ブツツ

……

ガ「って抗議の邪魔もすんのかよ！ 何なんだよ俺の人権……！」

## Unit 013：夜明けの渡し舟（前書き）

2ヶ月放置すみません！

もう読者様は減ってるかなあ。

そんな不安を抱えつつ、今年最後の更新をしました。

後書きの形式は好評でも不評でもなかったので、しばらくはあのままいきます。

気がついた点などありましたら、年賀状代わりにドシドシ感想なりメッセージなり書いて下さい！ 何も頂かないと、物書きとしても張り合いがないので、ご協力お願いします！

そして、来年2010年も宜しく願います！ 来年度にひかえた受験の勉強と共にぼちぼち頑張ります！ では、よいお年を。

## Unit 013：夜明けの渡し舟

戦艦シグヌスのMS発着デッキ。日が大分傾く中、四機のガンダムが着艦した。

「あれ、あれアテナじゃん！」

ビリーが前髪をかきあげながら、真っ赤な夕日を背に重々しく着地するアテナを仰いだ。

「誰が乗ってたんだ？」

不思議そうにアテナを見た。

「ビリー、2号機はお前の視点から見てどうだ？」

ガルマンがいつの間にもビリーの傍らにいた。

「うーん、些か火器が多い気がするけど……エネルギージェネレーター之恩恵で、ほぼ無尽蔵に強力な弾幕を張れるのは心強いよねえ」

「シャドーやアサルトじゃ弾幕張るのは苦しいからな」

「母艦側としても、もう一つ弾幕が張れる機体があるってだけでも大分助かるからねえ」

「母艦だけでは賄えない部分もあるしな」

という雑談をしているよそで、トシリアは。

「2号機のパイロット、誰だったんだろう?」

アサルトのコクピットから降り、正面に見えるアテナのコクピットハッチの辺りを凝視してみると、

「女か……雨傘?」

訝し気に目を更にしかめる。

「……なんで?」

不思議がるトシリア。体に明らかに不釣り合いな小ささの黄色い傘を持っている年頃の女の子を見てこうなるのも無理はない。

シグナスのMS発着デッキのハッチが閉まる。差し込んでくる夕日がだんだん小さくなり、やがて無くなった。空も、赤みが消え、夜に近づいていた。

「燃え上がれ〜燃え上がれ〜燃え上がれ〜ガ ンダムう〜」

「最後の丸何を隠してんの?」

：そんな他愛のない会話をしながらせつせと荷造りをしている俺とユキミ。外は大分暗く、俺まで鼻水が出てきそうな冷え込みだった。部屋の窓は室内気温と室外気温の差を如実に示しているかのようには曇っていた。

「窓曇ってる〜」

準備途中でぐっちゃぐちゃになっているリュックを放置し、タタと窓に駆け寄り、それに指で絵を描き始めた。

「指<sup>かひ</sup>黴臭くなるぞ〜」

「あたし青カビチーズ大好き！」

「……」

もうツッコむのがめんどくさくなってきた。無理にツッコもうとすると、かの熱くてしつこくて鬱陶しい奴みたいになるしね。

「手洗って準備しなさい」

「はい」

絵を描くのを途中でやめ、唇をむにゅーっと尖らせながら渋々洗面所に向かうユキミ。

「……なんの絵？」

中途な完成度のユキミの絵を見てみたが、あまりにも下手くそ過ぎてわからなかった。

人の絵を描きたかったのだろうか、指はモニターみたいに鋭いし、輪郭線はスーパーイヤ人級の歪み度だし、もう何がなんだかよくわからない感じになっている。

ユキミが何やら歌を歌いながら部屋に戻って来た。

「誰かさんが誰かさんが誰かさんが見つけた」

その振りなんか懐かしいな。

「ねえ、小さい秋ってなんなの？」

素朴な疑問だね。実は俺もわからない。敢えて言うなら……

「あれじゃね？　なんか、こう、秋っぽいを見つけたんじゃないの？」

「運動会！」

「うん、違うと思う。てか小さくないし」

「人の足に踏まれ続けてぐちゃぐちゃになってる紅葉もみじとか？」

「何故にそうまでして小さくしたい？」

などと他愛がないんだか不毛なんだかわかんないような会話を続けながら荷造りも大詰めになった。……今俺、うまいこと言った？

そんなことを心中でホザいている間に、ユキミは荷物がパンパンに入っていて丸くなってしまっているリュックを背負ってはしゃいでいる風だった。

俺の方もトランクケースを閉じ、鍵をかけて出発体勢に入った。

「んじゃ、行きますか」

「逝きましょー！」

ちよつと待った。

「何だその縁起でもねえ漢字は」

「浮ついたこと考えてたら足元すくわれちゃうんでしょ？ 死ぬ覚悟で行くんじゃよ？」

いや、そうだけども……。

「だからこそ死なねえように気を引き締めんじゃんよ。うわー死亡フラグ確定とか行く気失せたわー」

「えー逝こつよー」

「やだ！ まだ三途の川は渡りたくない！ てかいい加減漢字変換直せ！」

「なんで逝かないの？ 逝くって言ったのレイジさんでしょ？」

「言っていない！ 『逝く』は言っていないからね！？」

「……ん？ あ、まだ直ってなかったの？ 『いく』って漢字」

だから言ってるんじゃない！

「うーん……これはこれでこういうスタートもありじゃね？」



「……」

正直不安過ぎるわ。

てなわけで、荷物をコロナまで運び、装甲板貼り付けの作業を続  
行した。

「肌寒〜い」

制服のままのユキミが片手で腿ももを摩さすっていた。

「うどんもつと食べたかった？」

「また作って欲しいなあ」

「そうかい」

張り詰めた空気はあまりなく、何となく緩んでいた。

そんなこんなで全ての装甲板の貼り付けが終わった。

「できた〜!!」

両手をこれでもかかってぐらいに挙げてるユキミ。

「じゃあ出発だね」

「え？ おねんねしないの？」

淋しげな目を向けてくるユキミ。

「いや、早く出ようって言ったの君でしょ？」

「……そうだった！」

納得した風だったユキミ。

「コクピットのシートの後ろで寝てていいよ。毛布持ってきたし」

「わーい！」

俺がトランクケースから毛布を取り出すなりユキミはぱつと毛布を持って行き、半開きになっているハッチをぐいぐいこじ開け、ピユウと入って行った。俺も続いてケースを連れ、コクピットに入った。

コロナのコクピットは意外に広く、荷物も置けるし、一人一人くらいは寝れるくらいのスペースはある。広さのイメージはだいたい軽自動車の中くらい。

「おやすみ」

ユキミは毛布をかけたというより、毛布に包まって寝た。

「……さて、行きますか、シグナルとやらに」

えっ、戦艦の名前こんなじゃないって？ ……そうだったか。

「システム起動、と」

すると今度は正常なOSが作動した。コンソールには、  
『System - CORONA』  
と表示されていた。

「各システム異常無し。……さあ、行きますか」

仰向けになっているコロナのツインアイが森の暗闇の中で青く光り、コロナが立ち上がる。木々がざわざわと音を立てながら揺れている。

「テイクオフ！」

バーニアを目一杯吹かし、離陸。草木がバーニアの推進剤で引っこ抜かんばかりに靡なびかせていた。

戦艦シグヌス504号室。そこには、何となく腑に落ちない様子で自室のベッドで寝っころがっているガルマンがいた。

「……コロナ、どーすんだろ」

天井を見ながら呟くが、彼は天井なんか見ていない。

「あんなもん悪用されたら……」

シリアスに目を細める。

そこに、お客さんがきた。

「……ナリアだ。ガルマン・アラークの部屋は二こと聞いたが」

「ナリア？ 誰だお前は？」

「……ガンダム2号機、アテナのパイロット」

「おう、入れ」

：なんの用だろうと思いつつ薄ぐらい部屋の中でよいしょとベッドから起き、電気を付け、スライド式のドアを開ける。すると次の瞬間、俺は絶句した。その俺の目の前にいる奴が女であることに。その俺の反応にナリアは、

「……私を何だと思っていたのだ？」

「いや、別にそんなわけじゃ……」

完全に不利な弁解をする俺。

「……よかぬことを考えていたんだろう」

「断じて違う！」

「……ムキになるところもあやしい」

「な、何でそーなんだよ！」

「……まあいい。貴官がガンダムチームの建前上のリーダーと聞いて挨拶に来た」

「『建前上』はいらん」

「ヴェルター・ヴァイタル少佐とやらは何らかのジnkクスがあるとかで、形式上はリーダーではないみたいだが」

「……どこでそんなことを？」

「風の噂だ。気にすることはない」

「……いや、フツーに気になるんだけど？」

「……とにかく、よろしく頼む」

と言って勝手に出ていってしまった。

「……………」

また何となく腑に落ちない感覚になり、ベッドに寝っころがる。

「……暇だ……………」

その言葉を残して寝てしまった。

次の日。

「あ、やべ。寝ちった」

頭をぼりぼりかきながらベッドからむくつと起き上がり、洗面所

へよたよたと歩き、洗顔し、歯を磨く。

「あゝあ……」

歯を磨き終わり、大きく欠伸をする。

「暇だ……」

おもむろに廊下へ出てみると、廊下には微かな光が差し込んでいた。窓の外を見てみると、空が青白く光っていた。日の出だ。

「綺麗だなあ……」

思わず見とれてしまったと気付いた時には、俺の吐く息で窓が白く曇っていた。

「いけね」

そう思って白くなった窓を慌てて拭いた。

：俺達コロナが森から出発して数十分後、お目当ての戦艦が見えてきた。そらはゆらゆらと白じんできていて、p a l eで幻想的な景色だった。

「……そろそろか」

その声に反応したのだろうか、眠り姫がお目覚め。

「うん……うん？ もう朝？」

「いや、まだ明け方だな」

「うわあ！ こんな景色初めて」

ユキミは身を乗り出してこの景色を見た。……て、

「前見えないっつ。ちょっとおどき」

「ぶ〜」

ハムスターみたいに頬を膨らませ、ユキミは露骨に唇を尖らせながらシートの後ろに戻った。

「さてそろそろ……」

キーボードを出し、打ち込み始める。

「何してるの？」

無邪気な声で話しかけてくるユキミ。

「ん？ ちょっとね」

「ふうん。てゆうかさ、あたしたちどこに向かっているの？」

「とある戦艦と」

「戦艦……」

言葉を詰まらすユキミ。ユキミの親父さん、ひょっとして戦争で……？

「あ、因みにその戦艦にはガルマンがいるから」

「ムツツリスケベさん！」

途端にテンションが上がるユキミ。

「ムツツリスケベさんって軍人さんだったの？ ムツツリスケベなの？ ゲーム弱いのに？」

「フルボッコだなオイ」

地味にダメ出しをしているユキミに冷汗をかく俺だった。

…さつきから日の出の景色を見続けいたら、もう朝の5:28。もう空もだいぶ明るくなり、海も穏やかに光っていた。

「……へえつくしよんっ！」

誰かが俺の話題をしているのだろうか？

鼻を嚙りながらそんな他愛のないことを思った矢先、

「……ん？ 機影？」

この日の出が終わった景色の中、明らかに大きいものが光を出し



ながらこちらに向かって来ているように見える。

「MSS?」

そう推量した瞬間、俺の足はブリッジへと運んでいた。

ブリッジに到着。

「9時の方向に機影があるぞ！　すぐに索敵してくれ！」

俺はそう叫ぶが、ブリッジのクルーたちはゆっくりとした雰囲気  
で起き始める。

「……機影……ですか？」

のんびりした風にオペレーターが言う。

「9時の方向だ」

「了解しました」

おもむろに索敵を始めるオペレーター。他の皆も、  
あれ、もう朝？　あ、寝ちった！　寝不足だ。うわ。ハ  
ヒ見逃  
した。

的な会話をしながら起き始める。てか今ハル　関係ないだろ。

「……ッ!?　アラーク中尉！」

「なんだ、どうした？」

「この機影、コロナです！」

「何だと!？」

「まっすぐこちらに向かってきます!」

「速度は!？」

「そく……ん？ 光通信？」

「光通信だと？」

「戦う意思はない……着艦させてくれ」

オペレーターはたどたどしく言った。

「……何か企んでもかも知れねえ。俺はシャドーにて待機する」

「了解しました。ハッチは後ほど開けておきます」

「いや、俺が現場で指示する」

「わかりました!」

「朝早く起こして悪かったな」

と言葉を残してブリッジを出た。

「……レイジ、お前は一体何を考えてんだ……？」

廊下でそう呟いていると、

「……どうなさったのです？」

我らが母艦シグヌスの副艦長、ルイ（・アジエスター）中尉がいつもと変わらぬクールな顔で俺に聞く。

「ああ、それが……コロナがこっちに来てるんだ」

「！ コロナがこちらに来ているのですか？」

少しだけびっくりした風に反応したルイ。その時、少しだけ心が熱くなった気がするのはいのせいだろうか？

「ああ。……俺は、シャドーで待機してるから、ブリッジの方はよろしく」

「……わかりました」

と言ってブリッジに行ったルイ。

少しやり切れない気持ちでMS発着デッキに向かった。

MS発着デッキに到着。

「コロナがまっすぐこっちに向かって来ている！ 警戒しつつハッチを開ける！」

「おお、ガルマン！ 朝から元気だねえ。そんな冗談ぬかすなんて」

「嘘じゃない。てか早く準備しろ」

「……マジなのか？」

「ああ。敵軍製の虎の子……いや、ジャジャ馬がな」

「……レイジが？」

「さあな」

と言いながらシャドーに乗り込む俺。

「ハッチ開けます！」

整備兵が声を張り上げる。

「いいぞ！」

シャドーのスピーカーを通して了解の返事をする。

ゴゴゴツとハッチが開く。

ハッチが開いたその景色には、朝日でオレンジに光るコロナが割と近くに見えた。

「……………」

俺の心は張り詰めていた。  
コロナが減速し始めた。

「……そろそろだな」

シャドーの持っているライフルを構え直す。  
コロナがハッチをくぐり、淡々と着艦した。

「着艦は許可するが、ただでは降ろさまい」

ライフルをコロナに構える。すると、コロナのスピーカーから高らかにこんな声が。

「あ！ ムツツリスケベさん！」

「誰がムツツリスケベだゴラァ！」

「ああ、やっぱりガルマンか」

続いてレイジの低い声もスピーカーから聞こえた。同時に、二人がハッチから出てきた。

「レイジ……やっぱりお前なのか……？」

俺も機体の外に出る。

「ああ。そつち」

「なんで急に……」

「気が変わったのさ」

「気が変わって嫌いな軍に来るのk」

そこに、お嬢さんが。

「お久しぶりですね！ ムツリスケベさん！」

「いや今すげえシリアスだったよ！？ その横槍やめろよ！ しかもだからその呼び方やめろっつってんだろ！ ボケなのかマジなのかだんだんわかんなくなってきたから！」

「相変わらずうぜえツツコミだな。もうこの作品お前のせいで『鬱陶しいツツコミ』ってタグ検索すりゃ一発で出てくるようになってしまったじゃねえかよ」

「いや知らねえよ！ それ俺のせいじゃなくて庵瑠璃のせいだが」  
「！」

「因みに私は『型破りなヒロイン』！」

「自分で型破りって言っちゃったよこの子！」

「私はラムパド！」

「いやそっちの型破りかよ！」

というようなしょうもない会話の中、

「……何故ここにきた」

とヴェルターさんが横槍を入れてきた。

「……あんたらが本当の平和を望んでるって聞いてね」

レイジはしばしの沈黙のあと、ニヒルに答える。

「……そうか」

とだけ言つて、ヴェルターさんはいずこへ行ってしまった。場がしんとする。

その沈黙を断ち切るかのようにレイジが、

「……で、俺の部屋はどこ？」

「図々しいなオイ！ まだ正規の軍人でもないだろ！」

「傭兵も部屋貰えないの？」

「あーもつるせー！ はよ艦長に会つてこいよ！ 面接しろよ面接！」

「うー」

とけだるげに尻をかきながらよたよたと歩いていった。

「レイジさんイイおしり！」

「……どこ見てんの？」

…てなわけで潜入成功した俺ら。艦長に会うべくMSデッキを離れ、廊下を歩いてるわけだが……。

「……艦長どこ？」

「浣腸？」

「女の子がそんなこと言っちゃいけません。てか今日尻ネタ多いな」と品の悪い会話をしながら二人でウロウロしていると、

「……あなた、コロナのパイロットですか？」

という女の声が聞こえた。ユキミに向いていた視点を一旦前に戻すと、そこには見覚えのある女が立っていた。

「あ、副艦長だ」

「この人が副艦長さん？」

「そだよ。おそらく」

「……うらやましいなあ。あんなに胸のお山が大きくて」

「ゲフン、艦長室はこちらです」

咳ばらいをして、副艦長は俺らを導いた。



「レイジさん、私も大きくなりましたあい！」

「いや、知らんよ。なんで男である俺が胸大きくする方法を知ってんだよ」

「むう〜っ！」

頬っぺたをぶく〜っとな膨らませるユキミ。

「じじじす」

と立ち止まり、振り返る副艦長。

「……………501」

ドアの横つちよにこう書いてあった。

「ルイ・アジエスター中尉です。艦長、お目覚めですか？」

無機質な声で艦長を呼ぶルイ。

「つう〜ん？」

中からは暢気な声が聞こえてくる。

「……………」  
「コロナのパイロットを連れてきました」

「……………ええっ！？ 嘘でしょ！？」

「冗談ではありません。……準備が出来次第声をかけて下さい」

「今すぐ準備するわ!」

ドアの向こうからせわしなさが伝わってきた。するとそこにユキミが。

「ルイちゃん、どうやってたらそんなに胸大きくなるの?」

ユキミが上目遣いでルイの胸をゆさゆさ揺らしていた。

「……やめて下さい」

ルイは無表情で注意する。てか、今日のユキミは何だか様子がおかしい気がする。

「ユキミ、大丈夫かお前?」

「うん、今日はなんか暴走モードね!」

「エヴァンゲ オンかよ」

てか自覚してんだ。

「お待たせ。入っていいわよ」

「……では、入りましょう」

ルイに導かれて、艦長室のスライドドアをくぐる。その向こうには、茶色いセミロングの髪をした女性が、キャスターの着いた

椅子に座り、足を組んで待っていた。その女性の第一声。

「……コロナって、複座型だったけ？」

「いいえ、単座の筈です」

ルイがあっさり答える。

「……どちらがパイロットさん？」

「俺です」

「……あなた、戦場にこんなか弱い女の子を連れてくなんて……！」

「俺だってそんなつもりはなかった！」

ふざけんな。勘違いすんじゃないやねえよ。

「っ……！」

艦長が俺の言葉に怖気づいた。

「俺は……」

とためた後に、

「あたしのことは女って見なくていいです！」

とユキミが横槍を入れた。

「…………は？」

艦長は怪訝そうな目でユキミを見る。

「彼にもそう言っております！」

そーいえばそうだった。

「…………」

ルイは何か言いたげだったが、すぐに俯いて咳ばらいをした。

「…………まあいいわ。それじゃあパイロットさん、お名前は？」

「レイジ・ヒイラギだ」

「ヒイラギ…………どこかで聞いたことあるような…………？」

艦長は手を顎にあて、どこか遠くを見ている風な目をした。

「…………んで、女の子の方は？」

「ユキミ・サイン」

「サインって…………サイン家？」

「ところで、お部屋はどこですか？」

ユキミは艦長の言葉を途中で切り、部屋の話に挿込んだ。

「ああ、部屋なら……えーっと、507号室以降は空いてるわ。そこを使って」

「はあい！」

とって、ユキミは机の上にあった『507』と書かれたカードキーを「もらいまーす」と言って勝手に取り上げ、取り上げるなり俺の腕をぐいぐい引っ張り、風のように501号室から抜け出した。

その様子に、ルイが無表情を保っている傍らで、アカネ・ヤガ三艦長は呆気にとられたような顔をしていた。

「……碌ろくに何も聞けなかった……」

「聞く機会ならいくらでもあります」

無機質な声で答えるルイ。

「……それもそうね」

気持ちが切りかえられた風だったアカネ。

「では、失礼します」

ルイは、無表情で501号室から出ていった。

「……はあ、世話の焼けそつな子が来ちゃったわねえ……」

アカネは多少困った風に頭をかきなでる。

「ん？ あの子、鍵一個しか持ってかなかったわよね……？」

ここで、よかぬ思い込みをしてしまった。

「……まだ年齢的に早いわ！」

アカネは猛ダッシュで501号室を出た。

：507号室。ここは、これから俺らの自室になるであろう部屋だった。

「これね」

ユキミはカードキーを差し込み、ドアのランプが赤から黄緑に代わり、差し込み口の下にあるボタンを押し、ピシユンとドアが開いた。

「ハイテク」

ユキミははしゃぎながら507号室へ入った。

「ほら、ベッドふかふかだよ！ レイジさんも早く来なよ」

棒立ちしてる俺を促すユキミ。何故棒立ちしているかというところ、実はこの507号室、初めてじゃないのだ。いつだかガルマン達に無理矢理この戦艦に連れて来られた時もこの部屋だったのだ。

「ああ」

とだけ言って、ユキミの言葉に従って入ろうとした。  
その時、左側から、

「ヒイラギくーん!!!」

という女性の声が聞こえた気がするのは気のせいだね。  
俺はスライドドアをピシユンと閉めた。

「……そうだ、後で荷物ここに搬入しないとね」

「もう疲れたよ」

へタアとベッドの上でへたれるユキミ。

「だろうな。落ち着いてからにしようか」

と言った次の瞬間、ドツと睡魔が襲いかかってきた。

「……あゝ……」

考えてみれば当たり前だ。昨日の夜中からずっと寝ずにガンダムを操縦していたのだ。眠くないわけがない。

「ダメだ、俺も眠いわ」

靴をちゃちゃっと脱ぎ、ベッドに倒れ込む。

「あたしも疲れたなあ」

いろいろあったからね。てか、君が連れてって言ったんだからね？

「わかってるよお」

「こら、勝手に読心するんじゃない。」

507号室が沈黙となる。そんな静寂に、アカネが、

「ちよつとヒイラギ君！ 開けて！」

バンバン、とドアを叩くが返事はない。耳を澄ましてみると、微かに寝息だけが聞こえた。

「寝ちゃった？」

右耳をドアにくつつけながら呟くアカネ。そこに、ガルマン&ビリーが通り掛かる。

「艦長、何をやってんすか？」

口を揃えて半目になりながら質問するコンビ。

「え、あ、あなたたち、仕事は終わったの？」

と即席で作った答えを出すアカネ。

「……傍から見るとストーカーにしか見えないんですけど？」

ガルマンがさらっとツッコむ。



「そ、そんなことないわよ！」

「まさかとは思いますが、レイジに惚れちゃったんすか？」

いびるようにビリーが問う。

「そんなんじゃないわよ！ あの思春期真っ盛りの女の子が男と同じ部屋だったら心配でしょう!？」

「ああ、お嬢さんのことですか？」

ガルマンが単調に言う。

「そうよ！ ヒイラギ君、だらし無さそうだから何しでかすかわからないわよ!？」

「……あいつらなら心配ないですよ」

ビリーが落ち着いた風に答える。  
アカネが怪訝そうにビリーを見る。

「だって、サインちゃんは人前で（しかも俺達の前で）レイジにキスするような大胆な女の子ですよ？ 彼女はそんなにか弱くないです。……それにレイジも、サインちゃんに酷いことをするような男じゃないです。確かに、見た目は焼け野原のような頭をしたヤツですが、サインちゃんのこと、きつと、大事に思ってるから……大丈夫だと思いますよ？」

「でも……」

「……人を信じられずに、艦長、務まりますか？」

「……それもそうね、カーガル君。……今寝てるし」

後でもいいか、と妥協し、右手の508と書かれたカードキーをポツケにしまい、

「次に備えておきなさい。またいつ出撃かわからないわよ」

アカネは艦長らしさを取り戻し、自室に戻っていった。

「さて、俺も戻るかな」

ガルマンが体をくるっと自室に向けたところ、

「……ねえ、ガルマン、ちょっと」

とビリーは耳をドアにあてながら手招きをする。

「なんだ？」

ガルマンはビリーにつられ、耳をあててみる。部屋の中からは、

「ベッドで二人つきりっていったら、やっぱりこれでしょ？」

「いや、これって何？」

「ほら、洋画とかで男と女が ……」

「だー！ その先は言うな！ てか落ち着こう！ やっぱ今日の君

なんか変だよ？」

「スーパー・ハイテンション！」

「いや、スーパーとハイテンションの間に『・』を入れてる意味がわからんから！」

「レイジさん、いい加減観念しなさいよ」

「いや、何を観念すんの？　つて、え？　おい、ちよ、あ、ああああああああ！！！！」

レイジの世紀末的悲鳴の後、男一人はハモった。

「……寧ろ、立場逆だな」

Unit 013：夜明けの渡し舟（後書き）

レイジ「只今から、第二回雑談会を挙行政致します。」

ガルマン「雑談すんのになんでそんな畏まってんだよ」

レ「なんか、こう、運動会の開会式的なノリで」

ガ「いや、わかんねえよ。てかどっから運動会が出てきたんだよ」

レ「この話の俺とユキミの会話から」

ガ「そこまで広げるの?」

ユキミ「こんにちは、レイジさん！ ムツリスケベさん！」

ガ「……なあ、俺そろそろ泣いていい?」

レ「泣いていいよ!」

ガ「……いや、やっぱり泣くのやめるわ」

ユ「もうすぐ2010年ですね!」

レ「俺らが西暦言うのも変だけだな」

ガ「……確かに」

ユ「さてさて次回は、なんやかんやでレイジさんがシグヌスに入っ

て、なんか、ビリー君があれして、うーんと、あれ、なんか、忘れちゃった。」

ガ「グダグダじゃねえかよ！　まとめてからやれ！」

ユ「レイジさん、ムツツリスケベさんがいじめる」

ガ「いやいじめてねえよ！　てか寧ろ俺の方がいじめられてるだろ！」

レ「てかお前のツッコミマジで鬱陶しいんだけど？　お前のせいで不名誉なタグついちゃってるしよー」

ガ「だからそれは俺のせいじゃなくて庵瑠璃のせいだ」

レ「てなわけで、来年も」

レ&ユ「『新戦記IDガンダム』を宜しくお願いします！」

ガ「また邪魔された！」

庵瑠璃「……ガルマンも大変ね」

ガ「お前のせいだろがああー！」

庵「ふんちやー！」

Unit 014：清

：サインちゃん騒動の後、俺もといビリーは、507号室の前でガルマンと別れ、MSデッキに戻るべく足を運んだ。

「まだアサルトの修理終わってないんだよなあ」

両手を頭の後ろにあて、けだるそうに歩いた。

「……トシリアのやつ、無茶したなあ？」

そう呟きながらMSデッキに到着。奥にはまだ被弾部が目立つアサルトがいた。

アサルトの修理をしている同僚、オーグに話し掛ける。

「オーグ、まだてこずりそうか？」

「つたく、ネイビー曹長も無茶するぜ。シールドなんかもつほら、使い物になんねえや」

とオーグが、アサルトの隣に立て掛けてあるポロボロになったシールドを指しながら言う。

「いつそイチから作った方が良さそうだな。修理しようとしても結局イチから造んのと変わんなそうだしな」

「んだな」

オーグは顎に手をあてながらしかめっ面になる。

「ただ作り直すってのはつまんねえなあ……」

「なんか考えがあんのか？」

オーグが俺の顔を覗くように言った。

「こう、サザビーみたいに中からミサイルとか」

「サザビーか……ってオイ！ 完全にパクリじゃねえか！」

「いいんだよ。どーせ最近のガンダムネタ切れはじめてるし」

「消極的だなオイ」

「とにかく、アサルトは現状瞬間火力が少ない。いくら汎用機とは言っても、ちょっと凡庸過ぎるなあ。汎用なだけに」

「……それ、完成度の低いオヤジギャグのつもり？」

そのオーグの問いに、

正解！

と言い、話を続ける。

「アサルトは連邦ガンダムの中で一番初めに完成して、それからあまり調整されてないからな。テストも最低限度のものしかやってないし」

「そつえばそうだったっけか」



「問題点が出てくるのはしょうがない。なんか考えておこうぜ」

と言ってアサルトに付ける装甲板を取ったところに、

「そんな時間あんのか？」

とオーグが。

「……さあな」

テキトーに返し、装甲板貼り直しの作業を手伝った。

「そついえば曹長は？」

「トッシーは……自室にいるんじゃない？」

「曹長のことトッシーって呼んでんの？」

的な会話の中、アサルトは修復されていくのだった。

そのトシリリアといえば。

これはレイジ達来る前、アテナを収容した直後のこと。

「はあー……」

目を虚ろにし、自室である505号室のベッドの前で棒立ちする。  
直後、ベッドに倒れ込んだ。

(……懐かしい感じが、さっきより強くなってる……なんでだろう

……?)

俯せになっているトシリアは自問する。

(……戦いの時も、妙に熱くなっちゃったし……)

ううむ、と俯せになりながら考える。

(……てか、眠い)

コクツと首をへたれさせ、そのまま寝てしまった。

時間を戻して。

「……んあ、寝ちった」

大変な事になってる前髪を触って気にしながら洗面所へ向かい、鏡に立った。

「……うん、これは恥ずかしい……」

くりんっくりんでボツサボサな前髪をとかし、整える。

「……よし」

納得した顔をし、さっさと顔を洗い、歯を磨き、洗面所を出る。デスクにある置き時計を見る。

「……6:00か」

トシリアはおもむろにカーテンを開ける。優しい光が505号室を照らす。クローゼットに向き直り、制服に着替えて廊下に出たが、

「出撃命令出てないよな……?」

と思いつき、一旦部屋に戻り、ドア際についている内線電話をとる。

「……とりあえず506にかけてみるか……」

受話器を取り、プッシュに『506』と打ち、受話器を耳にあてる。

『プルルルル……プッ、トッシー！ 起きたか?』

内線電話のモニターが、『通話中』と出る。どうやら親機には繋がらなかったようだ。

「ああ、起きた」

『ちょうどいい。デッキに来てくれないか？ 詳しい話があるから』

「ああ、わかった。……今更だけど、出撃命令出てないよね?」

『ホントに今更だな……うん、出てないよ』

「ありがとう。じゃあ、デッキで」

『おう、待ってるぜ』

トシリアは受話器を戻した。

「……さて、デッキに行くか」

ドアを開けて廊下に出て、ロックをかけ、デッキに向かった。

このシグナスの内線のシステム。今みたいにトシリアが506にかけようとした時を例にとってみるとしよう。

先程トシリアがかけた電話は、506の親機（本体）ではなく、子機に転送された。子機は、ケータイと同じくらいのサイズなので、艦内なら持ち運びが可能である。因みに、親機同士の通話では、親機に備え付けてあるモニターで相手の顔を確認できるが、片方または双方が子機の場合は、モニターでの相手の顔の確認をすることはできない。

話を戻して。

「……何だろう、話って……？」

顎に手を当て考えながら廊下を歩いているトシリア。

「……ま、行ってみりゃわかるか」

顎から手を離し、歩くピッチを上げた。

：ユキミの迷発言&迷行為のオンパレードがようやく終わり、迷い姫はやつと眠りに就いた。

「てか、フツーに眠い」

死人同然の目をしながら頭をポリポリかく。

「……………あ……………」

半目で口を腑抜けのように開けたままにする。

「……………駄目だ、限界だわ」

体を酷使したようだ、自発的に体がフラツときた。その勢いでユキミの横に倒れた。

：デッキに着いた俺トシリア。割とつぎはぎ状態のアサルトがすぐ目の前に見えた。

「おお、トツシー、来たか。ちつと手伝ってくれよ」

「ああ、……………無茶して、済まなかった」

「なあに、生き残るには無茶も必要な時だってあるだろ？」

「……………かもね」

そう答えながら装甲板に手をかける。

「塗装は後ですかい？」

「そーだな」

オーグが少し素っ気なく答える。

そこに、

『緊急発令。未確認飛行物体が単機でこちらに接近しています。パイロットは自機にて待機を』

という艦内放送が流れる。副艦長の声か。相変わらず抑揚がない。

「オイオイ、まだ装甲板も碌に付けてねえぞ？」

オーグが参った風に言う。

「アサルトの出撃は無理だなア」

ビリーは頭をポリポリかきながら言う。

そこに、発令を受けてか、2号機のパイロット、ナリアが駆け付けた。

「…………アテナは」

「いつでも出れるぜ。サブジェネレーターパックの充電もバッチリしたぜイ」

「……………すまない」

「なんの。仕事だかな」

ビリーは白い歯を見せながらニカッと笑う。

「……」

ナリアは（なぜか）俺をしばし見た後に2号機に向かった。彼女のそのクールな目の中にもどこか温かさがあった。

その頃、放送後の507号室では。

「ぐー……すー……ぐー……すー……」

レイジとユキミの寝息の輪唱が奏でられていた。レイジは口を半ば開けながら股を開いて寝ているが、ユキミはそれを覆い被せるように仰向けに寝ていた。

「ぐー……すー……ぐー……すー……」

廊下では慌ただしくかつ殺伐と兵士が走り回っているが、この507号室は、閉まっているカーテンの境目から暖かい日の光がもれでいて、ゆったりとしていて優しい時間が流れている。

そんなことを余所に、ブリッジでは。

「確認急いで！」

艦長のアカネが声を張り上げて指示する。

「はい、……！ これは！」

「どづしたの？」

アカネは聞き返す。

「型式番号『FDG - 205』、5号機です！」

「なんですって!?!」

アカネが露骨に驚いている脇でルイが、

「……ではパイロットに指示を出します」と手元の機器を操作するルイがいた。

：アジエスター中尉の緊急発令でシャドーに乗り込んだ俺ガルマン。なんなんだろうと思いつつシャドーのシステムを起動させる。

「よおし」

ヴン、と240°モニターが付き、正面にはデッキ内の景色が見える。因みに、シャドーをはじめとした連邦ガンダムのコクピットは共通規格の240°モニターである。そのモニターの小画面に、アジエスター中尉の顔が出る。

『アラーク中尉、今回は変則的な任務になります』



「変則的？」

『今回のターゲットはたった一機です。その機体も、我々連邦の5号機です』

「5号機！？ 強奪されたはずじゃ……」

『単機ということは、少なくとも軍属の組織にはいないでしょう』

「偵察つてのも有り得るが？」

『偵察にそんなに目立つ機体を使うのは得策ではありません』

「そっか……」

ガルマンはあてが外れたような顔をしながら頭をかく。

『とにかく、今回の第一目標はターゲットの撃破ではありません。元々は我々の軍の機体であるので』

「……じゃあ、牽制するだけか？」

『できれば最初から奪取、或いは捕獲したいところですが、現実問題苦しいでしょう。場合によっては、機密保持の為にターゲットの撃破もやむを得ませんが、基本は相手の体力を奪い、疲労したところで機体ごと奪取することをねらいます』

「やむを得ず撃破する場合は……？」

『ほぼありえませんが、向こうがUUの兵士だとすれば、それ以上機密が漏れてしまわないように撃破して構いません。あとは状況に応じてこちらが指示を出します』

「わかった」

『今回、まずはじめにあなたが4号機でステルスアーマーを使って潜水し、奇襲を仕掛けます。万が一失敗した場合は1号機から3号機まで後から出撃させます』

「え、てことは俺一人で……？」

『……できませんか？』

「いや、やる」

『では、お願いします』

ヴン、とアジェスター中尉の映っている小画面が消えた。

「……奇襲か。あんまり好きじゃねえな」

だが、機体をステルス化して奇襲をかけ相手の意憑を突くという意味では、この機体が最適だというのは一目瞭然。

「……ま、やるしかねえか」

はあ……乗り換えてえ。

そう思いながらもたもたしていたら、

「ガルマン、早くこっちに来てくれよ！」

というビリーの声が聞こえた。いけね。

「ああ、スマン」

そそくさとシャドーを歩ませる。

「……さて、これを使うのは初めてだな」

ガルマンはキーを打ち込み、やがて機体はステルス化し、真っ黒のボディを横切る赤や黄色のラインが黒くなる。それにビリーが気付く。

「ガルマン、ステルスアーマー使ったのか？」

「ああ。バーニアを使うと感づかれちゃう。今回はカタパルトは使わん」

「わかった。んじゃあハッチ開けるぞオ」

「コオオウン……とハッチが開く。シャドーが明るみに出てゆく。

「シャドー、出るぞ」

シャドーはハッチからよっこらしよっというような仕草で海に着水。

「さあ、待ってるよ……」

鋭い目付きになり、海中の中をおもむろにシャドーを進ませる。

：拙者か？ この5号機に搭乗している春雨装水はるあめまきずいにごさる。近頃また戦が始まったとかで殺気立っておりが、どうしてこの地球を汚すことを厭わずに戦ができればよいか。拙者はそれにいても立ってもいられなくなった故、この5号機を強奪したのだ。

「あれが巷で噂されている戦艦か」

我が5号機は肉眼で戦艦を確認できるところまでに来ていた。

「……この春雨装水が薙ぎ払ってくれる！」

と長砲身の太筒を構えさせる。照準を戦艦に向ける。

その時、

「……ん!?」

何か気配を感じた。

「これは……！」

正体を推定するや否や太筒を水面に向き直させ、発射。

「ち、気付かれたか！」

すると、黒きガンダムががばあっと水しぶきを上げながら出てきた。

「主が正体か」

「ああ。つか何で気付いたんだ？ レーダーには反応してない筈だが？」

「ふん、レーダーなどという陳腐なものに頼っているからこのようなことになるのだ」

「陳腐だと？」

頭に血が昇った口調だ。どうやらこの黒きガンダムには若造が乗っているようだ。

「……まあそれはいいとして、……言いづらいんだが、俺達の同志になってくれないか？」

「同志？ ふん、下らぬ。あのような上辺のみの平和を掲げる主らの同志になるなど、笑わせてくれる」

「何だと!？」

「連邦は相変わらずよ。第一次大戦の火種は連邦が作ったではないか」

「てめえ……!」

「建前だけの和平交渉をUUにしたところで、暴走した軍閥を止められなかった連邦政府と和平なぞ結べるわけがなかるう」

「今回は違う！」

「そう言い切れるのか？」

「ええい、煩いんだよ！」

と黒きガンダムは両端に長めの光の刃を持った槍状の近接用武器を振るいながら呐喊してきた。

「ふ、若いの」

こちらも刀を取り出し、居合の構えをした。

「でええあ！」

黒きガンダムが斬りかかってきた。

「…………ふ、甘いわ！」

5号機は目にも留まらぬ速さでシャドーと擦れ違い、擦れ違い様にシャドーのライトアームを斬り落とした。複合兵装ランスもろとも海に落ちた。

「ッ…………何だ、こいつ…………？」

ガルマンもあまりの一瞬の出来事にうろたえていた。

「次はお主の左腕を頂く！」

「させるか！」

シャドーは今度は予備の複合兵装ランスを取り出し、それを構えた。

「また同じ槍を！」

春雨装水は少し呆れが混じった風に言いながら呐喊し、一気にほぼ零距离にまで間合いを詰め、斬りかかる。

するとシャドーは、5号機が実体剣を振りかざすその動作をするや否や、ランスを風車のようにぐるぐる回し始めた。

「!?!」

5号機は回避が間に合わず、実体剣の刃は折れ、そしてその勢いでレフトアームもランスのビームの刃で若干焼け爛れた。

5号機はバックブーストし、体勢を立て直す。

「ぬう、少しはできるではないか」

装水はニヒルに笑い、お待ちかねの如く腰部から中程度の大きさの剣を抜いた。抜いて構えると、剣の刃の片側にビームが走る。

「……対艦刀？ にしちゃ小さいな」

ガルマンは以前自分が使った対艦刀と照らし合わせたが、合点がいかなかった。

「……さあ、右手首を失い半死人となったその機体でどこまで戦えるか、見せてみよ！」

5号機はそれを構え、変則的な軌道でシャドーに呐喊。

「く、速い！ 捉えきれない！」

「隙あり！」

5号機は左斜め下からシャドーを襲う。

「しまった！ く！」

シャドーはランスを構えるが、その必要はなかった。

シャドーと5号機との間に赤い火線が横切った。この火線こそ、

「2号機……アテナ！」

ガルマンは火線の通ってきた軌跡を見、その果てにはランチャーを構えたアテナと、猛スピードでこちらに向かってくる航行モードのテトラがいた。テトラの翼部からは数発のミサイルが飛んでいた。

「く、多勢に無勢か、無念」

5号機がさっさと撤退しようとしたところに、

「おいお前！ UUの奴か？」

とガルマンが引き止める。

「ふん、拙者は軍などという下らぬ賊に清き我が身は置かぬ」



「何だと!？」

「ふ、また会おう」

「待て！」

と逃走してゆく5号機をシャドーが追うが、5号機にクラッカー弾を数発撒かれ、それがバババン! と弾け足止めされた。

「くそう、取り逃がした……」

ガルマンはモニターをガン、と叩く。  
遅れて到着したテトラ、アテナも呆然と立ち尽くすだけだった。

「……アサルトは？」

ガルマンが誰ともなく話し掛ける。

「……まだ修理が終わってないようだ」

ナリアがシグナスに振り返りながら言う。

「そうか……帰還するぞ」

5号機の機影が見えなくなった今、退却するほかなかった。シャドーに続き、アテナとMS形態のテトラが撤退する。

海は相変わらず日の光できらきら光っていた。

そのころ、507号室では。

「……んあ……なんでこんななってるの？」

レイジが目覚めますが、自分の胸の上に覆いかぶさっているかのように寝ている少女に素朴な疑問をぶつける。それもそのはず、レイジが寝たのはユキミよりも後だからである。

「てかこれ、寝相の域じゃなくね？」

何度もユキミをどけようとするが、ベッドのシーツをしっかり握っ  
つていてなかなか離れない。

「……」

レイジは仕方なくユキミをどけるのではなく、自らが上下運動してユキミの捕縛を解こうとした。膝くらいまで抜けたところで、彼女は今度はレイジの両足に巻き付くように抱き着いた。

「……てかこれ、ゼッターわざとだろ」

何度も振り払うが、全く解けない。

「……ユキミ、すまん」

レイジは不意に両手をユキミの脇腹に運ぶ。所謂攪りアタックである。

「ううんっ……」

ユキミはエロい声を出しながら捕縛を解く。

「……マジでごめん」

捕縛から解放されたレイジは、シャワールームに向かった。

ユキミが寝ている寢室のカーテンの隙間からは、相変わらず優しい光が差し込んでいた。

：シャワーを浴び終え、ローブ姿で寢室に戻ると、

「あ、レイジさんおはよ！」

とテレビを見ているユキミが明るく挨拶をしてきた。

「カーテン開けてからテレビ見なさい」

シャー、とカーテンを開け光が一気に差し込む。

「いやん、溶けちゃう」

「あんたはドラキュラかい」

と軽くツッコみ、ベッドにどかと座る。テレビを見てみると、

若い女のアナウンサーがニュースを報道していた。

『昨日の午後4時ごろ、ベルリンの工場区がUUのMS部隊によって爆撃を受けましたが、連邦ガンダム2号機が突如姿を現し、さらには1号機も駆け付けUUを撃退……』

というような内容のニュースがやっていた。ユキミはそのニュー

スを、腕胡座をかき、どっからか持ってきた煎餅をバリバリ食べながら見ていた。

……てか、

「おっさんかよ」

「違うわよ、オバサンよお」

中年は否定しないんだ。

「ねえそういえばさ、何でこんなところに？」

ユキミは大きい碧い瞳をこちらに向け、首を傾げていた。

「……旧友に会いに」

「へえ〜。どんな人？」

「う〜ん、昔はいいやつだったけど、今はどうなってるかわかんないな」

「会ってみてからの楽しみ！」

「……まあ、そんなとこだな」

こんなに樂觀できる件じゃないんだが……。  
やっぱりこの子は連れていけない方がよかったかなあ。

「レイジさん、なんかつまめるモノある？」

いつの間に向こうにある冷蔵庫の扉を開けてしゃがんでいるユキミがいた。

「知らぁん。てか逆になんかある?」

「うっん? ……あ、ペデ グリィ・ ヤムがある!」

「何でだよ!?! 俺ら犬扱いかよ!」

「いただきます」

「食べるな!」

どうもユキミと一緒にいるとたいてい愉快なことしか起きない。でもそれと同時に鬱にならなくて助かっている。

ユキミは俺の制止の言葉に膨れっ面になり、仕方なく牛乳を飲む。……てかそれがあるなら最初にそれ言いなよ!

「そんな507号室だった。」

Unit 014：清（後書き）

レイジ「えーでは、第三回チキチキ雑談大会」

ガルマン「いや違うでしょ明らかに！ 何だよチキチキって！」

ユキミ「次回予告です！ レイジさんが（中略）さあまた来週もサ  
ービスサービスう」

ガルマン「一番大事などこ省いて一番どうでもいいとこにいらんパ  
ロディ挿入した！」

ユキミ「うえええ〜ん！ レイジさ〜ん、ムツツリスケベさんがい  
じめる〜」

ガルマン「またそのパターンかよ！」

ユキミ「……グズン、気を取り直してお知らせです！ 本編はタグ  
『シリアス崩壊注意』で検索するとヒットするようになりました！  
是非試してみてくださいね」

ガルマン「んな不名誉なタグで検索されたかないわ！」

ユキミ「あたし一生懸命やってるのに〜」

ガルマン「もういろいろめんどくさいなこの子は！」

レイジ「てなわけで」

ユキミ「次回も……」

ガルマン（……お、これは俺が言う番か？）

ガルマン「新戦記IDガンダム……」

レイジ「は？ 何言ってるの？」

ユキミ「あたしが言おうとしたのに！」

レイジ「何でしゃばってんだし」

ガルマン「……いい加減泣かせてくれないか？」

レイジ「はいわかりました」

ガルマン「何でそんなに爽やかなんだよ！」

……

庵瑠璃（……オチが思いつかねえ）

ガルマン「知らねーよ！ 私情丸出しにしてんじゃねーよ！」

ぎいやあああああ……



## Unit 015: 怒りの光剣(前書き)

今回は後書きのおまけは無いです。

誤字脱字等ありましたらご一報お願いします。

## Unit 015：怒りの光剣

：ヒイラギ君が鞆を置いていなくなつて幾日か経つた。ヒイラギ君の鞆を未だ預かつている私もといカナリー。

私の部屋の隅にある事実上放置された鞆を見ながら腕組みする。

「……いや、ホントにどーすんだろ」

頭をかいても答えは出なかつた。ここ幾日、ヒイラギ君の鞆は私の家と学校を往復していたのだ。けど終いには、

「いちいち持つてくのも持つて帰るのもめんどくさいなあ」

今日持つてはいくけど持ち帰らないで学校に置いてい」。

「行つてきまゝす」

「いつてらっしゃい」

お姉ちゃんに迎えられながら家を出、学校に向かうべくアパートの階段を下りる。一階分下りるだけで1Fなので割と楽なのだが、荷物は単純計算で常人の二倍は持っていることになり、結構辛い。

そんなわけでいつも利用しているバス停に到着。もう既に7、8人くらいの人達が並んでいた。いつもは1人か2人くらいしかいないのにそれを明らかに上回っている。

(……何かあったのかな?)

何の気無しに二人前の荷物を持ちながら列の最後尾につく。

「バス遅れてるんですって」

前に並んでいたおばさんが親切に教えてくれた。

「渋滞かなんかですかね」

「さあねえ……困ったわ、今日パートの面接なのに……」

おばさんの私情まで知ってしまった。……悪いけど、全くもってどうでもいい。

「お嬢さんは学校?」

「はい」

「そう、お勉強頑張るのよ」

「あ、ありがとうございます」

割と親しみやすそうなおばさんだと感じ、ニコリと笑ってみせた。あんまり響きはよくないけど、やっぱり愛想って大事だね。

そんなモノローグをひたすら続ける私だった。

一方シグヌスの507号室では。

「レイジさん、裂きイカあるよ」

「なんで酒のつまみがあんだよ」

「あと柿ピーも！」

「完全に『犬飼ってる酒好きなオツサン』型の部屋じゃねーか」

「いただきまーす！」

「イカ好きなの？」

「イカ臭いけどね」

「まんまやん」

：ここで俺はよかめ方へと言葉を交換してしまっていたが、ここは流すとした。

「じゃあ俺は柿ピーを」と

柿ピーの入った袋を取ろうとした時、ふと思った。

「……ちゃんとした朝飯食わないと」

「どこで食べるのさー」

ユキミは裂きイカを頬張りながら声をあげる。

「外にカフェテリアとかあんのかな？」

「じゃお散歩しよー！」

「一応ここ軍属だけどね」

「全く、堅苦しいよね！ まあレイジさんはお友達に会うために利用してるだけだけどね」

「あんまデカイ声で言うなよ」

とユキミは悪戯そうな顔をした口を片手で軽く覆った。

「俺の立つ瀬が無くなっちまうからな」

「行こ！」

「ああ」

俺はユキミに手を引かれながら部屋を出た。

カフェテリアっぽいところに着いた俺ら。見ると、（一部を除き）ゆったりとした雰囲気です。食事を摂っている軍服を纏った人達がいた。

「レイジさん何食べたあい？」

「てか俺ら食べるの？俺らバリバリ私服だし」

ユキミは水玉模様のパジャマと一緒に買ったという黄色のＴシャツと濃紺のジーパン。俺はほぼアイデンティティと化している水色のＴシャツとベージュの（長）綿パン。

「レイジさんちゃんとお洗濯してる？」

「同じの何着もあるから」

「納得！」

と他愛のないことをカフェテリアで交わす中、

「ふう〜ん、随分と可愛いお嬢ちゃんもいるじゃないか〜」

一軍人がのそのそと立ち上がり、ユキミに立ち寄る。

「やあヘンタイ！」

ユキミはそそくさと俺の後ろに隠れる。

「ああ？ やんのか野郎！？」

酔っ払ってるのか、酒の臭いがプンプンした。

「そごどけえよ！ 俺アテメエと違って正規軍人だ！ さっさと諦めて嬢ちゃん渡しな！」

真っ赤な顔で殴り掛かってくるヘンタイオヤジ。

「やなこつた」

身をひらりとかわし、殴って来たその勢いを更につけさせるように床に叩きつけた。

「！？」

オヤジは顔面でモップクリーニングした。

「てえんめえ！」

「来ないで！」

すると突如ユキミが前に出たかと思ったら、オヤジの（男の）急所を、

キーン！

とサマーソルトした。

「…………ツ！…………」

オヤジは凄い形相をしながら内股になり、股間を押さえる。やがて悶え苦しんだ拳句、泡を吹いて昇天した。

「これぞ痴漢撃退法？ね！」

「? ? ともあるのかよ」

という明らかに的外れなツッコミをし、俺らはその場を去った。

ユキミの制裁に関しては一切ツッコまなかった。

：依然として来ないバス。私ことカナリーは暇だったので、テキトーに自分の鞆の中に秘めてあったマンガを読む。

(エー 死んじゃったんだよね……)

一人で勝手に感傷的になりながらカバーのかかったコミックスを読んでいる私だった。

：ユキミのキン蹴り事変(?)のあと、艦長さんにメシのことを訊いたら、

「好きに食べていいわよ」  
とのこと。

あのキン蹴りされたオヤジは他の兵士が引きずりながらオヤジの自室に運んでくれたそうだ。

カフェテリアに戻り、飯をカウンターで貰い、そこにはビリーとかがいた。

「おおレイジ！ それにお嬢さん、おはよー！」

「ああオハヨ」

「おはようございますー！」

ユキミは今度はいつものように明るく振る舞った。俺らは飯の乗っかってるお盆をテーブルに置いた。俺らは飯の乗っかってるお盆をテーブルに置いた。ビリーが訊いてきた。

「……今朝、何があったの？」

「は？ 何が？」

「……いや、やっぱり何でもない」

「？」

俺とユキミの頭上に同時にはてなが浮かぶ。その動作にビリーが言う。

「君達シンクロ率高いね」

「俺ア カ嫌いだな」

「ええ、そう？」

「あたしカラ がいい！」

「あいつゲイじゃん」

などと相変わらず中のいい俺らだった。

そこに、一人の見慣れない男が来た。ビリーと同じ作業服を着ている黒髪の男だ。



「オーグ！ お前も来たのか」

オーグと呼ばれた男はビリーの隣に座る。

「……こいつか、コロナのパイロットは」

オーグは俺を指さしながらビリーに向く。こら、人を指指さない。

「ん、そつだよ」

「……お前、ただ者じゃねえな？」

オーグが俺に向かって真剣な顔で言ってきた。

「……んあ？」

何のことがよく分からなかったのでテキトーな返事をした。

「……目でわかる」

オーグは俺の様子を伺うように話しているが、断定的な言い方を貫いた。

「……まさか、お前……」

俺は一瞬タメて、

「俺が鷹の 団だと何故分かった？」

「いやそれは知らねえよ！ てかそつなんだ」

こいつ、冗談がきくのか。ちょっと安心した。

「そうじゃなくて、おm」

とオーグが言いかけたところに警報が鳴る。

『緊急発令！ 総員、第一戦闘配備！』

「……………戦いが始まるの？」

ユキミが哀しげな目を俺に向ける。

「みてえだな」

我ながら珍しく真剣な顔になる。

(何だか胸騒ぎがするな……………)

そんな気がしていた。

俺らは自室に戻り、俺はパイロットスーツに着替える。

「どうしてレイジさんも出るの？」

「出とかなないと余計怪しまれるでしょ。ただでさえ胡散臭がられてんだからさ」

「そうだけど……………」

ユキミは唇を尖らせて俯いた。

「大丈夫だ、んなんでやられるタマじゃねえよ、俺あ」

「そう？」

「ああ」

俺は生き残らなきゃ。あいつに会うために。そして何よりも、この子のために……。

「ビリー、それにオーグ、ユキミを頼む」

俺はデッキにあるコロナのコクピットの中にいた。

「あいよ」

「……」

ビリーとオーグはそう俺を見送った。

『ブリュッセル市内に展開中の敵部隊を撃破して下さい。但し、民間人の避難はまだなので注意して戦闘して下さい』  
「ブリュッセルって……」

歴史上、何度も襲撃を受けたところ。そこに連邦のヨーロッパ地区の大きな軍事工場がある。SEEDでいうとオノゴロ島のようなところだ。

ID184年4月7日、赤ん坊の俺も『ブリュッセル市街襲撃事件』に居合わせていたらしいが奇跡的に無傷で生きていたらしい。大事なものを失ったかわりに……。

そしてそこは、エリシオ学園のあるところじゃないか……！

「よりによって、厄介なところに……!」

操縦桿を握りしめる。

アサルトがカタパルトデッキに足を乗せる。

「トシリア・ネイビー、アサルト、出ます!」

火花を散らしながらアサルトが空へ投げ出される。

「……ナリア・オーエン、2号機、出る」

「ヴァイタル、3号機、発進する」

「ガルマン・アラク、シャドー、出るぞ!」

残りの連邦製ガンダムもそれに続く。だが、コロナはそれに続けない。なぜなら……

『コロナの足はカタパルトのサイズに合わないのです、申し訳ありませんがカタパルト無しでの出撃をお願いします』

「あっそう」

オペレーターの機内通信に無機質に答えるレイジ。さほど気にしていないようだ。

コロナを出口まで歩ませ、発進体勢をとる。

「……んじゃ、行くか」

コロナの羽根が一気に展開し、初速は羽根いっぱいバーニアを

吹かす。

：今回のコロナの仕事は恐らく後方支援。味方はガンダムがあと四機いるし、キャノンに必要ないだろうと踏んで羽根を使っているのだ。コロナは羽根を使えば相変わらず小回りこそ利かないものの意外に速い。

その速さをもつてしてか、先頭四機集団に追い付いた。

「レイジ、一緒に戦ってくれるのか？」

「……一応、雇われ軍人って方向で」

「傭兵か」

「欧米か！」

「うん、やめよう。そういう単発ネタ」

ガルマンが珍しく冷めたツツコミをする。なんか面白くない。嫌な胸騒ぎを掻き消す為のネタだったんだが、まあしょうがないか。

：某人気海賊マンガを読んでいたら、ようやくバスがきた。どうやら料金投入口の機械トラブルで遅れたと車内アナウンスが告げた。

「勘弁してくださいよ、機械のトラブルなんて。無視してもよかったですんじゃないの？」

と抗議している乗客はさっきのおばさん。いや、しょうがないでしよ。

腕時計を見たら、もう100%遅刻する時間だった。

(ま、一時間目美術だからいつか)

メガネを外し、バスの中でまどろんでいた。すると、私の目には不自然な光が空に見えた。それはまるで、

「……戦争……!？」

私の顔は一気に青ざめ、窓に手をやった。他の人も何人が気付いたらしく、やじ馬のように窓から覗いている人もいた。やがて、遠くで爆風が見えた。しかもその方向は、バスの進行方向の果て。

「ウチの学校……!？」

居ても立ってもいられなくなったが、かえってバスから降りた方が危険な感じがしたので、恐れおののいているが何もできないというフラストレーションに近い感情が煮えたぎっていた。ついにバスの近くにも流れ弾が飛んできた。爆風によるバスの揺れが、私の不安を一層募らせる。

「怖い……」

思わず声をあげてしまったが、周囲には恐怖にパニックになっている人もいたので私は目立っていないほうだ。

「また戦争が始まるの……?」

そう言った後、私は激しい胸騒ぎがした。

(……なんだろう、さっきよりも胸がざわざわする……)

心中で呟いた次の瞬間、大きな爆風が向こう側に見えた。バスも少なからず揺れる。

爆撃が激しくなり、バスも止まり、乗客を避難させる運転手。私も急いでバスを降り、さっきの爆風の爆心地を見た刹那、私の脳みそは空っぽになった。

「私の……学校が……」

そこには無残に焼き払われた跡地と化したエリシオ学園があった。

「……！？ みんな！」

我に帰り、二人分の荷物を辛うじて残っている校門の側に置き、敷地内に入るが、焼け焦げた臭いが私の行く手を阻む。

「ッ、臭！」

目をつぶり、手で吹き払おうとするが、当然の如く焼け石に水。思わず下を向くと、足元には……

「サラ！」

各所に血が滲んでいるサラが俯せに倒れていた。

「何があったの！？ サラ……！」

私は悲鳴をあげるように訊く。

「……ッ、カナリー、あんた、悪運強いわね……」

喋り方は息まじりだったが、表情は余裕だった。

「サラ……」

「急に爆発が起きたの……美術室で先生待ってたらこのザマよ……でも私は大丈夫。ガラスの破片が背中と腕を掠っただけだから……」

「他のみんなは!？」

「わからない……」

よっ、と立ち上がろうとするサラだが、

「立つちゃダメ! 傷口が開いちゃう!」

サラに肩を貸してあげる。

「……あんた、優しいのね。きつといい母ちゃんになるよ」

だんだんサラが元気を取り戻しているのがわかった。元気でなによりだった。

「救急車呼ばなきゃ……」

ケータイを取り出し、急いで『119』と入力し、耳にあてる。

…敵部隊とはちあわせた俺らガンダムチーム。しかし、敵は見る



限り明らかポーンではない。

「新型か……？」

ガルマンが思わず声を漏らす。

「兵力増強か……」

2号機のオーエン伍長が静かに呟く。

「だが……様子を見ている暇はない。隊列を組むぞ！」

とヴァイタル少佐の掛け声で

前

シャドー

アサルト                    テトラ

アテナ                      コロナ

後

というような隊列を勝手に組み始めた。……てゆーか、

「ナニコレ？」

「19世紀末最強と言われたバルチック艦隊の隊列だ」  
ガルマンが西暦の話を持ってくる。

「縦一列で来られたら？」

「お前結構マイナーなことまで知ってんな」

「無駄話は後にしろ」

とヴァイタル少佐にストップをかけられる。

「すみません」

「ういーす」

ガルマンと俺は前に向き直るのだった。

でも、でもだ。俺の胸騒ぎは消えない。消えないままコロナの掌部ビーム砲の弾幕を張る。

「……」

自分ではいつも通り撃っているつもりだが、命中率はいつもよりいくらか低い気がする。

その中で一機、サーベルを振りかざし、こちらの隊列に接近してくる機体があった。

「邪魔だ！」

アサルトが飛び出し、抜刀する。

「ネイビー！勝手に前が出るな！」

ガルマンが制止しようとするが、アサルトは新型と剣を交えてしまった。

「ッ、あのバカ……！」

シャドーは余儀なく隊列を乱し、複合兵装ランスを取り出し、ビ

ームの刃を出してアサルと剣を交えている新型に突撃。

「だあああああ!!」

ランスは新型を串刺しにし、シャドーは直ぐさまその場を離れた。

「何やってんだ! 爆発に巻き込まれるぞ!」

ぼけっとしているアサルを急かすガルマン。アサルはそれを聞くや、素直に離れる。

新型は爆散した。

「隊列は乱すな! わかったな!?!」

「……………」

トシリアは何も答えない。

「…………ツ! なんとか言えよ!」

「仲間割れしている場合じゃないだろう!」

ヴェルターさんがガルマンを諫める。

「ツ、……………すみません!」

渋々謝るガルマン。今の流れ、ガルマンらしいって言えばガルマンらしいが。

新型は撤退した。そりゃそうだ。作りたてであろう新型をガンダムのせいで犬死にさせるようなもんだからな。

でも、何故か俺の胸騒ぎだけは撤退しなかった。  
そしてまたも揉め事が。

「ネイビー！ きちんと軍務をこなしてもらわなくては困る！」

「……ありがとうございます」

「ああ？」

「あの時、敵を撃破してくれてありがとうございます」

「ッ、俺はそんなこと言ってんじゃねんだよ！」

シャドーがアサルトを殴る。ありゃ。

「痛ッ……」

トシリアが小さく叫ぶ。

「……後で覚えとけ」

シャドーは直ぐさまシグヌスに帰艦した。テトラは変形してシャドーに続いた。アテナもアサルトを見、

「遅れるぞ」

ナリアがトシリアに声をかけ、アテナも続いた。

「……」

アサルトとコロナのみが残った。

「……レイジは、帰艦しないのか？」

トシリアがそわそわして素直に帰艦する気にならない俺に問う。

「何だか胸騒ぎがしてな、なんか帰る気にならん」

「胸騒ぎ？」

「ああ」

と答えた矢先、

「おいトシリア、あれは何だ!？」

「え、あッ……! あれは……!？」

見ると、ブリュツセルの港の方に向かって行く軍隊が見えた。

「あれポーンじゃないのか!？」

「俺らは、陽動されたのか……!」

「陽動？」

トシリアが聞き返す。

「新型が俺らガンダムを引き付けて……なんて言ってる暇はねえ! 行くぞトシリア!」

畳まれていたコロナの羽根を広げ、フルブーストする。

「ぐう!」

発進時、ものすごいGがかかり、パイロットスーツを着てなかったら内臓の1つは潰れてたかもしれない。

「レイジ! 待て!」

アサルトもレイジの乗るコロナを追いかけた。

その様子を遠目で見てたナリアは、

「敵の大群か……帰艦するわけにはいかんな」

アテナは方向転換し、港の方へ急がせた。

シャドーとテトラがデッキに着艦。

「お疲れ、ガルマン、少佐」

ユキミやオーグと一緒にいるビリーが迎えた。

「あれ、あとの三機は？」

ビリーがコクピットハッチから出てきたガルマンに問う。

「じきに来るだろ」

多少素っ気なく答えるガルマン。ビリーは外を見てみるがしかし、あと三機の機影は全く見えない。

「ガルマン、ホントに？」

「何言ってるんだよ、そくに決まってるだろ」

ガルマンは一瞬頭ごなしに答えるが、ビリーが本気で怪訝そうに外を見ているように、

「何、ついてきてないのか？」

口調を穏やかにして外を見てみるガルマン。確かに、ついてきている機体は一つたりともなかった。

「おいおい、何やってんだよあいつら……」

頭を掻きむしるガルマン。

「ネイビーのみならず、レイジやオーエン伍長まで……」

再びハッチの中に入るガルマン。

「おいガルマン！ また出んのかよ！？」

「当たり前だ！」

シャドーはツインアイを緑に光らせ、カタパルトも使わずに再出撃。

「……まったく、手のかかる奴ばかりだ」

ヴェルターは呆れ果て、自室に戻っていった。

海上を高速飛行中のコロナ。

：港が近くなった。

「何とかしねえと……」

コロナのブーストを切り、減速させる。

「……状況はどうなってんだ？」

と様子を伺おうとした時、内陸の方から爆発が見えた。  
よく見ると、ここはバス通りだ。

「……おい、あれ学校じゃねえのか……？」

そう推測した瞬間、俺の胸騒ぎが遂に弾けた。

「あいつら……」

直ぐさま向かおうとするが、コロナに乗ったままじゃ更に損害を  
与えるだけだと否定し、敵機を捜す。

「索敵……あっちか」

港の方に敵部隊の反応があった。

「ちい、よくも……！」

閉じた羽根でコロナのバーニアを吹かす。  
敵部隊が射程距離になったので掌部ビーム砲を構える。

「そこだ」



命中率が低かった今日。だが、悪い意味で胸騒ぎが消えた今は正確に敵機のコアをぶち抜いた。ポーンは爆散した。隣りにいたポーンたちは直ぐさまこちらに向く。

「何故民間人を平気で殺せる！」

コロナはアタッチトビームサーベルを長めに出し、数機に突っ込む。

「たあああ！」

数機いっぺんに横一文字斬りした。数機は腹部から真っ二つに斬れ、爆散。

コロナは爆風を背に更に索敵する。

「……くそ、思ったより多いな」

舌打ちを打つ。

羽根を開かずにバーニアを吹かし、空中に展開している敵部隊に近づく。

「……………」

頭部バルカンが火を吹く。たかがバルカン、されどバルカン。ポーンのメインカメラ目掛けてバルカンを撃った。

「出てきたか、コロナ！」

こちらに気付き、体勢を整えていた。

「ふん、そんなもの！」

ポーンのパイロットはたかがバルカンと思っていたのだろう。コロナのバルカンはポーンのマインカメラを砕いた。

「!? マインカメラが！」

「それみろ」

コロナは両手のサーベルを出し、X字にポーンの手足を斬った。

「あああ！」

ポーンは不様に海に落ちた。

「貴様よくも！」

もう十機のポーンが一気にコロナに襲い掛かる。

「ええい、うじゃうじゃと」

コロナはサーベルを引っ込め、掌部のビーム砲を連射。二、三機はこれで撃ち落とせた。

「あと七機……」

レイジはぎゅっと操縦桿を握る。すると、ポーンの一パイロットが、

「ええい、生意気なんだよ！ ニュータイプになり損ないの劣等動

物がガンダムなど!」

怒りを込めて怒鳴るUU兵。それと共にその機体がヒートアックスを振りかざし、突撃してきた。

「うつせーな。だからテメエらは嫌いだ。人種云々でゴタゴタと!」

コロナは右のビームシールドを展開し、そのまま特攻。ヒートアックスとビームシールドが軋み合い、光の飛沫が散る。が、

「……………」

コロナはシールドで力任せにポーンを吹っ飛ばし、飛び蹴りをお見舞いした。

「ぐう……………」

ポーンは受け身を取るが、受け身を取った隙をコロナは見逃さず、ビーム砲をポーンに直撃させた。

「な、なんだとおおおお!!???」

ポーンが爆散。

「小隊長が……………!?!?」

残りの六機のうちの二機のパイロットが愕然とする。

(……………あんなチンケな奴が小隊長? UUも終わったな)

レイジはそう呟きながら残りの六機にコロナのビーム砲を向ける。

「まだまだ！ 小隊長がいなくても俺らは戦うんだ！」

（確かにあんな小隊長は嫌だよな）

レイジは勝手にそう解釈し、ビーム砲を撃ち、牽制する。

「6対1だ！ いくらガンダムとはいえフォーメーションを組めば勝機はある！」

（めんどくせーマネしてくれんじゃねーの、ったく）

割と余裕を保っているレイジは、戦場慣れしているが故なのだろう。

（さて、どんなフォーメーションを組んでくる）

と心中で言いかけたところに、一本のビームサーベルが飛んできた。刃はピンク。

「……アサルトか？」

飛んできた方向を見ると、予想通りアサルトが槍投げのポーズをし終えた感じでした。

「遅くなったな、レイジ」

「トシリア、すまねえ」

「なんの」

青と白と黄のトリコロールの若干小型種のアサルトと、赤と白のツートンにスカイブルーのラインの入った大型種のコロナがずうん

と並ぶ。

「やっぱりガンダムが二機いると迫力が違う……」

「何を怯んでいる！ 今は前を向け！」

「すまん、ソロ」

ソロと呼ばれたパイロットのポーンはヒートアクセスからマシンガンに持ち帰る。

「相手が冷静になったか」

「冷静？」

「さっきまで異様に白兵戦ばかり仕掛けていた」

コロナはビーム砲、アサルトはビームライフルを構えたその時、赤いビームがポーンの小队を横切った。

「ぐああああ！」

数機が赤いビームに塵にされた。

「……アテナも来たのか？」

アサルトを赤ビーム発射源に向けるトシリア。

「みてーだな」

レイジが無機質に答える。

もう一発赤ビームが飛んでくる。

「ぐああああ……！」

二機残してポーンが消し飛んでしまった。

「まったく、派手にやってくれろ」

レイジが半ば呆れた風と言う。

そこに、ソロという奴が、

「貴様ら！」

特攻を仕掛けてこようとしていたが、

「ダメよ！ 今は退くのよ」

女の声が聞こえる。その女の機体だろうか、ソロの機体を羽交い締めにする。

「ぐう……。……。仕方ない。アン、行こうか」

二機は撤退した。

その二機が撤退するとほぼ同時に、他の場所からもポーンがたくさん撤退していくのが見えた。

「……。俺野暮用あるからここに残るわ」

「野暮用？ こんな所に？」

「ああ」

「……。わかった」

アサルトを帰し、コロナは内陸へと向かった。

鉛の空を見ると、UUのMSが多数撤退していくのが見えた。今私は、(元)保健室に残っていた消毒液でサラの傷口を消毒している。

「あたっ！」

傷口がしみるのか、サラが小さく叫ぶ。

私の周りでも手当てをする人される人が多くいた。

「UU、撤退したみたいだね」

サラが片目をつむりながら言う。……余程しめているのだろうか？

「うん」

と会話していると、救急車のサイレンの音が聞こえた。

「……お迎えが来たようね」

「お迎えなんて、縁起の悪い」

「ふ、カナリーお母さんみたいだね」

「……ごめん」

「褒め言葉だよ。気にしないで」

サラが笑う。

こちらも連られるように笑顔を返す。

とその時、救急車からたくさんの人や担架が出てきた。

「通報してくれたのはあなたですか？」

隊員が私に話しかけてくる。

「はい」

「ご協力ありがとうございました！」

隊員さんが深々とお礼を言った。

「そちらの方は、怪我人ですか？」

隊員さんはサラを指して訊いた。

「あたしは最後でいいわよ。軽傷だし」

サラはいつものラフさを全く隠さずに答えた。  
するとその脇で、

「コニイ、死んじゃいや！ コニイ！」

という声が。……え？

「今、コニイって言ったよね？」

サラが神妙に訊いてきたが、半分耳に入っていなかった。

「うそ……………そんな……………」

「カナリー……………」

そんな……………コニイが……………。



「でも、まだ死んだって決まったわけじゃないわよ」  
「そうだけど……」

そうだけど……。

：コロナを近くにしゃがませ、カモフラージュシートを被せた。

「結構焼けちまったな……」

校舎の壁がボロボロになっているエリシオ学園。黒い煙が鈍く立ちのぼっていた。

「……」

複雑な思いでエリシオ学園の（元）校門をくぐる。するとそこには、たくさんの人と救急車がいた。

「……あ、レイジ！」

聞き覚えのある声に呼ばれる俺。サラとか言う奴だっけ。あと神妙な顔をしているカナリーもいた。

「お前ら、大丈夫か？」

「あたしはなんとかね。ちょっと切っちゃったけどね」

「ヒイラギ、君……」

サラは軽快に答えるが、神妙な顔をしているだけに詰まった声で答えるカナリー。

だが、その旨は敢えて聞かずにおこつ。

「あんたも悪運が強いよ。カナリーも無傷よ」

「……」

「ん？ どうしたんだよ、レイジ」

「サラ、ちょっとお前らに話しておくべきことがある」

「え？」

「……？」

それぞれが反応する。

「俺は……コロナのパイロットだ」

いずればれることだ。言える時に言わないと後でめんどくさくなりそうだ。

「ッ！？ お前……！」

サラは言葉が詰まった。

その一方で、

「……ヒイラギ君、あなた達がいなかったら、戦争なんて起こらなかったのに……」

カナリーは自分の思いをぶつけてくる。

「なんで……なんで、戦争ってこんなに残酷なの……？」

もう今にも泣きそうな顔で訴えてくる。

「どうして……どうしてあなたが……！」

カナリーは憎しみと悲しみが混じった声で泣きしゃぐる。

「……なら、俺を殺ればいい」

「!?」

カナリーは目を見開く。

「お前のその手で、俺を殺ればいい」

レイジは脚にあるナイフをカナリーの前に投げる。

カナリーは俯いたままナイフを見つめ、やがてそれを手に取り、レイジに向ける。レイジは氷のような目をしながら微動だに動かない。

「……」

カナリーの息が荒くなる。

「はあああああ……」

カナリーは持ったまま走るが、途中でへたれて、地面に跪づいた。

「……無理だよ……人殺すなんて……無理だよ……」

カナリーは肩をひくひくさせながら泣いた。

「……人を殺すってのはそういう事だ。……お前はお前のやり方で

平和を探せばいい。人を殺す以外のやり方でな」

「……ヒイラギ、君は……？」

「……俺は兵士だ。戦うことでしか平和を見い出せない。戦いを傍観することなど、俺にはできない」

「……そんなのって……そんなのって……！」

泣き崩れているカナリーを見守りながらレイジは、

「……期待してるぜ、お前のやり方に」

レイジは先を急ぐように歩いていった。

サラがカナリーを擁し、

「……じゃあ、あいつの言った通り、あたし達のやり方で平和を探そうじゃない。人の言った通りにするのは胸糞悪イけど、……正論だし」

「サラ……」

ニツとサラが笑う。

「……ありがとう」

「なあに、手当てしてくれたのはあんたでしょ。忘れたの？」

カナリーの口元が笑い、やがて二人は声に出して笑った。

この笑顔が世界中に届くようにと……。

## Unit 016：和解への鍵

：野暮用があるとかで先に帰還することになった俺トシリア。ア  
テナと合流し、一緒に帰還する。

「  
……」

話すこともなくお互い黙り込む。

「……あの男は？」

オーエン伍長にレイジのことを訊かれた。

「野暮用があるとかで」

「……そうか」

とだけ言っただけでまた沈黙が流れる。

不思議と落ち着くこの沈黙。

……さて、帰るか。

そう思いつつコロナに掛かったカモフラージュシートを外す俺レイ

ジ。

カナリーと対峙したとき、正直俺はかなり緊張していた。予想通り彼女は刺して来なかったが、もしホントに刺して来ようとしてたら護身と力量の差を見せる為にそれなりの制裁を加えるつもりだったのだが、その心配は必要なくてよかった。

コクピットに乗り込み、コロナ機内の機械をいじる。

「SPS作動、……エネルギー充電ノープロブレム」

コロナのオレンジに輝く4対の羽根を展開。

「さあて、帰還するか」

コロナはダイナミックに展開された羽根じゅうから青白い炎を吹かす。

「……待たせてスマンな、ユキミ」

操縦桿を握りしめ、コロナを急がせる。

北海洋上を仲良く飛行中のアサルトとアテナ。

「……」  
「……」

二人は黙り込んだままだった。

トシリアは（無）意識的に女性とは距離をおきたがっているために

無理に話し掛けず、ナリアは元々おしゃべりな性ではないため無意識的に無言を保っている。

「……………」  
「……………」

この苛つく程に続く沈黙をぶち破ったのは、シャドーで追ってきたガルマンだった。

「いた、おーい！」

「……………すみません、中尉。……………」  
「ご迷惑とご心配を、おかけしました」  
「……………ああ」

ガルマンは先手を取られた気がして一瞬吃つたがてきとうな返事を返した。  
対してナリアは、

「……………淋しかったから来たのだろう」

「違う！ オメエらが心配だから来たんだよ！」

ガルマンはムキになって言う。

トシリアはそのナリアの発言に心を曇らせた。

「……………レイジはどうした？」

ガルマンが顔をキョロキョロさせながら言う。

「なんか野暮用があるとかで……………」

「ッ、どーせ奴のことだ、大した用事じゃないだろ」

ガルマンは決め付けるように言った。それにナリアは、

「人を思い込みで決め付けるのはよくない」

「お前に言われたくないわ！」

ガルマンは遂にいつものペースに戻り、場が和んだ。

「帰るぞ、海に落っこちんじゃねえぞ」

吐き捨てるように言うガルマン。

「了解」

「……了解」

シャドーが来た方向に向き直し、それにアサルトやアテナが続いた。

レイジはコロナでちょっと傾きかけた陽の下で洋上を航行していた。

「……」

目の前に広がる海に目を奪われるレイジ。太陽の光できらきら輝く海を見るその目はどこか感傷的である。コロナの操縦桿を握りつつも戦いのことなどすっかり忘れてしまっていた。



3機のガンダムがシグヌスに着艦。

「お疲れさん」

ビリーが爽やかに迎える。

「レイジさんの機体は？」

ビリーに上目遣いで問うユキミ。

「……あれ、まだ来てないな」

「……迷子になっちゃったのかな……？」

俯きながら言うユキミ。

「いや、それはないと思う……寄り道してるんじゃないかな？」

ビリーは冷汗をかいている。

「駄菓子屋さんにも行ってるの？」

「レベル低！」

歯切れのよいツツコミをかましたビリーに横槍が入る。

「野暮用があるとか言ってどっか行っちゃったぜ」

ガルマンが自分のヘルメットを脇に抱えながら言った。

「野暮用？」

ビリーが訊き返す。

「どーせ大した用事じゃねえんだろがな」

ガルマンが半ば呆れながら言う。

「……そんな、ひどい……」

ユキミが悲しく俯いた。

「……お嬢さん？」

ビリーがおどおどしながら訊く。ガルマンの方は自分の言葉に対するユキミの反応に困惑していた。

「あそこらへん……あたし達の行ってた学校があったのよ……？  
……きつと、焼かれちゃったんだわ……」

泣きそうな顔で誰ともなく訴えるユキミ。

「それを、ムツツリスケベさん、ひどい……」  
「……」

ガルマンは明らかにこの状況にそぐわない自分への呼び名に盛大にツッコみたかったが、流石に憚はばれた。

「その、すまん……」

ガルマンは謝るしかなかった。

「……まったく、ムツツリスケベの風上にも置けないわ」  
「そんな不名誉なモンの風上に置かんでいいわ！」

ガルマンは一瞬にしていつものペースに戻る。  
そこにビリーが横槍を入れる。

「やっぱりガルマンにシリアスは似合わないよ」

「それどういう意味だよ！」

「そういう意味」

「またそれかよ！」

ガルマンはシャウトを連発した。

：コロナはあと20分くらいでシグヌスに着艦できる距離だった。  
すると、

「……ん、熱源か？」

コロナのレーダーは高速接近してくる機影を捉えていた。その方向にメインカメラを向けると、

「……ガンダム？」

なんか灰色と水色のツートンカラーをした機体が接近していた。

「……なんだあいつ」

無機質な声で敵機に向き直り、ブーストを止める。

「……ッ、その機体、UUの「コロナとやらか」  
「いかにも」

何の気無しに答えてみる。

「UUよ、何故この地球を汚さんとする!」  
「は? 俺UUじゃねえし」

謎のガンダムがつかい剣を振りかざしてきたのを、左のサーベルで受け止める。

「……ほう、サウスポーか」  
「サウスポーで悪いか」  
「少々厄介だな」  
「そいつはいいことを聞いた」  
「……ッ、ぬかせ」

さらに剣とサーベルを軋ませる。光の飛沫が尚も散る。

「言っとくが俺マジでUUじゃねえかな。んな連中の仲間なんざ御免だ」

「その機体はUUのものではないのか?」  
「強奪した」

「では主は連邦か?」  
「うーん、傭兵?」

「……なにゆえ疑問形なのだ?」  
「いやあ、今俺微妙な立場なんだよねえ」

いつの間にか剣を交えながら世間話になってしまっている俺ら。

……この状況おかしくね？

「一応連邦の連中と一緒に戦ってるけど、奴らの掲げる理論はいまひとつ理解しかねてるんだよなあ」

「ならば何故奴らと戦わないのだ!？」

「まあ、とりあえず今ウザいのはヒビだし、ちょっと宇宙でやりたいことあるし」

「宇宙でやりたいこと……というと?」

「旧友に会いに……だな。この機体単独で宇宙にあがるのはあまりに無謀だし」

「古き友に……か。そのためにはあまり気乗りのしない軍に身を置いても構わぬと?」

「そーゆーことだな」

「……わかった。拙者はお主には何もするまい。だが、これだけは言わせておくれ」

謎のガンダムは交えていた剣をそつと離し、

「もしその古き友に会って落ち着いた時には……拙者と共に戦ってくれ!」

「いいよ」

「……えっ?」

「まあ、断る理由も今のところはないし」

「拙者に協力してくれるのか!？」

「いくつか条件がある」

「……条件を呑もう」

謎のガンダムのパイロットが真剣になる。

「……俺らの拠点の確保をしないとほしい。できれば地上と宇宙両

方な」

「……出来る限りはやっておう」

「それともう一つ……」

「……？」

「……死ぬなよ」

「！……ッ、それはお互い様にごぞる」

「そーだな」

「……やはり、そなたは殺すには惜しい人物よ」

「……そうか？」

と暢気な声をあげた俺を余所に、

「む、奴らが来たか!？」

「……ん、あいつらか」

「すまぬ、またの機会で」

と謎のガンダムが踵を返してどっかへ行こうとしたところを、

「……そーいえば名前訊いてなかったな」

「……おお、これは失敬。……拙者は春雨装水にごぞる」

「ハルサメ・ソウスイ……」

「漢字でごぞる」

「……その、5号機？ とやらのアドレス、登録しといたぜ」

「……かたじけ忝ない」

では、さらば、と言って5号機は行ってしまった。

あいつらが来た。

「おい、レイジ！」

開口一番にガルマンの声が聞こえた。

「何しに来たの」

「さっきまでそこに5号機がいなかったか？」

「灰色と水色の機体？」

「そうそれ」

「どっか行っちゃった」

「逃がすなよ！！」

「……何故にそんな叫ぶ？」

ガルマンは、そうか、こいつは知らないのか、的なことを小声で  
呟いたあと、

「あの5号機は、元々は我々の軍のものなんだ」

「……あいつが強奪したってこと？」

「そういうことだ」

「俺と同じじゃん」

「……そういうことだな。ホラ、帰るぞ」

「ういー」

（……なんかな……）

ガルマンはレイジの間の抜けた返事を聞くなり困ったように首  
を傾げたが、それ以上気にするのをやめてコロナを引き連れた。

所変わって、自分の部隊がほぼ壊滅したポーンに乗ったソロとア

ンはダイオギニスに着艦するところだった。

「連邦め……よくも……！」

ソロは仲間を命を奪ったコロナに怒りを露にしながら握りこぶしをわなわたとさせていた。

「ソロ……」

アンはそんなソロを案じる。

そこに、ある男が割り入る。

「だから私は言ったのだ。ガンダムは侮れないと」

「ネオン・ネイルバート隊長……」

アンがネオンの姿を確認した次の瞬間、

「あんたって人は……！」 ソロは上官であるネオンに対し拳を向けていた。

「イキがいいのは感心できるが……」

ネオンは、拳を振りかざしてくるソロの頬に鉄拳制裁を加える。ガツツという鈍い音がデツキに響く。

「隊長！」

アンが叫ぶのをネオンが制止し、

「……己が感情に任せて拳を振るうのに恥ずかしく思わんのか」



「……………!!」

ソロは頬を抑えながら倒れた体を起こし片膝をつく。

「……私を殴れば、お前の仲間たちが帰ってくるのか？」

「!?!? ……………」

「……仇を討てば、仲間たちは帰ってくるのか？」

ソロは黙りこくったまま動かない。

「私は私自身の正義を持って戦っている。貴様も己の正義を見出だすことだな」「……貴方の正義は……何なんです……?」

「正義というより……私は、コロニーを守る剣となって戦っているつもりだ」

「コロニーを守る……剣……?」

そういうことだ、とネオンは踵を返し、自室に戻って行った。

「……私は、先に戻るわ」

アンはソロの顔を覗くようにしながら肩に手を置き、彼女もまた自室に戻って行った。

「……僕は……貴方が理解できない」

どうしてそんなに冷静でいられるのか、とネオンを理解できず落ち着かない様子でデッキを出た。

その頃、ネオンが廊下で歩いていると、

「あ、隊長」

工員アリストがネオンと擦れ違った。

「おお、アリストか。こんなところで何をしている」

「隊長、何かツコイイこと言っちゃってんですかあ」

「な、何を!？」

「見ましたよ、さっきの愛の鉄拳制裁」

「『愛の』はいらん！」

「……ま、あんまり刺激させ過ぎないことっすね。……奴が反抗した上官は死亡するというジンクスがある……っっていう噂がありますよ」

「何だと？」

アリストが語調を落ち着かせて言ったのに真剣になるネオン。

「……ま、噂ですけどね。カリス・ノーティラスみたいに、ジンクスから外れてくれることを願ってますよ、隊長」

「……私は強化人間ではないぞ」

とほんのりコメディーが見え隠れしているやりとりをしている男二人だった。

その頃、エリシオ学園（跡地）では。

「じゃあね、カナリー！ グレないでね！」

「う……うん！」

カナリーは今一つ上がらないテンションを無理矢理上げて救急車で搬送されるサラを見送った。

：私には、サラしかいなくなってしまった。ヒイラギ君も、やっぱり私の理解の及ぶ範囲から遠く離れていた。

「……帰るか」

誰もいなくなった煤<sup>すす</sup>だらけの校庭から歩きだした。

バスが通っていないので、仕方なく歩きで家に帰ることになった。正直、家がちゃんと残ってるなんて確信はこれっぽっちもない。お姉ちゃんはお勤<sup>まじめ</sup>していいから大丈夫だろうけど。その時、上空に灰色と水色のボディをしたMSが通過した。

「え……また!？」

私は、途方もない恐怖感を覚えた。そのMSは、海岸通より内陸側の林に着地した。

「……?」

私を襲っていた恐怖感は若干消え去り、開いたハッチを見つめた。そこからは、灰色のロン毛をした男性が腰に刀をさしながら出てき

た。

「誰？」

思わず声をあげてしまい、その男性に気付かれてしまった。

「ひいつ!？」

私は必死にその場から逃げた。

「お主、待てい！」

古風な話し方をしながら私を追い掛けてくる。え、ちょっと、マジで？

「きゃあああああ！」

「ええい、こごうなったら……」

と男性の気配が消えた気がした。すると目の前には、あの男性がずうんと立っていた。

その後、私は何をしたか覚えていない。

シグナス発着デッキ。そこには、シャドーに連れられたコロナ

が共々着艦しているところだった。

「コロナが帰って来た！」

「うわあああああん！ レイジさあん！」

凄まじいスピードでコロナに猛進するユキミ。そしてコロナに攀じ登り始めた。

『こらユキミ、危ないでしょーが』

コロナのスピーカーからレイジの声が響く。  
レイジは仕方ないのでコロナをその場で止め、ハッチを開けた。

「んもお！ レイジさんのばかあばかあ！」

コクピットハッチに到着するなり、ユキミはレイジをポカポカ袋叩きにした。

「……すまない……心配かけたな」

よしよしと頭を撫でるレイジ。

「むう〜」

：不機嫌そうに頬つぺたを膨らますユキミ。ううむ、やっぱり俺についてかない方がよかつたんじゃないかねえか？

「ついてかなかつたら……もっと心配してるよお」

こら、勝手に読心するんじゃない。

「……部屋に戻るか」  
「うん」

コロナを適当に動かし、コロナから降り、ユキミを連れて507号室に戻った。

その様子を見ていたガルマンとビリー、オーグは。

「あの二人、仲良いな」

「ホント」

「……そーだな」

ガルマンは感心しており、ビリーはごく明るく、オーグは少し羨ましそうに言った。

「何、オーグ。羨ましいの？」

ビリーがおどけた風に訊く。

「……んまあ、少なからずな」

「お嬢さんかわいいもんね」

「……うん」

とうまく切り抜けたオーグに少しつまらない風なビリー。しかし、ターゲットは今度はガルマンに変更された。

「ガルマン、いつかはルイ副艦長とああなりたいたか思ってたんだろ？」

「えっ、そ、そんなことッ！」

明らかに赤面して当惑しているガルマン。

「凶星だ。ルイ副艦長の前にいるとおどおどしてるもんね」

「うるさい！」

「ガルマン巨乳フェチとか乙」

「……響きがキモいよな」

オーグもビリーを援護する形でガルマンを攻撃。次の瞬間、ガルマンの拳が振り上げられた。

バキッ！×2

一方、507号室。ベッドに仲良く並んで座るレイジとユキミがいた。

足をぶらーんぶらーんさせていたユキミが口を開いた。

「……何しに行ったの？ 野暮用ってなんだったの？」

「……エリシオ学園に行ってたんだ。……正確に言えば、学園跡地、にな」

「……やっぱり、焼かれちゃったのね……」

・落ち込んだ顔をするユキミ。この子にこんな顔はさせたくない。そして、無理に明るくしてる顔もな。

「……そんな落ち込んだ顔すんなよ。こっちまで落ち込んでしまっぜ」  
「……レイジさん……」

心配をかけた俺も悪い。が、ついていくと言ったからにはか弱いままじゃ困っちゃうな。

けど、元気づけるのが先決だ。

「……大丈夫だ。俺は不死身だからな」

「不死身のコーラサワー！」

「よしその意気だ」

ようやくいつものペースを取り戻したユキミ。ツッコむのは敢えてよそづ。

「……ユキミ、俺についていくと決めたからには、なるだけ落ち込まないようにな。じゃないと、これからは落ち込みっぱなしだぜ？」

「レイジさん……」

真つすぐな碧い瞳を向けてくるユキミ。

「んんなの、君らしくないぞ、ユキミ」

「……ごめんなさい、あたし、ぶりっ子してたよね！」

ユキミが馬鹿に明るく言葉を発した。さっきの不死身のコーラサワー並のテンションに戻ったみたいだが……？

「あたし、ぶりっ子だいつきらいなの！ ウジウジしてるだけで何もしない女だいつきらいなの！ だから……ぶりっ子ぶってたら、しっぺしていいから！ デコピンしていいから！ ババチョップしていいから！」

「……なあんか古いネタのオンパレードだなあ……」

と呆れ果てた俺の腹はもうペコペコだった。



「……そういえば飯食べた？」  
「心配で喉も通らなかつたわ」  
「よし、んじゃ行くか」  
「うん！」

ユキミは腕を俺の右腕に巻き付け、体重をこちらに預けてきた。でも、右腕はやめてほしいな……

「ユキミ、左側にいつてくれるか？」  
「左？ うん、いいけど……」

今一つ理解しかねているユキミは、従順にも左側にいつてくれた。

この汚らわしい右腕でこの子をも汚したくない。

この子はいつまでも綺麗でいてほしい。

あいつみたいになんて……ティアみたいになんて、なってほしくない……。

頭にたんこぶを生やしたビリーとオーグを率いるガルマンは昼飯を食べるためにカフェテリアにいた。

「武力行使とか……ホントお前軍人だよな……」  
「ホント、ないわ」  
「また殴られてえのか？」

「「すんませーん」」

ハモったビリーとオーグ。そこに、レイジ&amp;amp;ユニキミコン  
ビがやってきた。

「おお、お前らいたのか。どしたお二人さん、たんこぶでも生やし  
て」

レイジがラフに話し掛ける。

「ガルマンに殴られたんだよお」

ビリーが頭にできた火山を摩りながら訴える。

「オメエらの自業自得だろが」

ガルマンがぶっきらぼうに言った。  
それにレイジが答える。

「ああ？ どうせ副艦長のおっぱいがどうこうとかで殴ったんだろ  
？」

「なんで知ってんだよ!？」

「そーなんだ、テキトーに言ったら当てちゃったよ」

「ッ!？」

ガルマンがあからさまに赤面する。

「はぐらかせばバレなかったんじゃない？」

オーグが淡々と水を差した。

「てゆうかバカじゃね？」

ビリーが悪戯な目をする。

「寧ろ馬鹿じゃね？」

「今更じゃね？」

「オイテメエら！ いい加減にし……」

と三人に殴り掛かろうとしたところでガルマンは羽交い締めになれた。

「まあまあムツツリスケベさん、落ち着いて」

ガルマンを羽交い締めに行っているユキミが彼を宥めるが、

「そんな呼ばれ方で宥められてても余計苛つくわー！」

ガルマンがユキミに罵声を吐くが、ユキミは満更でもない様子で言葉を続ける。

「いいよね、副艦長さんのおっぱい！」

「……え？」

ガルマンがマヌケな顔をしながら硬直する。

「あたしにも分けて欲しいよ」

「い、いや、あの……」

ガルマンが完全に鎮静化した瞬間だった。振り上げた拳ももう既

に下ろしていた。

「あ、でもムツツリスケベさんがおっきいおっぱい好きなのはそれに対するフェティシズム？」

「……何だよフェティシズムって？」

「えっ！？ フェティシズムも知らないの〜！？」

ユキミの目が大きく見開かれた。

「……知らねえよ、そんなの」

「要するにあれだ。フェチの正式名称だよ」

レイジが補足する。

「……………話全く進展してねえじゃねえかよ！！！！」

ガルマンがしばらく言葉の意味を考えてから激しくツッコむ。

「何だよ今の時差」

レイジがユキミと一緒にお盆を取りながら冷たくツッコんだ。

Unit 016：和解への鍵（後書き）

レイジ「つーか久しぶりだな、このコーナー」

ユキミ「ホントにね！」

ガルマン「まあ前回はシリアスパートが多かったもんな」

レ「てなわけで、第……何回だっけ？」

ガ「そこ忘れるなよ！」

レ「つか作者もUnit：016投稿するときこのコーナー入れないで投稿しちゃったらしいしね」

ガ「知らねーよそんな私情2000%の愚痴なんか！」

ユ「てなわけで次回は……ついに、ついに！ あの劇場版銀魂が4/24から上映し……」

ガ「全然関係ねえ宣伝じゃねーか！！！」

レ「……つーわけで、」

ユ「次回もよろしくね！」

ガ（……一回でもいいからまともな次回予告やれよ……）

庵瑠璃「俺が真面目にそれをやるうとしたら、多分途中で力尽きて台本だけになるぜ」

ガ「エヴァ ゲリ ンかよ！ ていうか寧ろ小説で台本とかある意味凝ってね？」

## Unit 017: 激昂(前書き)

連載一周年記念で投稿しようとした筈が、一週間以上ずれ込んでしまいました(汗 申し訳ないツス……OTL

Unit 017：激昂

：カフェテリアにて食事を待っているユキミと俺レイジ。

「お腹ペコペコだよ」

「……んあぁ」

俺も腹減った。つか、だからカフェテリアに来ただけ。

「……」

「……」

何となく見つめ合う俺ら。結構身長差があるのでずっと見つめ合ってる。と首痛くなりそうだけど。すると突如ユキミが、

「……見つめ合うとすなおにおしゃべりできないなあい」

急に何を歌い出すのかと思ったら、超知名度の高い歌だった。でも……

「結構古いよね？」

「うん！」

清々しく満面の笑みで答えるユキミ。ホント、この子は笑顔がよく似合う。

厨房ではもう調理が終わったみたいだ。

「……作り終わったみたいだな」

「みたいだね」



トレイを受け取り、コップの水をテキトーにトレイに乗っけてビリー達の辺りに座る。するとユキミはこんなことを言い出した。

「小さい頃、最初トレイって字見た時トイレって読んでたの」

「……俺にトイレをおかずにして食べと？」

しょうもない発言にあっさりツッコんだが、ユキミ本人からの罪悪感は一切見受けられない。

「いただきます！」

「……いたあきあす」

何事もなかったかのように食事を始める俺ら。

「……いや、今の流れなんかおかしくね!？」

「は？ 何が」

激しくツッコむガルマンに冷たく返す。

「……う、いや、やっぱ、何でもない……」

何かを感じ取ったのか、それ以上ツッコむのを躊躇うガルマン。最近のガルマンは控えめな気がする。

「オイオイ、何だっつてんだよ、アラーク中尉さんよお」

「な、何でもねえよ！」

ツッコんでみると面白そうなので揶揄してみたところ、予想通りの答えが返ってきた。

「ええから話してみれよ」  
「もーうるせーな！」

焦れたように罵声を吐くガルマン。このくらいにしとくか。

「……そういえばユキミ、TSUNA Iどこで知ったの？」

「うん？ どうか！」

「……つまり、忘れたの？」

「ピンポーン！」

機嫌がいいのか、ユキミはずっと笑顔だった。人差し指を立てて俺の推測が正解であることを示してくれた。

その頃、508号室にて。ナリアが自室のデスクに立て掛けてあった黄色い雨傘を手に取り、じっと見つめていた。

(……この持ち主……あの男ではあるまい……？)

首を傾げ、脳内には茶色くウエーブのかかった髪の毛をした少年を思い浮かべていた。

「……ッ、考えすぎか」

ニヒルに笑い、雨傘を元の場所に戻し、廊下に出ようとしたところ、ドアの前でピタッと立ち止まり、

(……やはり気になる)

再び歩を進めたが、今度は目的地を505号室に変更し、部屋を出た。

ナリアが部屋を出た頃の505号室。そこにはトシリアが自室のベッドにてうなだれていた。

(……俺って……人殺しなのか……?)

最近戦績が思しくないトシリアは軽くスランプに陥っていた。

(ただの……人殺しなのか……?)

トシリアは片手で頭を抱える。

(ただの人殺しじゃあ、ユイを……家族を殺した奴らと……同じじゃないか……!)

彼は遂に頭を掻きむしった。

そこに、ドアノックが聞こえた。

「!?!」

ビクツと体を強張らせたトシリアだが、ベッドから立ち上がり、すぐにドアに向かった。

「……はい。どなたですか?」

すると、扉から、

「……ナリア・オーエン伍長だ。……時間は大丈夫か？」  
「ああ、お前か。用件は何だ？」

と言いながら素っ気なくドアを開けるトシリア。目の前には、軍服の第一ボタンを外したナリアがすつと立っていた。

「その……下らんことで申し訳ないが、紙パツクの紅茶のシールはあるか？」

「ああ、俺紅茶飲まないから」

またも素っ気なく答えるトシリア。

「……そうか、それは済まなかった」

ナリアは踵を返し、自室に戻って行った。トシリアは自分の突き飛ばした態度をナリアにあっさり対応され、何となく呆気に取られていた。決まりが悪くなり、トシリアは逃げるようにしてベッドに突っ込んだ。今まで女性に対して蔑みの心を持っていたが、淡泊な対応をされ、恥辱の念に駆られ、ベッドにてうずくまっていた。

…つむ、やはりいざとなるとこっ恥ずかしくて意外に訊けないものだ。昔過ぎることだからだろうか？ それにしても何故私は紅茶の話題を吹っかけた！？ うぬぬ、私ナリア・オーエン、何たる失態。

今度機会があれば絶対に訊いてやる。

その頃。

「はあ。ごちそーさん」

「ごちそうさまでした！」

：俺レイジとユキミはメシを食べ終わり、食後の挨拶をした。

「……レイジとお嬢さん、日本人みたいだね」

ビリーが怪訝そうな、興味がありそうな、そんな顔で俺らを見る。

「あたし日本が大好きなの！ いつかは髪の毛黒くして、肝試しで市松人形の役やるの！」

「おいおい……そんなおつかねえ野望、抱いてんじゃねえよ……ガクガク」

オーグが明らかに怖がっている。でも、確かに髪黒くするとそれっぽくなるかも……。

「オーグ、人形が大の苦手だからな」

ビリーが補足する。人形が苦手ならユキミが言ってたそれは人形の中でも屈指の怖さだぞ？ オーグ、多分失神するな。

「……んで、レイジはなんで日本的な感じなの？」

「……だってこれ、日本のノベルでしょ？」

「あ、そっか」

とビリーが納得してくれたところ、

「いやそこ納得するところじゃないだろ！」

と相変わらずなツッコミをするガルマン。

「うん、ちょっとウザいけど、それがガルマンのアイデンティティなんだから」

「……なんかその言い方、すっごくムカつくんですけど？」

「……あり、怒った？」

「そら怒るわ！」

バキッ！

「覇鬼？」

「何？ 今日そつちネタのオンパレード？ てか殴られてよく平気だな！ 殴ったの俺だけだ」

「そーだよ」

「お前何様のつもりだよ！」

「俺様」

「最悪じゃねーかよ！」

更に罵声を吐くガルマン。もうあいそが尽きたので、

「はいはい……」

とめんどくさそうに答えたら、

「何だよそのかわいそうな子を見るような目は！？」

「……え、違うの？」「」「」

四人が綺麗にユニゾンした瞬間だった。

「……なあお前ら、そろそろ泣いていいか？」

今日はこのくらいにしといてやるうか。

その頃、502号室の前でノックをしようとしているナリアがいた。

「……彼女は持っているのか……？」

そう呟きながら静かにノックした。

コンコン

「……どなたですか？」

ドアの向こうからはルイの透き通った無機質な声が聞こえた。

「……ナリア伍長だ。その……下らぬ用事だが……時間はあるか？」

「……どんな用事ですか？」

「その……紅茶のシールを……」

とナリアが言いかけたところでルイは直ぐさま、

「ああ、ちょっと待ってて下さいね」

声を明るくしてそそくさと部屋を物色し始めたルイ。

(ホントに、紅茶のことになると別人になるな……)

ナリアはそんなルイが微笑ましくなり、笑った。  
数十秒後、ルイが表に出て来た。

「お待たせしました。こちらです」

口元が少し綻んでいるルイが、両手から溢れんばかりの紅茶の紙パックをナリアに差し出した。

「……ありがとう……」

あまりの多さにたじろぐナリアだが、受け取らないと決まりが悪くなる気がしたのでありがたく受け取っておいた。

「シールがほしくなったらいつでも言っておいて下さい」

いつもとは違う明るい声でナリアに言うルイ。

「うむ、感謝する」

ナリアは紅茶の紙パック群をわっせわっせと運びながら自室に戻っていった。

(……ちょっと多過ぎたかしら)

ルイは首を傾げたが、あまり気にした風もなく自室に入っていた。

「……たっぷり、紙パック紅茶を飲まなくては」



ルイは紙パックの紅茶を買うべく軽い足取りでカフェテリアに向かった。

所変わって、ブリュッセル居住区。そこのはずれに灰色と水色のツートンをしたガンダム5号機が片膝をついていた。そこのコクピット内では……。

「だから、全然知らないってば！」

「では何故我が5号機をじいっと見ていたのだ!?!」

「そりゃ見るでしょ! 目の前に見たこともないガンダムがいたんだから！」

「では何故拙者を見た瞬間逃げ出したのだ!?!」

「そりゃ、なんかされたらやだし。てかもう既にされてるけど」

という、春雨さんとカナリーの不毛な会話が繰り返し広げられていた。

「……ではお主、聞きたいことがあるのだが」

春雨さんが真剣な顔になって赤髪の少女に問いかける。

「……あのUU共はどこへ行った?」

「知らないわよ! そんなのこっちが聞きたいわ!」

露骨に嫌がるカナリーを見て、これ以上尋問しても無駄だと悟り、

「……主の住まいは何処だ?」

「……」  
「……」  
「……」  
「……」

春雨さんは、ぶつきらぼつに言い放つカナリーを気に留めずにコクピットハッチを開ける。

「済まなかったな、カナリー殿」

「いや、私まだ名乗ってないけど？」

メガネをずらし、振り返るカナリー。

「地の文を見たでござる」

「……」

カナリーはツッコみづらいと言わんばかりに冷汗をかき、コクピットから出ていった。

「さて、拙者はUUを追うとするか」

コクピットハッチを閉じ、各所の電源を入れ、コンソールが光り出す。その後を追うようにして各所も順々に光り出す。

「……この機体、ずっと前から思っているが……名前がないな」

連邦ガンダムは通常、起動時には機体名（『ASSAULT-GUNDAM』など）がコンソールに表記されるが、5号機のみ、そこが不自然に空欄になっている。

「……拙者が名付けよう」

春雨さんはキーボードを打ち、5号機を命名した。コンソールには、新たに

『SLASH・GUNDAM』  
と表記された。

「さて、行くか。スラッシュよ!」

春雨さんは操縦桿を握り、5号機、いや、スラッシュを発進させた。

：その頃、所戻ってシグヌス507号室では。

「あゝ食った食った」

腹を満杯に膨らませたユキミがベッドに寝そべり、お腹を摩っていた。

「つかいつの間にそんなに食べたんかい」

俺もといレイジが冷静にツッコむ。

「だって美味しかったんだも〜ん。なんか、日本の味って感じだったも〜ん」

「確かに日本食っばかったもんな。まあ日本食は健康にいいとか言われてるけどな」

リモコンを片手にユキミの言ったことを肯定する。ベッドにどかっと座り、そのリモコンでテレビの電源を入れる。

「……」  
「……」

と二人で黙りこくって洋画を見ていたら、

『10時の方向に敵艦発見！ 即時これを撃墜します！ 各機、準備願います！』

という艦長のアナウンスが聞こえた。

「……レイジさん、また出撃するの？」

上目遣いで不安げに問うユキミ。

「うーん、様子見てからだな」

「え、なんで？」

ユキミが明らかに陽性の表情に変えて身を乗り出しながら訊いてきた。つか、俺の膝の上にユキミの両手が置かれてて重いんですけど。

「侵略戦争には全然興味ないからね。艦が危なくなったら出るわ」

と辞退するよつな手ぶりをして、両手を頭の後ろにやり、おもむろにベッドに仰向けになる。

「わーい！ レイジさん……ムフフッ！」

さも幸せそうに蝉みたいに俺にしがみつくユキミ。そうかと思つと

「み〜んみんなみんみ〜ん」

何だかみんなみんなの鳴きまねをし始めた。俺の汗腺から樹液は出ないよ。

しかし……

「み〜んみんなみんみ〜ん」

「あーもいい加減にしてくれ！　お願いだから静かにしてくれ！」  
「ぶぶ〜っ」

ユキミは明らかに不機嫌そうに頬つぺたをハムスターみたいに膨らまし、ベッドから離れ、テレビの前で仁王立ちし始めた。テレビ見えな。そんなに構ってほしいのか？

「あーもうわかったから、こっちおいで。蝉の鳴きまねは勘弁だ  
ど」

「じゃあヤダ」

「ごんだけ鳴きまねしてえんだよ！」

即答されて咄嗟にツッコむしかなかった俺。

MS発着デッキ。ガンダムの出撃前で慌ただしかった。

「おい、潤滑油はどこだ！」

「リフトを上げてくれ！」

「コード邪魔だ！　誰だこれ！」

などと荒い声が飛び交っていた。そんな中、自機であるシャドーに乗りかけていたガルマンがビリーに話しかけた。

「おい、レイジはどこだ？」

「え、知らねえ。ガルマンこそ知らないの？」

「ああ。つたく、何やってんだよあいつ」

舌打ちをしながらシャドーのコクピットハッチを乱暴に開けるガルマン。

「お嬢さんに止められてるのかな？」

「さあな」

ガルマンはビリーの言葉を流し、惰性でシャドーのコクピットにどかっと座り、ハッチを閉めた。

「っ、くそ……」

もどかしさが胸の中で煮えたぎっていた。

時を同じくして、アテナのコクピットでは、ナリアがアテナの最終チェックをしていた。

「サブジェネレーター充電100%完了、エネルギーパイプ、各所異常無し」

キーをすばやく打ち、タイピングの音が忙しく響く。

「……………」

タイピングをやめると、何か思い詰めたように俯いたナリア。ナリアは何気ない話題からあの雨傘の話に持っていかうとしたが、何だか拒絶された感覚に囚われ、何となく気が沈んでいる。

「……………トシリア……………」

ナリアは彼の名を呟いた。

その頃、その当人のトシリアはビリーから何やら説明を受けていた。

「今回も左肩部にミサイルポッド装備しといたから。それと……………シールド内部に新装備があるから！」

「……………新装備って？」

当然の疑問を浮かべるトシリア。

「2連装ビーム砲だぜい」

ビリーがグッドサインをしてみせる。

「おお、早速使ってみるよ」

「おおっよー！」

ビリーはアサルトに乗ってゆくトシリアを見送った。

テトラ、アサルト、シャドー、アテナの順にカタパルトデッキから出撃した。

4機が出撃し終えたころ、ビリーがオーグに問うた。

「おい、まだコロナは出れないのか？」

「コロナは大丈夫だが、肝心のパイロットがいねえからなあ」

俺にはどうしようもないぜ、的 な仕草をし、それに対しビリーは溜め息をついた。

「まだ来てないの？」

「みたいだが……」

オーグが後ろの方に振り返り、頭をポリポリかく。

「……もいんじゃないかね？」

オーグが投げやりにビリーに問い掛ける。

「はぁー……」

ビリーは大きな溜め息をついた。

「……ま、あいつ傭兵扱いだからあんまキツイこと言ってもしょうがないんだけどさ」

開き直り、コロナから手を離すビリー。



その頃、大西洋上。

「今回は敵艦隊の殲滅が任務だ。各員、気を入れてかかれよ」

ガルマンがガンダムチームを指揮る。

「了解！」

「……了解」

トシリア、ナリアの順に答えた。

「……少佐、行きましょう」

「……ああ」

ナリアに少佐と呼ばれたヴェルターは淡々と答え、フライトモードのテトラの上にアテナが乗った。

「落ちるなよ」

「……了解」

アテナはテトラにしっかり捕まり、アサルト、シャドー、テトラ（アテナ）は敵艦『ダイオギニス』に向かった。

一方、そんなダイオギニス内では四機のガンダムの存在を見逃さず、あちこちで警報が鳴り響く中、兵士達が百忙して走り回っていた。

「MS発着デッキのハッチを開ける！ 急げ！」

整備兵が声を張り上げて言う。

そんな中、まだ気持ちの整理が着かないソロとそれを案じるアンがいた。

「ソロ、しつかりね」

「……」

ソロは無言だった。寧ろ、自分を案じるアンですら鬱陶しく思っていた。

「……出撃準備はできてるか？」

アンに気にもかけず自機の整備兵ダイゴに声をかけた。

「ああ。……だが、少しだけカスタマイズさせてもらった。スラストを強化、ビームライフル及びビームサーベルの追装……まあ、あとは自分で確認してくれ」

素っ気なく答えるダイゴ。

「ああ、わかった」

ソロはダイゴの素っ気なさに気にとめずに開いていたコクピットハッチからコクピットに入った。

「じゃあ、行ってくる」

「……」

ソロがそう言うとコクピットハッチを閉じ、ダイゴはソロの乗る

『レピドウス』を見送った。黄色い新装レピドウスのスラストターから青白い炎が勢いよく吹き出る。ダイゴの黒髪も強く靡いた。いつの間にかソロ機は小さくなっていった。

「……ソロ、死ぬなよ」

ダイゴは小さくなったソロ機を後にして自分の仕事に戻った。

ソロは、後からきたアンの（通常仕様の）レピドウスと、ネオンの青いポーンカスタムが、部隊の最後尾で仲良く航行していた。

「お前の機体、カスタマイズしてもらったみたいだな」

「……」

ネオンが話のタネにソロのレピドウスの話を振るが、ソロは全くの無反応。アンは遂に痺れを切らし、激昂する。

「いい加減にしないでよ！ こっちはあなたが心配で声かけたのにシカトして……ましてネオン隊長にもシカトするなんてどういうつもり!?!」

アンは紫の長髪を揺らすか、

「煩いな！ 俺なんかほっといてくれよ!」

激昂を激昂で返し、ソロ専用レピドウスはせっかちにバーニアを吹かし、遠くなってしまった。

「……隊長……」

泣きつくような声でアンはネオンに声を漏らす。

「……放っておけん！」

すると、実体剣を右手に持ったポーンカスタムまでもがバーニアを思いっきり吹かした。

「あ、待ってください！」

アンの乗るレピドウスもそれに続いた。

「来るぞ！」

正面からくる敵部隊を確認し、ガルマンが怒号を散らす。

「……降ります」

「ああ」

アテナがテトラから離れ、背部にマウントしていたランチャーを左手に持つ。アテナが離れたテトラは牽制に機銃とミサイルを数多撃った。何機かは墜ち、それ以外は散開した。

「……」

ナリアの駆るアテナは左肩からはミサイルを、右肩からはビーム砲を、両脚部からは無数のミサイルを放っていた。そして右手には小型のライフルで敵を狙撃していた。あちこちで爆風が起こる。

「……流石はアテナだな」

ガルマンも感心するほどであった。

「俺だって……！」

トシリアのアサルトも負けじと左肩部のミサイルを無数に撃つ。命中はせず、密集した敵を攪乱した。

「11のッ……！」

命中しなかったのに苛立ちながらライフルのトリガーを引く。

「11いつらッ……！」

黄緑色のビームがライフルから連続的に放射される。

「ネイビー少尉、撃ちすぎだ」

ヴェルターがトシリアにストップをかけようとしたがトシリアは諦め切れず、またもライフルを構えた直後、シールド内蔵の2連装ビーム砲の存在を思い出し、ライフルの銃身を下ろし、逆にシールドの先端を上げた。

「これならどうだ!？」

細めのビームが連続的に撃ち出される。いくつか爆風が見えた。

「やった……やったぞビリー！」

アサルト内には、喜びに満ちたトシリアがいた。すると、油断もスキもなく機内にアラートが鳴る。アサルトは回避し、シールド内蔵2連装ビーム砲を連射し、最終発目に敵機を撃破した。

「……次だ……！」

トシリアの顔がどこか生き生きとしていたその時だった。

ビギューン！

「……火線？」

トシリアが、アサルトの左脇を過ぎつた黄緑色の火線を見て当惑した。

「……ッ、何か来るぞ！」

ガルマンが、猛スピードで来る機影を確認し、焦燥に駆られる。

「な……通常機の……」

とガルマンが自機のコンソールを見ながら言った時、ナリアが、

「3倍なのか？」

「いや、ちがう。流石にそこまではいかん。しかも赤じゃなくて黄色だ」

ガルマンがナリアを諷めるように言う。

「……この前の新型のカスタマイズ機か？」

ナリアがぼそっと呟く。

「……みてーだな」

ガルマンがコンソールを見ながらナリアの問いに答える。

「……侮れないな」

ナリアは顔をしかめ、アテナをバックブーストさせる。

「この機体での白兵戦は難しい。中尉、あとは任せる」

「……できる限りの援護はする」

「……ああ」

ガルマンはナリアに見送られ、シャドーをソロ専用レピドウスに突撃させた。

そんなレピドウスのコクピットでは。

「ち、2号機の赤紫！ 逃げやがって！」

アテナに逃げられ、怒り焦るソロ。するとそこに、

「2号機はやらせねえよ」

「何!?!」

ソロは、4号機ごとシャドーから聞こえたガルマンの声に小さく叫んだ。

「お前の相手は……俺だ！」

ガルマンの怒号と同時にシャドーがランスを取り出し、ソロのレピドウスと鏝ぜり合いになり、光の飛沫が飛び散る。

「くそ、地球人ごときが！」

「何だと!?!」

ガルマンはソロの罵声に罵声で返し、鏝ぜり合いがより激しくなる。シャドーはもう片方のランスを取り出し、レピドウスを突こうとする。

「く、小細工を！」

ソロが言うのと同時にレピドウスはシャドーを蹴り、間合いを離し、ランスから回避した。

「ッ、くそっ！」

ガルマンが悔しそうに齒軋りする。

「地球人ごときが……ガンダムなど！」

ソロの吐き捨てるような言葉と共にレピドウスはサーベルを振り下ろすが、シャドーはバックブーストして避ける。



「くそ、逃げてばっかり！」

ソロは執拗にシャドーを追う。

(…………くそ、ランスじゃ戦いにくい…………)

ガルマンがそう呟くと、シャドーは左手のランスを突き出したままにし、右手のランスを柄が短く刃が長い、所謂ビームサーベルのようなやつに組み直した。

「!? 変形するのか!？」

ソロが小さく叫ぶ。同時に、シャドーの左手のランスからビーム砲が数発レピドウスに向けて飛ぶ。

「く、こいつうー！」

レピドウスは後退しながら回避する。じりじりと間合いが離れていく。

「くう……………！」

ソロは、地球人が相手なのにも関わらず思うように戦況が進まずにもどかしさからくる怒りを滲み出していた。そこに、

「ヴェルス、そこをどけ！ 私がやる！」

というネオンの渋い声が両機内のスピーカーに響く。

「……………新手か……………」

面倒そうに目をしかめるガルマン。だが、

「隊長！」

「お前は他の奴を。私が4号機をやる！」

「……了解しました」

ソロは今の戦況を考えて渋々と退いたのだった。

「……2対1じゃないのか」

ガルマンが、割って入ってきたポーンカスタムに声を漏らした。

「……ふん、一騎打ち以外の戦いなどつまらん」

ネオンが偉そうに鼻で笑いながらポーンカスタムは実体剣を右手にシャドーに斬りかかった。

「……おもしれえ」

ガルマンは眼光をちらつかせ、シャドーはポーンカスタムと鏝せり合いになった。

「……ポーンの隊長機か？」

ガルマンがこの状況下で敵パイロットに問う。

「そうだ」

「……相当な実力者とみた」

「……それは褒めているのか？」

「さあな！」

シャドーは乱暴にサーベルを振るい、ポーンカスタムとの間合いを一旦離し、再び突撃する。

「どうした！？　なんだか押されてますけど？」

ガルマンが皮肉を籠めてネオンを茶化す。

「ぐう……この私が機体性能に屈するなど……！」

ネオンが悔しそうに歯を食いしばる。ポーンカスタムは苦し紛れに実体剣を構え、シャドーと激突し、再び鏝ぜり合いになる。

「ぬう……貴様、中々やるな」

「……ふ、ナメンじゃねえよ」

ガルマンは不敵に笑い、シャドーは鏝ぜり合う力を強め、ポーンカスタムをじりじり追い詰める。

「くう、おのれッ！」

ネオンは歯を食いしばり、ポーンカスタムは力任せにシャドーを蹴り飛ばした。

「ぐう！？　コイツ！」

ポーンカスタムに蹴られた衝撃にガルマンが驚くが、シャドーは素早く受け身をとった。両機の間合いが遠くなった。

その頃。

「……あともう少しか」

ナリアがライフルのトリガーを引きながらコンソールにある残存機数の確認をした。そこに、

「……ん、この機影、少し速いな。指揮官機か？」  
「どうした？」

ヴェルターがナリアに問う。

「一機だけ明らかに速い。おそらく指揮官機かカスタマイズ機かと」  
ナリアが機内のコンソールを見ながら無機質に答える。

「こちらに來ます」  
「ああ」

ナリアは少しだけ焦った風に、ヴェルターは腰を据えてしかと操縦桿を握った。

「少佐、白兵戦は頼みます」  
「了解した」

とアテナが後退したところに、

「2号機！ 逃げんじゃねえぞ……！」

という怒号が響いた。ナリアが捕らえたレピドウスのパイロット、ソロである。

「狙いは私か。……少々目立ち過ぎたか」

ナリアがぼそつと呟き、アテナは尚も後退するも、牽制に右肩部の6連装ビームポッドからビームが何発も撃ち出される。

「ぐうッ！」

アテナの正確な射撃にソロは苦虫を潰した顔になりながらも必死に回避行動をとる。回避に専念しているからか、中々前へ進めないでいるソロ専用レピドウス。

「伍長、よくやった。後は私に任せる。貴官は他の量産型を頼む」「了解しました」

アテナは砲撃をやめてさらに後退し、まだ残存しているUUのMS部隊の殲滅にあたった。それに対しソロは、

「3号機！ 貴様よくも2号機を逃がしたなあ！！！」

ソロは罵声を吐き、ソロ専用レピドウスもサーベルを右手にテトラに猛攻をかけた。

「……ふん」

ヴェルターは満更でもない様子で、テトラは背部アタッチメントのビームサーベルを抜刀し、黄緑色の光の刃をレピドウスに振りかざす。サーベル同士がぶつかり合い、鏝ぜり合いになる。光の飛沫

がしきりに飛散している。

「俺のようなニュータイプが……機体性能で地球人に負けるなんて  
ッ……………」

「それは違う、若人<sup>わかちや</sup>」

ヴェルターは諭すようにソロに言った。

「何だよ偉そうに！」

そのソロの罵声にも動じずにヴェルターは言葉を続ける。

「見たところ、貴様には経験が足りない。それだけだ」

「何だと!？」

ソロは明らかに敵意を剥き出しにしながら怒りを震わせる。

同じ頃、トシリアの乗るアサルトは新装備2連装シールドビーム  
砲を擁して多数の敵機を撃破していた。

「……………次は？」

トシリアがコンソールを確認すると、アンウンが3機の編隊を  
作っているのが見えた。このアンウンこそ、新型MSのレピドウス  
である。そのうちの1機はアン機である。

「量産型が束になったって！」

トシリアが叫んだのと同時にアサルトはシールドの先端を前に水平に突き出し、ビーム砲を連射した。3機のレピドウスはうまく散開した。

「ち、そんなに甘くないか……」

トシリアは頭を掻き毟り、今度は左肩部のミサイルポッドからミサイルを連射した。3機のレピドウスはうまく回避し、3機でトライアングルを作りアサルトに射撃を仕掛けてきた。

「今度はあっちの番ってわけかよ！」

トシリアは多勢に無勢という状況に険しい顔になり、精密射撃専用スコープに目をあて、3機のうち1機に狙いを定めた。

「そこだ！」

ターゲットのロックが定まり、2連装ビーム砲を発射する。ロックされたレピドウスは咄嗟に左に回避するが、片方のビームがコクピットを貫いた。貫かれた装甲は焼け爛れ、やがてレピドウスは爆散した。

「あと2機……！」

トシリアは専用スコープから目を離して後ろに回し、再び操縦桿をしかと握った。

アサルトの射撃による味方機の撃墜に一瞬気が沈むレピドウスのパイロット、アン。しかし、

「……アリスト、行くわよ！」

「了解だぜ！」

アンとアリストはアサルト単機を相手にレピドウスでフォーメーションを組んだ。

「……？」

トシリアは、肩の盾を前に突き出しながら突進してくるレピドウスに戸惑いを覚える。

「そんなもの！」

トシリアは構わずビームライフルのトリガーを引く。撃ち出されたビームはレピドウスのアーマーを貫くことはなかった。

「ち、対ビームにも対応した盾か……！」

トシリアがそう舌打ちした隙を見てか、もう1機のレピドウスが右舷からマシンガンの弾が飛んできた。右を向き、アサルトはシールドを構えるが、正面のレピドウスもマシンガンを撃ってきた。

「く、こいつらー！」

アサルトは、両機を見やすくするように咄嗟に後方にバックブーストする。

「逃がさないわよー！」

アンの叫び声と共に、レピドウスはレフトアームからアンカーを射出した。



「そんなもの！」

アサルトはバックブリストしながら頭部バルカンをアンカーの先端に付いたキャプチャーを撃つ。命中はしているものの、あまり効果はなかった。アサルトはアンカーに捕われた。

「くッ！」

左腕ごと胴体を掴まれ、身動きが不自由になったアサルト。

「このッ！」

アサルトはライフルを腰部アタッチメントにしまい、ビームサーベルでアンカーのワイヤーを切断しようとしていた。そこにもう1機のレピドウスが、

「させねえぜ」

ヒートホークを右手にアサルトに突撃する（アリストの）レピドウス。

「ナメるな！」

トシリアの怒号と同時にアサルトは切断を一旦諦め、ナイフ投げの要領で突撃してくるレピドウスにサーベルを投げた。

「な!？」

アリストが小さく叫んだ時は既に遅し、レピドウスのライトアー

ムはアサルトのサーベルと一緒に持っていかれていた。

「ら、ライトアームが!？」

とアリストがそう言ったのを余所に、アサルトは自由なライトアームでワイヤーを持ち、アンのレピドウスを逆に引き付けた。アンは思わず声を漏らす。

「あッ!！」

(ち、女かよ。苛つくぜ)

トシリアは機内のスピーカーを通してアンの喘ぎ声を聞き、不機嫌になった。

「おらあ!！」

マイナスの感情の入ったトシリアは、ある程度引き付けたアンのレピドウスでモーニングスターの要領でアリストのレピドウスに叩きつけた。

「あああん!！」

「ぐおあッ!！」

二人の悲鳴が聞こえる。皮肉にもその悲鳴は、両機が不可抗力で激しくぶつかり合ったからであった。アンのレピドウスは、アンカーを介してまだアサルトと繋がっていた。

その頃、シャドー（ガルマン）VSポーンカスタム（ネオン）の方は、離れては鏝ぜり合い、離れては鏝ぜり合い、の繰り返しであった。

「ち…………そう簡単にはやらせてくれんか…………」

「機体性能に依存するなど、軟弱者のすることだ」

ガルマンが顔をしかめて言ったのを、ネオンはさも勝者気取りでそう言うが、

「俺はカイ・シデンじゃねえぞ」

「馬鹿者！ 彼は軟弱者なんかではない！」

「…………どの辺がだよ」

ガルマンがネオンに問う。

「ガンダムがない時は他の機体を指揮するまでに成長したではないか！」

「…………あ、そういえばそんなのもあったk…………って何やってんだ俺ら！」

ガルマンがノリツッコみしながら、シャドーはポーンカスタムとの間合いを再び縮める。

「…………ふ、まさか地球人と共通の話題を持たたとはな」

「うるせえ」

二つの剣が爆音と共にぶつかり合い、再び鏝ぜり合いになる。

「…………そういえばコロナは出ていないのか？」

余裕なのか、鏝ぜり合いという状況下でネオンがガルマンに問うた。

「知らねえよ。こつちが訊きてえわ」

当然の如く、ガルマンがぶつきら棒に答えた。

「……ふ、なんと結束力が低いことよ」  
「なんだと？」

ガルマンにしては珍しく、静かな怒りを見せた。すると次の瞬間、遠方にダイオギニスから信号弾が放たれたのが見えた。

「……撤退か。小僧、また会おう」  
「あ、待て……くそ……」

ガルマンは、敵の撤退に追撃してはならないと軍で習ったのを思い出し、やり切れない気持ちでコクピットで佇んだ。

一方、テトラ（ヴェルター）VSソロ専用レピドウスサイドは。

「く、何なんだよ、お前は！」

ソロは地球人ごときに教え諭され侮辱された気分になり、激昂していた。

「……ふん」

ヴェルターは依然変わらない様子でライフルのトリガーを適当に引き、レピドウスを足止めしていた。するとその時、ダイオギニスから信号弾が射出されたのを視認した。

「……向こうから撤退命令が出たのか」

「ち、このまま引き下されるか！」

ソロは執拗にテトラを攻めようとするが、自機は相変わらずテトラの弾幕に躍らされるだけだった。

「ツツツ……！」

シールドを前面に構え、特攻しようとするソロ機。しかし、それは憚れた。ソロは後ろを見ると、自機の頭部を鷲掴みにしているポーンカスタムがいた。

「……撤退だ。乗り遅れるぞ」

ネオンがそれだけ言ってポーンカスタムは撤退した。

「……了解」

今日のソロはネオンに従順なのか、自機をそそくさと撤退させた。

「……」

ヴェルターは追撃しようとしたが、ネオンの言葉が気になり、追撃はやめた。

アサルトはビームライフルをアリスト機に連発していた。アリスト機は必死に回避していたが何発か掠り、中破状態に陥っていた。

「アリストはやらせない！」

アン機は自由な右手でマシンガンを持ち、アサルトの頭部を狙った。

「ち、生意気なんだよ！ 鎖で繋がれてる奴隷同然のゴミが！」

トシリアの酷い罵声と共にアサルトは今度は乱暴にアン機を引き付け、サーベルを振りかざした。が、それはあと数cmのところまで食い止められることとなった。

「ち、こいつ！」

アリスト機は、サーベルを持ったアサルトのライトアームをアンカーで捕縛していた。アサルトはほぼ自由を奪われていた。

「くっそう！」

トシリアの苦し紛れの叫び声と共にアサルトの左肩からアン機に向けてミサイルを無数に撃ち出された。

「甘いわね」

アン機はマシンガンを乱射し、ミサイルをことごとく撃破した。

「くそ、」のままじゃ……！」

やられる。

トシリアはそんな焦躁に駆られる。

熱源がこちらに急接近する。

しかし、それはアサルトに向けられたわけではなかった。

「ちい！」

アンがそう言いながら自機を回避させるが、赤い極太のビームはアンスカーのワイヤー部をいとも簡単に焼き去った。アサルトのレフトアームが自由になった。

「このビーム……アテナなのか？」

「……すまない、援護が遅れた」

「オーエン伍長……」

機内に響く救世主の声に安堵するトシリア。アテナのランチャーは、アサルトのライトアームを捕縛しているワイヤーをも焼き去った。

「……援護を感謝する」

トシリアは若干言いつらそうに礼を言う。

「い、いや、礼など……」

ナリアは珍しく吃りながら答える。ナリアが吃った直後、ダイオギニスから信号弾が射出された。

「……敵の撤退命令か。逃がしたくないものだな……」

アテナはダイオギニスに向けてランチャーを構えるが、

「止すんだ、伍長」

という声がアテナの機内に響く。アテナのすぐ後ろにはテトラがいた。

「……少佐？」

「敵の撤退命令だ。追うな」

「……しかし、我々の目的はあの戦艦自体では？」

ナリアはヴェルターに疑問を投げかける。

「……確定情報かは疑わしいが、敵は宇宙に上がる。下手に追えばこちらが燃え尽きてしまう」

「宇宙……」

「そうだ」

トシリアの呟きに相槌を打つヴェルター。

「ここは一旦体勢を立て直す。お互い、機体の状態もあまりよくないだろう」

ヴェルターが他の二人を諫めるように言う。アサルトはアンカーで捕縛されて装甲が若干歪んでいた。アテナの方は目立った損傷こ



そ見られないが、エネルギー残量がほぼ赤信号だった。テトラも弾薬が尽きかけていた。

「わかりました。撤退します」

「……了解です」

トシリアとナリアは自機の状況を把握し、おもむろに自機を撤退させた。

「……少佐、またお願いします」

「……了解した」

アテナは行きと同じくFモードに変形したテトラに乗った。

Unit017：激昂（後書き）

レイジ「つーわけで、一周年記念つづつことば……」

ユキミ「いつも通り雑談会をやります！」

ガルマン「何だよ！ 最初のフェイントかよ！」

レ「……ま、気にせずに」

ユ「次回から宇宙に行きそうだね！」

レ「マジで？」

ガ「宇宙か〜久しぶりだな」

レ「行ったことあんのか？」

ガ「まあな。レジャーでな」

レ「あ、そういえば、最近ラブホのこと何て言うか知ってるか？」

ガ「え、急になんだよ」

レ「……知ってる？」

ガ「いや、知らん」

レ「レジャーホテルっていうらしいぜ」

ユ「じゃあ今度二人でレジヤ―ホテル行こうね！」

レ「いろいろマズい気がするから止めておこう」

ユ「え〜レジヤ―だからいいじゃ〜ん」

ガ「……というわけで」

レ&amp;mp;ユ&amp;mp;ガ「これからも新戦記IDガンダムをよろしく願います！」

ガ（今日は異様に優しかったな、レイジ）

レ（……よし、明日は椅子に五寸釘でも仕掛けておくか）

ガ（む、奴から不穏な空気が漂ってくる……油断できんな。トホホ  
……）

Unit 018: 懐旧の宇宙(そら) (前書き)

まさかの高速更新です。

## Unit 018：懐旧の宇宙（そら）

ガンダム4機とU.U.が交戦していた最中、シグヌスは通信を受けた。シグヌスクルーが艦長に報告する。

「艦長、我が軍の軍事基地ルナートから通信がきています！」

「通信状態は？」

「……悪くはない、といったところですね」

「そう、回線開いて」

「わかりました！」

アカネはあまり気にした風もなくクルーに回線を開かせた。

「モニターに出ます！」

クルーが精悍な声で言うのと同時に、ブリッジの天井に対して鋭角に傾いた大スクリーンにアーノルド・クロムウェル少将の顔が出た。

「……少将、ご無沙汰しています！」

アカネはスクリーンに映るクロムウェルに敬礼した。ブリッジクルー一同も揃って敬礼する。

「そんなに畏まることはない、ヤガミ大尉」

威厳はあるがどこか優しそうなイメージを彷彿とさせる。それがクロムウェルの人柄だ。

「貴官らは満足な戦力を持たずして多大なる戦果をあげてくれた。よくやってくれた」

威厳を残しつつも、シグヌスクルーの功績を労った。

「大尉の知っている通り、私は連邦軍領軍事基地ルナートの長官だ。長官の権利を以て勧告を下す。シグヌスは我が基地に来てくれ」

「……物資の補給はさせて頂けるのでしょうか？」  
「勿論だ」

クロムウエルはアカネの頼みに不機嫌そうな顔をせず頷く。

「君達が来てくれれば心強い。月で待っているぞ」

「はい！」

クロムウエルは終止威厳は崩さなかったが、仏頂面というには少し穏やかであった。そしてすぐに通信が切られた。

「……作戦が終了次第、月にあがるわよ。みんな、いいわね？」  
「はい！」

他のシグヌスクルー達が揃って返事をする。

(だから、ここでなんとしてもダイオギニスを沈めん)

とアカネが心中で呟いているのを遮るようにブリッジクルーが、

「あ、ガンダム4機、帰艦します」

「え、そんなの聞いてないわよ」

はあ？ 的な顔をし、アカネは苛ついてくる。

：結局、洋画を観るのを諦めてゴロゴロしていた俺レイジ。ユキミは髪をとかしていた。

「金髪……か。懐かしいな」

「うん？ なんで懐かしいの？」

髪をとかしていながらすっかり俺の独り言を聴いていたユキミ。まあ、隠すほどのことでもないから話すかな。

「俺は……元々金髪だったんだ」

「あ……」

ユキミは、びっくりしたような、どこか合点がいったような、そんなような顔をしていた。

「……ほんのちょっとだけど、金色が残ってるのはそれ？」

「そうそう」

「……差し支えなければ、詳しく聞かせてくれる？」

ユキミは俺の座っているベッドに歩み寄り、大きな瞳をこちらに向ける。俺は、うん、と言って話を続ける。

「……俺は、君にも話した養母おかあさんが死んだ時、深い悲しみで三日三晩泣き続けた。……すると、過度のストレスで髪の色が薄くなっていたんだ。……さらに、『あいつ』を助けられなかったあと……」

気が付いたら、今の色になっちまってたんだ」

「……その白髪は、後天性なのね」

ユキミが視線を下に下ろしながら言う。

「……そうだな。アルビノではないから大丈夫だよ」

「ちょっと金色残ってるもんね」

「……そういう問題なのか？」

激しく問いたくなつたが、ユキミは特に答えようとせず、不意に抱き着いてきた。

「……」

ユキミはレイジに抱き着いたつきり微動だに動かない。ユキミはレイジの（断片的ではあるが）壮絶な過去を聞き、自らの衝動を抑えきれなかった。

「……」

レイジは仕方なくそこに居座ることにした。

「むぐう……」

「……」

ユキミはレイジを抱いたまま動かない。しかし、

「……」

「……」

「……あ、歯磨くの忘れた」



というレイジの間の抜けた声で、ユキミは後ろにズルツと滑る。

「君も磨くんだよ」

洗面所に向かいながら暢気に言うレイジに、ユキミは、

「……レイジさんのバカ！」

罵声を吐くのだった。

洋上。そこには、ネオンの乗るポーンカスタムを逃がしたシャド  
ーがきらきら光る海の上で飛行していた。

「……あのパイロット、何者だったんだ？」

ガルマンは、シャドーのコクピット内でどこか遠くを見るような  
目で誰ともなく問う。

それは量産機の上位機にすぎないのにも関わらず、そのシャープな  
青いボディから華麗な格闘技を披露していた。

「……ポーンであそこまでやるとは…… UUも侮れんな」

ガルマンが難しい顔をしながら呟いた時、モニターに他の3機の  
ガンダムの機影を確認した。

「お、あいつらか」

ガルマンはシャドーを他の3機に急がせる。

「あ、中尉、ご無事で！」

アサルトからトシリアの陽性の声が聞こえてくる。

「お前こそ、お疲れさん」

ガルマンがトシリアの労を労うと、シグヌスのMS発着デッキがもう目と鼻の先だった。

「着艦する！」

シャドーは外部出力のスピーカーで整備兵達の注意を引く。

「リョーカーイ！ 着艦してくれい」

ビリーが開口一番に答える。シャドーは膝を曲げながらゆっくり着地し、すぐに整備兵の誘導に従ってシャドーを所定の位置まで歩ませた。

「オーライ、オーライ、はいストップ！」

「……ガソリンスタンドみたいだな」

とガルマンが静かにツツコみながらシャドーを止め、システムも停止させ、コクピットハッチを開けた。

「よ、お疲れさん！」

ビリーがコクピットを覗くようにガルマンに声をかける。

「おお、あんがとよ」

ガルマンはバイザーを外し、大きく息を吹いた。

「……ガルマン、口臭い」

「なんだと!？」

ガルマンが早くも罵声を吐く。

「歯、磨いてきなよ」

「言われんでもそのつもりだわ!」

ガルマンはブリブリ怒りながらデツキから離れた。

「……やっぱりガルマン、いろんな意味でこの艦に必要な存在だよ」

去ったガルマンを賞賛と余興を籠めて言ったビリー。

ビリーが振り返ると、さっきのシャドーと同じ要領で自機を格納しているガンダム3機の姿があった。

すると、怒鳴ったような声がデツキに響く。

『ガンダムパイロットは至急ブリッジに来なさい!』

…なーんだろ。あんなに怒鳴っちゃって。艦長さん、カルシウム不足? 俺ビリーは頭をポリポリ掻きながらシャドーの損傷箇所を調べた。

「……装甲の凹みぐらいか」

割と少ない損傷を誰ともなく呟いた。

「アテナはほぼガス欠だぜ」

オーグが両掌を上に向けて俺に嘆いてきた。

「困ったな……もうあんまりストックがないのに……」  
「そーなんだよな……どうすんだし」

頭を掻きむしるオーグ。その後ろでは、アカネ艦長のヒステリック召集により急いでいるガンダムパイロット達がいた。

「ガンダムパイロットの皆さんがヤガミ艦長によって召集されました。」

「ルイちゃん、貴方からも何か言ってやってね」

ヤガミ艦長は私をこう呼びます。ですが、

「……」

返す言葉が見当たらず、黙ってしまいました。

「わかつt」

「ガルマン・アラク、入ります」

艦長は私に何かを言おうとしたのでしようが、アラーク中尉が外で待っていました。

「……入って」

艦長はぶっきらぼうに答えました。中尉がそれを受けて、失礼します、と言いつブリッジに入ってきました。すると艦長は中尉にぶっきらぼうに聞きました。

「……他のみんなは？」

「まだ来てません。じきに来るかと思っています」

それでもヤガミ艦長の機嫌は直らないままです。

「……」

艦長は焦れているのでしょうか、キャスターの付いた椅子をギイギイ鳴らしています。するとそこに、

「……ヴェルター・ヴァイタル少佐、並びにネイビー曹長、オーエン伍長を連れて来た」

ヴァイタル少佐の低い声が扉越しに聞こえてきました。

「……どうぞ」

艦長はなんとか怒りを抑えている風に答えました。それを受けて3人が入ってきました。入るなり、オーエン伍長が私に聞いてきました。

「……一体何の用だ？」

「……ヤガミ艦長からお話があると思います。私はよくわかりません」

と事実を話したら、ヤガミ艦長が激昂しました。

「ちょっとルイちゃん！ 何言ってるのよ！」

「……別に問題となることは言っていない筈ですが？ それよりも……」

私が艦長を急かしているのを読み取って下さったのでしょうか、妥協を籠めて言いました。

「……わかったわ、用件を言っわ」

多少調子が狂ったように話を進めるヤガミ艦長。

「……なぜあなたたちは撤退したの？」

腕組みをしながら険しい顔をして訊うヤガミ艦長。

「……訓練学校時代に、撤退する敵兵には手を出すな、と教わりましたから……」

アラク中尉は罰が悪そうに答えます。

「私は撤退命令を出していません！」

「なぜ戦闘継続を無理にでもさせる必要があったのですか？ こちらら弾薬が切れかけている機体もあつたんですよ」

ネイビー曹長がごく自然に質問します。

「……これから我々は月にあがります」

「ルナートか……」

ヤガミ艦長の言葉にヴァイタル少佐が呟きます。

「そこで補給もしてもらえるみたいだから、今回は頑張っ  
て欲しいの」

艦長は落ち着きを手に入れて話を進めています。

「……というより、なんでヒイラギ君はいないの!？」

落ち着きを手に入れたかと思ったら、ヤガミ艦長はまた罵声を吐いてしまいました。

「コロナも出てなかったし……傭兵と言っても勝手過ぎる行動は控えてもらいたいわ! ボランティアで艦に乗せてるんじゃないんだから!」

いつの間にかヤガミ艦長の愚痴になってしまいました。艦長は頭を抱えています。

「しかもあの女の子といつも一緒だし……何なのあの二人は!？」

本題から少しずれている気が……。

「……まあ、彼とは個別で話をするわ。以後は勝手な行動は避けてちょうだい。今回は結果オーライだったけど、今の状況、数では明

らかに不利だったんだから」

艦長は四人を諫めるように言いました。四人の皆さんも納得した風に答えました。それを見て艦長は四人を帰しました。

「……さて、次はヒイラギ君ね」

腕を捲るような動作で507号室へ向かう艦長。ですが、

「私も同行させていただきます」

「……なに、私が信用できない？」

艦長はあまり気にした風もなく私に訊いてきました。

「……あなたは、ヒイラギさんに対し、ある種の先入観を持っていらっしゃるように見えます」

「もう。……わかったわ、ついておいで」

ヤガミ艦長は妥協したように私を導きます。

「ありがとうございます」

それに続く私でした。

……そろそろ腹減ったな。そう思って、読んでいる新聞を閉じてベッドの方を見てみると、ユキミが静かな寝息をたてながらスヤスヤ寝ていた。人の寝顔ってのは可愛いもんだが、この子のは格別



だ。……でも、

「俺のベッドなんだけど？」

507号室には大小二つのベッドがあるのだが、見事に大の方を取られてしまっているのだ。

「……ふあゝあ……」

欠伸を手で隠そうともせず、新聞をテーブルに置こうとすると、ドアから呼び出しの音が聞こえた。

「あゝ、どなた？」

頭をポリポリ掻きながらおもむろにドアに向かう。

「アカネ・ヤガミ艦長及びルイ・アジエスター副艦長です」

マジで？ 直々に？ ドッキリの類じゃねえよな？

「へーい、今開けまーす」

ピシユン、とスライド式のドアを開けると、仏頂面の艦長と無機質な表情を保つ副艦長がいた。

「……」

「……」

「……あの、用件は何ですか？」

俺は片眉をひくひくさせながら艦長に訊づ。

「……なぜ今回出撃しなかったの？」

艦長は嫌に険しい表情で俺に問い詰めてきた。

「コロナを無駄に損傷させたくなかったの」

「そんな心配、パイロットのあなたがすべき心配じゃないでしょ！」

「敵軍の虎の子だぜ？ 十分な整備ができるとは言いがたいですが？」

「この前のはたまたま被弾が殆どなかったからよかったものの……  
防衛任務以外はコロナの出撃は任意にさせていたきたい」

敬語とタメ口のまじった言い方で弁解する。

「……こっちは軍なの。一人でも勝手な行動をとればみんなが命取りになることもあるのよ」

艦長は静かに怒りを醸していたが、構わず反論。

「つーかだいいち、正規軍でガンダム数機だけの部隊なんて聞いたことねえよ。一部の読者さんも理解できないってよ」

「知らないわよそんなこと！ コロナ奪取任務から他の艦隊とうまく合流できなかったのよ。仕方ないでしょ！？」

「……まあ、それはわかりましたが、もう一つ話したいことが」

俺は話を続ける。

「……以前、稼動中にも関わらずコロナのOSが完全に停止したことがあるんスよ」

「……？」

艦長は訝し気に俺の顔をみた。副艦長さんも若干興味ありげにこちらを見ている。

「停止はしてたんすけど、機体はちゃんと動かせました。……まあ、危機的状況だったんでそんな時は何とも思わなかったんすけど、今から思えば心霊現象じみた体験でしたよ」

ポーンの隊長機と戦った時に起きたあの出来事を端的に説明した。

「……何が言いたいの？」

艦長は語調を強めて言う。

「……これはあくまで推測ですが、コロナに搭載されているOS、得体の知れないブラックボックスが存在するんです」

「なんですって!？」

艦長は露骨に驚愕していた。

マジで謎なんだよな、あのOS。何だか急に『Windows』とか『G・U・N・D・A・M』になるし……関係ないか。ただのネタか、あれは。

「非常に興味深いですが……」

副艦長さんも声を漏らした。

付け足すように言う。

「あれはただの兵器ではありません。何かからくりがありそうです」「からくり、ねえ……」

艦長は手を顎にあて、何か考え込んだように指をしきりに動かしていた。そこに副艦長さんが、

「ともかく、敵軍の機体故に整備が間に合わないことへの危惧、及びそのように得体の知れない機体の出撃をなるべく少なくしたい、ということでもよろしいですか、ヒイラギさん」

「……まあ、そういうことかな」

と曖昧な答えを返した俺のすぐ後ろから、

「あ、副艦長さん！」

という高い声が響いた。ユキミだ。てか、

「あれ、いつの間に起きてたの？」

「うん？ えーっとね……『……なぜ今回出撃しなかったの？』から聞いてたよ！」

「ほぼ最初っからじゃねーか」

と軽くツッコんだのを気に止めずに、ユキミはアジエスターさんのところに歩み寄った。すると……

「いいなあ〜いいなあ〜」

ユキミはアジエスターさんの胸をゆさゆさ揺らし始めた。おーい、思春期男児がここにいるんですけどー？

「……やめて下さい」

無機質に制止するアジエスターさん。艦長はユキミの大胆な行動にあんぐりしていた。

「ねえ〜どーやったらこんなにおっきくなるの〜?」

「……知りません。というより、早くやめて下さい」

アジエスターさんは痺れを切らしてユキミを軽く突き放した。

「あ……ごめんなさい……調子乗ってました……」

ユキミはアジエスターさんが怒っていると思ったのか、罰が悪そうに謝った。

「いえ、別に」

アジエスターさんはいつもの冷静な顔に戻り、一足先に退散してしまった。

「……」

艦長はなにか言いたげだったが、結局何も言ってこなかった。そして、アジエスターさんに続くように退散してしまった。

ドアに取り残された俺とユキミ。しばし沈黙が訪れるが、俺は沈黙をぶち破るように、

「……さて、W杯の決勝でも見ますかね」

「見よ見よ!」

ユキミは足踏みしながらはしゃいだ。俺はテーブルの上にあるリモコンをとり、W杯のやってるチャンネルにまわした。

その頃、ダイオギニスでは、もうとっくに残存機が帰還して  
て、成層圏を抜けて重力から脱していた。

MS発着デッキ。その一画にソロとダイゴが来ていた。

「……月には、連邦の軍事基地があるみたいだぜ」

ソロが柵に手を掛けながらダイゴに話を振る。

「……」

ダイゴが黙ったままだったところにアリストが割って入った。

「今攻めても、基地のMSと後ろからのガンダムの挟み撃ちに合う  
な」

それにソロが食い下がる。

「シグナスが上がってくるってことなのかよ」

「おそろくな。奴らがこのまま俺達を見過ごすとも考えにくいしな  
ア……」

おどけた風をかくアリストだった。

「実際、この艦はルナートには攻めずに補給に行くらしいぜ」

アリストが付け足す。

「ここから一番近いのは……アレクサンドリア基地か」  
「まあ、そうだな」

アリストはソロの言葉に適切な相槌を打ったのだった。

：自室である507号室のテレビでW杯の決勝を観てたら、  
『本艦は宇宙にありますが。総員、万一の事態に備えるように』  
という艦内放送が流れた。

「どうすればいいの？」

右側で俯せに寝っ転がっているユキミが無邪気な声で訊いてきた。

「なんか捕まってるや大丈夫だよ」

「わーい！」

「うわっ！」

ユキミは体勢を整える動作をバイパスして俺に飛び付いてきた。

「じゃあレイジさんに捕まってるね！」

「……蝉の泣きまねは勘弁な」

「やだもん」

ユキミはさも当然そうな顔で言ったのけた。トホホ……。

そんなわけで蝉の鳴きまねをされて疲弊しきった俺を余所に、シグナスは宇宙に上がっていた。

「……そろそろか」

外は暗黒が広がっていたが、僅かに星たちが瞬いていた。

「カナカナカナカナ……あ、ホントだ！」

蝸こくもの鳴き真似をしていたのを中断し、窓に手をかけるユキミ。

「……」

俺は何となく感傷的になる。

(……ついに宇宙に来ちまったな)

果たして、『あいつ』はいるだろうか？

そんな杞憂とは裏腹にユキミは宇宙に出てはしゃいでいた。

ふとテレビを見てみたら、ボールが見事にゴールネットを勢いよく突き上げていた。歓声とシュートを入れた選手のガッツポーズは、俺に陽性の感情を湧き出させた。

そんなわけで我らのシグナスは補給基地に着いたのだった。『ルナート』っていう基地らしいが、すると突然ユキミが、



「ジムみたいな機体はないの？」

と訊いてきた。

「ガンダムの戦闘データから作られたいわばガンダムの量産型モデルのこと？」

「そうそれ！」

ユキミは指をピンと立てながら答えた。

「さあねえ。どうなんだろ」

「あたしその指揮官機に乗りたあい」

「欲張るね」。指揮官機つてところが。二本差ししちゃう？」

とほのぼのした雰囲気をつた切るように艦内放送が入る。

『ガンダムパイロットは速やかにブリッジに集合して下さい』  
「……さて、そろそろ行きますかね」

よっこらしよ、と体を起こしてううん、と伸びをする。

「あたしも行く！」

ユキミは左腕にむぎゅっと捕まり、離そうとしない。

まあ、いいか。

：ルナート基地に到着した俺ら。ブリッジには艦長とルイ副艦長、ヴェルターさん、トシリア、オーエン伍長、そして俺もといガルマンが居る。すると、

「あれ、何だろう?。」

とトシリアが窓の外を眺めながら言った。

「んあ……ええ!。」

俺も露骨に驚いてしまった。そこにレイジ……とお嬢さんが来た。

「……なんでお嬢さんも?。」

硬直したままレイジに訊く俺。

「コロナ、実は複座型なんだよね。」

「嘘つけ! んなわきゃないだろ!。」

お嬢さんが代わりに答えたのに罵声で答えてしまった俺。

「……あ、あれジム!?。」

お嬢さんも外に目を向けた。

「いや、ジムではないと思う。」

確かに、ガンダムに似た奴らがたくさんいるという意味ではジムだけでも。

「じゃあダガーシリーズ？」

「いや、そういう問題じゃないから」

と不毛な会話が続く中、スライドのドアが開いた。すると、クロムウェル少将が入って来た。

「よく来てくれた、ヤガミ大尉」

「は！」

艦長が敬礼したので、皆も揃って敬礼した。

「……ん、君達は？」

少将がレイジとお嬢さんを見て訝った。

「自分、傭兵のレイジ・ヒイラギです」

「同じく、ユキミ・サインです」

同じくなんだ！？

「君達が噂のコロナのパイロットか」

「そうです」

レイジが死んだ目のまま答える。

「……」

少将はレイジを見ながら何か考え事をしているように見えた。

「……うむ、では諸君、外のMSは見たかね？」

少将は気持ちを切り換えたようにして俺達に問いかけた。外のMSって、お嬢さん曰くジムもどきみたいな奴ら？」

「これらは動かせることは動かせるが、OSがやや不十分だ。テスト段階のガンダムのデータをフィードバックしたに過ぎないからな。便宜上先行量産型というべきか」

「ということとは……」

艦長が何かを察知したように呟いた。

「そうだ。ガンダムの実戦データを我々に提供して頂きたい」

「……お断りはしませんが、残念ながら粗削りなデータしか取っていないのですが……」

「問題なかるう。ガンダムのOSに戦いの詳しい実況データがメモライズされている筈だ」

「……というと？」

艦長は疑問符を浮かべた。

クロムウエル少将の話は、要はこうということらしい。

ガンダムのコンピューターには、いつどこでどんな風に戦ったかが詳しく記録されているデータベースが存在するらしい。

なんでも、いつ、どのようにして敵に照準を合わせ、どのように攻撃したのかということもわかるそうさ。

「……よろしいかな？」

「ああ、はあ……」

機械にはあまり強くないのか、ポカーンとしてしまっている艦長。まあ、少将の話はもっとたくさん難しい言葉使ってたからな。

「艦長、要はこういうことです」

「え？」

俺はわかりやすく艦長に説明した。さっきの俺の説明と大差ないことを話したのだが、

「……あ、わかったわ。ありがとう」

やっと納得してくれましたか。その顔は少女のような幼さが滲み出ていた。

「……それで、どうするのか？」

艦長にそう訊いたクロムウェル少将は冷汗をかいているようにも見えた。

「……データを提供します」

先程の些か頼りない態度から一変して凜とした態度になった艦長。

「わかった。では基地の人間と協力してデータを貰おう」

では、ゆっくりしてくれ、という言葉を残し少将は立ち去った。

「……さて、見に行こっかな」

ううん、と伸びをし、MSデッキに向かう俺。

「ぼ、僕も行きます」

トシリアが俺についてきた。

「私も新型を見に行くか」

オーエン伍長がそう言ったのをお嬢さんが、

「ナリアちゃん、一緒に行こー！」

お嬢さんに飛び付かれて伍長は一瞬困ったような顔をしていたが、満更でもない風にお嬢さんを連れて歩いて行った。

「……あれ、ユキミも行く感じ？」

レイジはおもむろに二人についていった。

：この量産型、名を『FDM-G1』というらしい。

見た目は簡略化されたブレードアンテナを持ち、ツインアイはなかった。よく見ると、肩にキャノン砲を備える奴もいれば、脚部にミサイルポッドを備える奴もいれば、サーベルが二本ある奴もいた。サーベル×2に関してはツインアイもある。見た目的にはVガンダムヘキサみたいな感じだった。こいつが指揮官機だろうか？

「二本差しできるう！」

「そおだね」

隣のユキミが二本のサーベルを見てはしゃいでいた。

つーわけで、シグヌスはガンダム4機（コロナは無傷なので不要）の整備と補給物資の供給を受け、また緊急的にこの新型機『FDM-G1』5機を受領した。

シグヌスはまだ基地からは発進しないみたいで、フリータイムを満喫していた俺とユキミ。俺らは、受領した新型を拜んでいた。

「あたしあれの指揮官機に乗りたかったなあ……」

「君そもそもMS操縦できないでしょーが」

ユキミがただこねるのを諷めた俺。どうやらあの指揮官機がシグヌスのMSハンガーに無くてちよっぴりご機嫌ななめみたいだ。上層部の人たち曰く、先行量産型故に不備があるかも知れないが、ないよりはマシだろうということで一応受領したらしい。

でも、こちらが提供したガンダムのコンピューターにある例のデータベースの解析をし、それを基にして新型のOSの修正が終わったら、この5機にもそれをフィードバックしてくれるらしい。

そこに、ビリーとオーグがやってきた。

「おお、レイジー！」

「おお、ビリー。どしたい」

ビリーとオーグが駆け寄ってくる。

「いやあ〜補給物資がきて大助かりだよ。加えてG1も来たし〜」

G1で、あの量産型のことか。続けてビリーが訊いてきた

「そういえば、レイジはコロナのアレ、提供した？」

「あー、そのことなんだけどさ」

俺は話を続けた。

俺がコロナのデータを採取しようとしたところ、コロナのOSが  
そういった操作を完全に遮断しやがった。『REJECT』という  
表示が、警報音と共にコンソールで真っ赤に点滅していたのがそれ  
を示していた。どうやら、それもブラックボックスの領域らしい。

「そんなことが……」

ビリーが若干怖がっているように見えた。

乗っている俺にもわからないコロナのシステム。俺の意思に反し  
てOSが動く様子は、まるでOS自身が人工知能を持っているよう  
だと思わせてしまう。

……コロナよ、一体お前は何者なんだ？



Unit018：懐旧の宇宙（そら）（後書き）

レイジ「てなわけで、いつものアレやりますか」

ユキミ「いえーい！」

ガルマン「量産型か。あれアサルトに似てたよな」

レ「あー、そだね」

ユ「あれの指揮官機乗りたかったよ」

レ「まだ言ってるんかい！」

ガ「しかしホントにジムみたいだな、コンセプトが」

レ「軍側から見てもガンダムより量産機の方がコストパフォーマンスが高いし経済的なんですよ」

ユ「へえ」

レ「……て、作者が指摘されてた」

ガ「作者のダメ出しかよ！」

レ「っーわけで次回予告！」

ガ（今度こそ真面目なやつを……）

レ「……あ、台本忘れた」

ガ「何だよ！ ちょっとでも期待した俺がバカだった！ つーか台本とか言うなよ！」

レ「てなわけで」

レ&amp;yu「TO BE CONTINUED！」

ガ「何その新しい終わり方！？ 俺だけハブ？」

庵瑠璃「プツ、ハブとかダサ」

ガ「てめえのせいだろがあああああ！……！」

庵「うわー逃げろー」

ガ「台詞棒読みかよ！」

## Unit 019：兆し

シグナスという追手から逃れたダイオギニスは今、アレクサンドリア基地のデッキからの着艦誘導に従っていた。

アレクサンドリア基地。そもそもこの基地は、第一次MS大戦の講和条約『ブラフマー相互不干渉条約』の効力が切れたのを口火に建造された軍用要塞。便宜上、基地という名前を使っているのは、基地としての役割を指す時にそう呼ぶのである。

「……ま、ブラフマー条約の詳細については今は保留な」

とアリストが補足する。とそれにネオンが、

「……貴様、いつからそのようなキャラになったのだ？」

「え、つい5秒くらい前スかね？」

「……つい先程ではないか」

と微妙かつ不毛な会話になるのを察してか、アリスト本人が、

「……ま、ツツコミ無用ってことで」

とネオンを宥めた。

「……それはそうと、我がダイオギニスに新兵が来るそうだ」

「新兵……スか？」

アリストがネオンの話に興味を引く。

「名を、ティア・プライマというらしい」

「ティア・プライマ……？ 聞いたことないツスね……」

アリストは首を傾げながら後頭部をポリポリかいた。

「二つ名を、『黒き鬼神』というらしい」

「女で二つ名持ちスか！？ きつとただモンじゃないツスよそいつ

ア

「彼女の階級は少尉。腕も信頼はできるだろう」

ネオンが付け足したのを、

「……そういえば、隊長の階級って何スか？」

「ん、私は大尉だが」

「……初めて聞きやしたぜ」

「……そうだったか？」

ネオンが訝っていると、ダイオギニスはアレクサンドリアに完全に着艦したのか、鈍い衝撃がMSハンガーにも響いた。

「どうやら着いたみたいだな」

「……あ、隊長、アレ！」

「あ？」

アリストが指す方向には黒い機体が。

「あれ、その黒き鬼神の機体スかね？」

アリストがハンガーの隅にある小窓から、アレクサンドリアの格納庫に安置されている『インフェルヌム』を拜んでいた。ネオンもアリストに連られてインフェルヌムを眺めたところ、

「そうだ。奴こそ、かつてシュヴァルツと呼ばれた亡霊だ」

と重々しく言ったネオン。

「シュヴァルツってあの、前大戦に出てきた奴ツスか？」

「ああ。大戦後、辛うじて残存していた機体、パイロット共に回収され、強化されたそうだ」

アリストは前大戦には参加していなかった故にシュヴァルツは話題でしか聞いたことがなかったが、ネオンは参加していた。実際、シュヴァルツを目の当たりにしたのだとか。

「亡霊……ツスか。姿も相俟って禍々しい機体ですね」

インフェルヌムは、アリストの口調も自然と落ち着いてしまう程の威圧感と禍々しさを持ち合わせていた。インフェルヌムは、その鋭く赤い双眸でこちらを睨んでいるようだった。

「……ああ」

ネオンは神妙に答えた。インフェルヌムの威圧感に神妙になっっているのか、ただのそれとない答えなのかはアリストにはわからない。

「隊長、まさか、インフェルヌムに怯えてるんスか？」

アリストは少しからかうように訊く。

「何を言うか。そもそも味方の機体だぞ」

アリストのからかいをあっさりと流したネオン。

「ちえー、つまんね」

アリストはぶつぶつ言いながら自室に戻っていった。  
アリストが去った後に、ネオンは心中で呟いた。

(……確かに、敵だったら怖いかもしれんな)

ネオンは顎に手を当てながらハンガーを出た。

：シグヌスのMSハンガーにてG1を見学しているユキミと俺も  
といレイジ。ふとユキミが、

「G1って強いの？」

相変わらず舌つ足らずな声で問いかけてくる。

「東になれば強いんじゃない？」

「戦いはやっぱ数だよね！」

「……シグヌスにとっては耳の痛い話だな」

冷汗をかきながら答える。

「ま、個々のある程度の技量は必要だけどね」

それに対しユキミが、

「パイロット養成もいいけど、ここはいつそダミー ラグの方が効率よくね？」

「……この場合、どっちかつつーとモビルドールじゃね？ てゆーか伊吹 ヤがまだまだ問題があるゆうてたやん」

「それは2015年段階でしょ？ 今なら余裕っしょ！」

ユキミが誇らしげに胸を張りながら言う。だがしかし、構わずツッコむ。

「いや、向こうの2015年とこっちの2015年とは別物やん。そもそもセカンドインパクトなかったし」

と答えたが、横から、

「いや、向こうとかこっちか言うなよ！ 設定がグラつくだろう  
「！」

というガルマンのツッコミが聞こえた。

「おーガルマン。お前もおったんか」

「……お前って標準語なのか方言なのか微妙な話し方するよな」  
「なんか語呂がええねん」

と俺が答えたのをユキミが、

「ムツツリスケべはんもここにおったんべか？」  
「だからその呼び方やめろって！ しかもなんか複数の方言が混ぜてるし！」

ガルマンが相変わらずなツッコミをかますと、格納庫の方から突然爆音が聞こえた。

「なんだ!？」

ガルマンが当惑のあまり声をあげてしまっていた。

「え……あっちの方ってG1がある方向じゃない？」

ユキミがそわそわしたような顔で誰ともなく問う。

「あ……おいおい、大丈夫かよ」

ガルマンは不安げに額に手をあてる。それにユキミが重ねて曰く、

「まだOSのアップグレード終わってないんじゃない!？」

「いや、そこから心配する？」

ガルマンがこの状況に似合わないくらいに冷ややかにツッコむ。

ユキミ、絶対ヤガミ艦長よりメカ強いだろ。

「俺はシャドーで待機してる！ レイジ、今回は出るよ!！」

「んああ」

ガルマンはシャドーに駆け寄り、全開になっていたハッチをくぐった。

「……今回は出るの?」

ユキミが悲しげな目でこちらを見る。



「……ああ」

「……あたしに出来ること、ないかな……？」

ユキミが下を向く。

(実際、ないんだろうが、ないとも言えんし……)

俺は深く考え込んでいたが、爆撃はそんな猶予を与えてはくれない。

「……ユキミ、またな」

「レイジさん……」

いたいけな目で俺を見るユキミ。その目のせいだろうか、異様なまでの切なさが込み上げてきた。

「……んじゃあ」

ユキミの頭を撫で、コロナに向かった。

：その時、レイジさんに頭を撫でられた私は、なんだか力が漲ってきた感覚を覚えた。レイジさんの撫でていた手を通して……。

：コロナのコクピットに入った俺レイジは、機内の各所のスイッチを入れる。

(……こーゆー時はちゃんと動くのに)

起動時はいつも問題なしのコロナ。たまーにイカれるんだよな、コイツ。

モニターには、コロナの足下にユキミが相変わらずないたいけな目でこちらを見上げていた。

(……ユキミ……)

胸の奥から更に切なさが込み上げてくる。俺は悠長にも、ガルマンが乗るシャドーの有線通信が入るまで微動だに動いてなかった。

そして、次にユキミに会えるのはだいぶ先の話のことになるとは、俺も知る由がなかった。

シグナスでは、各ガンダムとG1五機が出撃した。

「アテナとミサイル装備は後方援護を。シャドー、アサルト、その他のG1は私についてこい」

ヴェルターが指示を下すと、G1は各装備毎に分散した。

その一方で、コロナとシャドーは。

「レイジは、友軍のルーベンス艦隊の最後の砦になってくれ」

「……つかシグナスは？」

レイジが咄嗟に質問した。

「まだ発進準備が出来てないらしい。艦砲は使えるみたいだから、他のG1と一緒にルナートの砲台を務めるそうだ」  
「何もこのコロナがんな見ず知らずの艦隊の援護をしなくてもいいだろ」

レイジはけだるげに反論する。

「出来立てのG1よりもコロナの援護能力の方が信頼性があるらしいぜ。それに、ルナートはそんな簡単には墜ちないっさ」

伝聞のような口調でレイジに説明したガルマン。

「随分俺を頼ってるじゃんよ」

「羨ましいけどな」

「じゃあお前と代わっていいよ」

淡々と言つてのけたレイジ。

「いや、その仕事、シャドーには無理だな……」

「やーい、根性無しがあゝ！」

悪ガキのような口調でガルマンを揶揄するレイジ。

「……なんかお前に言われるとすっぱー負けた気分になんだけど？」

半分冗談混じりで半ギレするガルマンだった。ヴェルターは、その二人の不毛なやり取りを注意するように、

「気を抜くな。そろそろ散開しろ」

「おっと、じゃあレイジ、ルーベンス艦隊は頼んだぞ」

ガルマンが気持ちを切り替えてレイジに言った。

「りょーかい」

レイジは若干つまらなそうに、かつ無機質に答えた。

(……いかん、またミッション前におちゃらけちゃった。はたまた何かの前兆なのか……?)

神妙な顔になるレイジ。

レイジの駆るコロナは、他のG1を引き連れてルーベンス艦隊に向かっていた。その時、G1の或るパイロットから話し掛けられた。

「……ヒイラギさんよお、アラーク中尉と仲良いんスカ？」

「……んまあ、悪くアないかな」

ラフな口調で話し掛けられたのを、胸中穏やかじゃないレイジは穏やかな口調を何とか保っている。

「……頼りにしてまつせ、アンタ」

「おいおい、傭兵に頼ってどーすんだよ」

「……それもそうだな」

ニヒルに答える一般兵。

(……はあ、連邦大丈夫かよ……)

レイジは、そのままため息をついてしまいそうな勢いで片手で頭を抱えた。

それよりもちょっと前、アレクサンドリア基地では、数多のレピドウスとインフェルヌムなどが出撃準備を終えていた。そんな中で、「プライマ少尉、準備はいいか？」

今回の出撃機の中で唯一ポーン系統機に乗るネオンが、インフェルヌムに乗るティアに話し掛ける。

「……問題、ないです」

抑揚のない声で答えるティア。

「そうか、では行くぞ」

ネオンは、宇宙用にチューンされたポーンカスタムをハッチに歩かせる。

ネオンがポーンカスタムに乗り込む前、こんなことがあった。

「ネイルバート大尉、このまま出撃なさるつもりですか!？」

「撃墜されぬ限り、私はポーンからは降りん！」

「そういうことではなくて！」

整備兵は一生懸命ネオンを弁解しようとしている。

「この背中のジェットブースター、大気圏内でしか使えないジェットエンジンはあるんですよ!？」

「わかっている」

「ならせめて、宇宙用のパーツに交換させて下さい!」

「……まあ、いいだろう」

ひどく焦っている様子の整備兵を見ていられなくなったのが、ネオンは鷹揚として彼にパーツ交換を許可したのだった。

ネオンがポーンカスタムを歩ませていると、偶然にもアリストの乗るレピドウスとばったり会った。

「隊長、そのバックパックのやつ、宇宙用のスか？」

「そうみたいだな」

ポーンカスタムのバックパックの形状は、真横に突き出た翼から縦に長いX字の羽根へと変わっていた。イメージ的にドラグナーのそれからM1アストレイのそれに変わったようなものだったが、色は依然として青のままだった。

「ちょっと身軽に見えますね」

「さあ、どうだか」

ネオンは若干自嘲気味に笑う。

「……頼りにしてまっせ、隊長」

「ああ」

アリストのレピドウスは、ネオンのポーンカスタムに続いた。ふ

と、ネオンがアリストに訊く。

「……そういえば、お前たちのレピドウスも宇宙用のパーツに置き換えられたのか？」

「そうツスね。主にスラスタ関連とかツスね。あと、ご丁寧にバランサーも調整してくれたツス」

アリストは更に付け足す。

「あと……火器の追装もしてくれたツス」

「……一体何を？」

「ビームライフルが全機共通装備になったみたいで。自分の機体にも装備されてまっせ」

アリストのレピドウスは、後部スカートアーマーにマウントされた小型のライフルを指した。

「連邦ガンダム程の出力にこそ及びませんが、ガンダムにも有効打を与えられるそうツスよ」

「ビーム兵器を量産化か……」

ネオンは神妙で、かつ哀しげな顔をする。

「……隊長も、何かしらビーム兵器を持ったらどうスか？」

「煩い！ 私はいいのだ！」

ネオンの急な癩癩にアリストは酷く驚く。

「す、すいません……」

アリストは本当に申し訳なさそうに謝る。ビーム兵器に何か嫌な思い出でもあるのだろうか、と模索してみるが、本人から聞かない限りは知る由もない。無論、今のこの雰囲気では訊けたものではないが。

「……いや、こちらこそすまなかった。我ながら、私らしくなかったな」

ネオンはなるべくアリストに気を遣わせないように謝り返した。

「いや、大丈夫ツス。……それじゃあ、行きましようか」

「ああ、遅れるなよ」

ネオンは威厳を取り戻し、アリスト機を引き連れた。続いて、ずっと無言で待機していたティアも自機であるインフェルヌムを歩ませた。

数々のレピドウスの隊列の中、インフェルヌムとポーンカスタム、ソ口専用レピドウスは色彩的に目立っていた。それぞれ、黒、青、黄色の装甲が、地味なグレーの隊列に紛れ込んでいたのである。

「……隊長、この子たち、私が動かすんですよね……？」

周辺にあるレピドウスを指しながら抑揚のない声でネオンに訊うティア。

「……ああ。頑張ってくれ」

「はい。じゃあ、行くよ……！」



すると、インフェルヌムの周辺にいた数十機のレピドウスのコー  
グル型カメラアイが鋭く光り、隊列を乱さずにインフェルヌムより  
も先行する。インフェルヌムもそいつらの後をつけるようにゆっく  
り動き出した。

この場で、動かなかった数少ないグレーのレピドウスのうちの1  
機、アリスト機。アリストは酷く怪訝そうにネオンに尋ねた。

「……ありゃ一体、何だったんスか？」

「モバイルノバディ（MN）の試作型だ。各機のOSにAIを組み  
込み、無人で機体を動かすといったシステムだ」

「……要するに、モバイルドールみたいなやつツスか？」

アリストはネオンの説明を簡潔にまとめてみた。

「……それを言ってくれるな。というより、今はプライマ少尉がM  
Nらを動かしている。モバイルドールもそうだが、寧ろビットモバイル  
スーツに近いかもしれん」

「隊長だつて言っちゃってるじゃないスか」

アリストが弱点を突くような言い草でネオンに食ってかかる。

しばらくの沈黙と硬直の後、ネオンは言った。

「ツツコミ無用だ」

「真似しないで下さい」

何となく砕けた雰囲気になったのを、

「隊長、アリスト、そろそろ……」

アリスト同様、マイノリティーのグレーのレピドウス、アン機。真横に黄色いレピドウスを連れながらネオンとアリストを宥める。

「ああ、すまん。では、行こうか」

「了解」

鮮やかなブルーをしたポーンカスタムは、残りの3機を引き連れてバーニアを吹かした。

インフェルヌムやポーンカスタム率いるレピドウス隊を除いて、他のいくつかのレピドウス隊も、ルナートやルーベンス艦隊をはじめとした連邦陣営を駆逐せんと出撃していた。

連邦も幾多のG1や戦艦を擁してUUに対抗した。

ルーベンス艦隊の一角に、レイジの駆るコロナ率いるG1の部隊が、先行隊に侵略を任せて、向かって来る敵を待ち構えていた。

(やはり、どうも嫌な予感がするな)

レイジはコロナの操縦桿をしかと握りながら神妙な顔をする。

(……)

レイジはコロナのコクピットの中、珍しく緊張する。緊張のあまり、体は微動だにしなかった。

：あ、俺か？ ネオン隊長の部下のアリストだぜい。なんか三人称視点が続いて息が詰まってきたから仕方なく俺一人称視点になっただぜ。

俺らは今、後続のレピドウス小队と合流して、隊長とソロ坊やが先頭を飛行している。ソロ坊やのレピドウスはマシンガンを排して対艦スピアーなるものに換装したらしい。見た目からして、文字通りポ モンのスピ ーの腕に柄を付けただけ、なんていうものであった。……俺の正直な感想、

「……ビームサーベルで十分じゃね？」

である。突きに特化した武装でかつ斬撃ができないスピアーははつきり言って使いづらいと思う。ソロ機にはビームサーベルがちゃんと装備されてんのにさ。軍の上層部は何考えてんだかようわからん。俺、志願兵だからあんま詳しくないのよ。

「そつえばアリスト、君の階級がついたみたいだよ」

ソロが唐突に話しかけてくる。

「……はえ？」

思わず間抜けな答えをしてしまったが、ソロは構わず話を続けた。

「そついうことだよ、コーグエン曹長」

「……俺、曹長になったのか？」

俺に階級なんてなかったのに、ちょっと嬉しいが、ソロは補足する。

「MS操縦がそこそ上手いから、だってよ」

「オイオイ、軍がそんなアバウトでいいのかよ」

「さあな」

連れないソロを余所に、背後にずっとこけそうになっていたのに気付いた俺がいた。

：そろそろ敵が近いぞ、なんて部下に怒号を散らせるレンジにま  
でいた俺たち。俺たちは、ヴェルターさんのテトラ、トシリアのア  
サルト、多数のG1、そして俺の乗るシャドーってわけだ。

「そろそろ敵が近いぞ！ 準備はいいな！」

ヴェルターさんが怒号を散らす。

「はい！」

「うす！」

などという声が返事として返していた俺を含めるパイロット達。  
すると、敵軍からだろうか、火線が飛んできた。威嚇射撃だったの  
か、幸いにもどの機体にも当たっていなかった。

「……各員の健闘を祈る。気を抜くなよ！」

「は！」

「はい！」

「了解！」

なんていう返事が聞こえた。俺も答える。

「……大尉も、お気をつけて」

「……ああ」

ヴェルターさんのテトラが航行モードで先行して敵部隊に切り込んで行った。航行モードのテトラは、スラスターの方向を後ろに集中させているため、単純なスピードはこのシャドーよりも速い。まあ、MSのが汎用性は高いが。それに続いて、少数のG1が後に続く。

俺のシャドーの後ろには、トシリアの乗るアサルトや、残ったG1たちがいた。G1がアサルトのカラーリングに似ているため一瞬間間違えそうになった。まあ、両者の違いを挙げてみれば結構あるのだが。

「中尉、来ます！」

アサルトに乗るトシリアが少し焦った風に急かした。

「おいでなすったか！」

操縦桿をしかと握り直し、フットペダルを踏んでスラスターに火を入れた。

背部スラスターから青白い炎を目一杯噴き出させているシャドー。ステルスアーマーを使うつもりはないらしい。それにアサルトや他のG1たちが続く。

(……しかし区別しづらいなあ)

カラーリングがほぼ同一のアサルトとG1の相違点は、まずは頭部のセンサー。アサルトはガンダムらしいブレードアンテナだが、G1はこめかみから縦に延びた一本のアンテナに簡素化されている。次にビームライフル。これは銃身の長短だけでデザインの大きな差はない（アサルト>G1）。そしてシールド。アサルトのは割とフラットな外見で、ビリーが装着したビームキャノンの先端がはみ出ているが、G1のそれは若干シャープになっている。

カラーリング以外は結構違っていたりするのだ。

そんなことはさておき、遂にこちらにもレピドウス隊がやってきた。すると、

「ガンダムのパイロット達よお！ ここあ宇宙だ！ てめえらが慣れる地上とは違う！ 指をくわえて見ていやがれ！」

というG1のパイロットがいた。そのG1は、シャドーをもゆうに追い越し、レピドウスに突撃した。

「迂闊だ！ あんなので、ッ！」

すると、そのG1は文字通り蜂の巣にされた。何本もの火線が愚かなG1に裁きを下した。

そのG1は呆気なく爆散した。

「……隊列を乱したらどうなるか、わかったな……？」

ガルマンは、語調を落ち着かせて仲間に行った。

「敵は侮れない。慎重にいけ」

ガルマンがそう言うと、シャドーは複合兵装ランスを右腰部から取り出し、ライフルモードに組み立て直し、ライフルを数発撃った。撃ち出されたビームは一発たりとも当たらなかったが。

(動きがいいな……)

ガルマンは苦虫を潰したような顔をしながら射撃を続ける。その中で、一つ疑問点が。

(ヴェルターさんたちが先行して足止めしてきてくれた割にはレピドウス共の装甲に殆ど傷がないな……)

そのヴェルターといえば。

宇宙慣れしている彼は、変形解除したテトラで他のG1の先頭をきってレピドウス部隊を圧倒していた。

動き回っていたテトラを一旦止め、ライフルを慎重に構える。ライフルの銃口からビームが撃ち出される。余分なビームが少しだけ銃口から漏れていた。しかしそれは正確にレピドウスを捉え、撃破した。

「これで一機……」

ヴェルターがそう呟いた時、テトラは、レピドウスでない何かはこちらに急速接近していた。

「……なんだ？ 不気味な感じがする」

ヴェルターはテトラのコンソールを弄る。接近してくる機体をモニターの小画面で拡大すると、

「ッ！？ シュヴァルツ！？ 何故ここに……！？」

ヴェルターが当惑していると、突然テトラの機内に通信が入る。

「……なぜその名を……？」

淡々とした女の子の声が機内に響く。確かに、前大戦に参加している者でも、シュヴァルツの姿のみを見てそれだと分かる者は少ない。何故なら、姿を確認した者の大半はシュヴァルツによって撃滅されているからである。

「……逆に知らぬ者はいないだろう」

と何食わぬ顔で答えておいたヴェルター。

「……ただ者じゃない」

「……ふ」

ヴェルターはティアの言葉に不敵に笑う。漆黒のインフェルヌムは抜刀してテトラに接近する。テトラはすかさず両手に持ったライフルを背部バインダーにマウントし、手首の装甲がドアのように開き、その中からサーベルが飛び出し、ピンク光の刃を形成した。

「……受けて立つ！」

テトラもサーベルを右手にインフェルヌムに突撃する。



「……」

ティアは表情一つ変えずにインフェルヌムの操縦桿を握っている。テトラとインフェルヌムのサーベルがぶつかり合い、鏝ぜり合いになる。サーベルの光の飛沫が断続的に飛散する。

「……違う。この人じゃない」

「……誰か人を探しているのか？」

「あなたには関係ない！」

インフェルヌムは力任せにテトラのサーベルを振り切り、右手に持つライフルでテトラを牽制した。

「く、狙いが的確だ」

一瞬でも操縦桿を握る手元が狂えば撃ち抜かれる　ヴェルター  
はそんな窮地に立たされていた。

「あなたと長く戦うつもりはない！」

インフェルヌムが少し後退したかと思ったら今度は5、6機のレピドウスがインフェルヌムの背後からわらわらやってきた。インフェルヌムは他の十数機のレピドウスを連れてその場を離脱した。

インフェルヌムのコクピットの中、二カ所でレピドウスの動きを（手動の操作をバイパスして）頭に被った特殊なバイザーを介して官制しているティア。

(……誰なの？ さつきから頭に響くこの感じは……？)

ティアはインフェルヌムに搭載されているサイキックセンサーを使い、その源を探った。

「ZNOG・XOXコロナ……このパイロット？」

ティアは抑揚のない声で型式番号を読み上げた。

「……待つてなさい。今、倒しに行くから」

と言ったティアの胸が少し痛んだ。

(……？ なんで……？)

それは躊躇いだった。昔の戦友なのだから……。

…さつきから胸騒ぎが止まらない俺レイジ。寧ろそれどころか激しくなっている。

(……何だ……何か、懐かしいような、苦しいような……)

周りのG1に乗ってる奴らに必至に悟られないようにしているが溜めれば溜めるほど苦しくなる。

そして遂に、根源の奴が来たのを、コロナのリーダーが知らせてくれた。リーダーは根源の奴と複数のUUの新型を捉えていた。

「敵が来るぞ！」

「こっちでも確認済みだ」

さっきのG1のパイロットが叫んだのを淡々と返した。

とその時、俺は全身の毛が逆立つほどに鳥肌が立った。

「……！ あれは……シユヴァルツ……！」

あいつが乗っていた機体じゃないか……！

「……なんでこんなことが……」

この妙な胸騒ぎもあいつのものだと分かれば頷ける。きっとあのパイロットこそ……

「ティア、お前なのか！？」

連邦の月面軍事基地ルナート。ここでは、連邦とUUの激しい防戦を繰り広げていた。シグヌスモルナートの発着デッキの出口付近で対空砲火していたが、味方がいるため、派手には撃てずにいた。ガラス張りになっているデッキの奥の個室に、シグヌスに乗りかねていたユキミが一人シグヌスが対空砲火する様子を眺めていた。

（こんなに体がムズムズしてるのに、シグヌスの私の部屋でじつとなんかしてらんないけど、何したらいいかわかんないし……）

ユキミは碧い大きな瞳を潜めた。すると、その潜めた隙にシグナスが被弾し、小爆発が起きているのを見た。

「……！　こんなの、見てられない！」

ユキミは咄嗟に走り出し、どこと無く個室から駆け出した。

：個室から駆け出して、被弾の振動を身に感じながら廊下を走ること5分。そこには、『Keep Out』と書かれた電光掲示の光が消えている扉が目に留まり、立ち止まった。

「……なんだろ？」

すごく気になるなあ。

「光点いてないからいいよね」

悪戯っ子みたいな仕草でその部屋に侵入。

すると、少し暗めの部屋の真ん中に、MSが大事そうに保管されていた。

「何これ……？　G1の指揮官機とはちょっと違うみたいけど……」

カラーリングはG1系と似てる。でも、その鋭く丸い金色のツインアイと宇宙人や鬼を思わせる後ろに伸びた頭をしていた。そして、一本の鬼の角のようなアンテナがあった。正面の顔はまるで、

「……覚醒した初 機みたい」

……それはともかく、この機体が私を呼んでる気がする。私は真っ先にその白い機体に駆け寄り、攀じ登った。私、もしかしたら口ツククライミングの才能あるかも！

G スペリオル。この白き鬼の名前だ。前大戦にてシュヴァルツと共に戦場を引っ掻き回した亡霊である。こちらは連邦に回収され、強化改造された。

また、連邦ガンダムの製造の大きなヒントとなった。

当初はG1の指揮官機として改造されたが、テストの際、なぜか起動せず、不可解なまでに大量な文字が画面に並ぶだけで、皆に不気味がられた。故にこの場所に封印したのだ。

しかしユキミは難無くOSを起動し、G スペリオルの各システムが起きていく。まるで、機体が待ち侘びていたかのように……。

：私は実は航空機は操縦できるの。急にそんなこと言われても、なんて言われてもシカトですよ。免許持つてるものは持つてんだからさ。いつ取ったかって？ 三年くらい前かな。パパがまだ生きてた時だったから……。

「……へえ〜。この機体、G スペリオルっていうんだ」

コンソールの起動画面には、

『G - SUPERIOR』

と表記されていた。なんだか、直感だけこの機体が喜んでるみたいだった。

ピーッ！

もういつでも出れるみたい。

「Gスペリオル、行きます！」

Gスペリオルは横にあったボタンで天井を開放させ、ジャンプした。そこは、さっきまで自分がいたデッキだった。

「あ、シグナスが！」

Gスペリオルのモニターには、シグナスがレピドウスに取り付かれているのが映った。

「まずいわ！」

Gスペリオルをシグナスに向かって加速させる。

「ッッ！ 間に合え、間に合えー！！！」

Gスペリオルのライフルを撃つ。黄緑の火線がレピドウスの目の前を横切る。レピドウスは構えていたライフルを下ろし、こちらを見ていた。

「……間に合った」

ユキミは一先ず張っていた肩を下ろした。

シグナスのブリッジでは。

「艦長！ 新型がブリッジ左方に取り付きました！ 対空砲火が追いつきません！」

「ツツ！」

アカネは生死の瀬戸際に立たされた焦燥と共に齒軋りさせる。

すると、そのレピドウスの目の前を横切るように黄緑色のビームが通過したのが見えた。レピドウスパイロット、ブリッジクルー両者が驚いたことは、ビームの来た方向。明らかに外にいるG1からのもものではなかった。両者がビームの来た方向を見ると、白い鬼のような機体はその鋭い金色の双眸をこちらに向けていた。

「……こちらGスペリオル、これより援護します」

シグナスのブリッジに響いた女性の声は凜としているがどこかあどけなさが残っていた。

Unit 019：兆し（後書き）

庵瑠璃「は〜い、みなさん。お疲れ様でした〜」

レイジ「はあ〜撮影終わった〜」

ユキミ「レイジさん、お疲れ様〜」

ガルマン「……って何だよこれ!?!」

レイジ「『撮影終了後の出演者たち』に決まってんじゃねーか」

ガルマン「決まってねーよ!!! つーかマジでお願いだからそーゆーのやめてくんない!? 設定がグラつくだろが!」

レイジ「つーわけで次回予告」

ガルマン「オイ! シカトすんな!」

レイジ「……えーっと、ユキミgo」

ガルマン「台本見るな!」

ユキミ「なんか随分シリアスになってきちゃったよね」

レイジ「あーヤダヤダ」

ユキミ「あたしなんかカツコつけちゃってるし」



ガルマン「自分で言うか!？」

ユキミ「でもGスペリオルカッコイイ！」

レイジ「……」

ガルマン「ん、どうしたんだ？」

レイジ「いや、スマン、何でもない」

ガルマン「……それはそうと、何でお嬢さんはあのGスペリオル起動できたんだ？」

ユキミ「うん、この話にもそれをおわせる描写はあるけどね。ちょっとわかりづらいけどね」

ガルマン「……なんかこのコーナー、ここにきて初めて真面目なコーナーになったな」

レイジ「……ぼくドラ もん！」

ガルマン「うわびっくりした！ 急に何言い出すんだよ！ しかも微妙に似てるし！」

レイジ「……っわけで」

ユキミ「次回もよろしくね！」

ガルマン「……あれ、俺の分は？」

庵瑠璃「あ、忘れた（笑）」

ガルマン「（笑）じゃねーよ！」

庵瑠璃「うきゃー」

ガルマン「……最近コイツからやる気を感じない。はぁー」

庵瑠璃「溜め息をついたガルマンだった」

ガルマン「やかましいわ！ 少し黙っとれ！」

## Unit020：白と黒の再会

ブリッジ内に凜とした女性の声が響いた。凜とはしているもの、どこかあどけなさが残っているこの声こそ、

「ゆ、ユキミちゃん!？」

アカネは目を丸くして驚く。他のブリッジクルーも戸惑いを隠せずにいる。

「ご心配なく。空を飛ぶメカを操縦する免許は持ってます」

「で、でも!」

アカネの抗議も空しくユキミの乗るGスペリオルはレピドウスに突撃していた。

「ちッ!」

レピドウスのパイロットは賢明にも後退し、部隊に紛れた。

「逃げられたか……」

ユキミは顔をしかめてライフルを撃つ。しかし、素人のユキミには動いている敵を撃ち落とすのは困難で難儀していた。

「っ、当たらない!」

ユキミのGスペリオルは中々ライフルを当てられずにいた。そこに、その部隊の小隊長らしきレピドウスがGスペリオルに急接近す

る。

「なんだ、隊長機かと思って構えたらただのアマちゃんじゃねえか  
」！  
」

レピドウスは抜刀してGスペリオルに接近する。

「わ、く、来る！」

ユキミは慌ててGスペリオルのライフルを腰部スカートアーマー  
にしまい、シールドからサーベルを抜刀した。

「ふん、アマちゃんがサーベルなどと……片腹痛い！」

とレピドウスはサーベルを勢いよく振りかぶったが、ユキミのG  
スペリオルはあっさりそれを受け止めた。

「な、なんだと……？」

「……ナメてもらっちゃ困るんだよ！」

ユキミのその声はいつもより大分低かった。

「おらー！」

Gスペリオルは鏝ぜり合っているレピドウスの胸部を蹴り、レフ  
トアームのハードポイントに装備されたシールドを振りかぶりなが  
ら間合いを離れたレピドウスに突撃した。

「ぐぐ……！」

レピドウスは苦し紛れにサーベルを構えたが、Gスペリオルはその構えたライトアームをシールドの先端で突き、サーベルを取りこぼさせた。Gスペリオルは休む間もなくレピドウスに上段回し蹴りをかます。レピドウスのヘッドカメラが粉碎し、頭部の装甲も大きく凹んだ。

「コイツ……なんなんだよ！ 急に動きが！」

ひたすら混乱しているレピドウスのパイロット。射撃戦に持ち込もうと間合いを離すが、

「逃がすもんか！」

Gスペリオルは核分裂エンジンの肩書に劣らない機動力で、間合いを離そうとバックブーストするレピドウスを追う。その時、レピドウスのパイロットが、

（この隊長機のパイロット……女？）

訝る目でGスペリオルを見るUUパイロット。

「……くッ！ 俺が……女なんかに！」

使い物にならなくなったメインカメラから補助カメラに切り替え、レピドウスのライフルを撃つ。Gスペリオルはシールドを前に構えながら突撃を続けた。

「ッ、このじゃじゃ馬が！」

「誰がじゃじゃ馬よ……！」

Gスペリオルは右手のサーベルを振りかぶる。レピドウスはライフルを持ったまま必死に回避した。

しかし、Gスペリオルは左手も抜刀していた。

「これでとどめよ！」

左手のサーベルを振りかぶる。すると突然Gスペリオルのレフトアームが止まった。レピドウスの味方機がワイヤーでGスペリオルのアームを捕縛したのだ。レフトアームが引っ張られる。

「ちい、こんなの！」

Gスペリオルはサーベルを持った左手のマニピュレーターを回転させ、サーベルを風車のように回した。サーベルが一瞬にしてワイヤーを溶断し、捕縛が解けた。

「馬鹿な！ 自ら捕縛を解いただと!？」

捕縛したレピドウスのパイロットが驚愕していた。Gスペリオルは尚もレピドウスに突撃する。

一方、アテナのいる砲撃部隊はルーベンス艦隊の一步手前にいるのだが、ティア率いるレピドウス隊に回り道され、次のソコ率いるレピドウス隊とかちあい戦闘に入った。

「今日も来たか、黄色い新型……!!」

アテナに乗るナリアはキツと目をしかめた。

「砲撃隊、敵が来た！ 2号機も頼んだぞ」

G1の指揮官機がアテナに寄った。

「あまり期待はするな。私の荷が重い」

「何だと？ ……まあいい」

指揮官はナリアの生意気な態度にムカツときたが今はそんな状況ではないと思い直し、敵の殲滅にあたった。

ナリアはランチャーの照準を敵に合わせてようとした。

(ッ、やはり宇宙は慣れない。参ったな……)

なかなか照準を定められずに難儀しているナリア。

(……不本意だが、ここは機械に頼ろう)

ナリアはターゲットロックシステムをマニュアルからオートに切り替えるべくキーボードを片手で弄る。

(……この私が機械に頼るなど……)

慣れない宇宙の環境は、ナリアの射撃スキルのプライドをも凌駕していた。

(……とりあえずは切り替わったか。あとは私の問題だな……)

オートのロックシステムに馴染むだろうか。そんな杞憂を抱えつ

つ再び照準を合わせる。

(流石にこちらの軸と合っている敵は狙いやすいな)

要するに、こちらから見て横に動いていない機体は直ぐに定まる。ナリアはトリガーを引く。ランチャーは確実にレピドウスを撃ち抜いた。

「次は」

ナリアは直ぐに次のターゲットを捜す。たまたま見つけた機体は今度は軸が合っていないかった。

(ッ、アテナ、照準が甘いぞ……！)

ナリアは、地上では動いている敵でも敵の数秒後の動きを長年の勘で予測して自機とターゲットとの距離から体感で逆算した上で進行方向に向けて撃ち、ターゲットを撃ち抜いていた。だが宇宙は360°の行動範囲がある。慣れていない宇宙では数秒後の敵の動きが予測できず、その感覚があまり活かせずにいる。ナリアは自分の不甲斐なさや機械の照準の甘さに対してもどかしさが込み上げていた。そんな中で、黄色いレピドウスがアテナに突撃してきていた。

「2号機！ 今日こそはッ！」

ソロが罵声を吐く。

「……執念深い奴だ」

ナリアは半ば呆れながらアテナに肩部ミサイルを撒かせた。



「地球ではこんなもんじゃなかっただろう、2号機！」

黄色いレピドウスが回避運動をしながらソロが叫ぶ。その叫びにナリアが心中で答える。

（私だって、こんなもんじゃ………！）

ナリアが歯軋りさせながら操縦桿をしかと握っていた。ソロ専用レピドウスの猛攻を必死に受け止めていた。

（ち、このウザったいスズメ蜂が！）

ナリアは黄色いレピドウスをそう呼んだ。

「ふん、これで終わりだあ！」

ソロのレピドウスは先端がビームを帯びたスピアーでアテナを刺そうと突撃した。

「ッ、なめるな！」

アテナは、まだ弾薬の詰まっている脚部のミサイルポッドを無理矢理外し、正面から突撃してくる黄色いレピドウスに向かって投げつけた。

「ッ！？」

気付いた時には既に遅し、ミサイルポッドはレピドウスにヒットし、弾薬の詰まったポッドは大爆発を起こした。

「ぐうあああああ！！！！」

レピドウスも無事ではなく、胸部を中心に装甲がクレーターになっていた。

「とどめだ！」

アテナが大破したレピドウスにランチャーを向ける。トリガーを引こうとしたその時、ランチャーの銃身に火線が横切った。

「……ちいッ」

アテナは使い物にならなくなったランチャーをほっぽりなげた。ランチャーが爆破した。

「ぐう！」

その爆風にアテナが煽られる。

アテナのランチャーを撃った本人こそ、

「ソロはやらせない！」

アンであった。

「おのれ、よくも邪魔を……！」

アテナは肩部ビーム砲と、腰部から取り出したビームガンを連射した。

「狙いが甘いわね」

アン機は淡々とアテナの弾幕をすり抜けていた。

「ちい……」

ナリアは苦虫を潰したような顔をする。

レイジはシュヴァルツ、いや、インフェルヌムに対して昔の戦友の名を呼んだ。

「……誰なの？ 私を知ってるの？」

ティアは、不安そうな、興味がありそうな声で答える。

「……あれ、人違い？ んなわけないよね？」

レイジが間抜けな声で確かめる。

「そう。あたしはティア。でも、あなたを知ってる気がする」

「……おいおい、いろんな意味でがっかりだぜ。忘れられてるわ、UUにいるわで」

レイジは胸騒ぎが止んで落ち着きを取り戻している。

「……ッ！？ まさか、レイジ……！！？」

ティアは目を見開いて驚いている。

「やっと思い出したか」

「何で、何で連邦にいるの!?!」

ティアは頭ごなしにインフェルヌムを突撃させ、サーベルでコロナのサーベルとぶつかり合った。

「……君に会ったためさ」

「え?」

ティアは呆気にとられたような顔をしていた。

「聞こえたんだ。君が宇宙<sup>ぶそ</sup>で苦しんでるって」

「苦しんでる……苦しい……?」

ティアはレイジの言葉を咀嚼するように復唱した。

「あッ、あああああああああああ!?!」

「お、オイ! ティア!」

レイジはティアの唐突な絶叫に思わず声をあげる。ティアはうずくまる。

「……敵……敵八、倒ス!」

ティアの機械音のような声と共にインフェルヌムの目が赤く光り、鐔ぜり合う力を強める。

「ッ! どうしちゃまったってんだよ……!」

コロナはインフェルヌムと鏢ぜり合っているサーベルをバチツという音と共に離し、間合いを取った。

(……まさか、UUの人形にでもなっちまったのか……？ 様子が少し変わってたしな……)

レイジは持ち前の洞察力を戦闘中に働かせた。インフェルヌムは血に飢えた猛獣のような動きでコロナに迫る。

「ティア……君には絶望した。ただひたすらに牙を見せる下等な猛獣に成り下がったことにな」

レイジの落ち着いた声と共にコロナはインフェルヌムのサーベルを受け止めた。

「君は黒き鬼神なんていう高尚な通り名があったじゃないか。君が黒き鬼神のままなら、俺……白き鬼神がわかるだろう！」

レイジが叫ぶと、コロナは力任せにサーベルを押し返し、鏢ぜり合いを解いた。

「痛い……頭が痛いよお……」

ティアが弱々しい声を出す。

「……ティア」

とレイジが呼びかけたところに、

「プライマ少尉はやらせん！」

ポーンカスタムが増援にきた。

「あれアンタ、その声あん時のポーン」

「ふ、覚えていてくれたか。若造よ」

ネオンの声と共にポーンカスタムが実体剣を振りかぶり、コロナのサーベルとぶつかり合う。

「前回はいなかったが、今回は出撃していたか」

「うちの陣営が危ないからな」

レイジは平静を保っている。

「……ん、今回はあの小娘は一緒じゃないのか？」

「残念でしたあゝ」

「む、カンに障るな……」

あつかんべ、なんてしそうな顔で言ったレイジに引つ掛かりを覚えたネオン。

「まさかロリコンだったとは知らなかったわ」

「何を言うか！ 顔も知らないのだぞ！？」

ネオンは激しく否定する。

「だからティアのことも。納得だわ」

「ち、違う！ それは部下とし……ん、何故貴様が少尉を知っている？」

ネオンは核心を突くような言い方でレイジに訊く。鏝ぜり合いはどちらも緩めないまま。

「……知り合いだが」

「うつむ……」

ネオンは考え込んだ。

「黒き鬼神の少尉と知り合いとは、貴様、何か訳ありだな？」

「……よくわかったな。でも教えねえ」

レイジはごく淡々と saying のけた。

「ふ、気になるな」

「人の過去ほじくるなんざ野暮だぜ」

「……そうか、そういうことか」

「そう、そういうこと」

「……」

「……」

ネオンとレイジはなんとも不毛な会話になったのに気付く。お互い二の句が継げないのだ。

コロナとポーンカスタムは鏝ぜり合ったまま。

(……このままティアを連れ込んでもいいが、どうもそれは憚る。なんでだろう……?)

それは暗示だった。

過去に囚われてはいけない、という……。

レイジはそんなティアの心からの訴えを、本人は無自覚で受け取っていたのだった。

Gスペリオルはねらいの小隊長が乗るレピドウスに中々間合いを詰められずにいた。それもそのはず、味方のレピドウスが進撃の邪魔をしているからだ。

「もう許さない！　じゃじゃ馬って言ったあん畜生！」

ユキミが本音丸出しで罵声を吐きながらGスペリオルは邪魔するレピドウスを除けた。

「ううあッ！」

「あッ！」

レピドウスパイロットは次々とGスペリオルに跳ね退けられる。血気盛んなユキミが駆るGスペリオルだが、実はまだ不殺である。戦闘不能機（腕が切断されている、もぎ取られている、あちこちの装甲がベコベコに凹んでいる、など）は一定数あるものの、Gスペリオルによって撃破された機体は未だない。しかしそんな中で、

「あッ！」

ユキミがGスペリオルのモニター越しに見たものは、その小隊長



機がシグナスのブリッジに取り付いていたというものだった。

「動くな、じゃじゃ馬」

「誰がじゃじゃ馬よ！ この馬鹿！」

小隊長の言葉にキレるユキミ。

「じゃあこいつらどうなってもいいのかな？」

小隊長のレピドウスはシグナスのブリッジにライフルを向ける。

「……じゃああたしがどうすればいいのよ」

ユキミはいくらか落ち着いて小隊長に問う。

「お前もろとも、その新型を頂こうか」

小隊長の乗るレピドウスはライフルを持っていない左手をGスペリオルに差し延べる。

「あたしが人質になるってこと？」

「おお、思ったより賢明だね、お嬢ちゃん」

小隊長は皮肉を込めて言った。

「何よ』思ったより』って！ ホントこいつデリカシーのデの字もない！」

ユキミはいつになく頭に血を昇らせている。

「で、どうするんだね？」

小隊長は完全に勝利者気分でユキミに問う。

(……ビリー君、オーグ君、副艦長さん……)

シグヌスに残った思い入れのあるクルー達の顔がユキミの脳内に浮かぶ。

「……いいわ。その話に乗るわ。でも条件がある」

ユキミが声を低くして言う。

「それはなんだ？」

小隊長がユキミに問う。

「全軍に撤退させよ」

「……ほう、自分がヒーローになるってか」

「失礼ね！ あたしはヒロインよ！」

「そういう問題なのか!？」

「ホンツトデリカシーがないんだからコイツ！」

ユキミがマジギレする。

「……そうか、わかった。では一旦撤退させる」

周囲のレピドウスはGスペリオルを取り囲み、連行した。

「ちょっとアンタ達！ 軍人のくせに女性をエスコートすることも

知らないの!？」

「え、いやあ……」

女性が乗っていてもあくまで相手はMSである。レピドウスパイロットが困惑するのも無理はない。

「ああ、Gスペリオルが……」

「あんな女の子が人質にならなくてもよかったのに……」  
「俺たち、何もできなかった……!」

G1のパイロットたちは自分たちの無力さを嘆いていた。シグナスクルー達もそうだった。宇宙慣れしているパイロットの乗ったG1と同じく新型であれば勝てるわけがなかった。そんな中でもイキのよかったGスペリオルに頼るしかなかったのだ。

ナリアの駆るアテナはアンのレピドウスの対応に困っていた。

「く、すばしっこい鼠が!」

ひたすらミサイルを撃つアテナだが、中々引っ掛かってくれない。今度はレピドウスがライフルを撃ってきたのをさっと避ける。

(く、このままでは不利だ……どうにかせねば……!)

ナリアは焦り目をしかめた。しかし、ナリアのその焦る目に信号弾の光が見えた。

「……敵軍の撤退命令か？」

ナリアはいくらか気持ちを落ち着けて言った。レピドウスが撤退してゆく。

それに際してナリアは自機の状態を確認する。

「装甲損傷率27%、エネルギー残量……サブジェネレーター5%、メインジェネレーター21%……か」

：被弾には細心の注意を払っていたため損傷は大したことないが、どうやらエネルギーを無駄遣いしたようだ。深追いはよそうか。  
シグヌスに通信を入れる。

「アテナ、これより帰還する」

「了解です、お気をつけて」

返事を受け取り、アテナを帰還させた。

コロナとポーンカスタムの一騎打ちは互角でどちらも引けをとらなかつた。

「貴様、見たところ地球人だが、その割には宇宙慣れしているな」  
「……ふん」

レイジは素っ気なく答える。するとその時、ポーンカスタムの後方に信号弾が打ち上げられた。

「……撤退か？」

「何かの罠か？」

「いや、私もわからん」

ネオン、レイジ両者が疑問符を浮かべた。

「……まあいい。今回はお預けだ、コロナー！」

ポーンカスタムはインフェルヌムを掴み、他のMNたちと共に撤退した。

(MNのシステムがオートに切り替わっている……少尉には負担が大きすぎたか)

ネオンはティアの乗るインフェルヌムを憐れみ、黙り込んだ。

ぼつねんと残ったレイジは何か考え込んでいた。

(なぜだ……なぜ連れていかなかった……！もう目の前だったのに……！)

操縦桿を握る手がわなわなと震える。

「くっそうー！」

…もどかしさからくる怒りの余りモニターをガン、と殴ってしまった。すると、

「……撤退しやしょう……」

さつきも話し掛けてくれたG1パイロットからの接触通信がコロコロ機内に響く。気を遣ってくれているのか、ちよつと遠慮気味に言ってきた。

「……ああ、すまない。取り乱した」

第三者の存在が素晴らしいと思った瞬間だった。気持ちを切り替え、シグナスに帰還した。

ヴェルターに乗るテトラは6対3の無勢を強いられていた。後からG1の指揮官機と一般機が1機ずつ来てくれたが、2対1を強いられやはり不利だった。しかしある時を境にその6機の動きがどこか規則的になり、ヴェルターをはじめとした連邦パイロットたちはコツを掴み、6機とも撃破した。

「……よし、では他の部隊の増援に向かうぞ」

「はっ、大尉」

「了解です」

と意気込んだところに、遠くで信号弾が放たれているのが見えた。

「……撤退なのか？」

「そつみたい……ですね……」

上司部下共々呆気にとられたような態度で信号弾を見つめる。3機はおもむろに撤退した。

シグナスに帰還した各機MSたち。まずはじめにアテナが帰ってきた。

「あ……お疲れ！」

ビリーがぎこちない明るさをナリアに見せる。

「すまない、ランチャーを撃ち抜かれてしまった……」

「まあ、戦争にはそのくらいは付き物さ」

ビリーは何とか明るさを保っていられた。

そんな感じでMSパイロットたちを出迎えたが、最後に帰って来たレイジには隠し通せなかった。

「ああ、お帰りい」

「ここまではまだ平気。」

「……ああ、ビリーか」

コクピットから出てきたレイジがバイザーを外す。いつもとは違うよそよそしいビリーの態度にレイジが訝る。

「んん、どした？」

「いや、別に……」

ビリーは言えずにいた。

「？」

レイジは首を傾げた。まあいいか、と視線をあさつての方向に向ける。

「そつえばユキミがないな」

レイジのその何気ない言葉はビリーを十分に苦しめられた。

「ツツツ……！」

ビリーは今にも泣きそうな顔でMSハンガーから出て行ってしまった。

(……………まさか……………！？)

レイジは焦燥に駆り立てられたような、しかし無表情でMSハンガーから出る。向かう先はブリッジだった。

シグヌスメインブリッジ。そこは部屋じゅうが重苦しい雰囲気で包まれていた。誰も口を開けようとせず、誰もきびきびした仕草をしない。

その雰囲気をつつ切つたのは、乱暴にドアを開けたレイジだっ



た。

「……艦長、ユキミをどうしましたか」

レイジの顔は前髪で隠れていた。

「……ユキミちゃんは……UUの捕虜に……」

アカネは声を絞り出すように答えた。レイジはアカネに言葉をぶつけた。

「あいつが……何故ですか！」

レイジはアカネに何とか感情を抑えながら、しかしそれが少し漏れ出ているように問う。

「いつの間に……軍の機密のMSに……」

「いつの間になって……んでそんなに無責任なこと言えんですか！」

レイジは義憤に駆られたようにアカネに罵声を吐く。

「この艦には居なかったの！ だから……」

「……ッ！」

レイジはぶっきらぼうに早足でブリッジから出た。

彼は自室に戻った。そして頭に左手をやる。

「……くっ、だから言ったのに……ついて来るなど……！」

頭を抱えたその左手で頭を掻きむしる。

(……情けねえ……ティアも、ユキミも……！)

レイジはその左手をわなわなとさせる。

その時、レイジのケータイが鳴った。

「……何だ、こんな時に」

落ち着いた語調で机の上に置いてあったケータイを取り出す。  
宛名はユキミだった。

(ユキミ……？ メールできるほど余裕なのか？)

レイジは逆に訝しさすら覚えたのだった。

ダイオギニスMSハンガー。そこに場違いな程に白いMSが多数のレピドウスに囲まれながら着艦した。Gスペリオルである。

「降りろ」

先程の小隊長、アラン・ドリユフス中尉はレピドウスを降り、Gスペリオルのコクピットに向かって銃を向ける。他の士官達もその様子を見守る。Gスペリオルのハッチが開き、ユキミが出てきた。出てくるなり、皆が仰天する。

「ノーマルスーツを着ていなかったのか!!?」

「だってめんどくさかったんだもん」

「宇宙では自殺行為だぞ!？」

ユキミはロングTシャツにジーパンというボーイッシュな恰好をしていた。

「機体を調べさせてもらおう」

ドリユフスがGスペリオルに入ろうとする。

「好きにすれば？」

ユキミはこんな状況でも泰然自若としていた。それに癪が触った一士官がいた。

「女のくせに生意気なんだよ!」

その男士官はユキミに殴り掛かろうとする。

「……ふん」

ユキミは何食わぬ顔でさっと正拳を避け、逆に一士官の鳩尾に蹴りを入れた。

「ぐおおッ……!!」

男士官は大きくよろけ、とどめに脳天ひじ鉄を喰らわせる。

「おぶっ！」

地面に叩きつけられ、昇天する。

「おのれ、少尉をよくも！」

残りの数人の士官たちが一斉に襲い掛かる。

「卑怯者どもが！」

ユキミの罵声と共に数人の士官たちは一気に倒れた。ユキミは先頭の士官に足払いしていた。

「つたく、男の風上にも置けない！」

ユキミは数人の士官全員の股間を蹴り、その辺一帯は屍の山となった。そこにドリユフスがユキミを呼ぶ。

「おい女！ 起動しねーぞこいつ！」

「ああ？ 貸してみ」

ユキミはつかつかとGスペリオルに歩み寄り、コクピットをドリユフスと代わった。

「しかしインフェルヌムと似てるなあ、コイツは」

ドリユフスはGスペリオルを仰ぎながら言う。ユキミはシカトし、起動操作をやめない。

ドリユフスがGスペリオルのコクピットに再び入ってみる。

「どれどれ」

「あッ！ 何してんのよ！ アンタが入って来たせいで消えちゃったじゃない！」

「は？ どういうことだよ？」

「どういってもこういってもないわよ！ 早く出てってよ！」

ユキミが無下にドリユフスを追い払う。

「何だと！？ このじゃじゃ馬が！」

「誰がじゃじゃ馬よ！ 私は鬼ババよ！」

「そっという問題なのか！？ ええい、離せこのアマ！」

ユキミとドリユフスがコクピットから出て取っ組み合いの喧嘩になる……のだが、ユキミが掴んでいるのは胸倉でもなく首でもなく頬だった。

タタタテヨコヨコ丸描いてチョン！

をエンドレスでくらわせていてドリユフスがものすごい顔になっている。

「ふにゃけんなこによアマア！」

と若干意味不明な言葉でユキミに抗議するドリユフス。そして、容赦なくユキミの手を振り払った。

「あぁッ！」

「こんの！ さっきはよくも！」

ドリユフスは正拳をユキミに繰り出すのが、ユキミは鮮やかに避けた。

「甘い！」

ユキミはドリユフスに回し蹴りをした。すると頬にクリーンヒットし、ドリユフスの口から血が吹き出した。

「……ッ……！」

ドリユフスは大きくよろけ、口の中に貯まった血を吐いた。すると数本の歯も一緒に出てきた。

「え……マジかよ……！」

合計四本。25歳の若さにして一気に四本失ったのである。ユキミが明るく言った。

「次も四本折っちゃうゾ」

(……怖え……)

しかし、ドリユフスは軍人として退くわけにはいかなかった。

「折れるもんなら折ってみろ！」

と拳を振るうが、

「女子供に熱くなるな」

というネオンの声が聞こえた。アリストも一緒である。

「し、大尉……！」

拳をとりあえず止めるドリユフス。

「暴力ではなんの解決もできん」

「……いや、てか、逆に中尉がやられてますよ？」

アリストがネオンの言葉に疑問符をつける。ユキミは無傷だがドリユフスは口の周りに血を滲ませ、さらに彼の足元には血の付いた四本の歯が落ちていた。

「……この歯、中尉のものか？」

「このじゃじゃ馬、なんとかして下さいよ」

ドリユフスはユキミを指差しながら嘆く。

「誰がじゃじゃ馬よ！ 鬼ババだって言ってるでしょ！」

「だからそういうもんだ……いって……」

ドリユフスはユキミに蹴られた頬を押さえる。

「はあ……軍人のくせに情けない」

ネオンはその場を立ち去ろうとするが、

「ねえ、おじさん」

ユキミはネオンを引き止めた。

「おじさんじゃない、ネオンだ」

ネオンはそう言いながらユキミに振り返る。

「もしかしておじさん、地球でコロナと一騎打ちした人？」

「……ああッ！ 貴様こそ、あの時男と一緒にいた小娘か!？」

「小娘じゃない！ コキミ!」

コキミは頬つぺたを膨らませる。

「あれ、隊長。このお嬢さんと知り合いッスか？」

「いや、その……」

「知り合いだね!」

「ええ?」

コキミがネオンにちょこんと詰め寄った。ネオンはきよとんとしていた。

「隊長。こんな純粹そうな女の子、いつの間に口説いてたんですか?」

「違う! 断じて違う!」

「え、違うの……?」

コキミは知り合いということを否定されたと思って目に涙を浮かべる。

「ほら隊長、あの子泣いちゃいそうですよ」

「違うと言っているだろう! 貴様も誤解を招くようなことを言っ  
な!」

ネオンはアリストとコキミに罵声を吐いた。

「う……うえええええん!!!」



ネオンに罵声を吐かれてユキミは泣き出した。

「な、な……」

ネオンは目の前にいる少女に泣かれて慌てていた。

「知り合いだって思ったのに……頼れる人だと思ってたのに……  
ヒドいよぉ……」

ユキミはネオンに泣きついた。

「……」

ネオンはどうしていいかわからずにただ目の前で泣いているユキミを見ていた。

「隊長、男見せて下さいよ」

アリストはネオンを後押しした。

「……泣かせて、済まなかった。何かわからないことがあったら、  
私に頼っていい」  
「ホントに!？」

ユキミは泣くのをやめて希望に満ち溢れた顔でネオンに振り返る。  
ネオンは無言で頷く。

「わぁい！ よろしくね、おじさん！」

ユキミはネオンのがっしりとした手を、その白い手で握る。

「おじさんじゃない、ネオンだ」

「もうネオじさんでいいよ」

「よくない！」

ネオンがムキになる。

「……大尉、その女との関係はなんですか？」

ドリユフスは自分達には全く懐かなかったユキミがネオンにはかなり懐いてるのを見て疑問に思った。

「……一度会ったことがあるだけなんだが……」

ユキミは握った手を離そうとしない。

「……隊長、行きましようか」

アリストがとりあえずユキミに掴まれたネオンを誘導する。

ドリユフスはぼつねんと屍の山の中に取り残された。

「……何なの？ あの女？」

泣きそうな目をしながら、屍の山の中で誰ともなく呟いたドリユフスだった。

廊下を歩くアリストとユキミを連れだしたネオンはユキミのネオンに  
対するあまりの懐きように彼女への処遇に困っていた。

「……どうします、隊長。この子、隊長と一緒に居た方が大人しい  
ですよ。懲罰房にぶち込んだ日にや冊が木っ端微塵になりまっせ」

「あたし鬼ババだもん」

「いやだからなんで鬼ババにこだわるの？」

アリストはユキミがルンルン気分で答えたのにすかさずツッコミ  
を入れる。

「小学生の時のあたしのあだ名なの!」

「それ嬉しいのか？」

アリストがユキミの言葉に訝る。

「じゃじゃ馬よりはいい!」

「そーなのか!？」

アリストが酷くびつくりする。

「あなたは何者？ おじさんの部下？」

ユキミがアリストに問う。

「ああ。アリスト・コーゲン曹長だ。隊長は命の恩人だ」

「命の恩人？」

ユキミは無垢な眼差しのまま首を傾げる。

「俺がまだ軍人じゃなかった時だった。敵襲でコロニーから逃げ遅れそうになった時、MSに乗った隊長が落ちてくる瓦礫から守ってくれたんだ」

アリストは話を続ける。

「けどもうシャトルは発進してたし、逃げ道がなかったんだ。それで隊長は俺をコクピットに入れて脱出して、んでこのダイオギニス乗員になったわけよ」

「さっすがおじさん！ 優しいんだ」

ユキミは握ったままのネオンの腕をブンブン振り回す。

「こら、私の腕で遊ぶんじゃない」

「ぶ〜」

タラコ唇にして不機嫌そうにするユキミ。

「この子、表情豊かッスね、隊長」

「ああ、そうだな」

そう答えたネオンは不思議にも嫌な顔はしていなかった。

「おじさん、あたし……もっと強くなりたい！」

「……ん？」

ネオンは突然のことできょとんとしてしまった。

「おじさんみたいに、接近戦もつと強くなりたい！」

「おじさんじゃない、ネオンだ」

「……伝授してくれないの？」

ユキミは上目遣いでネオンに悲しげな視線を送る。

「うむ……君は体を動かすのが好きなのかね？」

「うん、大好き！ 楽器はカスタネットしかできないけど、スポーツならなんでもできる！」

「カスタネットって……」

アリストが冷汗をかく。

「うちん家なんか金持ちらしくてさ、『資産家の娘がピアノもバイオリンも弾けないのは恥ずかしいことです！』なんてうちのおばばが言っただけど、やってらんないし！」

ユキミが本音丸出しで二人の野郎に打ち明けた。

「……君、ホントに資産家の娘？」

「あまりに奔放すぎるが……」

アリストとネオンが訊う。

「……今はね。昔は違ったの。三年前まではね」

ユキミが下を向きながら答えた。その様子にネオンとアリストは目を見張った。ネオンはそんなユキミに、

「……すまない。余計なことを訊いたな」

「う、ううん、いいの！」

ユキミは強引に明るさを戻した。

「……ならいいのだが」

「……あたしはおじさんの過去は無理に聞かないよ。人には自分の心に留めておきたい過去を何かしら持つてるもんね」

ユキミは珍しく真面目な顔でネオンに言った。アリストとネオンは二人とも思った。この子はただのおてんばな子ではない、と。

「あたしも話したい時に話すから、おじさんも話したくなったら、あたしでいいんなら、話してね」

「……わかった」

ネオンも真面目な顔で答えた。するとユキミが、

「……うーん、話しちゃってもいいかな」

ズデッ！

なんていう音が飛び出してきそうな転び方をしたネオンとアリスト。

「んじゃあ、話すね」

ユキミは語り始めた。

「……ていうことなの」

「『ていうことって、どーいうことだよ』……て読者の意見をを代弁しちゃったりして」

「いや、読者とか言うな！」

アリストのおかしな発言にツッコミを入れるネオン。

「詳しくは後述ってことで！」

「後述とか言うな！」

『T o l e i j i』

件名：あたしは無事よ！

Sub：心配かけてごめんね。あたしは今ネオンおじさんのところでお世話になってるから、頼れる人だからとりあえずは心配無用だよ

それで、ちょっと言いたいことがあるからここに綴るね！

三年前のID197.3.27まではあたしは今のサイン家にはいなかったの。それまでは、実父と二人で暮らしてたの。要するに、男手一つで育つたの。だからあたし金持ちの娘らしくないの（笑）でもその三年前のベークキッドのテロでパパがニュータイプの疑惑をかけられて、あたしを庇って……死んじゃったの。それから今の伯母の家に引き取られたの。

パパはね、白い髪をしてたの。いつもはけだるそうな目してたの。だから初めてあなたと会った時、パパにそっくりだなんて思ったの。なんか親近感が沸いちゃって。……ごめんね、一方的だよ。でも、絶対に貴方のもとに戻るから。待っててね。

お返事、待ってます！」

ピッ

ユキミは画面を確認した後ケータイを閉じた。

（レイジさん、大丈夫かな……？）

不安げになるユキミ。ユキミがアリストやネオンに話したことはメールの内容とほぼ同じだが、実際話したのは事実のみ。父親が死んでサイン家に引き取られたところまでである。

ケータイをベッドの枕元に置くと、ネオンがドアを開けた。

「……サイン捕虜、同居人を紹介する」

「その呼び方やめて。ユキミがいい」

ユキミの部屋の玄関口にきたネオンに呼び方を変えるように言った。

「……ティア・プライマ少尉だ」

ネオンの後ろからひよこっつと出てきた少女。ユキミよりも背が低く、セミロングの濃いめの金髪をしたティアだった。

「……」

「……」

二人の間に沈黙が流れる。

「……よろしく……」



「よろしくねッ」

ティアの方から挨拶し、ユキミも明るく返事をした。

「では、ゆつくり休んでくれ」

「はあい」

「……おやすみなさい」

ユキミとティアがネオンの言葉に返事する。

ユキミとティアはテレビを見ている。付けたのはもちろんユキミだが。二人はベッドで仲良く抱き枕を抱えながら歴史ミステリー番組にかじりついていた。

ティアはユキミに比べて濃い金髪をしていて、髪の毛も肩くらいまでで短い。

「『ラグランジュ0でガンダムシルヴィアスが発掘された』……だつて。ガンダムシルヴィアス、知ってる？」

「……うん、知ってる」

ティアは首を縦に振った。

「どんなガンダムなの？」

ユキミは興味津々でティアに問う。

「……昔、コロニーの人たちが……所謂厄よけの象徴として造られたの」

「厄よけ？」

ユキミが無垢な顔をティアに向ける。

「……その昔、コロニーでは特有の病が流行ってたの。それで、この『ガンダムシルヴィアス』に厄を焼いてもらって、もう一方の対になる『ガンダムヴァイズノート』に自分たちの新世界を創ってもらおう……という信仰が生まれたの」

「へえ、すごい！ ガンダムは神様のような存在だったんだね！」

ユキミが手を合わせて驚嘆していた。

「……ガンダムは神そのもの。絶対の存在だったの」

「……んで、もう一方のガンダムヴァイズノートは……？」

ユキミがまたもティアに尋ねる。

「ガンダムヴァイズノートはとくにコロニーが見つ付けてるけど、その後どうしたかは知らない」

ティアは下を向いた。

「ふうん……」

ユキミは再びテレビにかじりついた。下を向いていたティアもユキミにつられてテレビを見た。ユキミは再びティアに質問する。

「ねえじゃあさ、連邦のガンダムは何なの？」

「何なの……って？」

ティアがユキミの質問に首を傾げる。

「ガンダムはコロニーの人々にとってはそんなに崇高な存在なのに、連邦のはどうみても兵器以上のものには見えないけど……？」

「……あれはさっき言った2機のガンダムの……」  
「パクリ？」

「……近いかも。地球の人たちは連邦の5機のガンダムに希望を寄せているみたい。けどU.U.は、コロニーはその存在を認めない。神への冒瀆だ、と」

その時、ユキミはある歴史の授業を思い出した。偶像崇拜を禁じる宗教は何故それを禁じるのかを。

神は唯一無二の存在、しかし、それを象った偶像は描く人によってそれぞれ。

とりわけ一神教の宗教では、そんなことがあつてはならないのだ。とどのつまりは、同じ信者達の中で対立が生まれてしまうのである。

「偶像崇拜の盲点だね」

「……そう。特に、コロニーの人たちはガンダムに対する固定概念が強いから……」

ティアは淡々と答える。ユキミはそんな淡々としたティアの態度が引つ掛かり、質問した。

「ティアちゃんは連邦ガンダムについてはどう思う？」

「……敵。それ以上でも以下でもない……」

ティアの意外な答えに虚を突かれたような顔をするユキミ。ティアはそんなユキミの様子を見て。補足するように二の句を継ぐ。

「私……戦うためのだけの存在だから……」  
「戦うためのだけ……？」

ユキミは不安になる。ユキミは即座にティアの言うことを否定した。

「そんなことないっ！　だって、ティアちゃん、あたしにいっぱい教えてくれたもん！」

「ユキミ……ちゃん……？」

「……たった一つの目的で生まれた人間なんて、いないよ」

ユキミは優しい目でティアを諭す。

「……あり……がとう……」

ティアは恥ずかしげに下を向いてしまった。ユキミはつぶつぶと笑い、再びテレビにかじりついた……かと思うと、ユキミは思いついたように更に質問する。

「え、じゃあコロナは何なの？　あれもその『ガンダム神への冒険』になるんじゃない？」

「……あれは軍部のMSじゃないの。あの機体にUUの技術なんてない」

「オーバーコストな機体なんだ」

ティアはうん、と頷き話を続ける。

「……コロニーも、一枚岩じゃないの……」  
「ふうん……」

ユキミはテレビに向き直る。ティアもそれに連れられてテレビを観る。二人の夜はまだまだ長そうだ。

レイジはユキミからのメールを読んでいた。

(そっか、だからあんまりあの家に懐いてなかったのか)

：俺はユキミの無事を知り、とりあえずは一安心し精神も落ち着いている。でも……

「ネオンおじさんって誰だ？」

その疑問を含めた返信をすることにした。

『トオユキミ』

件名：無事でよかった……マジ心配したよ( ^ - ^ ) ;

Sub：そっか。いろいろ教えてくれてありがとう。

ところで、ネオンのおじさんって誰？』

ピッ

送信完了を確認し、俺の銀色のケータイをテーブルに置いた。

「……頑張れよ」

俺はさっきまで怒りと悲しみに溢れていたが、いつの間にかそんなもんはどっかに飛んでいき、安堵から顔が綻んでいた。

女性の読者の皆さん（いるのか？）、大概の男は単純な生き物です。是非アンダーラインを！

Unit020：白と黒の再会（後書き）

ガルマン「……何だこの終わり方？」

レイジ「我ながら恥ずかしいわ〜」

ユキミ「ふう〜ん、男の人って単純なんだ〜」

レイジ「なんで君がいるの!？」

ユキミ「あたし今日はバーチャル出演なの!」

レイジ「日曜の朝にやってるあの番組みたいだな」

ユキミ「喝!」

レイジ「あっぱれ!」

ガルマン「オッサン臭いなお前ら……てゆうか元ネタ知らない人に優しくないよね、この小説」

ユキミ「てゆうわけで次回予告!」

ガルマン（期待するまい）

ユキミ「頑張ります!」

ガルマン「ただの次話に向けての抱負じゃねえか!」

レイジ「つーわけで」

ユキミ「次回も宜し」

ガルマン「く！」

……

ガルマン「って！ 俺の分これだけかよ！」

庵瑠璃「いや、前回欲しいとか贅沢言ってたからさ」

ガルマン「どこが贅沢だ！ つーかいくらなんでも少な過ぎるだろこれ！」



## Unit 021：神の眺望

ユキミが捕虜になり、湿った雰囲気を保っていたシグヌスブリ  
ツジクルー。

「……我々に、責任があります」

副艦長席に座るルイがぼそつと呟いた。

「……ヒイラギ君には、本当に申し訳のないことをしたわ……」

艦長のアカネも、いつもの毅然とした態度を崩し、うなだれていた。

「……あの子、向こうで何かされなきゃいいですけどね……」

オペレーターの男性、ヘンリー・エルリック少尉も彼女を心配していた。

「……」

操縦士、アドルフ・シュテルン少尉は無表情で操縦桿を握ったまま  
まだった。そのアドルフの様子に、ヘンリーが離席し、突っ掛かる。

「あのお嬢さんが捕虜になったんだ、お前は何とも思わないのか！  
？」

「……思わないわけではないが、何か言えば状況がよくなるのか？」  
「ッ、それは……」

アドルフの言葉に、ヘンリーがたじろぐ。

「……俺はシグヌスを進める。それだけだ」

視線を泳がせずにしっかりと前を見ているアドルフ。ヘンリーはそれ以上彼に言及せず、自席に戻った。

「……艦長、シュテルンを見習いましょう」

前に進む。アドルフ・シュテルンは自分の与えられた役割を、何にも囚われずにきちんと遂行している。

「……そうね。いつまでも悔やんでいられないわね……」

アカネはアドルフを見て、毅然とした態度を取り戻した。

「我々は、まだ負けたわけではありません。次の作戦に備えておきましよう」

クルーたちは気を取り直し、各々の仕事に戻った。

(ありがとう、シュテルン少尉)

無言な若き操縦士に礼を言ったアカネだった。

確かに、ユキミの件は憂慮すべき事態であるのは違いない。しかし、我々は、それでも前に進まなければならない。

…朝。一日の始まり。でもここはコロニー内部。地球とは一風違

う朝だった。

「……おはよう」

「……おはよ……」

私は既に髪の毛が整っているティアちゃんに朝の挨拶をされ、眠たげに挨拶を返した。ティアちゃんはテレビを見ていた。

「……くま、できてる」

ティアちゃんが、自分の目の下を指差して私の目の下が黒くなっているのを教えてくれた。

「……おじさんにはアイシャドーだって誤魔かしとこ」

寝癖をひらひら揺らしながら、ヤマンバみたいな姿をした私は洗面所に向かう。

昨日の話を思い出す。半ば眠くなりながらあの番組にかじりついていたような。半分寝ていたのでよく覚えていないが、これだけは覚えている。

昨日の番組に、ティアちゃんが言っていたガンダムヴァイズノートが、一切言及されていなかったのだ。

洗面を終え、ベッドに戻ると、ケータイがチカチカ光っていた。

(あ、レイジさんかも?)

ケータイを開いて確認すると、案の定レイジさんからのメールだった。返信せねば。

『To レイジ』

From ユキミ

Title Re:

Sub おじさんはあの人だよ、ほら、地球でレイジさんと一騎打ちしたあの青い隊長機に乗ってた人だよ!』

ピッ。

まさかあのおじさんにお世話になるなんて、あの時は思ってもなかった。

「……メール?」

ティアちゃんがじいじと私を見ていた。

「うん、お友達!」

「……仲はいいの?」

「うん。地球に残して来ちゃったんだ」

『あの艦にいる』とは、この敵軍の艦ではちよつと言いつらかったので嘘を言っておいた。ティアちゃん、ごめんね。

「私も……地球で仲間がいたの」

「そうなんだ」

UU軍なのに、地球に仲間なんて、変なの。

「さっきの戦闘で、久しぶりに会ったけど……」

「ええ〜。ひよつとしたら知人も!」

意外なことなんて有り得ないわけではない。そんな小さなことを

思つて明るく答えた余所で、気になる番組が。

『リチャード・スタンリーUU議会議長が、軍務省によるガンダムシルヴィアス完成の見通しの発表について、昨日の午後講演会にて演説してい……』

そつだ、思い出した。ガンダムヴァイズノートのことを。

「ねえ、ティアちゃん」

「……ん？」

ティアちゃんは昨日のように相槌を打つ。

「……昨日の番組、ガンダムシルヴィアスのことはたくさんレポートされてたけど、ガンダムヴァイズノートのこと、触れてたっけ？」

なにぶん半分寝ていたので、一応確認することにした。

「………されてない」

しばらくの沈黙のあと、抑揚なく答えたティアちゃん。

「なんでかな？ 同じく神と崇められたヴァイズノートが言及され  
たつていい筈なのに……」

「………埋もれた」

「え？」

ティアちゃんの低い声にほんの一瞬だけ恐怖感を覚えた。

「………歴史の中に………埋もれた」

「……どういうこと？」

ますます知りたがったあたし。するとティアちゃんはベッドから立ち、閉じていたノートパソコンを開き、立ち上げた。

「……？」

「……今から、ガンダムヴァイズノートの何たるかを……教えてあげる」

あたしが訝ったのを察知してか、ティアちゃんはさっきとは違う優しい口調に戻って説明した。

「二機のガンダムが、厄よけの象徴として造られたのは……話したよね？」

「うん」

ティアちゃんは言葉を続ける。

「……ガンダムは、『動く巨神』とも呼ばれていたように、製造された当初から、動力を持っていたの」

「後付けじゃないんだ」

何故だろうか？ そう思ったが、ティアちゃんはそのまま話を続けた。

「……二機のガンダムたちは、この辺りでは一番高圧な環境である木星で造られたの」

「木星！？」

驚きだ。人類が木星にまで進出しているとは。

「……現在は『ガンダム粒子』と呼ばれるナノサイズの粒子が発見されて、それを基軸にガンダムが製造されたの」  
「ガンダム粒子？」

ミノフスキー粒子みたいなものだろうか。聞いたこともないし、詳細も全く知らないや。

「……『あるものをあるがままにする』という効果を齎すと言われた特殊な粒子。実際、ガンダムを持ち込んだしばらくあと、コロニー住民の流行りの病気も治ったし、更にその住民たちの遺伝子にも、ガンダム粒子の影響を受けて強靱な体を形成していることが示唆されたの」

「ええー！？ それ大発見じゃない！？」

あたしの驚愕ぶりにティアちゃんはうん、と頷いた。

「……でも、そのメカニズムは完全には解明されてないの」  
「へえ……」

「……ガンダム粒子のもう一つの特徴として、エネルギー軽減効果を持っているの」

何だそれ？ 的なリアクションをしてしまったあたし。

「暦がIDになってからも普及が難しい核融合炉の開発に、このガンダム粒子が大きく貢献しているの」  
「……その、エネルギー軽減効果が？」

ティアちゃんは頷き、話を続けた。

「核融合炉は、知つての通り核融合反応から熱を取り出してエネルギーに変換するもの」

「それを兵器化したのが水素爆弾だよね」

「うん、……そうだね」

ティアちゃんは話を続ける。

「核融合炉は、核融合反応の超高熱に耐えうる炉の壁が必要だけど、どうしても解決出来なかつたの。でも、ガンダム粒子を炉の壁に付着させることによつて、熱エネルギーを軽減することに成功したの」

「すごい！」

「より性能が高く、高圧な核融合炉の製作にあたつても、木星で造られたから問題はないし、パワーも強力かつ制動力も非常に高い機体になつたの」

ティアちゃんがそう話していると、パソコンはログイン画面になつていた。ティアちゃんがログインを済ませるとすぐに待受画面になつた。

「木星へはどうやって行き帰りの？」

ログインを済ませたティアちゃんに続けて質問。

「……行きは、一般のシャトルで数年。帰りはガンダムに乗つて数週間……」

「ガンダムの高性能ぶりが伺えるね」

そんな話をしていたら、私たちの部屋にお客さんが。

「サイン、強くなりたいと言つていたな。今日から軍事演習をする



か？」

ネオンおじさんだった。相変わらず青い軍服姿で、開けたドアの前に立っていた。

たしかに、おじさんみたいに強くなりたいたいは言った。でも今日はガンダムについてもっと知りたいな。

「うーん、もう少し考えさせて」

「ん、そうか？」

私の答えが意外だったのか、おじさんの調子が狂ったように見えた。

「また明日来る」

「じゃあねー」

「……」

黙り込んだおじさん。挨拶は返さなくちゃだめだよ？ そう思いながら膨れっ面をやった。

おじさんが帰った後、ティアちゃんは例のメモリーの中身をノートパソコンで見せてくれた。それはそれは、かなり詳しいものだった。

「ガンダムシルヴィアスのOSは、『God who is Ultimate and Noble Delete All Misfortune』……なの」

「ええと……『究極で気高い神は全ての不幸を消し去る』……でいいのかな？」

画面に書いてある文字を訳してみた。大文字になっている文字を並べてみると……

「GUNDAMだ!」

「……そう」

ティアちゃんは私に振り向いて答えた。

「『Generation Unsubdued Nuclear Drive Assault Module』じゃないんだ!」

「……?」

ティアちゃんは、私がジャスイスとかのOSを言った時、ポカんとした顔をして首を傾げてしまった。

「……ううん、何でもない!」

この話題をいつまでも続けていても、ただ不毛になるだけな気がしたので、揉み消しておいた。

「……因みにヴァイズノートは、『God who is Ultimate and Noble Dispensate for All Man』なの」

ティアちゃんはキーを操作して、ヴァイズノート版のOSをアップしてくれた。

「……施し?」

「そう。ヴァイズノートはその姿から、太陽の化身とも言われたガンダム。生きとし生ける者全てに施しを与える存在だったの」

「へえ」

たしかに、ガンダムはどちらも畏敬すべき存在だっただろう。しかし、どうしてヴァイズノートは消されなくてはならなくなったのだろうか。

「それは、我々が地球から圧政を受けていたからだ」

リチャード・スタンリーは講演会を終え、スタンリー邸の自室にてキセルを吹かしていた。

「反乱の象徴に、『施し』の言葉は足枷になる」

先人は、このためにヴァイズノートを消したのだろうか。『抹消』という言葉を持つシルヴィアスが生き残ったのだろうか。

「フェブラル・デイドロンが余計なことをしなければ……」

奴がコロナを製造しなければ、連邦の力はここまでのし上がらなかつただろう。スタンリーはキセルを握る手を強める。

「この事態は、我々が収拾しなければならぬ」

ガンダムを崇拜する彼らにとって、ガンダムに関する事態は、彼らに責任がある。

「地球への反乱の象徴として2世紀もの間崇められたガンダムシルヴィアス様、今こそ、地球に鉄槌を」

キセルを置き、両手を握る。すると、年端のいかない女の子がスタンリーの部屋に入って来た。

「パパ！」

「おやおや、もう夜遅いぞ。もう寝なさい」

娘と思しき女の子、リリアを適当にあやすスタンリー。

「パパはぎちよーなんだよね？」

「ああ、そうだよ。みんなの意見をまとめるんだ」

「ふう〜ん」

あまり理解していないようなリアクションをするリリア。

「パパはもう寝るの？」

「パパはもう一仕事あるんだ。リリアはもう寝なさい」

「……はい」

唇を尖らせて渋々来た道に戻るリリア。

「……すまない、リリア」

スタンリーはリリアに寂しい思いをさせてばかりいると思っている。しかし、このような難しい話に、実娘であるリリアを巻き込むわけにはいかないのだ。

ユキミからのメールに気付き、ベッドから起きたレイジ。

：昨日はユキミの件で一睡も出来なかったな。メール来て返信した後は疲れてすぐ寝てしまったが。

「青い隊長機……あッ、あのオッサンか!？」

ユキミがまさかあのイマイチ憎めないオッサンに厄介になってるとは。何やら、ティアのことも知っていたいな。

見たところ、あのオッサンとティアは上司と部下に見えた。ユキミがあのオッサンのもとにいるなら、ユキミはひよっとしたらティアと会ってるかもしれないな。

「……なんか入り組んでやがるな」

そう呟きながらケータイのボタンを押す。

『To ユキミ

From レイジ

Title Re:

Sub あのオッサンか。ところで、ティア・プライマはそっちにいるか?』

ピッ。

ユキミはティアを知るいい手掛かりだ。たしかに、ユキミには寂しい思いをさせてしまっているに違いない。だけど……

そう思った時だった。俺のケータイの画面には送信エラーとあった。

「……なんだ、圏外なのか？」

おかしいな、さっきは送信できたのに。その時、艦内アナウンス

が入った。

『これより、スペースデブリ帯を通過します。操縦には細心の注意を払っていますが、万一の振動に注意を』

デブリ帯か。だから電波が届きにくいのか。参ったな。仕方のないことではあるのだが。

「……ちえ」

退屈ささえ覚え、両手を後頭部にやり、チェアに踏ん反り返る。その時、自分の腹の虫がなったのに気付いた。人間の一次的欲求に逆らうつもりもなく、チェアから立ち、カフェテリアに足を運ばせる。

シグナスのカフェテリア。今そこでガルマンは、ビリーが重苦しい雰囲気で食事をちまちま摂っている様子に訝る。

「元気ないな。どうしたんだ？」

ウィンナーを頬張りながら尋ねるガルマン。

「……サインちゃんが……」

「……ッ、まさか!？」

ビリーがゆっくりそう言い出したのに焦燥に駆られるガルマン。

「……UUの捕虜に……」

「……何されるかわかんねえぞ。あんな純粹そつな見た目の女の子じゃあ……」

敵陣営にいるであろうユキミを憐れむような顔をするガルマン。  
そこに、

「ユキミならとりあえず無事だ」

落ち着いた口調の男声が聞こえた。覇気のない目、ボサボサな白い髪の毛を持つ長身の男。まさしく、

「レイジ！ お嬢さんは無事なのか!？」

ガルマンが真つ先に食いつく。

「だから言ってるじゃん、とりあえず無事だつて」

レイジの抑揚のない声は、ガルマンの語調の勢いを完全に殺していた。

「……なんでそんなことわかんだよ？」

あまりに泰然自若なレイジの態度に、逆に不思議がるガルマン。

「ついさっき、彼女からメール来た。向こうでの待遇は悪くないぞうだ」

「……不思議だな」

軍人が捕虜を虐待すれば罪になるが、それでも、敵軍を信用するなんてできっこない。

「メールしてきてくれるほどだ。割と余裕らしいぜ」  
「……へえ……」

予想外のことに呆気に取られるガルマン。ビリーも不安の表情からどこか腑抜けた顔に変わっていた。

「……まあ、サインちゃん、強い子だからね」

ビリーはいつもの調子に戻ったようで、顔から不安の色が消えていた。

「……まあ、確かにな」

レイジは、ユキミが以前、家の人達を背負い投げしてたり、酔っ払って寄って来た男の股間を蹴り飛ばしたりしていたのを思い出した。

レイジが食事を持ってきて、ガルマン達の席の近くに座った。座るなり、レイジがビリーに問う。

「……そういえば、オーグは？」

「ああ。多分、アテナの整備をしてるんじゃないかな」

ビリーはデツキの方角を指差しながら答えた。

「アテナ……伍長さんが無茶したのか？」

「無茶っていうか……エネルギーがかなり消耗してたみたいだね」  
「おまけに、ミサイルポッドももぎ取られてたしな」



ガルマンも補足する。

「もぎ取られてた？」

：なんだ、そのもぎぎフルーツ的なノリは、なんて思ってたが、そこに、本人オーエン伍長が来た。

「……自分で無理矢理外して敵に投げ付けたんだ」

「……ああ、伍長。アテナはどうだい？」

ビリーはオーエン伍長にそれとない口調できいた。

「エネルギー充電及び、ミサイルポッドの新装中だ」

ナリアは、ビリーに単調な口調で現状報告をする。そこにガルマンが、

「ミサイルポッドを投げるとか……乱心したか？」

「……」

ガルマンの言葉に、ナリアは考え込んでしまった。

「……どうしたんだよ？」

ガルマンが訝し気にナリアに問う。ナリアは手を顎に当てたまま答える。

「……いや、貴官をどうイジろうか考えていた」

「何なんだよ！！ 真面目に訊いて損したわ！！ つーかどんだけイジりてえんだよ！？ 何がお前をそうまで駆り立てる！？」

「……朝っぱらから煩」

左耳を押さえながらスパッと一言言っただけだ。

「ッ、……悪かったよ」

言いづらそうに謝ってきたガルマン。今日は妙に素直だな。このくらいにしといてやるか。

「……ま、それがガルマンのアイデンティティだから」

と、その側で地雷を踏んでしまったビリー。

「『煩い』俺』に自己同一性なんか求めたくないわ!!」

地雷が起爆。ありやありや。ま、ビリーの言ったことは半分以上事実だけどさ。

シグナスMSデッキ。アテナに関して一段落ついたオーグは、コロナを見ていた。

(データ解析を拒否したOS……か。一体どんなやつなんだ?)

目をしかめながらコロナを見上げる。赤と青のけばけばしい装甲に傷は殆どないが、オーグはフレームがほんの少し溶解しているのが見えた。

「……ビームサーベルの飛沫か?」

溶解しているレフトアームの肘関節部に近づく。溶解部は、幅が5cmにも満たないクレーター状のものだった。

(……………このくらい見逃してもいいが、規格外の機体だからな……………どうしたのか……………)

と腕組みして難しそうな顔をしたオーグの顔が、肘関節部に起きている小さな異変に対し、驚きの表情に変わる。

「自己修復してるのか!?!」

少しずつ、細胞分裂のように、コロナはフレームの溶解部を自己修復していた。

「……………これは一体……………?」

オーグは、コロナの自己修復をまじまじと見ていた。

(生き物みたいだ……………)

口を開けたまま、その口がしばらく閉じなかった。

ティアは知らなかった。ヴァイズノートが歴史から消された理由……………いや、消されなければならなかった理由を。

「……………知らないの」

ティアは、ユキミの問いに答えられず、下を向いて落ち込んでしまった。

「……まあ、ティアちゃんでも知らないことはあるよね！ 無知の知ってやつ？」

「……ソクラテス。問答法……」

「助産術ともいうよね！」

ティアが嬉しそうにぼそぼそと呟いたのをユキミも乗っかる。ユキミが言葉を続ける。

「……昔は、産婆術とも言ったの」

「たしか産婆さんって、日本の江戸時代では、大名行列の真ん前を横切っても首を斬られなかったんだよね」

ユキミが豆知識をティアに言う。

「……そう、なの？」

「うん、そうだったみたいだよ」

「……普通は、首を斬られる。でも、そもそも日本のことは、あまり知らないの……」

伏し目がちになるティア。ユキミはすかさず励ます。

「じゃあ、日本のことはあたしがばっちり教えてあげるね！」

人差し指を立て、明るく振る舞うユキミだった。

ラグランジュ0。ガンダムシルヴィアスが発見されたこのコロニーの整備工場にて、黄金の機体シルヴィアスがU規格用に改造されていた。その目の前にいる青年、アルバート・スタンリーが、整備中のシルヴィアスを拝んでいた。

「……………」

アルバートは、クールな目付きでシルヴィアスを捉えていた。

（これこそ、唯一の……本物の、ガンダム……）

連邦のガンダムなど、異端に他ならない、排除されるべき存在だ。

（ガンダムシルヴィアス様、どうか、この自分に、力をお貸し下さい）

目をつぶり、祈祷するようなポーズをするアルバート。

しかし、黄金に輝くシルヴィアスはアルバートのことなど見ていないようだった。無論、機械が見ることなどできはしないのだが、そうではない。シルヴィアスは、古き友、ヴァイズノートを探しているようだった。

Unit021：神の眺望（後書き）

レイジ「今日はユキミがいないので……」

ビリー「代打、ビリー・カーガル！」

ガルマン「いや、これ野球じゃないから」

ビリー「作者は、野球は体育の授業でしかやったことがないらしいよ」

ガルマン「知らんわ！」

ビリー「因みに左投げ右打ちらしいよ」

ガルマン「余計に知らんわ！　つーか稀有だな、その組み合わせ」

レイジ「あゝ次回予告とかめんどくせー」

ガルマン「勝手に言ってる！」

ビリー「因みに、次回からは、サインちゃんが軍事演習をするらしいよ」

ガルマン「軍事演習！？　捕虜にしては随分余裕だな」

レイジ「UUには攻めづらくなっただな」

ガルマン「……そうだな」

ビリー「と、というわけで、次回も」

レイジ「EDガンダムを宜」

ガルマン「しくー！」

……

ガルマン「だからなんでこんな少ないんだよ！」

庵瑠璃「前より一字増えてるじゃん」

レイジ「中途半端に台詞を区切られてる俺の気持ちも汲めよ」

ガルマン「知るか！！！」

## Unit 022：懐古の共鳴

春雨の駆る連邦ガンダム5号機ことスラッシュガンダムは、カナリー少女を逃がし、軍の討伐の旅を続けた。

「うむ……随分静かになった気がするが……」

それもそのはず、シグナスもダイオギニスも宇宙に上がった後だからである。スラッシュは、大剣を右手に、バズーカを左手に、頭をキョロキョロさせるが、歩けども歩けども敵らしきものは一切見つからなかった。

薄い灰色がベースのスラッシュは、陽光で水色のラインを煌めかせていた。

ふと自機のコンソールを見た春雨は、あることに気付いた。

「……何、エネルギーがもうあと僅かなのか？」

スラッシュは、稼働時間の延長をコンセプトとして造られた機体である。そのため、本機はビームの火器を一切積んでいない。実際他の四機のガンダムと比べて数倍の長い機体である。

が、それには限界がある。

スラッシュは、春雨に強奪された後、一度たりとも補給を受けていないのである。

「参ったでござるな……これでは……」

鳴り続ける警報を止め、頭を抱える春雨。

すると、スラッシュのモニターは、足元にいる人影を捉えた。



「ん、何奴？」

モニターに映る数人の人間を拡大する。見た感じ、ゲリラ兵であった。

「ぬう、このような時に限って……」

ゲリラ兵たちはこちらに大ぶりなライフルを向けている。人間が持つライフルの威力など、ガンダムの装甲をもってすれば屁にもならないが、メインカメラなどの急所であれば、今度は有効打になってしまう。ただ突っ立っていれば急所を突かれかねない。

しかし、春雨にとって、相手が軍人と確定できなければ、今ここの殺生は完全に無駄である。

春雨は機器を操作し、兵士に聞こえるようスピーカーを外部出力にした。

「そこの者！ 主は何者だ！」

ガンダムからいきなり声が聞こえたからか、体を微細にびくつとさせる兵士。

「……俺は、反政府組織ワイバーンの部隊長、ウィルソン・カーターだ」

一兵士は、ガンダムに向かって、ご丁寧にも、自分の名前も明かした。

春雨は、しばし考えたあと、意を決したようにカーターに頼んだ。

「……カーター殿、実はこの機体、もうじきガス欠してしまうのだ。拙者を主のアジトに誘導してくれぬか」

「貴様、連邦か。連邦が何の用だ」

再びライフルをスラッシュに向けるカーター。仲間もライフルを向けた。

「……そういえば、この機体は連邦のものだったな」

「……？」

カーターは、あからさまに訝るように眉をひそめた。

「拙者が連邦であれば、母艦にて満足に補給を受けられたろう。されど、拙者はこの機体のパイロットではあっても、狼のごとき賊に他ならぬ」

春雨は話を続ける。

「カーター殿、そなたらが軍を討たんとしているのならば、手を貸そう」

春雨は、スラッシュをしゃがませた。カーターは仲間に戻り、どうする？ 的な話を仲間に戻った。

カーターはスラッシュに戻り、答えを出した。

「随分胡散臭いが、貴様から敵意はまだ見て取れない。とりあえずこちらに來い」

カーターは、スラッシュを誘導するように、肘を支点にして手招きした。

「……忝ない」

春雨は恭しく頭を軽く下げ、スラッシュを立ち上がらせた。

「……貴様、名前は？」

カーターは今まで話していた相手の名前を訊いた。

「……申し遅れた、春雨装水にござる。」

「ハルサメ・ソウスイ……。」

「漢字でござる。」

「……は？」

カーターは間の抜けたような顔をする。

「拙者、日本の者でござる。」

「……そうか。」

カーターは春雨の言葉を軽く流し、誘導した。

（……つくづく変な奴だな……）

頭をかくカーター。

（……拙者、あしらわれたのか？）

どこか虚しくなった春雨。

この両者、理解し合うには時間がかかりそうだ。

シグヌスメインブリッジ。ヘンリーは、ボトルを右手にシートの背もたれに身を任せ、くつろいでいた。

そんなヘンリーに、脇から話し掛けた人物がいた。

「エルリック少尉、あの……シユテルン少尉はどちらですか？」

ヘンリーの一つ下の後輩にあたる、CICのシエラ・クリッジが後ろに纏めた髪を揺らしながらアドルフの所在を問うた。

「ああ、飯食いに行ったと思うよ」

「あ、ありがとうございます」

多少吃りながらお辞儀をし、そそくさとブリッジを去ったシエラ。

「まったく、シユテルンの奴、無口なくせに女にはモテんだな、あん畜生」

つまらなそうにボトルの中の水を喉に流し込んだ。

「あら、女の子にモテるのに個人の努力も必要よ？」

アカネは、艦長席からニコニコしながらヘンリーにアドバイスした。

「シユテルンがどんな努力をしてるっていうんですか？」

不満そうに反論するヘンリー。

「うーん、容姿とか？」

「結局そこですか」

アドルフは、飾り気は無いが、端正な顔付きをしている。そこを言われてしまったてはどつしよつもない。

「メガネはどうせモテませんよ」

勝手にニヒリズムに浸ったヘンリー。

「……そんなことないと思うけど。メガネ、いいと思うよ」

「うつむ……年上はちょっと……」

「……何か言った？」

アカネは、額の血管を浮き立たせ、笑顔を引き攣らせながら、ヘンリーに問うた。

「……いえ、何でもありません……」

顔面蒼白で明らかに怖じけづくヘンリー。

「……ふーん」

まあいいや、と普段の表情に戻すアカネ。

「ま、レディに対しては言葉を選ぶことね」

アカネは確かにレディである。未婚者である。32歳にして、未婚である。

(……地の文しつこいわね)

キツと目付きを鋭くさせたアカネ。

(……艦長、やっぱり怖ええ……)

危なかったあ、と胸を摩るヘンリーであった。

カフェテリア。レイジ、ガルマン、ビリー、ナリアの四人が、テーブルを挟んでわいわい談話していた。そこに、操舵手アドルフが入って来た。

「おお、シュテルンさん、こっちこっち」

ガルマンは入って来たアドルフを歓迎するように手招きした。

「……飯を取ったらそっちへ行く」

食券を購入しようとするアドルフだが、どうやら彼のお気に入り  
のデザート、チョコプリンが売り切れていたようで、一瞬指が止ま  
った。

「……」

仕方ない、といったような仕草でプリンを買った。

「っーか、プリンあるんかい」

レイジが淡々とツツコむ。

「最近新発売したみたいだよ」

ビリーが補足する。

「あと紅茶もな」

ナリアが更に付け足す。

「何やら、ルナートから仕入れてるみたいだぜ」

「いやだから、なぜにプリン？」

「いや、紅茶もだ」

「あーも、うるせえよ！」

珍しくレイジが罵倒する。もうメニューを受け取ったのか、アドルフはガルマンの隣に座った。

「隣席、失礼する」

「なあに、俺が招いたんだからさ」

ガルマンとアドルフ、年齢はアドルフの方が上だが、階級はガルマンの方が上。故に、ガルマンはアドルフに対しタメ口で話しているのだ。

「……すまん、あの人、誰？」

レイジは隣のビリーにひそひそ声で問う。

「ああ、シュテルンさんだよ。このシグヌスの操舵手さんだよ」  
「へえ、そんな重役を」

レイジはアドルフを見ながら感心する。そんな様子を見てか、アドルフがレイジに軽く自己紹介する。

「……自分は、アドルフ・シュテルン少尉だ。君のことはよく聞いている……サイン君のことは、済まなかった。我々が不甲斐ないばかりに、彼女を守れず……申し訳ない」

「……まあ、しょうがないツスよ。それに、とりあえず彼女はまだ無事みたいツスよ」

いつもの鷹揚とした態度でアドルフに答えたレイジ。

「……軍規とはいえ、向こうで何をされるかはわからん。そう軽々しく判断できるものではない」

アドルフは真剣な顔でレイジに突き付けたが、レイジは淡々と答える。

「いや、さつき無事のメールが来たんすけど」

「……メール？」

アドルフの険しい表情が若干崩れる。

「はい」

「……」  
「……」

「……まあ、この件に関してはしばらく様子を見よう」

しばしの沈黙の後、アドルフは冷静な言葉を返し、ブツ　ンプリ



ンを頬張りはじめた。

「……好きなんすか、プリン」

「……自分は、甘党だからな」

スプーンを一瞬止めてスパツと言ったのけたあと、再びプリンにありつくアドルフ。

そこに、あるクルーがやってきた。腰まである髪を後ろに束ねた女性士官、シエラ・クリツジだった。

「あの……シュテルン少尉……」

手を前で組み、どこかおどおどしているシエラ。

「……何だ、少尉」

スプーンを持ちながら振り向くアドルフ。

「あの……このあと、お時間はありますか？」

「……別に問題ないが」

「……後で、ルーフに来て下さい！ お話したいことがあります  
」！」

意を決したように言っただけのけたシエラはスタスタと去って行った。

「……」

アドルフはしばし硬直したあと、まだ三分の一くらい残っているプリンに食いついた。

「……今の、誰や？」

レイジは間の抜けた声で誰ともなく問うた。

「シエラ・クリッジ少尉。ああみえて、やり手だよ」

ビリーが答えた。

「やり手……というと？」

「彼女は、士官学校時代、情報科だったんだけど、情報科の中では首席を争うほどの凄腕だったみたいだぜ」

「へえ、すごいな」

「ちなみに、シュテルンさんはパイロット科だったらしいよ。だからMAやMSも操縦できるみたいだよ」

ビリーがそう話している余所で、やっと食べ終わったプリンのカップを捨てているアドルフの姿があった。

「ただ、他にシグヌスの操舵手志望の人がいなくて……」

「……アドルフさんが仕方なくやってると」

「そうなんだよねえ」

頭を掻きながら外に歩いていくアドルフを見送ったビリー。

「トラヤヌスは、シュテルン少尉を乗せても腕は問題ないんだけど

……」

「トラヤヌス？」

レイジが聞き返す。

「うちの艦の戦闘機だよ。あれ、知らない？」

「……知らないア」

レイジは首を軽く傾げる。

「そもそも、うちの艦に戦闘機なんてあったの？」

「あれだよほら、レイジが脱出しちゃった時の」

「……っか、あれは無理矢理ガルマンとかが俺をシグヌスに連れて来たんだろ」

その後、レイジは、ガルマンに地上に降りる口実を作って、ままと脱出したのだった。

「……まあいいや、あれは戦闘機にしては大ぶりだけど、重力圏内でもアサルトぐらいなら乗せて運べるぜ」

「コア・ブー ターみたいだな」

レイジはしょうもないツツコミを入れたのだった。

ダイオギニス医務室。全身打撲と左腕の骨折、及び各部外傷を負ったソロが、薬臭い部屋で目覚めた。その傍には、ダイゴが無表情で、しかしどこか心配そうにソロの様子を見守っていた。

「……気がついたか」

いつもの単調な口調で夢の世界から戻って来たソロを迎えた。

「……ダイゴか……俺は……」

昨日の戦闘を思い出す。対2号機とは優勢で戦況が進んでいたが、とどめを刺そうとしたとき、2号機がいきなり変なものを投げつけた。相当爆発力のあるものだったのだろう、スピーアで咄嗟に防いだものの、爆風が防ぎ切れずにレピドウスのボディが陥没したらしい。

レピドウスは、前影機のポーンよりも装甲を薄く造られている。それが裏目に出てしまったのだろうか。

「……お前のレピドウス、直しておく。お前も、今はゆっくり休め」

「……世話を焼かして、悪イ」

「……仕事だからな。なんとも思わない」

無理するなよ、と言わんばかりに踵を返し、病室から出ていくダイゴ。

ソロの脇には朝食が置かれていた。ソロは、自由な右手でフォークを持ち、ありついた。

「……ぞーしょお……」

部屋の中、顎に手を当てながら難しい顔をするユキミ。

「……おじさんの誘い断っちゃったし……」

「おじさんって……ネオン大尉のこと？」

ティアがユキミの顔を覗き込むように聞いた。

「うん、そう。あの人、いくつなんだろ」

「たしか……25歳。今年で26だったよっな」

「うっん、あんまり見えないかな」

ユキミは、ネオンの実年齢はもっと高いのではと予測していたの  
だろうか、どこか釈然としなかったのだった。そこに、またもお客  
さんが。

「お嬢さん、少尉、腹減ってないかい？」

アリストが、扉を隔てて気さくに訊いてきた。

「うん、減ってる！ もうペコペコ！」

「……減ってる」

二者二様の答えが返ってきた。

「そうか、一緒に食堂に食べに行かないかい？」

相変わらずな様子で二人に訊く。

「……うん」

ティアは素直に答えたが、ユキミは違った。

「あたし一応捕虜だよ？ 出歩いちゃっていいの？」

「いや、一応って……」

自虐的だな、と冷汗をかくアリスト。

たしかにユキミの言う通りである。捕虜にしてはイレギュラーであるが、軟禁状態ではあるので、迂闊に出歩けない。そこでアリストは、自分のスパイ魂が炸裂した。

「なんなら、軍服貸そうか？ 女性兵用の」

「え、いいの!？」

ユキミが、半分嬉しさをこめて驚く。

「今ちよつくらこさえてくるさ。待つてな」

ドアの向こうで、アリストの走り抜ける足音が聞こえたユキミ。

「アリスト君、いい人だね」

「……あの人、愉快」

「おじさんといいコンビだね」

ユキミがはしゃいでいると、早くもアリストがやってきた。

「よお、持つてきたぜ」

「早くない!？」

「へっへっ」

悪戯小僧のような笑い方をするアリスト。

ユキミは扉の横のモニターで、何やら軍服らしきものを持っているアリストの姿を確認し、スライドドアを開けた。

「さあ、着なよ」

アリストがユキミに手渡すと、ユキミは着ているロングTシャツ

の上から上着を着始めた。

「……アリスト君のエッチ。ドア閉めてよお」

膨れた顔でアリストを突き刺す。

「ああ、悪イ」

アリストはピシユンとドアを閉め、閉まったドアに寄り掛かった。

(……やっぱり女の子なんだな、あの子)

そんな失礼なことを考えていたアリスト。すると部屋の中から、

「あたしはれっきとした女の子よ!!」

と激昂するユキミの声が聞こえた。

(……え、マジ？ 聞こえてた？)

口を押さえながら動揺するアリスト。

スライドドアから、萎えた緑と白の軍服を纏ったユキミがひよこ  
っと出てきた。

「お待ちせ！」

敬礼しながら出てきたユキミは、完全に軍人気取りだった。続いて、青と黄色の士官服を着たティアもするすると出てきた。

「……んじゃあ、行こうか」

アリストは、両手の華を抱えながら、食堂に向かった。

食堂。ただ一人、ぽつねんと新聞とにらめっこしているおじさん……いや、ネオンがいた。

現在の時刻は7：12。軍人とは早起きなもので、ネオンを含めた殆どのクルーが朝食を食べ終えていた。

「スタンリー議長の子息がガンダムの……」

難しい顔をしながら、ガンダムについての記事を見ていた。

「……何を考えているやら……」

ネオンは、ガンダムのことなど興味はなかった。ただ、コロニーを守る剣となりたかったただけだ。

そこに、アリスト一行が食堂に訪れた。

足音に気付き、ネオンは入口の方に振り向いた。

「おお。アリストか……ん、サインじゃないか」

ユキミの存在に気付くネオン。

「よっすー！」

右手を上げて挨拶するユキミ。



「いや、よっす、じゃなくて。その軍服、どうしたんだ」

ネオンは堅苦しくユキミに問うた。

ユキミは、もうここで告白しようと思った。

「……あたし、やっぱ、今日から軍事演習やるから」

ユキミは、珍しくキリッとした顔で答える。

「……おお、そうか。わかった。では、そのように手配しておく」

ネオンは何やら、懐のポケットを探り始めた。

「これを読んでおけ。軍規が記してある」

何やら紙切れをユキミに渡したネオン。

ユキミは一瞬戸惑った。

軍規。これは、軍属の者しか知らない者。それが記してあるものを渡された。ということは、自分の所属はUUとなる。連邦の敵になる。

かといって、またも己の力不足になることは嫌だった。守るための力が欲しいのだ。

また、この艦からの脱出も今すぐは必要ない。もしかしたら、もっと沢山の情報を得られるかもしれない。ガンダムに関しても、かなりのことを知ることができた。

自分もレイジのように、潜入捜査という名の入隊を試みようか。ユキミはそんな思索を巡らせた末に、

「……うん」

紙切れを受け取った。

「……どうした？ 浮かない顔だな」

ネオンが、娘を宥める父親のような表情をしながらユキミに問う。

「あたし、おじさんの娘じゃないよ」

「……は？」

少し目を大きくし、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をする。

「……あの、お嬢ちゃん、何の話をしてんの？」

アリストの方も、片眉をびくびくさせながら問う。

「地の文！」

「……じのぶん？」

ユキミの明るい答えに、ネオンが更に訝る。しかし、ユキミはそんなネオンの態度を構わず、

「そんなことより、軍事演習はいつからできるの？」

「ああ、今すぐ手続きすれば今日からでも簡単なものならできろぞ  
「簡単なもの？」

ユキミの問いに、ネオンは言葉を続ける。

「まずはMS操縦の基礎からだな」

「もうあたしMSを動かせるどころか戦闘もできるけど？」

「つべこべ言うな。我流には限界がある」

ぴしゃりと釘を打つネオン。

「……確かに、射撃が全然当たらないし……」

「部隊行動をする際は、接近戦の技術よりも射撃の技術を問われる。私も、決して射撃ができないわけではない」

ネオンは、アリストに振り向きながら眉をしかめた。

「……な、何スか？」

アリストは、明らかにたじろぎながら聞き返す。

「……まあともかく、しつかりやれよ」

ネオンはそう言いながら、軍服姿のユキミの左肩に手を置き、テーブルにある新聞を気にかけて、食堂を去った。

しばらく神妙な顔をしていたユキミだが、ネオンが放置した新聞をそれとなく手に取って見た。

「……ん？ あ、ガンダムだ！」

第一面の大見出しに、

『ガンダム、二世紀ぶりの復活か』

とゴシック体で大々的に印刷されていた。

「ねえ、この新聞もらっていいかな？」

ユキミは、新聞を両手に持ちながら、いつもの無邪気な声でアリストに訊く。

「え、んまあ、いいんじゃない？」  
「わあい」

新聞を小脇に抱え、食堂のカウンターからチヨコクロワッサンと  
コーヒーを貰い、席に着いた。

「……ふむふむ」

チヨコクロワッサンを頬張りながら新聞にかじりつくユキミ。

「……」

じい

ティアは、新聞に夢中なユキミの脇から、身を少し乗り出すように  
して新聞を覗いた。

「……仲いいのな」

アリストも自分の飯を取り、二人の少女の正面に座る。二人の様  
子を見ながらライスを口に運んでいると、ユキミがまず口を開いた。

「ね、このおじさん誰？」

見出しのすぐ横に映る、前髪が少し後退したブロンドの髪をした  
壮年男性の写真を指した。

「……リチャード・スタンリー。UU議会の議長。事実上、UUの  
実権を握ってるの」

「コロニーって、立法権が強いんだ！」

地球では、相変わらず行政が力を持っているが、魂が重力に引かれていない宇宙そふでは、立法が政の中心に台頭しているようだ。

「……ん、ガンダムのパイロットはその息子、アルバート……？  
なんか、世襲が見え見えだよな」  
「シッ！」

アリストは人差し指を立て、慌ててユキミを諷める。  
アリストは大声を出さないようにしてユキミを叱る。

「バカ、他の奴いたらどやされるぞ!？」  
「完全に私はノーマークだったみたいだな」  
「ああ、そうだよ……つて、隊長!？」

一度はノツたアリストだが、ネオンが食堂に戻って来ているのに  
気付くなり、仰天した。

「新聞を忘れたのでな」  
「ああ、新聞なら、お嬢ちゃんが……」

アリストは、新聞に手を置いているユキミを指した。  
ネオンはユキミに歩み寄るが、ユキミはネオンを見ているだけで、  
新聞を一向に手放そうとしない。

「……渡す気がないみたいだが、何か思い入れがあるのか？」  
「熟読したい!」「即答だな。……まあ、別にいいのだが。また新  
しいのを取りに行けばいいだけのことだ」

そうして踵を返そうとした瞬間、ユキミが、

「え、新しいのあるの!？」

「ん、ああ、あるとも」

ネオンは、足を止め、ユキミに半身のみ振り返った。

「あたしそつちが欲しい!」

「……貴様、何様のつもりだ」

しばしの硬直後、ネオンは冷汗をかきながらユキミに問う。

「おでふ様」

「……日本における歴史的仮名遣い……てふがch」

「いやいやいやいや、何の話してんの、少尉まで!」

アリストは、訳の分からぬ話題を本日二度もしているガールズにすかさずツッコんだとさ。

同艦ダイオギニスの307号室。ここは、アン・リオネ少尉の部屋だった。

(……ソロの怪我、よくなるといいけど……)

ベッドに座り、俯くアン。長いバイオレットの髪がサラッと揺れる。同室の住民が帰って来たのだ。

「アンちゃん、たっだいま〜!」

顔を赤くした女性士官、ルネ・エイブリーが陽気な顔を見せ、千鳥足で入って来た。

「また飲んだんですか、エイブリー先輩」

うなだれた顔を上げ、半ば呆れたように言ったアン。

「アンちゃんは飲まないの〜?」

「私まだ18です!」

「うふふ、若いわね〜。あたし18って言ったらもう居酒屋に入り浸ってたわよお?」

なんて破天荒なことを言う少佐に、

「私に押し付けないで下さい! ああ、もう……」

倒れかかっている29歳ののんたくれを介抱し、ベッドに寝かせ  
るアン。

「世話焼きねえ〜。きっといいママになるわあ」

「……それは、どうも、ありがとうございます」

少し吃りながらルネの褒め言葉に答えた。

「ママになるためには、生き残らなきゃね」

ルネは急に真面目な顔でアンに言う。

「……そうですね」

アンも思わず神妙になる。

「ママになりたい？」

「……まあ、はい……」

ルネの問いに、少々答えづらそうに下を向いた。

「うふ、ウブなのね。可愛いお母さん」

「私はまだお母さんじゃありません！」

なぜかムキになるアン。顔を赤くしていたのだった。

）

こんなことがあった昨夜、アンは目覚めた。時刻は7：23。

（え、やだ。寝坊しちゃった）

口に手を当て、ふと隣のベッドを見てみる。ルネはもう起きてしまったのか、ベッドは蛻の殻だった。

「ふあ……」

欠伸を口で押さえ、洗面所に向かう。すると、隣の浴室から、規則的な水音と歌い声が聞こえた。

「さあ〜んぽ歩いてにいほ下がる」

その歌はなんと陽気だった。アンは浴室に向かって朝の挨拶をした。



「先輩、おはようございます」

「んん、ああ、おはよー」

やはり陽気に答えるルネ。アンも洗顔し、目がすっかり開いた。

「先輩、いつ終わりますか？」

「うん？ あと12000秒待って〜」

とてつもない数字を突き付けられたアンは、咄嗟に60で割ってみる。

「……先輩、200分もシャワー浴びるんですか？」

「アハハ、冗談に決まってるでしょ〜？ ちょい待ってて〜」

なんていう他愛のないやりとりが展開されていたとき。

ラグランジュ0アルマナ遺跡。そこは、ガンダムシルヴィアスが発見されたというコロニー内の遺跡。このコロニーは、スペースデブリをかき集めて造られた、小惑星型のコロニーである。通常のコロニーの外見は円筒状であるが、これだけは一見衛星と見間違える。

そんなコロニー内の偽の青空の下、アルマナ遺跡の一角で、アルバートは、鉄筋で造られた、苔で所々青くなっているポロボロの建造物の前に佇んでいた。この巨大な建物の中に、ガンダムに関する、『見てはならないもの』があるらしい。

(……タブーか……シルヴィアスに選ばれた俺でも駄目なんだろうな)

静寂な遺跡の中、独り心中で呟くアルバート。気流があるのか、アルバートの濃紺の髪がさらさらと風に揺れていた。

すると、携帯端末が彼を呼び出した。それを取り出し、対応した。

「なんだ」

『ガンダムシルヴィアスの起動実験を開始します。お戻りになってください』

「わかった。すぐに向かう」

アルバートは端末をポケットにしまい、来た道に戻った。

アルバートが整備工場に戻った後、シルヴィアスは、指揮する整備兵、スイッチを入れるアルバート、その他数人の整備兵に囲まれて、幾多のケーブルに繋がれながら起動実験が始まるうとしていた。

「これより、起動実験をします。御曹子、スイッチを入れて下さい」「了解」

単調に答えるアルバート。

(ガンダムシルヴィアス様、どうか我々に、力をお貸し下さい)

神妙な表情で機器を弄るアルバート。

「ガンダム、起動！」

最後のスイッチを入れたアルバート。コンソールが一斉に光り出し、文字がものすごい勢いで流れる。アルバートは、何か神聖なものを感じざるを得ずに、ただ呆然としていた。

流れる文字が止まり、コンソールに、

『SVG - XY』

『VNG - XX』

という二組の文字が交互に点灯していた。

「……この文字は……？」

アルバートが訝る。

シルヴィアスはやはり、古き友ヴァイズノートを探していた。アルバートに関しては、自身を起動させる媒体にすぎなかったのだ。

シグナスMSデッキ。そこには、超常現象じみたコロナの異変にあんぐりしているオーグがいた。

「……ますますわかんねえな、このコロナは……」

補修の手間が省けたのはいいが、なにぶん不思議でならなかった。

「……まさかこれ、ナノマシンか？」

オーグは、装甲再生の様子をもう一度注視してみると、やはり、

小さな組織が増殖しているように見えた。

(…………するとコイツぁ…………とんでもなく高性能な機体だぞ…………！？)

メカニックにとって、これほどの性能を持ち合わせたメカに出会って喜ぶのも自然だろう。

オーグが独り興奮していると、コロナのデュアルアイが金色に光った。

「えっ？」

オーグが気付き、点灯を確認した次の瞬間、また消えてしまった。

(…………何だったんだ?)

オーグは訝るばかりだった。

Unit022：懐古の共鳴（後書き）

ユキミ「今日は、こちらからお送りしまーす！」

アリスト「あゝ……緊張するなあ……」

ユキミ「肩の力抜いて！」

アリスト「ああ、すまん」

ネオン「なんだ、だらし無い」

アリスト「た、隊長も出るんスか？」

ネオン「呼ばれたのでな」

ユキミ「ねえおじさん！」

ネオン「おじさんじゃない、ネオンだ」

ユキミ「前回の次回予告ではあたしもう軍事演習する予定だったんだよ？」

ネオン「知ったことか！ しょうがないだろう」

アリスト「文字数がアレだから入りきらなかったらしいよ」

ネオン「文字数がアレって、どついつ意味d」

ユキミ「そうなんだあ」

ネオン「今のでわかったのか!？」

アリスト「というわけで次回こそ、お嬢ちゃんが軍事演習を始めるらしいッス」

ユキミ「また延びちやうかもね」

アリスト「……うん、ありえる」

ネオン「次回も、IDガンダムを宜しくお願い申し上げます」

……

ガルマン「あれ、間違えた？」

ネオン「む、貴様、連邦の輩か!？」

ガルマン「う、うわっ！　なんでUUの奴が!？」

ネオン「待て貴様!」

ガルマン「捕まってたまるか!」

## Unit 023 : 仮面の奥の素顔 (前書き)

新入りのメカが出てきます。まだ資料に載せるほどのものではないため、こちらに。

ミニ・モビルスーツ

MINI・MOBILESUIT

全高：約3m

重量：約5t

小型で寸胴なモビルスーツ。コロニーにて主に普及している。自家用車や作業用機械としての機能も持っていて、軍が作業用に使用しているのは勿論、コロニーに住む人々の日常生活にも密着している。

## Unit 023：仮面の奥の素顔

：ウィルソン・カーター氏に我がスラツシユガンダムの補給を要請したところ、何やらどこかへ誘導されている拙者、春雨装水。エネルギー残量が少なく、悲鳴をあげているであろうスラツシユは、森の中を掻き分け掻き分け、遂に目的地に着いたらしい。

この者達の基地にござろうか、いくつかのポーンや、戦車、更にはポーンより古い型のゲツデまでも駐在してある。

「降りろ、装水とやら」

銃を構えたまま、拙者に降りるよう指示したカーター氏。

拙者が降りると、兵の皆が拙者に銃口を向けている。いきなり連邦の機体を持ち出した野郎なぞ怪しくないわけがなかるう、拙者は特に不思議がらなかった。

「貴様、本当に連邦じゃないみたいだな。なんだその恰好は」

「拙者のポリシーにごぞる」

「……まあいい」

カーター氏はまたも拙者の言葉に呆れてしまった。しかしカーター氏は、拙者から離れ、こちらに向き合った。

「貴様、本当にガンダムのパイロットに似合うだけの實力を持っているか確かめさせてもらう！」

カーター氏は、他の兵士に渡されたサーベルを持ち、拙者に切っ先を向けてきよった。拙者と決闘をしたいのでござろうか。久しぶりに、拙者の刀を唸らせるのも悪くはないな。



「……ふむ、よかろう。拙者が相手になろうぞ」

柴水は腰に差ししてある日本刀を手につけ、抜刀した。柴水の片手に構える刀は、陽の光で銀色に煌めき、手入れを怠っていないことを象徴していた。

「その刀、へし折っても知らねえからな！」

「果たして主にへし折れるか!？」

二人の怒号と同時に、両者の刃が鏝ぜり合い、金属音が軋んでいた。

シグナス503号室。適度に幅を利かせているベッドの上には、ジャケットが無造作に置かれ、その部屋はコーヒーの香りが染み付いている。キャスターの付いた椅子にもたれている壮年男性は、シグナスの中でも有数の古参兵で、連邦ガンダム3号機テトラのパイロット、ヴェルター・ヴァイタルである。

六分目程まで飲まれたカップが、丸テーブルの上の給湯用のポットに添えられるように置かれた。

「……」

彼は無言であるが、どこか怪訝そうに、どこと無く顔をしかめていた。

(ナリア……やはり、彼女なのだろうか……?)

かつて、彼は配偶者と一人娘がいたが、配偶者はUの地上部隊に殺害され、娘は拉致されてしまった。その娘の名前は、他でもない、ナリアだった。

(……別人かと思っていたが……)

拉致されたのは、今から十三年前。ヴェルター側から見ても、彼女が生存していたとしても、十三年も経てば、彼女の当時の面影はあまり残っていないだろう。逆に彼女側も、物心つく前の記憶など、常人であればほとんどないだろう。

しかし彼は、奪還した連邦ガンダム2号機アテナのパイロット、ナリアと初めて話した時、自分の話し方が自然と柔らかくなっていたのを思い出した。彼は、無意識にも彼女とは親子のように接していたのかもしれない。

だが彼は、一度操縦桿を握れば鬼神のようになるが、普段は良くも悪くも寡黙である。自分からアプローチするのが苦手だった。それゆえに、もし彼女が本当に自分の実娘のナリアであったとしても、十三年間見捨てていた負い目から、彼にとっては彼女に打ち明けるのが気まずくてならない。

再び手に取ったマグカップは、手でわなわなと震えている。今彼の唇は、大好きなコーヒーをも拒むように、頑なに閉じられていた。そこにふと、電子音が鳴った。内線だった。

「……なんだ」

マグカップを置き、壁にある受話器を取って対応するヴェルター。声の主は艦長のアカネだった。

「あ、少佐ですか？ あの、もしよろしければ、MSチームの再編成を行うので、ブリーフィングルームに立ち会って頂きますでしょうか？」

艦長にしては少ししどろもどろしたような言い方でヴェルターに用件を依頼した。しかし、ヴェルターはそんなアカネの態度に全く気にかけて答えた。

「わかった。すぐに向かう」

「ありがとうございます」

受話器を戻し、中途半端に残ったコーヒーを飲み干し、着崩した軍服を直し、ジャケットを羽織り廊下に出た。

シグヌス書庫。明かりが備え付けのランプしか見当たらない少し薄暗いその部屋の一角で、副艦長であるルイは、事情聴取をするように正面に座ったトシリアと個人面談をしていた。

「ヒイラギさんが連邦の士官学校時代、あなたと同期で、そこを卒業した学歴を所持している、という噂が流れていますが、本当ですか？」

「なんで本人に聞かないんですか」

どこから仕入れたとも知れぬ事実を、トシリアは不服そうに聞き返す。トシリアは女性が苦手だった。ルイは、そんな事情は知らずに淡々と答える。

「お答えしたくなければそれでも構いません」

ルイのその言葉で、トシリアは、自分のしたことが下らないことだと悟り、果たして答えた。

「……………そうですよ」

「……………そうですか。彼とは、知り合いでしたか？」

「……………まあ、そうですよ」

少々ぎこちなく答えるトシリア。トシリアはルイの言う通り、士官学校でレイジと同級生だった。

「彼は当時どういう生徒でしたか？」

「……………なんか、無口で、なんでもできて、でもそれでも、何となく人望がありました。話してみると、意外と普通の奴で……………」

トシリアは、現在とは少し違った過去のレイジのことを話した。

「何があったのかは知りませんが、今とは少し雰囲気が違う奴でした」

「……………そうですか。貴重なお話が聞けました。ご協力ありがとうございました」

下がって結構です、とトシリアを促す。トシリアはそれとなく去って行った。書庫に残ったルイは、顎に手を当てた。

(……………彼、尉官の資格を持っているのにも関わらず、何故それを明かさないのでしょうか……………)

ルイは独りレイジに懐疑の念を抱いたのだった。

トシリアが向かった先、カフェテリアだった。その道中、アドルフ・シュテルン少尉とはちあわせた。

「あ、お疲れ様です」

トシリアは少尉に敬礼した。

「……曹長か」

アドルフも、トシリアに軽く会釈した。

「……シュテルン少尉、これから、どちらへ？」

話題が見つからず、即席で作った質問をぶつけてみたトシリア。アドルフは困った顔一つせずに答えた。

「人に呼ばれてな」

「少尉もですか……」

「……曹長もか？」

「ええ、先程……」

「そうか……では」

アドルフは、シエラ・クリッジ少尉に呼ばれたルーフに向かったのだった。

トシリアがカフェテリアに到着した。

「……おお、トッシー！ 最近どうしたんだよ!？」

開口一番にビリーの陽気な声が発せられた。他にも、レイジやガルマン、ナリアもいた。

「最近、作者に忘れられてたみたいだが」

「まあまあ、大人の事情を言っちゃいかんよ」

ビリーがレイジを宥めると、トシリアはビリーの隣に座った。

「どうせ俺は、影が薄いキャラですよ」

「いや、その話引つ張るのかよ!」

自嘲するように言ったトシリアに、かぶせるようにしてツッコむガルマン。

「お前のその『シャウティング・ツッコミ』、最近あんま無いよな」  
「何だよそれ！ 変にカツコよく言っくんじゃねえよ!」

変に名付けたレイジにさらにシャウティング・ツッコミするガルマン。

「心配してんだよ俺。お前のアイデンティティが崩壊するんじゃないかって」

「余計な心配いらんわ！ それにそんなちっぽけなもんは自分のアイデンティティ全権を委託した覚えはないわ!」

完全に以前の調子に戻ったガルマンと、耳を塞ぐレイジ。周りはそれにほんのり吹き出したのだった。

突然そこに、艦長であるアカネがやってきた。

「あ、二人ともいたわ」

皆が振り向く。アカネは少し急いでいるようにみえる。

「どうやら探している人物が二人いたみたいだが、一挙両得したらしい。」

「ネイビー曹長、オーエン伍長、ちょっと、ブリーフィングルームに来てちょうだい」

「……なんですか？」

「また呼び出しか、というような顔をするトシリアにアカネがとどめをさす。」

「いいから来てちょうだい」

目つきを鋭くしてきっぱり言うと、一足早くブリーフィングルームに向かったアカネ。ナリアは従順について行くこととする。するとアカネは、突然引き返して来て、ある人物に手招きした。

「あ、それと、アラーク中尉も、『一応』来てちょうだい」

「いや、なんで『一応』強調してるんすか!？」

「早く!」

「ああ、はい」

仕方なく、渋々と、アカネについていくガルマンだった。

三人が一挙にいなくなったカフェテリア。残るはレイジとビリー

の二人だけとなった。

しばしポカンとしていた二人だが、我に返ったように言葉を発したのはレイジだった。

「……何の用やったんやるな？」

「さあ……？」

「艦長さん、随分切羽詰まってる気がするが……」

レイジの問いに、首を傾げるしかなかったビリーだった。

そこに、どたばたと廊下を走ってくる忙しい音がカフェテリアに近づいてきた。その正体が、カフェテリアの入口に姿を現した。

「ビリー！　すごいぞ、コロナ！」

オーグが息を荒げながら壁に手をつく。

「……どうしたんだよ、オーグ」

「コロナ……見てほしいんだ……！」

まだ息まじりで話すオーグの顔はとても昂揚していた、

「……珍しいな、オーグがそんなに興奮するなんて」

「……レイジも居たのか」

「んああ」

オーグはビリーの言葉に気にならず、レイジの存在を確認した。

「……デッキに来てくれ。二人ともな」

「はあ……」

「……ああ」



二者二様の答えが返ってきたところで、二人はオーグにデッキまで連れられた。カフェテリアには、もう人は残っていなかった。

ブリーフィングルーム。パネルを使わないので、照明は明るくしてあるこの部屋に、既に二人の士官が居合わせていた。

一人はローゼ・ボリノーク大尉。ルナートに居たG1のテストパイロットでもあり、実直な軍人である。清潔感のある短めの髪が特徴的だ。

もう一人は、エデ・リアーノ中尉。同じくテストパイロットの女性であるが、些か性格に問題がある厄介者。ブロンドの髪が無造作に伸ばされていて、最低限度の手入れしか施されていないようなイメージを受ける。

この二人は先輩後輩の関係であるらしいが、ローゼはエデを女性と見ていなかった。

「……俺たちがガンダムに乗るのか」

「どうせあたしは、G1のお袋、アサルトっすよ」

「……もっと女性らしい喋り方ができないのかよ」

ローゼが呆れたようにエデを諷めるが、

「無理っすよ。これでも、ボリノーク先輩には穏やかな方っすよ」

「……はあ」

その言葉にローゼが頭を抱えたところに、先程内線で呼び出されたヴェルターがブリーフィングルームに顔を出した。

「……ポリノーク。久しぶりだな」

「あ、ヴァイタル少佐、お久しぶりです」

ローゼは起立し、きびきびとした動作で敬礼した。ローゼは、以前ヴェルターの下下だったらしい。

「……先程の戦いでは、ゆっくり話せなかったな」

「……そうですね」

先程の戦いでヴェルターと一緒に部隊を組んだG1指揮官機に乗っていたのはローゼだったらしい。

「……大尉に昇進したと聞いている」

「はい、お蔭様で」

きびきびとした答えを出したところにエデが、

「このオッサンだれ？」

「何言ってるんだ。俺の上司だぞ？　口を慎め！」

「ふうん」

ローゼはエデを諫めるも、彼女は無頓着に流していた。

「部下の無礼、申し訳ありません。自分が不甲斐ないばかりに……」

「……その者は」

あまり気にした風もなく、彼女を指した。指された彼女の顔は据わっていた。

「あ、自分の後輩のエデ・リアーノ中尉です……て、お前が言えよ」

「えー……よ、よろしく願います」

「……こちらこそ、よろしく頼む」

ヴェルターは毅然とした態度を全く崩さずに礼儀を返した。

(……はあ……)

ローゼは、以後も続くであろう気苦労が目に見えるようで、うなだれ頭を抱えた。

そこに、トシリア、ナリア、ガルマンを連れたアカネがやってきた。

「……これで全員揃ったわね」

アカネは三人を席に誘導し、前に立った。

「では、早速MSチーム再編成に移りたいと思います」

アカネは皆の顔を一通り見渡し、話を続けた。トシリアはどこか不安そうに、ナリアは無表情、ガルマンはどこか不服そうに、ヴェルターは毅然とした態度で、ローゼ・ポリノークは真面目な様子で、エデ・リアーノは面倒臭そうに前、もといアカネを見ていた。

「シグナスに補充要員が何人か来てくれました。それに際し、チームを再編成したいと思います」

アカネは、後ろにあるホワイトボードに水性マジックで文字を書きはじめた。そこに書かれたのは、

□ MSチーム再編成

3号機 ヴァイタル少佐

4号機 アラーク中尉

1号機 エデ・リアーノ中尉

2号機 ローゼ・ポリノーク大尉

G1 ネイビー曹長、オーエン伍長』

といった具合のものであった。アカネが黒い字で書いたものは、トシリアとナリアにとってはシビアな内容だった。

「……そんな……」

「……」

トシリアは愕然としていたが、ナリアはやはり表情を変えていなかった。

「……悪いけど、二人にはガンダムを降りてもらおう」

憐れむような目でトシリアとナリアを見るアカネだが、そこにエデが、

「……ッ、負け犬なんか憐れむ必要なんかないんじゃない？」

明らかにトシリアに向かって馬鹿にするように言った。

「……」

トシリアはエデに対し、今にも噴火しそうな火山のごとき噴怒の表情を見せていた。

「なに？ 悔しいの？ 悔しいならあたしを倒してごらんよ」

「よせ、挑発するな」

ローゼはエデを左腕で制した。

「……迷惑かけて悪いな、ネイビー曹長」

「……」

ローゼが割って入り、トシリアの表情は、『噴怒の表情』から『ムツとした表情』になっていた。

「すみません、ヤガミ艦長。リアーノ中尉にはよく言っておきます」

ローゼは畏まってアカネに謝った。

「……頼みます、ローゼ・ポリノーク大尉」

アカネは二人に鋭い視線を送った。アカネは向き直って、皆に言った。

「……少々揉め事がありました、何か質問のある方？」

異議なし、と言わんばかりに誰も手をあげなかった。

「……それでは、解散します。次の戦いに備えて下さい」

その瞬間、エデは直ぐさま離席してトシリアの顔を覗き込んだが、それはまたもローゼに制され、連行された。問題児とよき先輩が去ったところにガルマンがトシリアに歩み寄った。

「……何も言えなくて、すまん。正直、同階級としても、俺も奴の言動に癪に障った」

「……いや、アラーク中尉。こちらこそ、心配かけさせて、すみま

せん」

トシリアは思い出した。自分が隊列を乱し、単独行動に走り、ガルマンの4号機で自機が殴られたこと。その後、殴った後であるにも関わらず、ガルマンが単機で迎えに来てくれたこと。

トシリアには、いつも気にかけてくれるガルマンの言葉が嬉しかった。

ガルマンも思わず口元が綻び、じゃまた、という風に去って行った。

トシリアは、じつと座ったままのナリアを見た。乗る機体が降格されたのに、殆ど表情を変えていなかった彼女を。彼は訝って彼女に話しかけた。

「……お前はなんか思わないのかよ。ガンダム降ろされて」

「……私には、たしかに荷が重かった」

「……?」

呆気にとられたような顔をするトシリア。ナリアは話を続けた。

「……宇宙では全くふるわなかったし、私は、エネルギー無駄遣い女だからな」

「……エネルギー無駄遣い女?」

「この作者がそう名付けているそうだ」

「……は、はい?」

だんだんシュールな話題になってきたところに、まだ退室していなかったヴェルターが脇から割って入る。

「……二人とも、ガンダムの件、気に病む必要はない。これからの精進を怠るなよ」

唐突な登場に少し驚いたトシリアとナリアに対し、穏やかな目を双方に向ける。その励ましの言葉に、トシリアとナリアも応えるべく、

「……お気遣い、ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

二者二様の答えを返したトシリアとナリアだった。

「……」

ヴェルターは去り際に二人を見るが、どちらかというところ、視線はナリア寄りであった。

「……」

ヴェルターは何か言いたそうに、口を少しもごもごさせるが、トシリアという第三者いるために気恥ずかしく、かといってナリア個人を呼び出すのも気が引ける。結局、何も言えずにブリーフィングルームを去ったヴェルターだった。

ブリーフィングルームに再び静寂が訪れる。そんな中でトシリアが切り出した。

「……少佐、何か言いたそうだったなあ」

「……？」

ナリアは少し困ったような顔をしながら首を傾げた。その様子を見たトシリアは、何か胸の奥が揺れた気がした。

(…………なんだろう、この感じ…………)

俺、エスパーじゃないのに。なんて冗談を言いかけたが、彼は、無意識にナリアを見つめたままだった。どこかいたいけな、それでいて懐かしいような、ナリアはそのようなイメージを彼に残した。彼はその具体的な感覚までは自覚していなかったが、それでも、彼の心は彼女でいっぱいだった。

ラグランジュ。今、ユキミやティア達の乗っているダイオギニススが停泊しているコロニーである。そこには軍事関連の施設が数多ある。MS製造工場や、UU軍士官学校、軍事訓練場など、軍事施設はほぼこのコロニーに集約されていて、コロニーの民間人への配慮が伺える。一応、ごく小規模の一般居住区もあるのだが。

そのこの港にて、白と青のダイオギニススが羽根を休めていた。港には、貿易または通商関係者たちの行き交いで適当に賑わっていた。

ダイオギニスの廊下では、朝早くから活動しているクルー達がちらほら歩いていた。

カフェテリアをあとにしたネオンも、そんな廊下を独り歩いていた……否、その後ろに一列に並んで随行するユキミ、ティア、アリストもいた。咄嗟に、ネオンがツッコむ。

「…………なぜにこう…………某RPGのような隊列を成しているのだ？」

「隊長が勇者ですぜ」

「カダタが勇者なんてシニールだよ」



「誰が盗賊だ。まったく……」

ネオンがスパツとツツコみ、二人の茶番に呆れる。

「少尉は……なんか古文書持ってそうだな」

アリストは勝手にティアを配役するが、その憶測はあながち的外れではなかった。彼女は実際、ガンダムについていろいろな資料を持っているからである。因みに配役したアリスト本人は、ティアがその資料を持っていることは全く知らない。

「……私、考古学者？」

「うん、そんな感じだな」

「ティアちゃん物知りだしね！」

アリストとユキミは歓喜するが、ネオンはやはり冷めていた。

「……いつまで続ける気だ？ この不毛なやりとりは」

「……つまんねえの」

アリストがポケットに両手をつ込み、歩調をネオンに合わせてようとす。

「……気を引き締める。特に、サイン」

「わかってますよお、おじさん閣下」

「……」

ネオンはもうツツコむのが面倒になったのか、ユキミに向いていた顔を正面に戻し、無機質に歩き続けた。

同艦のレストルーム。出口の脇には、南国を思わせる植木が部屋を飾り、室内にはいくつかのソファアが適当に並べられていた。

「昨日、何があったんですか？」

洗いざらしのバイオレットの髪をしたアンは、なだらかにウエーブのかかった黒っぽい髪をしたルネに問うた。

「昨日はドリユフス中尉を怒鳴り散らしたんだよお」

後頭部をソファアの背もたれに預けるように呆れていたルネ。

「……人質のことですか？」

「そうそう。許可もしていないのに撤退しやがってさ。挙げ句のほうには、なんか知らないけど、あいつ口の周り真っ赤だったし！」

つらつらとアンに愚痴るルネ。アンは、ドリユフスの口がどうなつたのか気になった。

「口の周り……？」

「捕虜に回し蹴りをされたって」

「ええ、それって大問題じゃないですか！」

アンが目を大きくして驚く。

「うん、どうもその捕虜、女の子だったみたい」

「……どのくらいのこと……？」

「うん？ アンちゃんよりも年下じゃない？」

「はあ……」

ルネは、ローテーブルにある紙コップを持ち、水を喉に流し込んだ。

「ま、さしずめ、痴漢でもされたんじゃない？」

「痴漢で……」

「レディは何もしてこない男には何もしないわよお」

ルネは陽気な顔で手をひらひらさせながらおちやらけた。

そこに、ドラク ……いや、ネオン一行がレストルームの入口を通り続った。

「あ、ネイルバート大尉！」

アンが出口の向こうでととと歩いているネオンを呼んだ。

「ん、リオネ少尉か？」

声のしたレストルームの方に体を向け、足を止めたネオン。それを受けて、後ろから様子を伺うようにレストルームを覗くユキミの姿があった。

「おじさん、あの人たち誰？」

「おじさんじゃない、ネオンだ」

と出入口でお決まりのやり取りをしている二人に、

「あ、ネオン君じゃない」

ルネは首を180度回して、入口に立っているネオンの方を向いた。

「……おはようございます、エイブリー少佐」

ネオンはルネにあくまで上官に対する礼儀を崩さないが、

「んもう、そんなにカタクならなくていいのに」

「……いえ、そういうわけには」

ルネは今度は上体もネオンの方に向け、半身をソファアの背もたれから乗り出してネオンを宥める。

「……おじさん、あの人少佐さんなの？」

ユキミはネオンの軍服を掴み、上目遣いで問うた。

「……そうだ」

上官の前で下らないやり取りをするのは気が引けるので、敢えてツッコまずに、話題を素直に肯定した。だが、

「あ、おじさんって呼ばれるの黙認した」

ニヤニヤしながらルネがネオンをイジる。

「ウオツホン、では、私は失礼します」

軽く握った右手を口に近づけ、大袈裟な咳払いをしたネオンは、レストルームからいち早く離れた。それを真つ先に追うユキミ。

「待つてよおじさん」

「おじさんじゃないと言ってるだろっ!」

「うえ〜ん!」

嘘泣きをするユキミを余所に、ネオンは他の二人も連れて歩き出した。

「……ネオン君ったら、あの子に浮気しちゃって……」

退室したネオンの余所で頬をむっ〜と膨らませながら不機嫌になるルネ。

「浮気って……」

アンは勝手に嫉妬しているルネに冷汗をかいた。そうかと思うとルネは、

「もう、あなたなんか、知らないんだから!」

夫婦喧嘩を気取っているのだろうか、ブンブン怒りながらソファーから立ち上がり、大股で部屋を出た。

「……」

もはや何からツッコめばいいのかもわからず、レストルームで独り呆然と立ち尽くすアンだった。

ダイオギニス病室。体の各部分が包帯で巻かれている少年、ソロが

いた。食事を終えたのか、スプーンがトレイに無造作に置かれていた。コロニー外壁のスリットから差し込む太陽の光と町の明かりが、病室に優しく差し込んでいた。

「……ここは、ラグランジュ か？」

窓の棧に手をかけるソロ。いくつもの軍事施設と、それらを繋ぐ街路樹達。ソロにとってここは懐かしい場所だった。

UUの士官学校でいろいろなことを学んだ。

訓練場で軍事演習をした。

「……」

あの頃から、自分は変わったのだろうか。そう自問しているようだった。

窓の外に意識が集中していると、後方から足音が聞こえた。ふと振り返ると、ダイゴが戻って来ていた。

「……食べ終わったか？」

「ああ」

「……持っていく。その足では、出歩けないだろう」

ダイゴは、ソロの目の前の食器をまとめ、持っていこうとした。

ソロは、一旦は食器を持ったダイゴを見送ろうとしたが、ふとそれとなく気になったことが浮かんた。

「ダイゴ、一つ聞いていいか？」

「……？」

ダイゴは、ソロが突如引き止めたのに立ち止まり、ソロに向き直

した。

「俺はあの頃から……変わっているかな……？」

「……あの頃……？」

「……お前と士官学校にいた頃さ」

親から英才教育の学校に通わされていたが、うまく折り合いがつかず、学校を中退して家を出て、ミニモビルスーツを使った公共事業のバイトで生計を立てながら士官学校に入学した。

どうしてか、自分が英才教育学校を中退したことが流布していた。それでも、腰抜けと蔑んだ親を見返したかった。

教官にも平気で意見を述べていた士官学校時代の自分。幾度となく殴られたが、今はその上官はいない。どうやら戦死したみたいだ。しかも、殴った教官全員揃って。

そんなことがあって天狗になったのか、いつの間にか人を見下すような態度を取るようになった気がする。

「……そうやって過去の自分を省みれるなら、きっと変わっているはず」

ダイゴは、士官学校時代の同期だった。宇宙海賊によるテロで軍事演習中の学生のうちソロとダイゴが脱出ポッドのまま宇宙空間に投げ出されたことがあった。ソロの機転で難を脱し、無事救援されたのだった。

「……そうか」

自然に笑顔が出た。ソロとダイゴの仲が伺える瞬間だった。無表情だったダイゴもつられて口元が綻び、食器を持って退室した。

ダイオギニス発着デッキ。ネオンを先頭にした一行は、ハッチ付近でやり取りをしていた。

「よし、では各自、これに乗れ」

ネオンが指したものは、寸胴の小さいMSのようなものだった。ユキミは二機の寸胴を見てはしゃぐ。

「あ、これミニ・モバイルスーツでしょ!？」

「そうだ。よく知ってるな」

ネオンは、地球生まれであろうユキミがこれを知っているのに意外に思ったらしい。

「あたし、コロニーに来たことあるもん」

「そうなのか？」

「そこで二輪車と航空機の免許取ったの!」

ユキミはポケットから財布を探り当て、両方の免許証を取り出した。

「……随分活発な娘だな」

「へえ、お嬢さんすごいんだなあ」

ネオンの脇でも免許証を見るアリストもユキミを賞賛した。ユキミは二つの免許証をしまおうとするが、



「……あ、二輪の方期限切れちゃうじゃない」  
「切れるんだ!？」

アリストが驚いたのは、文字通り期限が切れること。要するに彼女は、期限が切れるほど昔に免許を取ったことになる。五年など、決して長い年月ではないが、まだまだ思春期の少女には十分に長い年月である。

「どうしよう、どこで書き換えようかな？」

「……まあ、今すぐ切れるというわけではないだろう。今は訓練場に急ぐぞ」

ネオンは皆を促す。ネオンはアリストと同じミニ・モビルスーツに乗り、ティアとユキミが同じミニ・モビルスーツに乗った。

「……行くよ」

「うん」

ティアが操縦桿を握り、後部座席にユキミが乗った。

ラグランジュ。前述の通り、軍用施設の集中したコロニーである。景色の中の街路樹達が流れていく中、軍用のジープなどがネオン達のミニ・モビルスーツと擦れ違った。手の空いている兵士は擦れ違い様に敬礼していた。ユキミもUに順応したのか、ちゃっかり敬礼していた。ティアは、運転しながらそれを微笑ましく見守っていた。このティアの反応にユキミは、

「お母さんみたい」

とツッコんだのは、また別の話である。

UU軍演習場。大袈裟なゲートを、警備兵の許可を得てネオン達の乗る二機の寸胴がくぐり、入場した。

「……」

先程から声を一言も出していないユキミ。ティアはそんな彼女を案じるように、

「……緊張、してる？」

「うん、ちよっぴりね」

そう答えたユキミの声もやはり神妙だった。

「……大丈夫。多分、コーグエン曹長も一緒に演習やるから」  
「アリスト君も一緒なんだ！」

ユキミはすぐにいつもの調子に戻り、ティアもホツとした。  
軍用ガレージに着き、ミニ・モビルスーツを停めた。

「……じゃあ、降りるよ」

「うん」

運転席及び後部座席を覆うガラスが開き、ティアとユキミが降りる。

「ティアちゃんは一緒じゃないの？」

「……私、薬をもらわなくちゃならないの」

「えっ、薬……？」

ユキミはたかがその単語に引つ掛かってしまった。ティアは無表情で答える。

「……私、持病があるから……その、薬」

「そうなんだ……」

ユキミはただそう答えるしかなかった。喘息か何かだろうか、な  
どと思いながらティアの脇を歩いた。

少女二人は、後ろから歩いて来たネオン、アリストと合流した。

「じゃ、お嬢さん。行こっか」

「やっぱり一緒に感じ？」

アリストの軽い誘導にユキミが素朴な口調で聞き返す。

「……えっ、もしかして、嫌？」

今朝、ユキミに失言を漏らした（疑惑）彼は少しばかりセンチ  
ティブになっていた。

「ううん、寧ろ、知ってる人がいてよかったよお」

何の気無しに間延びした答えを返すユキミを見て、とりあえず一  
安心した。

「行こ！」

「うん」

ユキミに促され、演習場に誘導するのだった。

シグナスMSデッキに仁王立ちするコロナの前には、オーグに連れられたレイジとビリーの姿があった。

「ここが自己修復されてるのをみたんだ」

オーグは、コロナの右肘部を人差し指で二人に示した。

「……ナノスキン？」

レイジが間の抜けた声で問う。

「……まあ、あなたが間違いないかもな」

オーグは後頭部を掻きながら、少々答えづらそうに言った。

「まったく、何なんだよホントにコイツは……」

レイジはコロナに問い掛けるようにコクピットに足を掛けてみた。何やらコンソールが光っているのに気付く。気になってシートにどっかり座りながらそれを見てみると、何やら文字が点滅していた。最初は何の文字か訝っていたが、何かを考えているように硬直した

あと、声を発した。

「何かどっかで……？」

レイジは、見覚えのあるような無いような、そんな感覚に見舞われた。交互に点滅するその文字は、

『V N G X X』

『S V G X Y』

だったのだ。

「どうした？」

オーグがレイジの声に呼応するようにコクピットの中に問い掛けた。

「いや、何でもない」

無機質に答え、縁に手を掛けてシートを立ち、コクピットから出る。

ふと振り返る。謎めいた意味深な文字を点滅させているコロナに、レイジは何か壮大なものを感じざるを得なかった。

(……何だろう、思い出せねえ)

歳はとりたくないもんだ、なんて冗談を心中で呟きながら、コロナの顔を仰いだのだった。

神の共鳴に目を金色に光らせたコロナ。その姿は、しがらみから抜けた開放感すら感じさせた。

Unit 023：仮面の奥の素顔（後書き）

レイジ「最近、作者がこのコーナーを面倒臭がってるみたいだ」

ガルマン「知らんわ。勝手に作ったのが悪いんだろが」

レイジ「このコーナーと本編の整合性を考えると非常にややこしいみたいだ」

ガルマン「だから言ってるんだろ。勝手に作ったのが悪いって」

レイジ「お前のツツコミもなんか面倒臭がってるしな」

ガルマン「む……」

ビリー「……えー、なんかキレのない会話ですが、構わず次回予告ですー！」

レイジ「次回を見なけりゃわからん。以上」

ガルマン「意味無っ！！ 予告の意味無っ！！ いつも通りだけど」

レイジ「だから台本にそう書いてあんだって」

ガルマン「いい加減にしろよ！ その台本ネタ！」

ビリー「では、懲りずに台本通り、次回も」

レイジ「EDガンダムをよろしくお願いします」

ガルマン「。」「

.....

ガルマン「何だよこれ！ どう発音しろってんだよ！」

レイジ「『まる』に決まってるだろ」

ガルマン「.....」

## Unit 024：光冠の束縛

神秘の聖地、ラグランジュ0。コロニー市民の抛りどころであるガンダムシルヴィアスが、二世紀ぶりに復活しようとしていたが、文字が相変わらず点滅したまま、膠着状態に陥ってしまった。

(…………どうなってるんだ…………ガンダム様は…………)

表情を曇らせるアルバート。コクピットの中で操縦桿を握ったまま、変化を待った。

(…………それにしても、このローマ字は何なんだ…………?)

アルバートが訝っていたのは他にもない、コンソールに点滅する

『SVG XY』

『VNG XX』

である。アルバートは、このローマ字が一体何を表しているのかを模索してみるが、一向に見当がつかない。

「御曹司、ガンダムシルヴィアスはまだ起動しませんか？」

機体の外から整備兵の声が聞こえる。起動を待ち望んでいるみただが、残念ながら吉報は伝えられそうにない。

「…………システムは起きなさったが、俺にはわからない文字が点滅なさっているだけだ」

「わからない文字…………でありますか？」

整備兵は訝し気な様子で聞き返す。アルバートがそれに肯定する



と、整備兵は顎に手を宛てて考え込んだ。

「このまま起きるのを待つか、一旦やめて問題点を探すか。」

「……一旦中止にしましょう」

彼は後者をアルバートに提案した。

「……わかった」

電源を落とし、コクピットから離席し、外に出た。

ガンダムシルヴィアスは、旧き友をいつまでも呼んでいたのだ。

ガンダムシルヴィアスのコンソールに同じく、文字が点滅していたコロナガンダム。しかし、今は為りを潜め、静かに佇んでいた。

「……しかし不思議な機体だな、コイツは」

レイジは、相変わらずの老成した口調でコロナを仰いだ。

「……かえって不気味な感じがするよな……」

オーグが明らかに冷汗をかきながら言う。

「ったくう、オーグは臆病だな」

ビリーはオーグの背中をバンと叩きながらおちゃらけた。どうやら彼は、市松人形といい、オカルトな要素が苦手らしい。

「オーグ幽霊信じてないもんな！」

「いるわけねえじゃん、そんなもん」

そう言っただけで憚らない。その言葉がぴったりな口調でしねっと言っただけだ。

「じゃあ、心靈写真をどうやって説明する？」

「それは……アレだ、捏造だろ？」

「……違うんだな」

ビリーは顔に影を作りながらオーグに詰め寄った。

「な……何だよ」

平静を保とうと口調を無機質にするオーグ。ビリーは顔の影を消さずに話を続ける。

「あれはね……この世に怨みを持った怨霊が……この世に存在するもの自体に怨みを持った怨霊が……そう遠くない死の宣告を……」

と言った次の瞬間……

ウーッ！

「「うわあああああ！？」」

二人の野郎が同時に跳ね上がり、同時に叫び、あからさまにビビっていた。

しかしそれは、デッキ内のサイレンが鳴っただけであった。

『総員、第一戦闘配備。繰り返します。総員、第一戦闘配備……』

アカネ艦長の声がデッキ内に響いた。

この一連の流れを最も冷静に受け止めていた人物は、レイジだった。

「……何ビビってんや、お前ら」

ごく無機質にツッコむレイジの目の前には、ビビった余韻でまだ恍惚としている二人がいた。

「第一戦闘配備だよ」

「お、おう……」

「……」

レイジがさつさとコロナに乗った一方で、ビリーとオーグは歯切れの悪い返事をしていた。

「……何言ってくれてんだよ、ったく……」

「いや、俺はそんなつもりじゃ……」

心臓の鼓動がまだ早鐘である二バカを余所に、他のパイロットもそろそろとやってきた。気を取り直してそちらの方を見てみた二人だが、二名ほど見かけない顔の男女がいた。

「あの二人、誰だろう？」

「……補充要員じゃね？」

一人は、黒い髪を短く丁寧に切られている実直そうな若い男性と、

「あの女のほう……なんか阿婆擦れしてるみたいだな」

「いや、失礼でしょうが」

それぞれ、ローゼ・ボリノーク大尉とエデ・リアーノ中尉である。エデへの酷評を漏らしたオーグを、ビリーが諫めたのだった。

）

ルーフに呼び出されたアドルフ・シュテルン少尉。そこには既に呼び出した本人であるシエラ・クリッジ少尉が、ガラス越しに見える宇宙を眺めていた。

「……シュテルンだ。用件を伺おう」

いつもの落ち着きを払った口調でシエラを気付かせる。案の定彼女は彼に気付き、何やらもじもじしていた。恋愛には疎かったのだろうか、あまり慣れていない風だった。

「あ、あの……これを……」

シエラが差し出したのはチョコプリンだった。彼女は彼が甘党だと知っていたらしく、この品をプレゼントした。しかし、アドルフも恋愛には疎かった。

「……だからそれが売り切れていたのか」

「……え？」

あまりに直球な言葉がシエラの心を串刺しにした。

「……だが、受け取るう」

やはり好きなものには逆らわず、シエラの不器用なプレゼントを受け取った。彼女が先輩であるアドルフに受け取ってもらい、ホッとしていたのも束の間、彼はまたも直球を投げた。

「……それで、何故このような所で……？」

少し困ったような表情で尋ねたアドルフに悪気は皆無だろう。シエラは吃り、やはり吃った。

そこに、アカネ艦長による例の第一戦闘配備の艦内放送が入った。

「……では、また後で」

アドルフは一足先にブリッジに向かった。追い掛けるようにしてシエラもブリッジに向かうが、何となく釈然としない表情だった。

「はあ……」

ラグランジユ 宙域に展開しているMS部隊の先頭に、アラン・ドリュュフス中尉機がいた。

「中尉、歯は大丈夫ですか？」

部下に、回し蹴りを直撃された歯を案じられたドリュュフス。

「差し歯を入れたからとりあえずは平気だが、いてて……」

まだ少し腫れている頬を押さえようとすると、バイザーが邪魔して触ることすらできないのに気付いた。

「お大事に……」

部下はそう言うしかなかった。

(くそう……エイブリーのババア！ それにあの小娘……！ だから女は嫌いなんだ……)

今回ドリユフスは、勝手に撤退させたことによりルネ・エイブリー少佐にこっぴどく怒られ、今すぐ歯を全部抜くか最前線に送り込まれるかの選択肢を与えられたらしい。もちろん、後者を選んだそうだ。

「もうじき連邦の哨戒部隊とぶつかるとぞ。各個、準備しておけ！」  
「は……」

ドリユフスの号令で、後続のレピドウス隊も戦闘体勢に入った。

ブリッジには既に艦長のアカネと、副艦長のルイ、オペレーター  
のヘンリーなどがいそいそと戦闘体勢に入っていた。

「今回は、私たちシグナスも後方援護します。全速前進！」  
「遅れてすみません、了解です」

と、聞き慣れない声が後ろの入口から聞こえた。その者は、操舵席に移った。

「貴方は？」

「あれ、ご存知ありませんか？ ルナートから来ましたカシム・ニール中尉ですが」

「ごく丁寧な口調だが、丁寧過ぎる口調ゆえに他の者に違和感を与える。」

「……操舵手はシユテルン少尉のはずですが」

「だっていないじゃないですか。そのような方にこの艦を任せられますか？」

「……む」

どこか癢に触る口調のニールに表情を曇らせるアカネ。

「……僕の腕も見てほしいので、今回は僕に舵を任せて下さい」

これが本音だろう。そう解釈できたアカネは、彼に覚悟を決めさせた。

「……あなたの決意に蛇足するようで悪いけど、操舵はあなただけの命が乗ってるわけじゃないの」

アカネは話を続けようとするが、そこにアドルフが戻って来た。

ブリッジで少し揉め事が起きている余所で、ガルマンはハンガーにてトシリアと別れ、愛機シャドーのコクピットに乗り込んだ。いつも通りにシステムを起こし、出撃準備を整える。

(……トシリアやオーエン伍長はG1なんだよな……間違えないようにせんと)

今度アサルトに乗るのは、問題児エデ・リアーノ中尉。あんな奴が自分と同階級などと、認め難い。そんなことを思いながら起動操作に一区切りが付き、簡単な作戦説明が機内に響く。

『UUのMS部隊がこちらに向かって来ています。既に哨戒任務に就いていた友軍が応戦体勢に入っています。彼らをも援護して下さい』

「……了解した」

今度は副艦長のルイが手短かに説明を終え、ガルマンは愛機を発着デッキに急がせた。彼の頭の中に、まだルイの顔が残っていた。

(……だあーッ、何考えてんだ俺！)

頭を掻きむしり、シャドーをカタパルトデッキに乗せた。

レイジは、先程まで騒がしかったコロナのOSを立ち上げ直すそうとしていたが、今コロナのOSは、黄色にコンソールが光ったまま、フリーズしていた。

(だめだ、全く動かん。再起動させんと)



コロナの電源を一旦落とし、一からOSを立ち上げた。すると、いつも通りに『System-CORONA』という文字が出たあと、コンソールに何やら案内が出てきた。

「『Bind機能を使いますか?』……なんやこれ」

てきとうにEnterを押すと、画面が黄色に光っていたのが元通りの青色に戻り、今まで何事もなかったかのように普通に起きたのだった。

(……やはりあの意味不な文字の点滅は、例のブラックボックスの中にある……このOSと直接は関係ないのか)

なんとか再起動に成功したコロナは、他のパイロットの機体に少し遅れをとっていた。

「やぐ、早くしねえと」

コロナを急がせると、アサルトと鉢合わせた。

「おお、トシリア。さっきはなんで艦長さんに呼ばれたんだい?」

と何の気無しに聞いたレイジだったが、聞こえた返事は明らかにトシリアのものではなかった。

「ああ、あの負け犬トシリアっていうの? 知らなかった」

かなり砕けた口調の女性の声だ。パイロットはエデ。レイジの質問に、間接的に答えたようなものだった。

レイジも彼女のその物の言いように癩に触ったゆえか、こう答え  
た。

「ああ、その機体阿婆擦れが乗ってんの？ 知らなかった」

「誰が阿婆擦れだ！！」

レイジの思わぬ反撃に、殆どない乙女心を持ってしてツッコむ。

「早く先に行けよ。この機体の足、カタパルトデッキの規格と合わ  
ねえからよ」

「……ち、傭兵ごときが」

「何とでも」

エデは、レイジに一切激昂されずに流されているのにつまらなく  
思い、コロナよりも先にカタパルトデッキに向かった。

(何やねん、アイツ)

カタパルトデッキに消えてゆくアサルトを一瞥したあと、自分は  
ハッチまで歩ませ、漆黒の宇宙空間に飛翔させた。

テトラを先頭に、シャドー、G1数機、アテナ、アサルト、コロ  
ナの順にシグヌスから出撃した。

「あ、出たよ。クソ野郎」

「クソ野郎じゃない。レイジ・ヒイラギという名前がある」

アサルトのすぐ後ろを飛行するコロナに向けて毒舌を吐くが、レ  
イジは全く動揺せず、ごく穏やかな口調で答えたのだった。

「あたしだって阿婆擦れじゃないし」

「えっ、違うんか!？」

レイジが目を丸くして驚く。

「ちげえよクソ野郎！んな名前の奴いるわけねえだろクソ野郎！」

またも汚い言葉で罵倒するエデだが、

「はいはい」

レイジはあからさまに面倒臭がるようにあしらった。

「こいつホントムカつく。上から目線で話してんじゃねえよ」

エデが、度重なるレイジの淡々とした態度に半ギレするが、

「黙ってるブス」

レイジは、ごく無感情に女性にはタブーの捨て台詞を吐いた。レイジとて、ユキミがUUの捕虜になったゆえ胸中穏やかな方ではなかった。

「ッ、」

いかにも恨めしそうな目でコロナを睨むエデ。しかし、当のレイジは知らんぷりと言わんばかりに鼻唄をし始めた。

「この野郎ッ！」

アサルトがコロナに掴み掛かるが、アテナがそれに気づき、アサルトを羽交い締めにした。

「やめる！ 今そんなことしてる場合じゃないだろ！」

ローゼの声がアサルト機内に響く。

「……こいつ……後で模擬戦だ！ テメエをケチヨンケチヨンにしてやる！」

エデは悪あがきにレイジに模擬戦を申し込んだ。

「……わかった」

レイジは鼻唄をやめ、淡々と了承した。そこからは、険悪なムードは流れなくなった。ローゼはまたも左手で頭を抱えた。

「もうじき友軍と合流し、敵MS部隊と応戦する。気を抜くなよ」

ヴェルター機であるテトラから各機に通信が入り、シグヌスのMS隊も戦闘体勢に入った。

ダイオギニスが出航して程なくした頃、UU軍領アレクサンドリア基地整備工場にて、新型機『ゼネル』がもう一息で完成という状態であった。

ゼネル。ガンダムシルヴィアスに準ずる戦力として製造された、核分裂炉搭載の高出力機。ハングライダーと甲殻類の中間を思わせるバックパックは、見る者に怪物的なイメージを与える。

「これがゼネル……」

適度に髭を生やした三十代前半頃の男性、ジェラル・ネルソンが、背後の巨大な怪物に寄生された巨人を仰いだ。

「まだサイキック・センサーを搭載できていませんが、現段階でもかなり強力なMSですよ」

ネルソンの傍にいた整備兵が補足するように、ゼネルを誇っていた。

「なぜまだサイキック・センサーを搭載できないのだ。既にインフレムには搭載されているだろうに」

「いえ、あれは……アスレー・シュトレールさんの技術協力を得て改修ができました。我々独力では、まだまだ時間が掛かります」  
「……そうか」

ネルソンは整備兵に向けていた顔をゼネルに向き直り、漆黒の怪人を拝んだ。

「よし、敵部隊を捕捉した！ 狙撃隊、撃ち方用意！」

哨戒任務中のG1隊長機が、180mm長射程ライフルを持つ3機のG1狙撃隊に指示を送る。狙撃隊は向かってくるレピドウス隊に対し、その長い銃身を向ける。

狙撃隊のG1には、頭部には外付けのカメラアイが、腰部に重たそうなサブジェネレーターを積んでいた。そのサブジェネレーターからは、長射程ライフル直結の有線ケーブルが伸びていた。いずれも、急造の試作品であることが伺える。

「撃てえ！」

三本の鋭い火線が、一斉に真空の宇宙を過ぎる。向こうに見えるレピドウス隊に二、三の花火が上がる。

「狙撃隊は後退し、増援のシグヌス隊を案内しろ！ あとの者は私に続け！」

ガンダムを彷彿とさせる隊長機が通常仕様のG1を連れ、狙撃部隊機は後退した。

狙撃部隊がシグヌス隊と合流した。

「他のG1部隊が先行しています。あなた方も続いて下さい。我々は後方援護をします」

「了解した」

ヴェルターがシグヌス隊を代表して指示を受けた。

「機動班は私に続け。それ以外の者はバックアップを頼む」

ヴェルターの指示で、ガルマンのシャドーと、エデのアサルト、トシリアのG1等がテトラに続いた。

「ボリノーク、そちらの指揮は頼んだ」

「了解です、ヴァイタル少佐！」

バックアップする班の指揮を任されたローゼは、テトラが行くのを確認し、指示を送る。

「俺達は、聞いての通り、先行G1部隊及び機動班をバックアップする。前に出過ぎるなよ」

バックアップ班はどの機体もずっしりした装備をしたものばかりであった。

「……」

今はG1のミサイルポッド装備に乗っているナリアが、初めてのG1に不安を抱いていたのだった。

所は戻り、アレクサンドリア基地発着デッキ。巨大な怪人ことゼネルが出撃しようとしていた。

「ネルソン大佐、サイキックセンサーはよろしいのですか？」

「構わん。この機体で久しぶりに暴れてみたくな」

まだ若さが少し残っているが貫禄が出ているジェラル・ネルソンは、整備兵の杞憂を流し、一見穏やかな表情であるが、目は血に飢

えた獣のようだった。

「ジェラル・ネルソン、ゼネル、出る」

大ぶりな体に相応する巨大なスラスタから、溢れんばかりの青白い炎を勢いよく噴射する。

そらに打ち上がり、巨人が背部の怪物に食われるように変形する。しかし、そのMA形態と言えば、間抜けな言い方をすると、頭隠して尻隠さずの状態なのである。

「……素晴らしい。この機動性、このパワー」

ネルソンはゼネルの性能に驚嘆し、不敵な笑みを浮かべる。

「コロナ……今はガンダムを名乗っているそうだが、今日でその命運、このゼネルが断ち切ってくれる……！」

MA形態のゼネルを加速させ、シグヌスへ直行させた。

機動班の先頭をきるテトラは、先行のG1部隊と合流し、ウイングバインダーのミサイルをぶちまけ、敵を牽制した。

「あれが3号機か。すばしっこいな……」

レピドウス部隊隊長のドリュフスがテトラの攻撃を避けながら苦虫を潰した顔をする。



「あの羽根付きには特に注意しろ！ 機体もそうだが、パイロットも中々のものだ」

部下に指示を送るドリユフスの姿は、顔面に回し蹴りをされた情けない彼とは大違いだった。極限状況に置かれているからか、とても集中した顔をしていた。

「数ではこちらが勝っている。一人で戦おうとするなよ！」

「了解です」

「あいてて……」

が、やはりドリユフスである。蹴られた頬がまだひりひりしていたのだった。

バックアップ班は、やや後方にて適宜援護射撃をしていた。

「間違っても味方に当てるなよ！」

「了解です」

アテナに乗るローゼの怒号が飛ぶ。後方援護ということもあって、機動班よりかはいくらか解れた雰囲気だった。

そして一方狙撃隊は、シグナスの方にまで後退してきていた。コロナや数機のミサイルポッド装備のG1も狙撃隊に随伴していた。

「……君がああGスペリオルの女の子の……本当に申し訳ない……。我々が不甲斐なかつたゆえに……」

ミサイルポッド装備のG1パイロットがレイジに詫びを入れた。

「……ま、今は彼女の無事を願うしかないさ」

レイジは本音を言った。今の彼には、バイタリテイ溢れる彼女の生命力を信じるしかなかった。もつとも、今の彼女と言えば、UU軍に潜入して軍事演習をしているゆえ、命の危険とは程遠い状況なのだが。

その時、コロナのレーダーが機影を確認した。

「……ん、何か来る……確かめに行ってくる！ アンタは引き続きシグナスの警護を！」

「えっ？ あ、ちょ、ちょっと！」

置いてけぼりにされたG1パイロット。仕方なく、警護にあたる仲間を許へ戻ったのだった。

コロナを急がせるレイジ。機影を頼りに最大限にバーニアを吹かす。

(MSにしては結構な大型だった。一体何者だ？)

と神妙な顔をするレイジの脇に、大出力のビームが遠くですれ違ったのが見えた。

（あの方向……シグヌス……！？ ええい、急いでくれ！ コロナ！）

ソーラー・パワー・システムを起動させ、羽根を展開する。羽根いっぱいにはスラスターの青白い火を点火し、コロナが爆速で機影に向かう。

（アドルフさん……だっけか、避けてくれよ……！）

名前を覚えたてのシグヌスの操舵手に艦を命運を託した。

）

その少し前、ニーレルとアカネが応酬しているところに、アドルフがやってきた。

「……艦長、自分の席は」

「あなたがシュテルンですか。遅いですよ」

ニーレルはアドルフに振り向く。

「……申し訳ないです。人に呼ばれていたもので」

アドルフの言い訳に、ニーレルはあからさまに呆れる。だが、アドルフは表情を一つも変えなかった。

「そこは自分の席です。お立ち退きを」

「ふざけないで下さいよ。僕よりも遅く来たじゃないですか」

手で拒むようにしてアドルフの言葉を突き返す。

「……自分の役割というものがあります。自分はその役割を果たしてこそ、軍の一つの機能を果たせると考えています。ですから、安易に役割を変えられては困ります」

アドルフは言葉を続ける。

「貴官の階級は知りませんが、たとえ貴官が連邦の最高司令官だとしても、前言を撤回するつもりは毛頭ありません。シグヌスの操舵手は、自分ですから」

「……ご立派な大義で。では何故そのようなあなたが僕よりも遅れるのか、不思議ですねえ」

ニーレルは敵の揚げ足を取るような口調でアドルフに尋ねる。

「自分はそれほど遅刻はしていません。それに、どうして貴官と比較されなくてはならないのです。貴官は余程の怠け者なのですか？」  
「む……一兵卒の分際でこのニーレル家の僕を……！」

あからさまに食いしばっている歯を見せながらアドルフに怒りを与えるニーレル。ニーレル家は、連邦軍を代表する資産家であり、カシム・ニーレルはそのコネで士官学校に入学し、卒業した。腕は確かなのだろうが、しかし、アドルフは動じない。

「ニーレル家のご子息でしたか。しかし、自分は言ったはずですよ。たとえば貴官がどのような人でも、そこを立ち退いて頂くと」

「生意気な……！ 貴様の家族の人生をめちゃめちゃにしてやるぞ

「！」  
「自分に無くすものなどもない。何かしたいのならば、この自分自身にやれ」

もうニールに敬意を払う必要ないと悟ったのか、語尾変化させることをやめていた。

「貴様〜！」

遂には操舵席を離席し、アドルフに掴み掛かろうとするニール。しかし、アドルフはちらつとみた操舵席のリーダーが示すものに悲感を抱いた。直後、我に返り、急に荒っぽい動作になった。

「どけッ！」

前に立ちはだかるニールを突き飛ばし、操舵席に素早く座り、ぐいっと左に大きく舵を回した。艦が大きく傾き、ブリッジクルーの悲鳴が聞こえたかと思うと、船体の右側に超弾速の高出力ビームが掠った。

「何するんだ！ 危ないじゃないか！」

暢気に怒号を散らすニール。しかし、アドルフは答えない。そこに、急な舵取りに驚いて刹那動けなかったヘンリーが報告する。

「右舷装甲表面が高出力ビーム砲によって削られました！ 避けていなかったら……ブリッジに直撃していました……」  
「何だつて!？」

他にも驚いていたクルーも居たが、一番驚いていたのはニール

だった。

ヘンリーは、隣のシュテルンに振り向き、胸を撫で下ろしたように言った。

「……シュテルン、助かったよ」

「まだ気は抜けない」

鋭い眼差しで前を見たままのアドルフ。ニーレルは腰が抜けてその場から動けなかった。

「……ニーレル中尉、邪魔よ。懲罰房に入れられるか、ここから早く立ち去るか、どっちかにしてちょうだい！」

アカネはニーレルを怒鳴り散らし、ニーレルをビビらせた。

「は、は……」

すたこらとブリッジから逃げ出した。

「……あの野郎、覚悟という言葉も知らないのかよ」

ヘンリーが誰ともなく言葉を漏らす。

「……ホントにね」

アカネもヘンリーに同感だった。そうやり取りしている二人を余所に、アドルフは神妙な顔をする。

（レーダーで感知できない程の距離からの狙撃……一体UUはどんな兵器を開発したんだ……）

まだ熱が冷めないアドルフは、遠すぎて見えない敵を警戒していた。

狙撃を行った張本人、ジェラル・ネルソンの乗るゼネル。大型ビームランチャーを担ぎながら、シグヌスの荒業を眺めていた。

「……ほう、避けたか。流星は新造戦艦といったところか」

ネルソンが、こいつは面白いといったような顔で口元が綻ぶ。そして、先程から捉えていたコロナに向き直る。

「さあ、見せてもらうぞ。偽物のガンダムの力を」

シグヌスの船体が大きく動いたのがコロナからでも確認できた。

(はぁ……派手に避けたね、ありゃ)

アドルフの舵裁きにいつまでも感心もしていられず、レイジは視線を前に戻すと、黒き怪人がモニターに映った。

「あれか」

少しおちゃらけていた顔を神妙にし、操縦桿をしかと握り直す。

「……MAか？」

甲殻類を思わせるMAがこちらにミサイルを撃ってきた。バックブーストしてバルカンで全てを撃墜した。すると、甲殻類が変形し、黒き怪人が現れた。

「可変機なのか」

「そうとも。君も見たらう、ゼネルの火力を」

「もつとも、そいつを直接見せ付けることはできなかったみたいだな」

誰とも知らぬ男性であるネルソンとタメ口で話すレイジ。大型ランチャーから射出されたビームは、アドルフの荒業によってシグナスに直撃させられなかった。

「では今度こそ君に、いや、その偽物ガンダムに見せてやろう」

ランチャーを巨大なバックパツクのラックにしまい、腰からビームサーベルを抜刀した。

「……心得た」

コロナも左前腕部からサーベルを発生させ、しばしの沈黙のあと、両者が同時に急接近し、サーベル同士が鏝ぜり合った。

「……ふん」

するとゼネルは、バックパツクから有線式アームを伸ばし、そのアームからコロナにビーム砲を撃ってきた。



「ち、阿修羅かよ!」

コロナの左側から撃ってきたので、サーベルを出している前腕部からビームシールドを展開した。攻撃を見事に防いだ。

「ふん、これならどうだ」

続いて、反対側からもアームが飛び出し、ビームを撃ってきたが、コロナは両側にビームシールドがあるため、同じ結果となった。

「ええい、拉致があかん!」

「隙あり!」

ゼネルはもう二つアームを展開しようとしたが、コロナはその前に、右腕のサーベルも出し、胴部にサーベルを突き出した。

「ツツツ!」

ネルソンはやむなくアームの展開を諦め、ゼネルを左にひらりと避けた。

「まさか左右対象の装備とはな……」

「洒落てるだろ?」

レイジは皮肉を籠めてコロナのビームを撃つ。

「貴様に二刀流、果たして使い熟せるか!?」

「いや、主義としての二刀流ではないんだがな」

ゼネルが接近してきたのを、コロナは真っ向からは相手にせず、尚もビームを撃って牽制している。

「ふん、ちょこまかと……」

ネルソンは、コロナが適当に牽制している様に焦れたように顔の苦虫を潰す。

ラグランジュ 軍事演習場内。先程髪の毛を一本に結わいたユキミと、恐る恐るユキミを連れていたアリストはもう既に整列しており、前には数人の士官が立っていた。その中には、ネオンもいた。

「ではこれより、定期演習を始める」

敵つそうな士官の号令で、今日の演習が始まった。

今日の演習は、テスト機であるポーン同士での模擬戦だった。ポーンといっても、現行量産機であるレピドウスに近い仕様に改造されており、より実戦に近づける配慮がなされていた。想定ステージはデブリ宙域。地の利を生かして戦うか、地に振り回されてしまうのかも試される演習だった。

「ゴミがいつぱいだね」

「ゴミっていうか……スペースデブリだね」

ユキミのストレートな感想に、アリストが冷汗をかきながら補足する。

「どう違うのよ?」

「うーん……」

アリストは非常に困った。そして、結論を出した。

「なんか、そう言った方がカッコよくない?」

「ふーん」

即席で出したいいい加減な答えにも、普通に納得したような顔をす  
るユキミに対し、逆に訝った。しかし直後、

「……テキトーじゃね?」

いつもより低い声で、反応の遅い答えを出したユキミに、思わず  
転げ落ちるアリストだった。

ティアは独り処置室にいた。室員と何やら話をしていた。

「最近調子はどうだ」

「……存外、順調です」

ティアは相変わらずの無機質な口調で室員に答えた。

「なら、新しいのはまだ必要ないか。持ってけ」

カプセル形の薬を貰い、士官服のポケットに突っ込み、退室した。

(……………あと、どのくらい持つかしら……………?)

憂鬱な顔でドアノブから手を離れた。気持ちを切り換えようとしたところ、せつかなので軍事演習を見学しようとして、演習場に歩を進めたティアだった。

Unit024：光冠の束縛（後書き）

ビリー「いやあ、アドルフさんカッコよかったね」

レイジ「これでクリッジ少尉もホの字なんじゃね？」

ビリー「だねえ」

ガルマン「よし、じゃあ次回予告やろうか」

ビリー「ううむ、なんかとりあえず変なのが出てきたよね」

レイジ「あいつなんかNRX-0015に似てね？」

ガルマン「分かる人にしか分からんネタはやめろって」

レイジ「なんでや」

ガルマン「これは、ガンダムを知らない人も見てる可能性があるから、だそうだ」

レイジ「何故に伝聞？」

ガルマン「台本にそう書いてあるんだから仕方ないだろ」

レイジ「台本ネタやめろよ！（ドス声）」

ガルマン「お前に言われたくねーよー!!」

ビリー「というわけで次回も」

レイジ「IDガンダムをよろしくお願いします」

ガルマン「!!」

.....

ガルマン「いやだから何だよこれ!! どう読めってんだよ!」

レイジ「『!!』な感じに」

ガルマン「わかんねえよ! どういう感じだよ!」

## Unit 025：無慈悲な連撃

MS。兵器が人型である理由は、コロニーの人達の信仰する主に起源している。その主の名も、『ガンダム』。

人間にあまりに似ているが、しかし人間の十倍ほどもある巨神の偶像。かつて、コロニーの人々の病を良くしたその偉業と、黄金の巨軀はあまりに神々しく、人々の信仰の対象となった。

レグルス・ヒラナギ。まだIDという暦にもなっていない頃に活躍した、優秀な技術者。この『ガンダム』を造った人にして、『ガンダム』信仰の最高司祭デセンベル・デイドロンの親友である。

彼は、デセンベル・デイドロンの先祖が掲げる

『God who is Ultimate and Noble  
Deletes All Misfortune (究極で気高い神  
は、全ての不幸を消し去る)』

という謡い文句の下で、

『ガンダムシルヴィアス』

を完成させ、『ガンダムシルヴィアス』に乗って、製造した木星から帰って来た。

ガンダムシルヴィアスは、しばらく碌々として動くことはなかったが、コロニーの人々の間に病は少なくなり、『ガンダム』への信仰が深まった。

しかし、そのレグルスと言えば、『何らか』の謀反を起こし、デセンベル・デイドロンに追放され、アルマナ神殿の地下に幽閉された。その『何らか』の内容は信者たちの間で『禁忌』とされており、その『禁忌』に触れば罰が下るといわれている。以後、アルマナ神殿は『禁忌』と現実とを引き離す結界の役割を果たすようになった。

しかし、コロニーが地球連邦政府に反抗声明を出し、コロニー政  
府 ユニバーズ・ユナイテッド UUを結成してから十九年後のID19年。『ガンダム』信  
仰が始まって以来の悲劇が起きた。人々はそれを、  
『神の逆鱗事件』  
と呼んだ。

）  
）

時は過ぎゆき、ID30年。デイドロン家は、ガンダムシルヴィ  
アスの暴走『神の逆鱗事件』を機に、コロニー市民の間ですつか  
り冷却化した『ガンダム』信仰を取り戻すために、政界で実権を握  
っていたスタンリー家を招き入れ、『ガンダム』信仰の伝統を守る  
うとした。以来、政教合一することで『ガンダム』信仰を盛り返し  
た。

スタンリー家は、『ガンダム』を信仰する者は神の逆鱗いかりから報わ  
れるとして、UU軍内でもある程度の優遇を受けられるものとした。  
ただし信仰する市民たちは、最低でも一週に一度ラグランジユ0  
に出向かなければならず、あまり裕福でない家庭は信仰することす  
らできなかつた。その市民たちは、新造コロニー、ラグランジユ  
に移住勧告され、以来、そこに住み着いた。

ラグランジユでの生活は劣悪で、まともな医者もいないせいで  
病が一気に広がり、人々の心身が荒んでいった。しかし、大した対  
策が練られることもないまま数十年もの月日がすぎた。その頃には、  
ラグランジユの人口は三分の一ほどになってしまっていた。



そんな細菌呼ばわりされたコロニーに、愛の手が差し延べられた。時に、ID93年。

『God who is Ultimate and Noble Despensates for All Man (究極で気高い神は、全ての人類に施しを与える)』

の信仰の布教活動を展開した彼女の名前こそ、リリアント・グレーデ。彼女は、ラグランジュ0を秘密裡に探索し、古文書を発見した。その古文書に記述されていた内容に彼女は驚き、

「ラグランジュ の人達を助けるにはこれしかない」

と確信し、ラグランジュ に赴いた。政治家である親友の力も借り、布教活動しながらラグランジュ の興行に尽力した。彼女らの努力が実り、ラグランジュ は今や一大コロニーを担う存在となるまでに栄えた。

しかし、それには柵があった。デイドロン家やスタンリー家は、リリアント・グレーデを異端の布教者として地球に追放してしまつた。リリアント・グレーデに忠実な人達は共に地球に行き、そうでもない人達はラグランジュ に残り、コロニーの繁栄活動を続けた。今では、最も平和なコロニーとして知られている。

地球に追放されたりリリアント・グレーデは、少数の信者と共にめげずに地球でも布教活動を続けた。しかし、地球の人たちの反応は  
淡白で、

「あっそう」

「へえ」

「そんなのもあんの」

「っーか何、宗教？ マジ怖いんですけどー」

的な反応を繰り返されるばかりだった。布教活動を断念し、そのま

ま地球で細々と暮らすだけとなった。

）  
）

更に時は過ぎ行き、ID165年。デイドロン家とスタンリー家はかくして信仰の伝統を守り続け、時には排他的な処置も施しながら世紀単位で政治を支えてきた。

そんな折で、デイドロン家とスタンリー家それぞれに、同じくらの年頃の若者がいた。フェブラル・デイドロンと、リチャード・スタンリー。

フェブラルは活動的で頭の切れる技術者で、リチャードは真面目で実直な政治家だった。二人の性格は正反対であったが、不思議なくらいに仲が良かった。

スタンリー邸。リチャードがUU議会から帰宅してきたその時、フェブラルがリチャードを待ち構えていたかのように、邸の茂みから出没してきた。

「よお、スタンリー。また飲みに行くか？」

「何言ってるんだ。昨日も飲んだだろう」

「カタイこと言っつなよお」

フェブラル・デイドロンはリチャード・スタンリーの肩に腕をかけ、リチャードをばんばん叩く。

「……ったく、この酒飲みが」

「酒豪と言え、スタンリー」

「どう違うんだよ!」

リチャードが歯切れのよいツッコミを入れ、フェブラルも陽気に笑う。

「どっちも同じだろ!」

「カタイこと言うなよお」

「カタイことかこれ!?!」

気ままなフェブラルのものの言いように、リチャードはムキになってツッコむ。どうやらこの二人は、ショートコントを繰り広げるほどの仲みだ。

ID180年。二世紀以上も前に追放したヒラナギの子孫が地球に亡命しているとのことで、フェブラルは、UU議会副議長に就任したりチャードから『ガンダム』に関する調査をするよう依頼された。

ここは、ラグランジュ0。かつて、自分の先祖がレグルス・ヒラナギを監禁したコロニーである。地球の自然を模して造られた特性上、草のにおいが風に香る内部に、鉄の壁を持った建築、アルマナの結界の巨大な中央塔の目の前にいた。

「……何かヒラナギ家の秘密がわかるかも知れないな」

唾を飲み込み、決意を固めたフェブラルは少し古びた、しかし、

高さ二十メートル以上もある入口に足を踏み入れた。

中は大きく吹き抜けていて、照明は無く、外からの光がスタンドグラス越しに所々漏れている程度だった。スタンドグラスの光が織り成す芸術は、神の社に相応しい神秘ささえあった。

「……ん」

入口から奥にいった所に、地面に一メートル四方の紋様が描かれていた。

「……これは一体……」

煤を払い、紋様が鮮明になり、何が描いてあるかよくわからなかったものの、紋様を囲む四角い枠があった。どうやら取り外せるように、重い石の音を立てながら、紋様を退かしてみた。

中を覗いてみたが、真つ暗で何も見えない。左腰に携えた懐中電灯のスイッチを入れ、梯子はしこを伝って降りた。

中は不気味に静かで、不気味に肌寒かった。カーキ色の作業服を着たフェブラルにも、鳥肌を立たせるのに十分な寒さと不気味さだった。

「……」

神妙に無言になりながら梯子を降り続ける。先程から、脊髄に響くような不気味さがフェブラルを襲う。

(……一体何があるっていうんだ……)

梯子を慎重に降り、足元を懐中電灯で照らし続ける。すると、梯

子の終着点が見えた。無骨なコンクリートの床だった。ゆっくりと梯子から四肢を離し、辺りを懐中電灯で見渡した。まだ脊髄に響く。

(なんだ……なんだっていうんだ……)

恐怖感すら覚えたが、吐き出したいのをぐっと堪える。適当に懐中電灯で見渡すと、重そうな扉があった。やはりこれも、二十メートル以上ものある高さの扉だった。

(……ここまで来たからには……！)

戸口に手をかける。すると、手応えなしに、いや、半ばひとりで扉が開き始めた。

「ッ!？」

これには流石にフェブラルも驚き、手をパツと放すが扉は開くのをやめない。光が一気に差し込み、最初は眩しすぎて何も見えず、両腕で目を覆った。

明順応した目で扉の向こうを見ると、なんと、二十メートルものある巨人の像があった。しかしそれは、自分の見慣れた『ガンダムシルヴィアス』とは似て非なる『ガンダム』だった。かなり褪せてはいるものの、元は黄金だった名残がある。その黄金といえば、『ガンダムシルヴィアス』のそれと同じだった。

「これは……!？」

全身が粟立つような驚愕をみせるフェブラル。恐る恐る歩み寄ってみると、その『ガンダム』の足元に、一・五メートル四方の褪せ

た金色の石版が置かれていた。その石版の冒頭には、こう印されていた。

「God who is Ultimate and Noble  
Despends for All Man」……」

フェブラルはゆっくりと読み上げ始めた。これも自分の知っている、

「God who is Ultimate and Noble  
Deletes All Misfortune」

とはやはり似て非なるものだった。そのまま読み進めていくと、ガンダムの事は書かれているものの、自分の知っているものとは違うものもたくさん書かれていた。聞き慣れているようで聞き慣れないガンダム、

「ガンダムヴァイズノート」

とは、恐らくこの目の前に佇むガンダムのことだろうと頭で把握することはできるが、戸惑いを隠せなかった。

「ガンダム……ヴァイズノート……？」

言葉を詰まらせ、硬直したフェブラル。今度は石板の左下に目をやると、乾ききった赤黒い文字が書かれていた。人間の静脈の色にすら似ていた。

「……血文字……！」

嫌悪感を一旦吹き払い、冷静に読んでみる。

そこには、まるで悪夢のようなことが書かれていた。

その文字を見て、フェブラルは絶句した。この悪夢のようなコト

バが、落書きのような冗談話ではないとわかったからだ。その血文字の文末に、『レーナ・ヒラナギ』とあったからだ。レーナ・ヒラナギが誰なのか、フェブラルは知らない。ただ、ヒラナギという姓を聞けば、彼とて単に知らないという一言では済まない。

因みにこの人物は、レグルスの妻。ガンダムヴァイズノートの開発者である

更に、その文末から尾を引く先は、石板の後ろ。そこには、人差し指らしきものを立てたままになっている人間らしきミイラが、時を止めたように倒れていた。

「なんだ、これは……！」

後ろに何歩も下がり、腰が抜けそうになりバランスを崩すフェブラル。自分が今まで数十年生きてきて、積み重ね、培ってきたものが、一瞬にしてひっくり返るような悪夢だった。

フェブラルは、『ガンダム』信仰の裏を知り、握りこぶしをわなわなとさせる。

「……許されないッ……こんなこと……！」

フェブラルはゆっくりとその場をあとにした。ガンダムヴァイズノートは、去ってゆくフェブラルを見守るように、しかし全く動かずに佇んだままだった。

翌年のID181年。デイドロン邸が火災に遭い、デイドロン家が皆焼死したという、信じられないような事件が起きた。火災現場からほぼ全員の家族遺体が発見された中、フェブラルのみ、発見されなかった。彼の死亡はまだ確認されていない。いずれにせよ、代々最高司祭を世襲してきた家柄がこの事件で一瞬にして消えて無くなったのだ。

この事件の報告を受け、自室のチェアでうなだれるリチャード。

「アウグストおじさんが……」

アウグスト・デイドロン。フェブラルの父親にして、『ガンダム』信仰の最高司祭。コロニーのガンダム信仰を象徴する、神に一番近いであろうこの男は、神の御加護を受けられずに、逝去した。いや、もしかしたら天に召されたのかもしれない……。

「それに、フェブラル・デイドロンまで……」

親友の消息だけ分からず、持っているキセルを静かに置いた。

司祭一族がいなくなった今、コロニーをどう平定しようか、司祭は誰が引き継ぐのか。

政治家ならば、こんな状況でもいつまでも悔やんではいられないのが現実だ。リチャードは悲しみを水底に押し込み、思索を巡らせていた。

「……おとーさん？」

濃紺の髪をした幼児

リチャードの子息、アルバート・スタン



リー　が、父親の座るチェアの脇から、訝しげに顔を覗き込む。

「おやおやアルバート、まだ起きていたのかい？」

「だって、外がうるさいんだもん……」

不満げに唇を前に突き出し、目の前にいる父親を困らせた。部屋の外の廊下では、スタンリー家の関係者達や使用人達が動揺している様子を部屋の中の自分の息子も察しているようだ。

「……すまないな、アルバート。だが、大丈夫だ。父さんがなんとかするからな。父さんを信じる」

アルバートの両肩を持ち、熱い視線をアルバートに向ける。

「うん……じゃあ、僕寝るね」

「おやすみなさい」

とぼとぼ自室に戻っていく息子を見、半ば強制的に納得させてしまったと、後頭部を掻きながら若干の後悔をする。しかし、これは自分に対しての戒めと励ましも込められていた。伝統を守り続けてきたスタンリー家の後継ぎとして、自分が何とかしなければ、と……。

）  
）

時は戻り、ID1999年。地球連邦とUUとの三度目の大戦が終結したものの、UU議会議長に就任リチャードは依然としてフェブラルの消息が掴めずにいた。

政界のトップに相応しいずっしりした机。キャスターの付いた立派なチェアに腰掛け、机上にあつたキセルを取り出す。適当に火を入れ、ぷかぷかと煙を吹かした。

キセルを左手に持ったまま、溜め息をつくりチャード。フェブラルの行方が不明になつてからおよそ二十年が経っているが、大戦が終つてなお消息が掴めないでいた。

ただ、昨日気になるニュースが入つたのだ。

荒ぶる者を封印すると言われている、アルマナの結界のその中央塔が半壊したという不吉な事件が起きた。ステンドグラスが粉々に砕けて飛散していたのは風圧によるものと推定。そして、中央塔から五メートルほどの所に、盛り土に囲まれた直径数メートルの穴が忽然とあつたのだとか。

「…………アルマナの結界に、何かがあつた…………！」

過激で凶悪な異端者、ヒラナギー族を葬るアルマナ遺跡。元々は『ガンダム』信仰の代表的な神殿とされていたが、今は神殿としての役割はなく、異端と正統との結界の役割を果たすとされている遺跡となつている。それが破壊されたとなれば、スタンリー家が長年存続してきたガンダム信仰に傷がついてしまう。

墓荒らしか、亡霊か、他の何かか…………そして、あの忽然とあつた数メートルの穴は何なのか…………？

考えるだけでもキリがない。一刻も早くコロニー市民達を安心させなければ、世の中が大混乱してしまう。司祭代理兼コロニー議長たる自分が浮ついてどうする。いつも通りテレビに顔を露さねば、コロニー市民達に不安と不信感を抱かせてしまう。

そう思いながら握り拳を右手に作ると、緊張感の抜ける高い声が横槍を入れてきた。

「…………おとーさん、あたしをなぐるの？」

今にも泣きそうな目で、椅子に座る自分を見上げる少女　リチャードの娘、リリア　が、机の脇からこちらを見上げている。すぐに自分の右手を見、拳を解いた。

「済まんな、リリア。お父さんは議長だから、いろいろやることもあるのさ」

「ぎちょー？」

あんまり意味がわかっていないような返答を返すリリア。そんなことを言ってもこの子にはわからないわよ、と助言できる妻はもういない。リリアは妻が産み遣した愛し娘。育児すらできなかつた妻の分も責任を持って育ててきた。

「そうさ。それよりリリア、もう学校の時間じゃないかい？」

「うん！　じゃあ……行つてきます！」

「いつてらっしやい」

バッグを背にぎこちなく走つてゆく愛娘を、優しいまなざしで送る。この子に元気をもらったことは何度となくあつた。しかし、今回ほど慰められたことはなかつた。きっと、今回が未曾有の事態だつたからだろう。

慰められたことを追い風として、リチャードは席を立ち、議事堂へと急いだ。

）  
）

地球、オーストラリア大陸。宇宙への玄関口のマスドライバーを備えるオセアニア州の海に浮かぶ大陸。このIDの地球でマスドラ

イバーを備える地域は、このオーストラリアとジブラルタル、南アフリカ（喜望峰）、カリフォルニアの四カ所存在する。

そのオーストラリアのマストライバーの管制塔の脇にある小屋の個室に、フェブラル・デイドロンが木のチェアに腰掛け、窓辺にてまどろんでいた。外の夕焼けで赤暗くなっているその部屋で、座っているチェアとセットである木のテーブルの上には、今はニュースを伝えている黒く無骨ラジオがあった。

『謎の機体コロナは連邦に加勢し、UUを駆逐している模様……』

コロナ。レイジの乗る謎のMS。

「……」

冷たい目をラジオに向けるフェブラル。無論、ラジオにそんな目を向けたところで意味はない。

「……」仮面は半分外しているが、まだ気付かれていないようだな

コロナは元々、頭部も増加装甲とゴーグルアイという覆面で覆われていたみたいだが、

「連邦はさぞ喜んでるだろうよ」

覆面を外し、ガンダムと名のつく最強のMSが加勢しては当然のことだろう。

「……さてレイジ。お前はコロナ……いや、ガンダムヴァイズノートを起こせるか？」

：ラグランジュ。どうやらUUの軍事施設が集まっている場所みたいだけど、あたしユキミは隣のアリスト君と一緒に、他の兵士さんたちが仮設デブリ帯にて演習用のポーンで二対二の戦闘をしていた。その仮設デブリ帯といえば、外の宇宙を使っており、そこにバールのデブリがちりばめられていて、臨場感が溢れていた。コロニー内であるこちらからは、強化ガラス張りにしてあるウィンドウから見学できるようになってる。

「すごいね、演習場！」

「たしかに、施設しつかりしてるよな」

隣のアリスト君も、ウィンドウの棧に肘を載せながら演習を眺めていた。しかし、そんなアリスト君はUU軍人の割には見慣れた感じがなかった。

「アリスト君もここ初めて？」

「実はそうなんだよ」

こちらにいつものフレンドリーな顔を向けてきたけど、

「こら、私語はよせ」

見知らぬ上官さんに諫められ、言われるがままにウィンドウの外に視線を戻した。

（べっつ。つまんねえの！）

その見知らぬ上官さんにこう言ってやるうかと思っただが、更に胡散臭がられてしまうのでやめておいた。

ポーンは仮設デブリに隠れては出て撃ち、また隠れては出て撃ち、などを不規則に繰り返し、徐々に敵機との差を詰めていた。接近戦しかできない自分からしてみたら、

(さっさと接近すればいいのに……)

この地道な戦い方がもどかしかった。でも多分、あたしにとってこれも射撃武器を使った戦法の勉強になるんだろうな。

1番機、4番機が偶奇に別れて戦っている。1、2番機がそれぞれマシンガンを持ち、3、4番機がそれぞれバズーカを持ち、それぞれ前衛と後衛を担っていた。

1番機が、2番機の隠れているデブリにマシンガンを乱射。バルーンのデブリがマシンガンの幾多の弾で四散するのに前後して2番機が左に回避し、迎え撃つようにマシンガンを撃つ。

「マシンガンか……」

「……なんか、嫌な思い出でも？」

アリスト君は邪推したつもりで言ったんだろうけど、苟も正解だ。

そう、パパはマシンガンで蜂の巣にされて死んだんだ。

私はパパが撃たれたのを耳でしか聞いていない。だって、パパに振り返るなど言われたから。

正確に言えば、マシンガンそのものよりも、その無慈悲な発砲音

に対してトラウマがあるのかもしれない。

あたしが黙っていると、アリスト君は察したように、そーっと視線を外の演習場に戻している……と思ったら、

じい〜……

目の前を遮るように熱い視線がぬうと割り込んできた！

「うわあっ！ びっくりした〜」

「……ごめん、驚かせちゃった？」

「一、二歩後ずさるあたしの目の前で罰が悪そうに謝る女の子、ティアちゃん。」

「うん、めっちゃびっくりしたよ〜」

先程、見知らぬ上官さんに注意されたのも忘れてはしゃいでしまったのに気付くなり、口を両手で塞いだ。しかし、上官さんはティアちゃんの急登場の状況を把握していたらしく、不問となった。

「……それより、ユキミちゃんは演習やったの？」

「ううん、まだだよ」

先程より控えめな声で話す。

「……ここでの戦い、慣れといた方がいいかも」

「うん、そうだね」

ティアちゃん特有の朴訥とした喋り方に何となくノスタルジックな感覚を覚え、演習場の宇宙を眺めていた。

宇宙は思ってたよりずっと暗黒だ。コクピットの中ではもうちよ  
い明るかった気がするけど……。

「……コクピットの中のモニターは、高感度にしてあるから」

ティアちゃんに質問したら、こんな答えが返ってきた。

「……好感度？」

「いや、恋ゲー違うから！」

アリスト君がスパッとツツコミを入れてきた。

「……星が明るく見えるの」

なるほど。

「……暗黒の宇宙のままだと、不安になる人が多いみたい」

「……んで、普通よりキラキラさせると、いうことですか」

「……そう。ユキミちゃんは、星、好き？」

ティアちゃんは首を傾げて聞いてきた。

「うん。地球から見る夜空なんて絶景だよ」

とあたしが言った次の瞬間、その場の空気が一気に凍った。

「えっ……？」

みんながあたしを見る。明らかに非難の目で。



「貴様ツ、やはり連邦のスパイか！」

げっ、やば！ と喉までこの言葉がきてしまったが、発声はされなかった。しかし、兵士たちにわんさかと四肢を取り押さえられた。地球をよく言ったのがまずかったのだらうか。

「ちょ、やめてよ！」

「黙れ！ このクソアマ！」  
「痛い！」

頬を殴られてひりひりする。あたし、どうなっちゃうの？

「連邦のスパイなんだろ！？ 答える！」

「あたしは連邦軍人じゃなかったもん！」

「うるせえ！ だからスパイかどうかと聞いてるんだ！」

またも同じ場所を殴られる。レディを殴るなんて最低ね。

「二度も殴ったね……親父にも殴られたことがなかったのに！」

「いや、女が親父って言うかよ！」

脇にいる別の兵士が場違いなツッコミを入れてきた。あれ、元ネタ知らないの？

「……まあ女だ。後でじっくりと吐かせてやるよ」

取り押さえる兵士の、粘っこく絡み付く視線に、不意に虫酸が走る。

（もしかして……）



「汚えんだよ鼻血野郎！」

「いや、てめえが……ウゴッ！」

てめえがやったんだろと反論する間もなく、追い撃ちをかけるように今度は両鎖骨の間に鉄拳を喰らい、一瞬息が詰まった。そのまま床に仰向けに倒れ、鼻血が尚もドクドク出ていた。

「あたしはなあ！」

兵士たちに向き直って叫ぶ。

「そんな美しい自然を持つ地球を食いつぶす連邦に反感を覚えて志願したんだ！ 覚えとけ！」

「……お、おお……」

「……そうか……」

兵士たちが静まり、演習にちらほらと目を向き直す。

「はあ、つたく……」

…ふう〜。何とか言い逃れた〜。食いつぶすという表現はシヤアの演説から拝借させてもらったけど、まさかこんなに役に立つとは思わなかった。

「……ごめん、変なこと、聞いちゃったね……」

明らかに罰が悪そうに下を向き、手を前に組んでいるティアアちゃん。

「なあに、どつってことないよ」「

「……ほっぺ、腫れてる……」

ティアちゃんは何やらヒップポケットからオロナインを取り出し、指に適量を取って、あたしの頬を撫でるように塗布してくれた。優しいのね、ティアちゃん。

「……ありがとう……」

ティアちゃんの優しさに触れ、思わず温かい気持ちになった。

「……痛そうだったから……」

ティアちゃんの熱い視線はまだ続きそうだった。

そして、あたしの視界の端の方で戦慄を覚えていたアリスト君のことなんてあんまり覚えてないや。

「……なかなか粘り強いな」

自機である連邦ガンダム3号機テトラを变形解除させ、胸部アタッシェメントにくっついていた両ライフルをそれぞれの手に持ち、頭部のビームバルカンでレピドウスを牽制する。

地上と宇宙では勝手が違う。相手とて、よくも悪くも同じだ。

ヴェルターは無意識に目をしかめ、ロックサイトに中々収まらないレピドウスに、薄々ながら苦い表情を滲ませる。

「少佐！」

背中合わせに連邦ガンダム4号機シャドーに乗るガルマンがやってきた。比較的細身のガンダム二機が、全方位に注意を払うような体勢になった。

「単機ではてこずる。フォーメーションを使うぞ」

「了解！」

歯切れのよいガルマンの返事が返ってくる。張り詰めたこの状況下では、一層爽やかに聞こえた。

「ネイビー曹長もいいな！」

「あ、了解です！」

一瞬反応が遅れたトシリア。敵機の牽制を一旦止め、フォーメーションを組むべくG1を隊列に加えた。

前のパイロット、トシリアから引き継ぐ形でガンダム1号機アサルトを駆るエデ・リアーノ中尉。前の作戦ではG1に乗っていたが、操縦の癖はアサルトとあまり変わらない。若干反応速度が高い程度の違いしかないのですぐに馴染んだ。

「楽チンじゃないの、ガンダム！」

軽快に操縦桿を動かし、適度に狙いを定めて射撃している。楽に当たってくれる敵ではないが、こちらも同じく被弾していない。

しかし、いつまでも余裕をぶっこいているわけにもいかなかった。UU側のMS部隊長アラン・ドリユフスの乗るレピドウスは、エデの乗るアサルトを捕捉するなり、二連装マシンガンの銃身の上に

添え手を置いてアサルトに火を噴いた。

「実体弾ごときが！」

エデの叫び声とともに、被弾構わず特攻を仕掛けるアサルト。

「レピドウスをナメるな！」

アラン機は添え手を一旦遊ばせたかと思いきや、前に突き出し、袖部からワイヤーを射出した。

「えっ!?!」

あっという間にライトアームを捕縛され、右のマニピュレーターに持ったライフルを取りこぼしてしまった。どうやらこのワイヤーに捕縛されると、特殊な電磁波を出して機体の機能が麻痺するようになり、チューンされたいらしい。アサルトは反撃のはの字の行動もできず、八方塞がりだった。

「どうなってんのよこれ！」

操縦桿をガチャガチャ動かしてもアサルトは碌に動いてくれない。

「いいザマだ、1号機！」

アラン機は黄緑色のビームの刃を形成し、アサルトに正面から突撃する。

「ああ……いやあ……」

ワイヤーを手繰り寄せながら迫りくる抜刀状態のレピドウスに、  
いつになく情けない声で怯えるエデ。

せつかくガンダムをもらったのに。G1の上位機なのに。  
顔を両手で覆う。もう、死ぬ……。

「おい、何やってんだ。生きてんだろ？」

アサルトの機内に、接触通信のクリアな声が聞こえた。恐らく生  
態反応があったのだろう、パイロットが生きている前提で話し掛け  
ているのはガルマンだった。

「……ッ!？」

ガバツと一瞬体を痙攣させ、覚醒するエデ。自分はまだ生きてい  
た。

「リアーノ中尉、だったか？ 隊長機は俺達がやる。中尉は他のレ  
ピドウスを頼む」

「……はあ？ ふざけんなよ。あたしの獲物を横取りするってのか  
い」

幸い、反論する元気も残っているみたいだ。そう一旦安堵したあ  
と、ガルマンはびしゃりところ擦伏せた。

「隊長機に墜とされかけた奴が言えることかよ。くれぐれも邪魔は  
すんな」

反論をさせる暇も与えず、踵を返すようにその場を離れたシャド

！。

「……ちえ」

エデは渋々他のレピドウスにロックサイトを変え、捕縛から解かれたアサルトに再度火を入れたのだった。

「トシリア、しっかり頼むぞ！」

「はい！」

：俺達は、しぶといレピドウスとやらの隊長機を追い詰めて撃破するべく、三機がかりでフォーメーションを組んでいる。

三機のフォーメーションというと、ジェットス リームアタックが思い浮かぶかもしれないが、残念ながら不正解だ。

ヴェルターさんとトシリアで敵を引き付け、背後から俺のシャド―でとどめをさす……といった具合のフォーメーションだ。

「少佐、お願いします！」

「任せろ」

背後からの不意打ちを確実なものにするためにシャド―のステルスアーマーを発動させ、大きく旋回させる。

（頼むぜ、二人とも……！）

あまり推進剤を使わず、旋回もなるべくAMBACを利用するよう工夫しているつもりだ。

さて、うまくいくといいんだが……。



Unit025：無慈悲な連撃（後書き）

レイジ「つーか、俺主人公なのに今回一回も出てなくね？ フツに変な奴と戦ってたよね？」

ガルマン「さしずめ、いつも俺をイジってる罰だろ」

ビリー「お、ガルマンがいつになく調子に乗ってるねえ」

ガルマン「お前も出てないだろ」

レイジ「……さて、天狗はほっというて」

ビリー「なんか、変なおっちゃん爆弾発言しなかったか!？」

レイジ「何がやねん」

ビリー「コロナの正体だよ。だとしたら、とんでもなく壮絶な運命を辿った機体じゃねえか？」

レイジ「確かにな。まあ、本編の俺らは全く知らない設定だけだな」

ガルマン「……だからよ、このコーナーの位置付けをそろそろはっきりさせようぜ？」

庵瑠璃「いいじゃない、どうだって」

ガルマン「身も蓋も無えこと言っなよ!」

レイジ「そういえば、A M B A C。この作品で初めて出たよな」

ビリー「あー、確かに」

ガルマン「どうする？ 説明入れるか？」

庵瑠璃「メンドクサイカライイヤ」

ガルマン「また身も蓋も無えこと言いやがったよコイツ！ しかも何で急にカタコトになってんだよ！」

レイジ「……というわけで」

ビリー「次回もよろしくう」

ガルマン「いい加減、ボケ連発やめてくんないかな？ 俺の身が持たんわ」

庵瑠璃「じゃあツツコむなよ」

ガルマン「だから！ 身も蓋も無えこと言つなよ！」

庵瑠璃「はーい、本日三回目」

ガルマン「……おい、一発殴らせてくれないか？」

## Unit 026：甦る歴史（前書き）

### 《本話の登場人物》

レイジ・ヒイラギ

本編の主人公。コロナガンダムのパイロットを務め、旧友ティアと捕虜になったユキミの身を案じる。16歳。

ユキミ・サイン

本編のヒロイン。Gスペリオルを無断で使用した挙げ句、UUの捕虜に。15歳。

ガルマン・アラーケ

本編の直情型ギャグ担当。連邦軍中尉でガンダム4号機シャドーを駆る。17歳。

ネオン・ネイルバート

本編のなんちゃってライバル担当。UU軍大尉。ジエノサイド部隊の隊長で、捕虜のユキミから異様に慕われている。28歳。

ティア・プライマ

UU軍少尉。ネオンの部下であるが、レイジとはワケアリの関係らしい不思議ちゃん。推定16歳。

アリスト・コーゲエン

UU軍曹長。ネオンの直属の部下、と言えるほど堅苦しい関係でなく、フランクな雰囲気の特徴。18歳。

アルバート・スタンリー

UU議会議長リチャードの子息。ガンダムシルヴィアスのパイロットに任命された。24歳。

ジェラル・ネルソン

UU軍大佐。ゼネルのパイロットで、ガンダム信仰に固執する。39歳。

カリタス・ネルソン (New!)

UU軍少尉。演習用1号機でユキミと対峙した好青年。23歳。

ブラット・ノゼス

UU軍少尉。ユキミに右鼻を頭突きされて鼻血を出してしまい、以後『鼻血野郎』というあだ名に。23歳。

アラン・ドリユフス

UU軍中尉。ルネ・エイブリー少佐に尻を叩かれ、レピドウス中隊を率いることに。24歳。

トシリア・ネイビー

連邦軍曹長。ガンダム1号機アサルトを降ろされ、現在はG1に乗る。16歳。

ナリア・オーエン

連邦軍伍長。ガンダム2号機アテナを降ろされ、G1砲撃仕様機を駆る。15歳。

ヴェルター・ヴァイタル

連邦軍少佐。ガンダム3号機テトラに乗る寡黙な古参兵。腕は確か。36歳。

エデ・リアーノ

連邦軍中尉。ガンダム1号機アサルトを受領した補充要員。女性にして問題児。24歳。

ローゼ・ポリノーク

連邦軍大尉。ガンダム2号機アテナを受領した補充要員で、後輩のエデの素行には頭を抱える。26歳。

春雨瑛水

連邦ガンダム5号機を強奪した謎の浪人。以前、レイジと和解したが、進展はなし。年齢不詳。

ウィルソン・カーター

瑛水との決闘を申し込んだゲリラ兵。25歳。

## Unit 026：甦る歴史

コロナガンダム。世紀の産物の亡霊が、鮮血のごとく赤く塗られた鎧を纏った生ける歴史。

背中に蟹のような怪獣が寄生している黒い狂戦士ゼネルと、鮮血が塗られたように鮮やかな赤をしたコロナとが、今ぽっかりと暗い宇宙の中対峙していた。

「ふん、いつまでも逃げられると思うな」

UU軍大佐ジェラル・ネルソンが、ゼネルの背部のバックパックから細い三本指のアームを四つ展開させ、ジグザグにバックブーストを続けるコロナの四方を囲むようにオールレンジ攻撃を仕掛けた。

(……何だ。胸がざわざわするな……)

内的要因でざわざわしている訳でもない。外部から押さえ付けられるような、いや、やはり内的要因なのか。

そんな曖昧且つもどかしい感覚に見舞われたレイジだが、MS操縦の伝達指令を司る操縦桿を握っているには思考がまとまるはずもなく、引つ込めた両サーベルのうちレフトアームのサーベルを再抜刀し、敵の有線式アームの腕部に斬りかかる。

「かかったな」

ネルソンのしてやっつたりの口調と共に、他の三つの有線式アームがコロナに一気に接近し、コロナを捕縛した。

「ちいっ！」

三本指のアームに両手と右足を掴まれ、じたばたするコロナだが無意味な抵抗だった。やはり、オールレンジ攻撃相手に安易に動くのは迂闊だった。捕縛して有線式アームとコロナの相対速度がゼロになった有線式アームから、掌に当たるビーム発生器で零距离射撃が刺さる。コロナ機内にも被弾した激震が走る。胃をキリキリさせるように損傷を知らせる警報が鳴く。ゼネルの有線式アームの零距离射撃は一発では終わらなかった。なぶり殺すようにビームを連発し、コロナを痙攣させる。

「……タフだな」

もう何発目かは数えていないが、コロナは連発されてなお原形を留めていた。伊達にガンダムを名乗っているわけではないようだな、と心中で譲歩し、ネルソンは今度は発声した。

「だが、残念ながらこれで終わりだ」

残りの一本のアームの三本指の基部からビームサーベルが発振し、それがコロナをまっすぐ串刺しにしようとする。

レイジは、絶体絶命のこの状況下でキュツと歯を食いしばり、操縦桿を動かしてどうにか捕縛から逃れようとするが、無意味だった。

ふざけんな、まだやるべきことがあるのに。

ティアは大丈夫なのか。

ユキミは無事なのか。

師匠はどこにいるのか。

……まだ死ねない、こんなところで。

《そうだ、私にはまだやり残していることがある》

……え、誰の声？　そもそも、今本当に聞こえた声なのか？

何となくぼんやりとした疑問も晴れぬまま、コロナのコンソールが一気にブラックアウトし、他の機器も一斉にシャットダウン、コクピット内が真っ暗になった。

その中で、ブラックアウトした筈のコンソールの中心に、

『V N G X X』



という血のように赤い文字が忽然と現れた。

コロナのデュアルアイが青からまばゆい金に変わり、人でいう所の口部が生き物のように開き、血、いや口ごと燃えるように赤いビームを吐いた。その溢れんばかりの業火は光の剣を携えた化け物の腕ごと焼き払った。ネルソンも流石にすぐには反応できず、ゼネルの有線式アーム一本を、コロナの噴いた業火にみすみすくれてやる羽目になった。

コロナは、ボロボロになった赤い外部装甲をパージし、褪せた金色をした細身のガンダムとなった。

「なんだ……ガンダムシルヴィアス……いや、そんなわけが……！」

ネルソンがそう言った顔には、冷汗と焦燥が滲み出ていた。

(それになんだ……この不気味な感覚は……)

ネルソンが心中で呟く間もなく、細身のガンダムは、膝部の突起装甲の裏にアタッチされていたサーベルを飛び出させ、そいつを真空中で受け取るなり赤いビームを発振させ、ゼネルに突撃してきた。

「なッ……速い！」

爆速、いや、殆ど瞬間移動のような接近に反応できず、反射的に構えたサーベルでなんとか一命を取り留めた。血のようなサーベルの斬撃を受け、なんとか防いでいる最中、これが本当に彼の気迫なのだろうか。ゼネルは訝った。

(それにしては、あまりに重みを感じる……)

もし、ある荘厳な風格を持つ神殿の最深部にある、この目の前にある巨大な神像を破壊したら、一体全体、どんな罰が下るのだろうか

……  
ネルソンは、そのような恐怖に近い感情を抱いていた。

「何なんだ、お前のガンダムは!？」

ネルソンは年甲斐もなく叫んだのに恥じる暇もなかった。

ラグランジュ0。そこははじまりの地。すべてのはじまりのコロニー。そう、ガンダムのすべての……。

今ここでは、ガンダムシルヴィアスの起動実験をやっていたが、中々起動せず、諦めてシルヴィアスから降りていたアルバート・スタンリー。

柔らかい濃紺の髪が風に靡く議長息子。スタンリーの貴公子と呼ばれるほどの端正な顔立ちをした青年は、シルヴィアスを見上げていた。

（今はまだ早い、ということなのでしょうが、ガンダムシルヴィアス様）

と目をしかめたその時、今まではうんともすんとも言わなかったシルヴィアスが突如、デュアルアイが金色に光りだした。

「な、何だ!?」

「起動したのか!?」

「馬鹿な、無人で!」

アルバート含め、技術者達が突然の起動に慌てふためく。

「私が確かめてみる!」

「き、危険です、御曹司!」

そう引き止める技術者を差し置いて、ワイヤーでコクピットハッチまで上がり、コクピットに入る。コンソールを覗いたところ、

『SVG XY』

という表示が赤く点灯していた。あちこちの機器がけたたましく光り、すぐにでも動きたそうに煮えたぎっているように見えた。

(どうして急に……?)

アルバートがけたたましく光っている機器などに気を取られている脇で、機内のソナーは、ある座標をひそかに点滅させていた。

：背後からレピドウス隊長機を奇襲する役にまわった俺ガルマンの駆るシャドー。火線が飛び交うのにアラートで注意を払っているのか、周りの敵機はシャドーの存在に気付いていない。暗色でカラリングされているため、漆黒の宇宙では保護色になっているとはいえ、肉眼での確認は可能なはずだが。

(このまま、斜め下から……!)

右斜め上に、ターゲットのレピドウス隊長機を捉えた。現在、ビームライフルを撃っているが、動きのキレが今一つ悪い。きつと、トシリアのG1やヴェルターさんのテトラがうまく牽制してくれているのだろう。

(しまいだ!)

シャドーを一気に接近させた。

レピドウス隊長機に乗るアラン・ドリユフス中尉。現在、二機がかりで牽制されているが、粘り強い射撃でなんとかやり通していた。

「ッ！ 俺一機ごときに二機も無駄にしているのかい！」

右手のビームライフルと左手の実体弾二連装マシンガンを使い分け、G1とテトラを近づけさせなかった。

「1号機を仕留め損わせた罪、清算してもらっぜ！」

ドリユフスは必死だった。歯を全部抜かれるか出撃するかの二択で後者を選んだのだ。もし敗北したら……考えたくもないことだ。

「オラッ、さっさと落ちろ！ 量産型！」

トシリアの乗るG1に、銃身が焼けるくらいにビームライフルを連発する。

「ち、ナメやがって!」

器用に回避し、テニスのラリーのごとく撃ち返すようにビームライフルを放ってきた。

「……ほう、一般兵でもさすがに訓練程度は受けてるようだ」

G1に固執するのはやめ、改めてテトラにも注意を払うようにした。そこに、

「隊長、無事ですか!?!」

部下のレピドウスが応援に駆け付けてくれた。

「おお、コゼム。少しばかりてこずってる。すまんが、援護を頼む」「はい!」

仲良く横に並び、部下のコゼム機もビームライフルを連射する。

「これで二対二だ!」

勝ち誇ったように、ドリユフスが勢いづいた。しかし、

「そいつはどうかかな!?!」

「何ッ!?!」

謎の声に思わず声が詰まり、アラートを確認するが、反応無し、と確認した刹那、至近距離でいきなりアラートが鳴りはじめ、シャ

ドーがビームランスを突き立ててきた。

「しまった!」

接近戦用武器を取り出す間もなく、やむなく咄嗟にマシンガンを撃した。連射で焼けしまった銃身が今度はビームの熱で溶かされてしまったものの、レピドウス本体のダメージはほぼ無し。

「危なかった……」

「……敵ながら、いい判断だったな」

ランスを引き、体勢を立て直すシャドー。ガルマンもドリユフスを素直に認めた。

「だが、長くは持たんはずだ!」

ランスをライフル型に組み直し、ピンクのビームを連射。

「ちい!」

ドリユフスも怯まず回避を続け、負けじとビームライフルを撃ち返す。

「クソツ! 不意打ちにしかならなかったか!」

「そんなチンケな小手先が通じるかよ!」

「なんだと!」

罵声を交わし合い、互いのボルテージが高ぶった。

しかし、そこに太めのピンクのビームがドリユフス機の装甲を掠めた。

「なんだ？」

新手か、と訝るが、近くに砲撃主が見当たらない。躊躇しているともう一発同じビームが飛んできて、今度も纏もっれてしまい、左足の膝下がごっそり持って行かれてしまった。

「クソッ！ どこから!？」

見えない敵にもどかしく怒りを覚えた。

突然、ドリユフス機を襲った二本のビームは、G1の砲撃仕様機だった。その宙域には、ローゼ・ボリノーク大尉の乗るアテナが巡回していたが、かなり離れた距離にある最前線に援護射撃をしたG1砲撃仕様機に声をかけた。

「無茶だ、こんな距離から援護は。せめてもっと接近してからしろ」

「無茶じゃない。実際、誤射はしていない」

ぶつきらぼうに答えたパイロットはナリア。ナリアの乗るG1は頭部にカメラアイを被り、大きくくり抜かれたところに入れられた無造作な赤い単眼は、ターゲットを撃つのに躊躇ちゅうしない無慈悲さを醸し出していた。

宇宙での戦闘は奮わなかった彼女だが、敵に気付かれない距離からの砲撃は成功したようだ。

「大尉殿も、そろそろ援護しなければ我が方も危ないのでは」

少し皮肉を籠めてポリノークを唆す。

「……今は俺が指揮を取っている。勝手な発言はやめてもらいたい」  
意地張ってる場合か、と反抗する心と自軍への危機感をなんとか無言の下に沈めた。構わず砲撃を続けるべく、銃身に添え手を置き、ロングライフルのスコープに赤い単眼を覗かせた。  
一方でポリノークは、なんで俺の身の回りの女性は碌な奴がいなののかと頭を抱えていた。

「誰が碌でもない奴だ」  
「……えっ!？」

心中の言葉の筈が、相手には丸聞こえだったみたいだ。戦闘中にも関わらず思わずマヌケな声を出してしまった。

「こついつのをレディの敵と言うのか」  
「勝手な発言をするなど言っただろう!」  
「だから貴官はモテないんだ」  
「何で知っているんだ!？」

冗談でモテないと言っただつてもりが、どうやら、

「……なんだ、凶星か」  
「は?」

「せめて、女をたぶらかした武勇伝の一つでも聞かせて欲しかったな」

「貴官は俺をどんな奴だと思っているんだ! というより、戦闘に集中しろ!」



垢抜けた傭兵の男たちに囲まれて育った故か、こんなこともあっさりと言つてのけてしまうナリア。もちろん、無表情で。

たかが下級兵に対し本気でキレてしまい、頭に血が昇ったまま下がらないポリノーク。また問題児が増えたと、熱を持ったままの頭を抱え、コクピットの中独りうなだれた。一方のナリアは、何事もなかったかのような、満更でもない素ぶり。G1の次発のライフルを敵に構えていた。スコープに赤い単眼を覗かせたG1は、その単眼を妖しく歪ませた。

地球。人類を含む生きとし生けるもの全ての命の源となった雄大な自然を持つ星。

北海沿岸から少し離れたところの森の中で、二人の男が互いの剣を交えていたが、間もなく終局を迎えるところだった。

「これで終いだ！」

「早まるなよ、お主！」

ゲリラ組織ワイバーンの部隊長ウィルソン・カーターと謎の浪人春雨装水とが、怒号と剣を交わした。凶器同士がぶつかる高い音が森じゅうに響く。

「……………どうやら」

「拙者の負けのようだな」

「いや、俺の負けだって」

「いいや、拙者の剣は折れてし……………うん？」

互いの剣を見合わせると、両者共に剣が折れていた。

「……相打ちか」

お互いに自分が負けたと早とちりしてしまった。やがて間の抜けた雰囲気は漂い始め、周りの兵士たちも何とも言えないようなこの沈黙に、それぞれの顔を見合わせた。ついにこの雰囲気を黙ってやり過ぎすのに耐えられなくなり、戦っていたはずの二人が笑いだした。

「やるな、お前！」

「そなたこそ」

握手をし合い、友情が深まった風にも見える。周りの兵たちもやがて陽性の感情に変わり、装水を歓迎した。

ウィルソンや装水が向かった基地の格納庫には、UUから鹵獲したポーン地上型がドーンと佇んでいた。緑に塗られた装甲は、外の森に溶け込めるようだった。続いて、連邦から鹵獲したFDF-07（ゼロナナ）。トラヤヌスの一つ前の形式の戦闘機だが、トラヤヌスの製造コストがかなり高く、今でも現役として活躍している空の王者である。そして、歴代戦車の八十六式戦車や九十六式戦車、さらには旧式化した七十四式戦車までもが砲門を外に向けていた。

「七十四式がまだあるのか」

「バツカおめー、ナナヨンもまだ現役だぞ？」

「む、そうでござったか」

恐縮したように、装水は少しのけぞった。

「八チロクも軽快でいいが、いかんせん華奢でなあ。弾当たっちゃまったらすぐやられちゃう」

ナナヨンに比べて一回り小さい八十六式戦車<sup>ハチロク</sup>。軽量化に重きを置いた本形式は、被弾率の減少、燃費向上と、兵器としてはおおむね成功だった。だが、一度被弾してしまうと、軽量化をなるべく装甲を薄くしたために脆弱で、また七十四式に比べて精密部品が夥しく増えたのが祟り、検車が煩雑化したという難点も抱えていた。今も、修理が中途になっている八チロクが二、三ある。

「その……九十六式はどうなのだ？」

「クンロクはまあ……扱いやすいな」

七十四式と八十六式を折衷したような大きさで、性能的にはいいとこ取りしたような型式の九十六式<sup>クンロク</sup>。八十六式に近い軽快な操縦ができ、七十四式に迫る火力も持つハイスタンダードさが売りだ。最も、戦車の中では。

幕末の浪人を彷彿とさせる装水が、一言コメントを入れた。

「今の時代はMSだろう」

「大昔のカッコしたお前が今を語んな！　つーか、戦車ナメんなよ？」

「戦闘機ではいけないのか？」

「む……どっちも大事なんだよ！」

近くにいた整備兵と兵器トークを繰り広げていた装水。ふと、自機の連邦ガンダム5号機スラッシュを見遣った。数本の剣をバックパックに積んだ戦士は、装甲はコンクリートのような無骨な灰色だ

が、水脈のように体を流れる水色のラインが陽光に煌めいていた。

「あの機体、アンタらが戦ってる間に見させてもらったよ」

剃り残した顎髭を右手でジヨリジヨリ触りながら整備兵もスラッシュを見上げた。

「連邦系の戦闘機のバッテリーと似たようなのを使ってあったから、充電プラグの規格が合ってたよ」

萎えたカーキ色の作業服を適当に直しながら歯を見せてきた。

「ただ、ウチの主力は戦車と戦闘機だから、悪イがそっちを優先させてもらうぜ」

「うむ……地上戦ではやむなし、か」

先刻、装水はウィルソンたちがスラッシュにライフルやバズーカを向けて来たとき、非常に的が大きいMSに乗っていることに、武器を持っていないような無防備な感覚になったのを思い出した。実際、メインカメラなどの急所に当たっていたらかなり面倒だっただろう。

「話がわかる兄ちゃんじゃねえか」

勝手に納得した風な顔をし、九十六式の整備に向かった整備兵だった。

(さて、ここで拙者は何を為すか……)

何となく淋しげなスラッシュを拝みながら、装水は心中で呟いた。

ラグランジュ 周辺宙域。今ここは仮設デブリ帯となっており、UU兵士達がポーン同士で軍事演習していた。遂にユキミの番になり、彼女は演習用4号機に乗り、ジエネレーターに火を入れた。

「おい新入り、援護しっかり頼むぞ」

味方の3号機から通信が入る。同時に、モニターに味方パイロットの映像も出る。バイザーで顔は不明瞭なもの、右鼻にティッシュを詰めているのがわかった。

ユキミは一瞬にして誰だと判明し、素っ気なく言い放った。

「あ、鼻血野郎だ」

「誰が鼻血野郎だ！ つーか、オメーがやったんだ」

『私語はよせ。もうすぐ演習が始まるんだぞ』

スピーカーにネオンの声が入る。鼻血野郎はまたも抗議を中断させられ、心中でこう呟く。

(おいおい……地の文でも鼻血野郎かよお……)

鼻血野郎は酷く落胆し、ゆっくりと3号機を方向転換させ、デブリ帯に接近させた。

「新入り、俺を撃つなよ」

初心者であるうユキミに敢えて当たり前のことを言ってみるが、予想外の展開が待っていた。

「うーん、保証はできないなあ。あたし新入りだし」

「おい！ ふざけんなよ！ 頼むから撃つなよ！」

はいはい、と生返事をしたユキミはまるで息子に駄々をこねられて折れた母親のようだった。

(なんでこんな奴に子供扱いされなくちゃいけねえんだよ……)

まるでこの地の文を覗いたかのような発言を漏らしたのだった。

そんな下らないやり取りは過ぎゆき、演習が始まった。相手の1号機や2号機のパイロットの名前は、ユキミは知らない。バズーカを持つ自機の操縦桿を、必要以上に力ませて握る。

「開始！」

上官の怒号とともに、前衛のポーンが火器を吹かせた。鼻血野郎のポーンもマシンガンの火を噴かせた。後衛のポーンたちを置いていくようにジグザグにデブリをすり抜けていく。

「援護つたって……こんなんじゃ無理に決まってるじゃない」

敵機がデブリに隠れたり出てきたりして、なかなか照準を合わせられていないユキミ。自分のやるべきことがだんだんぼんやりとしてきた。そんな自分に気付いた刹那、ユキミ機が突然急発進し始め

た。

「な、なんだ！？ 後衛じゃなかったのか！？」

鼻血野郎含める敵味方関係なく驚愕の声をあげたポーンパイロットたち。バズーカを右手に担ぎながら突進している。ついに鼻血野郎機を追い抜いた。

「馬鹿、あんなんじゃないの的じゃねえか」

鼻血野郎がそう呆れたが、案の定ユキミ機にアサルトライフルが放たれた。しかしユキミ機は、戦闘機でいうところのバレルロールの要領でライフルを回避し、重々しくバズーカを撃ち返した。

「む！」

アサルトライフルのような実体弾を回避するには、ある程度の訓練が必要だ。それをごく軽やかにやってのけた彼女は一体……。

敵の1号機パイロットはそんな雑念に囚われていた。そんな自分に気付いた時には、いかんいかんと自分を諫め、気を取り直し、バズーカを回避した。やはり狙いは甘かったのか、あっさり回避できた。

「なら！」

ユキミ機はついに抜刀し、ヒートアックスの刃に熱を入れた。流石に接近戦用武器を近距離で出されてはこちらも抜刀するほかになく仕方なくヒートアックスを左肩のシールドから抜き取り、熱を持たせユキミ機の斬撃を受け止めた。

「随分でしゃばりな後衛じゃないか。まあ、相手してやるよ！」

演習用1号機パイロット、カリタス・ネルソンは、この突飛な状況を跳ね退ける勢いで叫ぶ。

カリタス機はユキミ機と鏢ぜり合っているこの状況下、ユキミ機に蹴りを入れるべく少し反動をつけた。しかし、ユキミは僅かにその動作を察知し、鏢ぜり合いを解き、蹴りを空振らせた。

(一筋縄じゃいかねえな……)

乾いた唇を舐め、空振りして不安定になった機体を姿勢制御し、左手にマシンガンを持ち、火ぶたを切った。

(マシンガン……)

自分の嫌いな兵器の名前を心中で呟き、ユキミは操縦桿をしかと握り直し、こちらもバズーカを左手に持たせた。降り続けるマシンガンの弾を、飛行機の操縦で慣れたバレルロールで回避しつつ、カリタス機に特攻を仕掛けた。

(さっきから変な避け方するな……)

大気圏内用戦闘機が殆ど配備されていないU.U.にとっては、あまり馴染みのない回避の仕方に訝るカリタスだが構わずマシンガンを撃ち続ける。

そんな様子を見守っていたネオン。隣にいる士官がそわそわしたように演習場とネオンを交互に見ていた。



「なんだ、落ち着かない」

腕組みしながら鷹揚とした声で士官を諷めるネオン。

「新入りが後衛機なのに接近戦をしてるんですよ!？」

説得するように、演習場を指しながらネオンに叫ぶ。

「そういえば彼女は接近戦を極めたいと言っていたな。まあ、接近戦の厳しさを思い知ってもらおうか」

そう答えたネオンは余裕をかましつつ、彼女がどのような戦い方をしているのかをしっかりと注視していた。

(……あの直線的な動き、一見素人の動きに見えるが、タイミングだけは的確な回避だけは特異だな……)

そういえば、彼女は間もなく期限が迫っている二輪の免許証と一緒に、航空機及びシヤトル操縦の免許証も出していたことを思い出したネオン。数々の自分の地上戦の記憶を引っ張り出しながら、あれは樽が回るような旋回『バレルロール』だと認識した。

「ハウズ・オ・ティン　ロスには程遠いツスけどねえ」

聞き慣れた後輩の声。いつの間にやらいたアリストの声だった。ネオンの脇で、ガラスに食い入るように演習場を眺めていた。

「……どこの花園の話だ」

アリストのボケに乗っかりつつ、一言であっさり流したネオン。

「お嬢さん、意外に奮闘してますぜ」

アリストはネオンと隣にいる士官に顔を合わせた。

「あの者は隊列を大きく乱した。自粛処分ものだ、これは」

士官、ケレルが厳しい意見を飛ばし、アリストはへえ、と尻込みするが、ネオンはユキミとカリタスの戦いぶりを目で追ったままだった。ユキミ機がバズーカを撃つても、カリタス機のマシンガンで相殺される。かといって、カリタス機がマシンガンを撃つても、例のバレルロールで蜜蜂のようにすばしっこく避けられるだけ。

「……あの避け方は、MSには負担が大きい」

「え？」

「へ？」

ネオンがそう断言したのを、ケレルとアリストが間の抜けた反応をする。

「スラスターを使い過ぎている。AMBACをうまく使えていないな」

ユキミ機は、ネオンに蜜蜂と形容されるほどに回避を繰り返し、それでも距離を詰めようとしていた。しかし、詰めては離され、詰めては離され、を繰り返しているうちに、推進剤の残量が僅かになっっていた。

(まずいわ、もう残りが……！)

ユキミの顔に焦りが見えはじめ、碧色の瞳の奥の瞳孔が目立った。

(もう、小手先は無理ね……)

ユキミ機は、左肩、所謂シールドを前に突き出し、真つすぐに特攻を仕掛けた。

「む、自棄になつたか!？」

カリタス機はすかさずマシンガンを撃ち続けるが、シールドに当たつてまともにダメージを与えられないでいた。

「ッ、何なんだよ、コイツは!」

シールド以外の場所を狙おうとしたその時、左肩を突き出して特攻してきている裏側に、熱の光が見えた。

(抜刀してるのか。見えてるぞ、新入り!)

こちらもヒートアックスを抜刀し、マシンガンをリアスカートアーマーのアタッチメントに装着させながら接近した。

しかし次の瞬間、両者がかなり接近したところでユキミが叫んだ。

「かかった!」

「何!？」

突き出していた左肩を突如引つ込め、持ったままだったバズーカを真正面に構え、近距離で弾を撃ち出した。

「ウツ！」

中途にアタツチメントに手をかけていたマシンガンを不意に取り出して相殺したが、自機がバズーカの爆風に煽られ、姿勢制御が不安定になった。また、爆煙で一時の目眩ましを喰らっていた。

「目眩ましのつもりか！」

ソナーを頼りに接近させ、ヒートアックスを振りかざすと、ちょうどユキミ機もヒートアックスを振りかざしていて、鏝ぜり合った。爆煙が消え、煙の中から右肩に『4』と書かれたポーンが姿を現した。

「てこずらせるじゃないか、新入り」

「なにおう！」

ユキミは相手を仕留めきれず、余裕をかまされてるのに逆上し、ブースターを吹かせて押し出そうとするが、スラスターからは情けない音と情けない推進剤を出すだけだった。

「……もうダメなのね……」

あとできるのは、ひたすら動かずに粘るだけ。鏝ぜり合いを解かれたら最後、回避できずにマシンガンの餌食になる。

『……そこまで！』

ネオンの声が入る。飽くまで演習。殺されることはない。お咎めを受けるかもしれないが、どうすれば推進剤を無駄遣いせずに済む

かをそのついでに聞いてしまおうと飽くまでポジティブに考えた。

『今日の演習はここまで。皆、ご苦労だった。各自、配置に戻れ。最後の演習の者は、自機をデッキに戻しておけ』

ネオンは機械的に終わり文句を並べただけだった。

(あたしはどうすればいいの？ このまま漂流して死ねるか？)

悲観的な思想に走ったユキミ。スパイ容疑がかかった自分なら仕方ないか、という諦念が胸の中で蔓延した。

そこに、脇にいたライバル、カリタスが声をかけてきた。

「……新入り、俺が運んでやるよ」

「……ありがとうございます」

何とも悔しいことだが、とりあえずは命の恩人なので礼を言っておいた。

レイジ以外の男性に対しては『男性としての』興味がない彼女にとっては、こんなことをされてもあまりときめかず、ましてや今回は負かされた相手。ぶすつとした顔をしたままだった。

「奇抜な戦法だったな。どこで訓練したんだ？」

何の気無しに質問してきたカリタス。

ユキミはしばらく無言を保っていたが、そんな自分を不毛に思えたので、遂に答えた。

「……別に。翼のある乗り物の操縦が得意なだけです」

「例えば？」

無遠慮に質問してくるカリタス。無下にすると漆黒の海に放置されそうだったので、仕方なく答えた。

「……シャトルとか、飛行機とか」

「飛行機……君は地球出身なのかい？」

「地球に住んでいたことはありません」

出身と言うとまた勘違いされると思い、今度は間を開けずに答えた。

「……そうか」

存外普通に相槌を打たれ、心の隅で拍子抜けしたユキミだった。すると、またも無遠慮に質問してきた。

「……なあ、ガンダム信仰、どう思う？」

(うわ、超メンドい質問してきたよ……)

ユキミは渋い顔をし、どう取り繕おうかと迷った末、こう答えた。

「……私は、よくわかりません」

「……なら、俺と同じだ」

「え？」

…苦肉の策で出した即席の答えだけど、案外悪くない解答だったみたい。でも、あなたのことなんて、好きになってあげないよ。

あたしユキミが口には出さずぶつぶつと呟いていると、彼は話を続けた。

「俺も、実際よくわからないんだよな。皆がガンダムに固執する理由が」

この回線は接触回線。あたしとカリタスとかいう奴だけのプライベートの回線だ。そんなにあたしに気があるのかしら。でも、好きになつてあげないよ。

「だから俺は、ガンダムのことなんてあんまり気にしてないネオン大尉の部隊に志願したんだ。叔父さんの反対を押し切つてね」

よく喋る。

ネオンのおじさん、確かにガンダムの話題をあまり持ち出さないよね。でも、好きになつてあげないよ。

てゆうか、あんたの叔父さんとか知らんがな。

「ジェラル叔父さんつていつてね。叔父さんつて言うには少し若いんだけどね。普段は優しいんだけど、ガンダムの話になると目付きが急に怖くなつちゃうんだ。子供の時からそのトラウマで、ガンダムが無くなつちゃえば叔父さんは……なんていう危険思想を持つたこともあつてね」

ホントよく喋る。てゆうか、お父さんすつぽかして叔父さんの話題つてどういうことだよ。

もしかして、家庭環境が複雑だったりするのかな。

……まあいいや。

あたしにとってはどうでもいい与太話を、適当な相槌を打ちながら聞き流し、バイザーを外さずに、外の暗い宇宙をぼんやりと眺めていた。

視線を前に戻すと、コロニーが近付いていた。まあ、コロニーまで連れていってくれた見返りがこの与太話っていうんならなんともないや。

「〜ていうわけだから……お、着いたぜ」

どついうわけだし。全然聞いてなかったし。  
でも、連れてってくれたんだから、

「……ありがとうございます」

礼くらいは。

「じゃあ、例の件、考えといてね」

は？ 何のこつちやい。デートの約束だったらお断りよ。

カリタスとかいう奴の演習用1号機が去っていき、自分の演習用4号機を格納庫まで歩ませた。推進剤が切れただけであつて、パワー切れではないので普通に歩けた。

デッキの向こうの港口のハッチが閉まり、デッキと港口のハッチを繋ぐ滑走路のライトも消え、演習の終わりを告げた。

命を助けてもらったのは確かなのに、なんでこんなモヤモヤしてんだろ。

そんな悩みをうやむやと考えながらハッチを開けると、ハッチの向こうのキャットウォークにティアちゃんの手摺りに掴まりながらこちらをじい〜つと見ていた。

「あ、ティアちゃん！」



「……おかえり」

何だかとても懐かしい気がする。シートから飛び出し、思わずティアちゃんを抱きしめてしまった。

「うわぁん、死ぬかと思った〜！」

ティアちゃんを抱いたら、安心感がどつとなだれ込み、半ベソをかいてしまった。

「……推進剤、気をつけてね」

げっ、バレてる。

そう思ったら体が不自然に硬直し、涙が急に引っ込んでしまった。

「うん、気をつける」

早速お咎めを受けてしまった。

あ、お咎めといえば、聞きたいことがあったんだっ。

「てゆーか、どうやってたら推進剤を無駄にしないで回避できるの？」  
「……教えてあげるね」

わーい！ 教えて教えてー！

というわけで、ティアちゃんからレクチャーを受けることになった。

Unit 026：甦る歴史（後書き）

ユキミ「何なのよ、あの男」

アリスト「いや、俺も知らねえな……て、誰のこと？」

ユキミ「カリタスとかいう奴よ。こないたいけな思春期少女を、命助けてやったからって好き勝手たぶらかしやがって」

アリスト「いや、自分でいたいけ言うか？ つーか、たぶらかされてないだろ。完全にスルーしてたじゃん！」

ネオン「そんなことより次回は、ドリユフス中尉が……」

アリスト「まさか……」

ユキミ「死ぬの？」

アリスト「コラコラ！ いくら『じゃじゃ馬』呼ばわりされたからってあまりに酷いだろ！」

ネオン「次回を見てのお楽しみ、だそうだ」

ルネ「あ、ネオン君じゃない！」

ネオン「……では、私は失礼する」

ルネ「あ〜ん。行かないでよ〜」

ユキミ「こんにちは、少佐さん」

ルネ「あら、可愛い兵士さんね。悪いけど今はネオン君を追いかけなきゃいけないの」

ユキミ「大丈夫ですよ。おじさんなんだかんだでヘタレですから」

ネオン「誰がヘタレだ!」

ルネ「ねえ、ネオン君ってヘタレなの?」

ネオン「間に受けないで下さい、少佐!」

.....

アリスト「.....モテる男は大変だ」

## Unit 027：地へ落ちゆく

黄色い剣と赤い剣。異端を排除し守り抜き、混じり気のない黄色い剣と、歴史の水底に沈められ血に誓いをこめ、混沌からはい上がった赤い剣。

互いに混じり合うことなく、ゼネルとコロナガンダム　いや、忘れられしガンダムヴァイズノートがぎりぎりとして合っていた。

「ぐうッ……お前は何なんだ！」

ゼネルを駆るジェラル・ネルソンは、鏝ぜり合いを受け止める操縦桿を握る手から伝わる痛みと、脊髄に響くような不気味さを同時に噛み締めていた。

「偽物ごときが……ウツ！」

偽物と言った瞬間、ジェラルの脊髄が激しく響いた。

（おのれ、このゼネルに干渉してきているのか……？）

ゼネルは、元々サイキック・センサーを取り入れられる前提にある設計になっているため、パルスを通す神経のような器官が存在する。

ヴァイズノートから発信された何らかのパルスが、ヴァイズノートと鏝ぜり合っているサーベルを通じて逆流するように流れてきてこのようになっていないかと、ネルソンはこの状況下で判断した。

「……だが、パワーは今一步及ばないみたいだな」

ヴァイズノートが剥いだ装甲には、外付けの追加ジェネレーターも付随していた。しかしヴァイズノートはそれもろとも剥いでしまったため、総合的なパワーが落ちてしまっている。

「見かけ倒しのただの蚊蜻蛉かんとんぼよ。いや、せめて蜉蝣かげろうと呼んでやろうか」

ヴァイズノートが四対の光の羽根を持つゆえ、透き通るような美しい羽を持つ蜉蝣と言い換えてはみたが、蟹の怪物にとってはどのみち弱々しいものだった。

鏝くわぜり合いがゼネルによって押し返され、ヴァイズノートはやむなく距離を置いた。

「聞こえているか、パイロット。君の機体は何やら脱皮したようだが、残念ながら力不足だ。投降するがいい。悪いようにはしない。その偽物ガンダムのみを破壊する」

ジェラルは勝ち誇ったように、落ち着きを払った口ぶりでレイジに降伏勧告する。

『……違ウ』

ジェラルは、機内のこの物々しい声を聞き硬直した。

『……違ウ！』

「ふん、何が違つというのだ！」

レイジのものなのかどうかも怪しいこの声にムキになり、ゼネル

は再び剣を構えた。ヴァイズノートはまたも爆速でゼネルに急接近する。刹那、乱暴に剣同士がクラッシュし、二色の光の飛沫が痛々しく散る。

「うむ……機動性と勢いだけは一人前だな」

だが、と付け足し、ジェラルは先程と同じようにゼネルに力を入れさせ、ヴァイズノートをまたも押し返した。蜉蝣　もといヴァイズノートは無様に跳ね飛ばされ、無理に姿勢制御しようとする。しかし、ゼネルはその隙を見逃さなかった。

「終いだ、偽物」

ジェラルの無慈悲、いや、一切の感情すら込めていない声とともに、黒い蟹の化け物ゼネルは、甲羅　バックパックから重そうなビームランチャーをすばやく担ぎ、姿勢制御途中でよるめいているヴァイズノートに照準を合わせた。照準がヴァイズノートにしっかりとロックオンされ、トリガーを引いた。ビームランチャーからは、轟音が聞こえんばかりの黄色く大きいビームが溢れんばかりに撃ち放たれた。

姿勢制御が終わったばかりのヴァイズノートにはよけきれず、命中した右肩が爆発する。爆発のショックで機体が大きくよるめいたあと、機体の金のデュアルアイが消え、撃たれた右肩からは煙を吐き、糸の切れた操り人形のように四肢を暗黒の宇宙に投げ出していた。また、爆発の衝撃で機体が地球方面に流れていた。

「そのまま地球へ落ちるがいい」

青く光る地球へ真つ逆さまに落ちていくヴァイズノートを、今度は勝ち誇った顔で見下ろすジェラル。しかし、油断大敵。この言葉

はよく言ったもので、今まさにゼネルはその言葉の餌食になった。本体の人型の両脇からもはみ出るほどの甲羅　バツクパツクをも、ヴァイズノートが噴いた赤いビーム、いや赤い炎が本体もろとも掠り、バツクパツク右方からの小爆発でゼネルも態勢を崩した。

「ぐ、醜いあがきを」

突然の振動にもめげずに、今度こそ仕留めると言わんばかりにビームランチャーを左手で構え直す。今度はコクピットのある胸部を狙い、照準が定まったところでトリガーを引いた。

ゼネルとて、無傷ではない。このことが、ヴァイズノートに直撃させられなかった最大の要因だった。撃つ直前、バツクパツクの被弾部がまたも音をあげて照準が大きくずれてしまったのだ。ビームはヴァイズノートの右手を掠る程度の損傷しか与えられず、ゼネルもそろそろ耐久限界だった。

「これ以上の戦闘は無茶ということか」

ゼネルのジェネレーター出力は6000kW弱。そのぶん火力が大きくパワーも十分だが、それだけのエネルギーを運用するためのパイプラインが、先程の被弾で損傷してしまっていた。よって、ジェネレーターを介する兵器の安定運用は難しくなっていた。

「また会おう。もっとも、大気圏で燃え尽きなかったらな」

黒煙を噴くバツクパツクを担いだまま、ゼネルは踵を返す動作をした。

「残存部隊の直掩にまわろうか。ドリュフス中尉、聞こえるか。無事ならば、返事だけでいい」

『あ、はい!』

スピーカー越しに慌ただしさをひしひしと感じるアランの声が返って来た。

「今からそちらへすぐに向かう。それまで持ちこたえてくれ」

『はい!』

アランの返事を聞き、再度地球へ落ちゆくガンダムヴァイズノートを見るジェラル・ネルソン。復活を果たしたガンダムヴァイズノート。しかし今、大気圏の地獄へと、じりじりとすいよせられていった。

偽物のガンダムを、大気圏の熱で溶かす(であろう)ことで間接的に討ち取ったと不敵な笑みを浮かべ、アラン率いるレピドウス隊の直掩に向かったジェラルだった。

：先ほどティアちゃんからのMS操縦の手ほどきを受け、ここらグランジユの軍事演習場から帰るあたしたちユキミ一行。ミニモビルスーツの前で突っ立てるあたしの横で、キャノピーを開けようとロックを解除しているティアちゃん。コードを打ちこみ、キャノピーが空いてシートが露わになった。ティアちゃんがこっちを向いてミニモビルスーツに乗ろうと促してるのを確認し、右足を上げようとしたところ、横からこんな声が。

「あ、新入りじゃないか!」



この異様に涼しげな声。カリタスとかいう奴か。相手するのも面倒なのでシカトして乗ろうとした。そのまま事が流れると胸を撫で下ろそうとするすんでのところ、ティアちゃんがこちらを向いてこう言ってきた。

「……呼んでるんじゃないの？」

「気のせいじゃない？」

ティアちゃんの親切心を踏みにじってしまったが、後で事情を話して納得してもらおうしかないなあ。

「ちょっと、無視すんなよ！」

猛ダツシユでこちらに接近してくるカリタスとかいう奴。ティアちゃんは相変わらず悲しそうな眼を向けてくるし、お互いに居た堪れなくなったので、振り向いて一言だけ言ってやった。

「助けテクレテアリガトー」

棒読みでそう言い放ったあたしの脇で、運転席に座っているティアちゃんは困った顔をしながらエンジンを入れ、ミニモビルスーツをハッチから出庫させた。そのあとのあいつの行動なんて知らないや。

）

ここラグランジユに寄港しているダイオギニスに帰艦し、ミニモビルスーツから降りる。ティアちゃんもミニモビルスーツから降り、キャノピーを閉じた。じゃあ行こうとかぶりを振ろうとしたその時、ティアちゃんがボソツと問いかけてきた。

「……ネルソン中尉、嫌いなの？」

「どうやらカリタスとかいう奴の名字はネルソンというらしい。まあ、知った話じゃないけど。」

「しつこい男はみんな嫌いよ」

「……男の人がリードしてくれなくていいの？」

突然何を言い出すのだろうか。これでは完全なるガールズトークではないか。いや、多分絵面は普通だと思うけど、ティアちゃんが率先してその話題を出してくるとはあまりに意外……。

「うーん、それとこれとは話が違うと思うけど……」

レイジさん、決してしつこくはないけど、何となくリードしてくれる（ホントに何となくだけど）。んで、しつこくついて行くつもりで思う。

「……うわ、あたし自身がしつこいじゃん。軽く自己嫌悪に陥ってしまった。」

でも、カリタスとかいう奴はなんか違う。何なんだろう、よくわからん。

結論が出ずに曖昧な答えしかできなかった。

「……年頃の女の子は難しいのね……」

「いや、あの……」

おばさんのような達観した口調で言われ、どう突っ込んでよいものか分からず、言葉を失ってしまった。そして、あたしがかいた冷汗を、ティアちゃんはハンドタオルで拭ってくれた。

……で、これを見て思ったこと。

「ティアちゃんって、何でも持つてるんだね。オロナイソとか、タオルとか。四次元ポケットみたい！」

「……この作品、実は22世紀末だったりして……」  
「まさかの22世紀！？ 22世紀である伏線少なくて？」

ティアちゃん、意外と冗談が通じるのね。

「私、子供の頃、虎衛門好きだった」

「あたしも観てた！ パパも子供の頃観てたって」

完全なる偏見だけど、ティアちゃんは世俗に疎そうないメージだった。けど、結構庶民的なのね。

「……じゃあ、部屋に戻ろう」

「うん」

体を九十度回転させて促すティアちゃん。あたしも戻ることにした。

一方、ユキミに置いていかれたカリタスと言えば。

「ユキミ（あの新入り）になんか悪いことしたかなあ……」

ユキミに乗せたミニ・モビルスーツが演習場から退場したあと、

カリタスは自分のミニ・モビルスーツの運転席で、頭頂部をポリポリかきながら、その理由について悶々と熟考した。

(……ま、そのうち機嫌が直るのを待つか)

女性は気まぐれだとよく聞く。出所もよくわからないような理屈を付け足し、飽くまでポジティブに考えてあまり深くは考えないようにした。

「よお、ナンパ野郎」

キャノピー越しにミニ・モビルスーツの外に誰かがいるのを確認するなり、キャノピーを開けるスイッチを押し、声の主を助手席に入れた。

「ブラット、鼻大丈夫か？」

右の鼻にちぎったティッシュを詰めた男、(ユキミ曰く)鼻血野郎ことブラット・ノゼスは、カリタスにそう心配されていた。

「心配すんの鼻だけかよ」

自分の鼻を指しながらカリタスに毒づき、話を続けたブラット。

「あのお転婆石頭金髪、親から一体どんな教育を受けたんだ」

ユキミをこの七文字で呼び、頭突きされた悪態をカリタスにぶつけた。

「お転婆石頭金髪？ あの新入りの女の子のことか？」

「おめえは模擬戦で勝ったからいいけどよ、こっちは不可避の顔面頭突きの手げ呼吸器を鉄拳だぜ？　頭突きはともかく、あの鉄拳は格闘技通り越して殺人術だろ」

「いや殺人は言い過ぎだろ」

カリタスが苦笑いしながらキャノピーを閉じるボタンを押し、周辺機器のチェックをしていた。

「鉄拳喰らってしばらくまともに呼吸できなかった身にもなってるよ」

「どんだけだよ……」愁傷様

カリタスは更に苦笑いし、同時にユキミの被害者として憐れんだ。

「おめえだって、相手がもしプロペラント装備とかだったら勝負はわかんなかったぜ？」

「そうかもな。まあ、タラレバの話をしてもしようがない」

「……それもそうだな」

カリタスのもっともな意見に、乾いた納得の声をあげるブラット。

「それじゃ、行くぞ。ダイオギニスに」

カリタスは操縦桿を握り、ミニ・モビルスーツを発進させた。ミニ・モビルスーツを滑走させるように足の裏に付いたタイヤが小さなスキール音を立てながら演習場を後にした。

カリタスとブラットを乗せたミニ・モビルスーツは、ラグランジュ市街地の並木をスケートのように走り抜く。カリタスは機内ラジオにスイッチを入れ、チャンネルが示された細長いラジオ用のデ

イスプレイが表示された。

『先程入ったばかりのニュースです。本日午前九時半頃、なんとガンダムシルヴィアスが181年ぶり、およそ二世紀ぶりに起動しました。詳しいことはまだわかって……』

「マジかよ」

「へえ〜」

芸能のニュースを聞いた時のような全く以って淡白な反応を見せた二人。ガンダム信仰にあまり関心がない二人ならではの反応である。

「ビッグニュースやん」

「な、ホンマに。コロニーは大騒ぎやるなあ」

思わず関西弁が出たブラットに続いて、カリタスも関西弁を被せ、二人は暢気に笑い出した。

ダイオギニスの停泊する港に到着したカリタスとブラット。二人が乗っているミニ・モビルスーツは、大きな積み荷と積み荷の間を摺り抜けるようにダイオギニスに向かう。

「あ〜ちょっと、そのミニ・モビルスーツ、こいつ運んでくれな  
いかい？ どうせダイオギニスに行くんだろ？」

整備兵に呼び止められ、ミニ・モビルスーツを一時停止させるカリタス。

「いいですよ」

寸胴なミニ・モビルスーツでもアームはしっかり付いており、MSのそれと比べては小さい物だが、およそ三メートル四方のコンテナを器用に持ち上げた。

「サンキユ、助かるぜ。これで終わりじゃねえから、また来てくれないかい？」

「わかりました」

前方はコンテナを抱えていて視界が塞がれているため、後退させながら荷物を運んだ。

ダイオギニスのデッキにあるコンテナの山に、今持ってきたコンテナもその横に並べた。

「お前は降りてていいぞ。俺はコンテナ運ぶから」

「いいのか？　じゃ、お先に」

キャノピーを開き、腕を直角にあげたブラットを降ろすカリタス。ブラットを適当に見送り、キャノピーを閉じて再びコンテナを運ぶべくダイオギニスの外に出た。

カリタスの乗るミニ・モビルスーツの他にも、別のミニ・モビルスーツや作業用重機、大掛かりな作業にはポーンやレピドウスといった、本来は戦闘用であるMSまでもが加わっていた。

ミニ・モビルスーツはコンテナの運搬。蟻のように港内でせっせと運んでは、巣であるダイオギニスに運び込み、またコンテナを運びに戻っていた。

MSは、艦体整備作業用重機の運搬及び補佐。ダイオギニスに幾本もの伸びている重機のアームたちの脇には、数機のMSが補佐を務めていた。

「こうして見ると、MSも機械なんだな……」

兵器としてのイメージが強いMSであるが、作業を手伝っている姿は、他の作業用機械に溶け込んでいた。重機に侍るMSの姿は寧ろ人間の作業員にすら見える。

後退しながらコンテナを運ぶカリタスのミニ・モビルスーツ。ミニ・モビルスーツとて、当初は民生用だったが、その小柄さゆえの取り回しのよさが軍に評価され、カラーリングや細かな仕様を中心にマイナーチェンジした軍用機も少なからず生産された。

「お疲れ！ こいつで最後だ」

後からコンテナを受け取った他のミニ・モビルスーツがそんな言葉を受けていたのを聞き、カリタスは仕事の区切りが見えたと操縦桿を握る手を強めた。

ダイオギニスに到着すると、ネオンが出迎えてくれた。

「ご苦労。各自ミニモビを収容し、自室にて待機している」  
「は……」

カリタスを含めるミニモビパイロットたちがキレのよい返事をし、ミニモビを専用の格納庫に収容させた。

「隊長、明日は何をやるんスか？」

ネオンの脇で、アリストが人差し指で彼の肩をチョンチョンと突いた。



「今は軍から何も指示が出ていない。いつでも出港できる準備はするが、指示が下りるまでは演習だろうな」

「また演習スか。お嬢さん、また何かやらかすかもしれませんぜ？」

「……うむ、否めないな」

こめかみを指で押さえながら冷や汗をかくネオン。

「教育したらどうスか？」

「その言い方、ギリギリじゃないか？」

「え、何がツスか？」

「……いや、何でもない」

「まさか隊長、いかがわしいことでも考えてたんじゃないスか？」

「何を言うか！ 少し黙っている！」

ついにムキになったネオンだが、アリストは隠しもせずニヤニヤしていた。

シャドーガンダムが漆黒の宇宙に紛れて駆け回る姿はまさに夜の暗闇を駆ける忍者だ。ライフルを失ったアラン・ドリユフス中尉のレピドウスを翻弄していた。

「くそ、捉らえきれん！」

シャドーを捉えるはずの照準が中々ロックオンできず、徒にシャドーに遅れて追っただけだった。ただでさえシャドーは視認しづらい黒のカラーリングをしているのに加えてこのすばしっこさ。アラン

はそう呟きつつ苛立っていたが、シャドーなどから撃ち放たれるビームガン回避しないわけにもいかず、操縦桿を握る手は引つ切り無しに動いていた。

（もうじきネルソン大佐の援護が来るはずだが……）

ゼネルに乗るジェラル・ネルソン大佐の通信からしばし。ゼネルは大半の推進力を司るバックパックもやられているため、戦場への直行に遅れている。それでも、ゼネルが来るまでは持ちこたえねばならない。

「こんなトコでやられてたまるかよ！」

ナリアの乗るG1砲撃仕様機に片足の膝下を持っていかれているものの、UU兵士は宇宙という環境にある程度適応しているため、その程度の損傷は自分の感覚でカバーできるのだ。

「粘り強いな……なかなか墜ちないぜ」

しぶとく回避を続けるアラン機に対し、シャドーを駆るガルマンの表情も険しい。

「焦るな。敵勢力も疲弊し始めている。着実に攻める」

「はい、少佐！」

テトラガンダムに乗るヴェルターの助言を受け、攻撃の手を緩めずにレピドウスにじわじわと肉薄したガルマンのシャドー。

「持ちこたえるんだ、ネルソン大佐が来るまでッ……！」

テトラとシャドーを相手に立ち回りを見せるレピドウス。

「中尉、大佐はまだですか！」

「持ちこたえろ！ 持ちこたえればきつと来る！」

殴られて赤く腫れた頬の痛みを噛み締め、持ちこたえてる実感をひしひしと味わうアラン。シャドーはともかく、テトラの多様でかつ正確な射撃を避けるのに、一瞬たりとも操縦桿を握る手元の狂いを許さない状況だった。

「……敵は時間稼ぎしてんのか？」

前に突き出していたシャドーのビーム砲の銃口を少し下げ、様子を見るように一瞬静止したシャドー。

「気を抜くな、アラク中尉。敵の目的がはっきりしない以上、憶測は死に至るぞ」

：憶測はミスを生むぞなんて言葉をどこかで聞いた気がする。コンソールの右下に示されたシャドーのエネルギー残量が気になるが、ヴェルターさんの言う通りに攻撃の手を緩まなかった。

「当たれっつてんだよ！」

ビーム砲をレピドウス一直線に向け、トリガーを引いた。

ガルマンたちが前線で戦っている最中、母艦シグナス。オペレー

ターのヘンリー・エルリック少尉がアカネ・ヤガミ艦長に振り向く。

「艦長、友軍機のG1がパワー切れで補給要請をしているんですが」  
「許可します」

「いや、それが……」  
「何？」

要領を得ないヘンリーの報告にフラストレーションが溜まりつつあるアカネ。

「エネルギー供給プラグの規格が合わなくて……」

「充電できないの？」

「そうですね……」

「……私が指示します」

すっと手が上がったのは副艦長のルイ・アジエスター中尉。

「……やむを得ないわ。中尉、頼んだわよ」

無言で自席のコンソールを操作し、MSデッキに通信を繋いだ。

「カーガル工場長はいますか」

「おう、俺だ。その声は、副艦長さんかい？」

ビリーの明るい声が聞こえるが、少し焦燥に駆られたような口調だった。

「はい。まず、プラグの接合部は合致しますか」

「ああ。ちゃんとガチャンって嵌まるぜ」

「プラグやコードの故障はありませんか」

「問題ないぜ」

機械的に質問をするルイ。ここまで異常は報告されずにいるが、ルイの表情は変わらない。

「では、電圧は合ってますか」

「電圧？」

ここで初めてビリーが語調を上げる。

「ガンダムとG1の定格電圧は1000Vほど違います。G1の定格電圧はコンピュータの諸元表に載っているかと思えます」

「わかった、調べてみる」

マイクから離れ、G1のコンピュータにアクセスし、定格電圧を調べている様子のビリー。

「副艦長の言う通りっすね。G1はガンダムより1050V低い。電圧を下げてみる！」

「また何かありましたらご連絡を」

「おう！ 成功したらメールを送るぜ」

ビリーの陽性の声を聞き、ルイは通信を切った。

「ありがとう、ルイ中尉」

「仕事ですから」

アカネのお礼に、ルイは素っ気なく答えた。

雰囲気明るくなりかけたシグナスのブリッジに、異変を知らせる声がある。

「か、艦長！ コロナの反応が消えました……」  
「え？」

アカネだけでなく、クルー全員が不気味なほど一斉に目を大きくした。

地球の低軌道上で引力にじわじわと吸い寄せられているコロナガンダム、いや、ガンダムヴァイズノート。装甲が大気圏の熱で赤く帯びはじめる。パイロットのレイジはほぼ意識がなく、ガンダムヴァイズノートは主がいらないに等しい状態だった。主もおらず、ガンダムヴァイズノートは死へのカウントダウンが始まるようだった。そのカウントダウンは無慈悲で、秒読みをすることに落下速度が上がってゆくものであった。

何だろう、何だか熱い。

これは、地球……？ こんなに赤い……？

こんなに赤くなってしまった……？

もつ、よくわからない……。

景色が機内の振動で激しくぶれる中、意識までもが混濁し、昏睡してしまった。

しかし、ガンダムヴァイズノット『自身』は諦めていなかった。灼熱の風を真正面から受けながら再びデュアルアイを金色に輝かせる。投げたされた四肢も一瞬痙攣し、命が吹き込まれたようだった。灼熱の風を受けながら手足を器用に動かし、姿勢制御をし始める。地球に対しやや真つ逆さま気味の俯せだったのが完全な仰向けになり、スラスターを噴くと、少しだけ落下速度が落ちた。

次に、不可視の粒子を胸部の排気口から機体表面にコーティングし始めた。核融合炉の開発に成功した不可視の粒子 『ガンダム粒子』と呼ぶ人もいるが、科学者でそう呼ぶ人は殆どいない。その粒子は外部の熱を遮断し、装甲を元の褪せた金色に戻しつつあった。

ガンダムヴァイズノットの落下は止まらない。しかし、安全な着地もしくは着水ができる体勢を整えていた。それも、ガンダム自身が……。

ガンダムシルヴィアスが起動したガンダム信仰の聖地、ラグランジュ0。ガンダムシルヴィアスのコクピットでは、アルバート・スタンリーが手探るように機器をいじくっていたが、思うように動か

ないようだ。

「どうなってるんだ……?」

眉を歪ませてみてもガンダムシルヴィアスは思うように動いてくれない。お手上げだと言わんばかりに両腕を脱力し、シートに深く腰掛けてみる。しばらくぼーっとしていると、何やら球状のレーダーがどこかの座標を示し、黄色く点滅していた。

「ここは……?」

身を乗り出してその座標を見てみると、その座標が示す場所は、地球の低軌道上だった。

尚も粘り続けるアランのレピドウス。シャドーガンダムとテトラガンダムの猛攻を何とか撒いていた。しかし、すぐに直掩に向かうと言われたつきり、一向にゼネルが来ない。

「中尉、もう持ちません!」

持ちこたえるストレスで赤く腫れた頬が更に腫れ上がってしまう気がしてしまったが、命には変えられまいと割り切るが、部下がついにネをあげてしまった。

それにしても……

「……すぐに来るんじゃないのかよ!」



アランは遂に焦れてしまい、ここにはいない、上官であるジェラル・ネルソンへ罵倒を浴びせた。

「遅すぎんだよ！」

あまりに血が昇り、更には真横のモニターをも勢いよく殴り付けた。すると、

「私はここだが」

頭に血が昇ったアランとは対照的な落ち着いた声のアラン機機内に響く。

「え？ あ、いや、た、大佐！ い、いつの間にいらしたので!？」

噛み噛みしながら、将校らしからぬ慌てぶりでネルソンのゼネルの増援を迎えるアラン。

「少々厄介事に付き合っていてな。遅れて済まない」

「あ、いや……どうということはないです……」

何とか取り繕おうとしどろもどろと答えるアラン。

「戦況は苦しそうだな。私も何とかしてみる」

「は。よいご活躍、期待しています！」

ようやく調子を取り戻したアラン。アランと共に粘り続けた部下も、ゼネルの増援を受けて胸を撫で下ろし、ゼネルやアランのレピドウスに続いた。

「なんだ、あの黒い機体……?」

「わからん。決して油断はするな」

ガルマンとヴェルターがゼネルの急登場に動きが一瞬硬直したが、更に集中するべく顔を神妙にした。

「手伝います。少佐、中尉」

「トシリアか。援護任せたぞ」

トシリアのG1も二機のガンダムのもとに戻り、三機同士のMSが対峙していた。

Unit027：地へ落ちゆく（後書き）

ユキミ「なんだ、ドリユフスとやら死なないじゃん」

アリスト「いや、死ぬとはいつてないから！」

ユキミ「しかもまだ痛がつてるの、頬つぺた」

アリスト「……君、ゼッター腕力軍人顔負けだろ……」

ネオン「そんなわけで次回は、話が大きく動くらしい」

アリスト「さてさてどうなることやら」

ユキミ「次回、新戦記IDガンダムUnit028、『ステラ』」

アリスト「いや、完全に別のアニメじゃん！」

ユキミ「そろそろ名前一字の題名があってもいいよね！」

アリスト「いや、無くていいから！」

ネオン「………というわけで」

ユキミ「次回もよろしくね！」

………

ガルマン（こっちはレイジが一時離脱したからなあ……）

ビリー（二回連続でスタジオはあっちに……）

ガルマン（そうなんだよなあ。って、スタジオって言い方するの？）

ビリー（そうだよ、きつと）

ガルマン（そもそも台詞カギ括弧じゃないのになんで会話が成立してんだよ）

ビリー（それは……）

ガルマン（……テレパシー？）

ビリー「うわ、キモッ！」

ガルマン「そこだけ発声するのかよ！」

## Unit028：辺境の土（前書き）

### 《本話の登場人物》

レイジ・ヒイラギ

本編の主人公。ジェラル・ネルソンの駆るゼネルとの交戦で敗北するも……。16歳。

ユキミ・サイン

本編のヒロイン。昨今は自称UU潜入捜査官（？）としての職務に馴染み始め、円滑に進んではいたが……。15歳。

ガルマン・アラーク

本編の直情型ギャグ担当。戦闘中ゆえギャグの職務をサボっているが、アツさは相変わらず。17歳。

ビリー・カーガル

本編の明朗快活キャラ担当。その明るさを持ち味に、今日もデッキのメンバーをまとめている。15歳。

ティア・プライマ

本編のほんわか不思議ちゃん担当。感情が漏れてしまうユキミを宥める心優しい少女。レイジに何やら未練を持っている。推定16歳。

エレン・リエン

レイジ曰く、エリシオ学園での同級生カナリーの姉疑惑が立っている（実際は正解）清楚な女性。23歳。

アルバート・スタンリー

UU議会議長、リチャード・スタンリーの子息。ガンダムシルヴィアスの復活を待ち続ける。24歳。

リチャード・スタンリー

UU議会議長を務める。今もなお、昔の親友フェブラルの軌跡あしあとが気になる。51歳。

ジェラルド・ネルソン

ゼネルを駆る腕のたつMSパイロット。リチャードとは面識があるらしい。39歳。

アラン・ドリユフス

UUのレピドウス中隊を率いる将校。階級は中尉。23歳。

ルネ・エイブリー

UU軍少佐。作戦参謀を主に担当しており、やり手のキャリアウーマンだが、異様に明るい。29歳。

アン・リオネ

ルネの後輩。真面目で曲がったことには懐疑を持つ。階級は少尉。18歳。

## Unit 028：辺境の土

アラン・ドリユフス中尉率いるレピドウス中隊に、ジエラル・ネルソン大佐の乗るゼネルが加勢に入り、ガルマンたちは黒い怪物、ゼネルに警戒しないではいられなかった。

「どうやら敵は損傷の箇所があるらしいですね」

「油断はするな。逆に考えれば、その状態でも向こうには勝つ自信があると考えた方がいい」

油断は禁物。そんな当たり前すぎるヴェルター言葉は、ガルマンには痛い言葉だった。ヴェルターに次いでMS隊の指揮を執っていた前の戦いでは、驕り高ぶった味方機があつという間に蜂の巣にされていた光景を思い出したからだ。

対するゼネルは、ガンダムヴァイズノットとの戦いで小破してしまい、応急修理を受けて一応の安定運用が望めるまでに修復されていたが、ガルマンに損傷箇所を一見して看破されてしまうほどの修復度だった。慎重な操縦をするようにと整備兵から忠告されたとか。

「大佐、その機体大丈夫なんですか？」

「心配するな。戦うのに支障はない。偽物のガンダム共を畳み掛けるぞ」

「は、大佐！」

ドリユフスの返事とともにゼネルとレピドウス2機が散開し、攻勢に入った。

「さて、どうしたものかね……」

渴いた唇を舐め、操縦桿を握り直すガルマン。

「私が敵を攪乱する。援護を」

ガルマンの乗るシャドーの左手に並んでいたテトラがその場でFファイター形態に変形し、暗黒の宇宙に推進剤の軌跡を残した。

「ヴェルターさんを援護だ！」

テトラが翼下のミサイル計6発を2機のレピドウスに発射させた後ろにガルマンのシャドーも続き、ビーム砲モードに組み立てられたビームランスを連射する。

「G1でも、やってやる！」

シャドーに続くG1も、シールドを横にして前面に翳し、その上から顔を出すようにビームライフルの銃口を覗かせ、桃色のビームを吹かせた。

元々どんな兵器にも適応できたヴェルターには、テトラのような可変機を縦横無尽に操ることは難儀しない。F形態のテトラは、MA特有の、汎用性を殺した大推力で敵をスピードで凌駕していた。ミサイルの弾幕は三機の敵の自由を阻み、味方のシャドーとG1に動きやすいようにしていた。

「ち、連邦にも宇宙で実戦慣れしているなんて……」

ドリユフス中尉の部下、フエガルンがテトラの猛攻に渋い顔をする。

「何言ってるんだ！ ほざいてる暇があったら攻撃の手を緩めるな！」



「す、すみません！」

フエガルトン機は慌てるようにライフルを敵に構え直し、緑のビームを発射させた。

灼熱の風が吹き付ける。地球の重力に従い、大気との物凄い摩擦による灼熱の風。ガンダムヴァイズノートはその風の中、至極涼やかな装甲をしていた。それもそのはず、落下速度を落とした後、断熱材としての役割を果たす不可視の粒子を表面にコーティングしたからである。

赤い灼熱の風は未だ吹き付け、気絶しているレイジがぐったりする機内は赤くガタガタ揺れているが、機体は危険を表わすアラートを鳴らしていなかった。

赤く吹き付ける風のせいでも、眼下に広がる大陸が真っ黒く見える。ガンダムヴァイズノートは、北アメリカ大陸目指してスカイダイビングをしているようだった。

- ネオン・ネイルバート大尉が隊長を務めるジエノサイド部隊を収容する、UUの強襲用艦ダイオギニスにある命令が下った。

偽物のガンダム、コロナガンダムが単機で大気圏に突入しようとしている。燃え尽きるものと思われるが、保証の限りではない。異端のガンダムは何としても排除せねばならない。別働隊と共にこれ

を追われたし。と。

(もしかしてこれ……レイジさんのことじゃない……?)

自室にてこの知らせを聞いたユキミが恐怖で全身が粟立つ。口を半開きしたまま、目を不気味に開けたまま、生気を吸い取られたように閉じなかった。

「……どうしたの?」

脇にいたティアに案じられる。しかし、ベッドにうなだれるユキミの耳にはまるで入っていなかった。

「……ねえ、ユキミちゃん。……ねえ!」

ティアにしては珍しく、声を張り上げ、焦燥に駆られたようにユキミの体を揺さぶる。はっとユキミがピクツと動き、ティアに向く。

「……レイジさんが……」

「えっ?」

聞き覚えのある名前をユキミの口から発せられ、思わず聞き返すティア。

「……レイジさんが……うっ、うわああああ!」

両手で顔を覆い、大声で泣くユキミ。

(……今、あなた、レイジって……?)

泣き崩れるユキミの肩を抱くティアは、自分のかつての戦友と同じ名前を呼んだことに動揺していた。

偶然にしては出来過ぎている。レイジのいた勢力からやってきたのだ。きっと彼女は、間違いなくあのレイジと接触している。

「あら、どうしたのかしら」

ルネ・エイブリー少佐は、隣から聞こえるユキミの泣き声に、暢気な声で反応する。

「泣き声、ですね」

ルームメイト、ルネの後輩であるアン・リオネ少尉もこの泣き声に怪訝そうな声をあげる。

「ティアちゃんはああやって泣かないだろうし……」

「捕虜の女の子の方ですかね」

「あー、今は捕虜じゃないみたい。今はもう志願兵みたいよ」

「え、そうなんですか!？ 軍人にしてはあまりに若すぎるんじゃないや」

「……」

アンはユキミが軍人になったと聞いて驚く。実際にちゃんとユキミに会ったことはないが、年頃の少女とは聞いていたアンにとっては当然の反応だろう。

「そうねー」

とだけ答え、暢気にベッドになっところがるルネ。

「ま、ティアちゃんがいるから。大丈夫でしょ」

「何がですか？」

「泣き止むでしよってこと」

左半身を下になっところがりながら、右の人差し指をピンと立てるルネ。愛嬌のある笑顔をアンに向ける。

「そっちの話ですか……」

ガクツと右肩が下がったアン。羽織っている青と黄色の軍服がズレてしまったので、肩をあげ、服装を直すのだった。

「あ、そうそう。アンちゃんはどうなの？ 地上に降りるの？」

「ガンダムの件ですね。まだネオン隊長の意向を聞いていないので何とも……」

長い紫の髪をかきわけ、曖昧な答えを返すアン。

「……つまり、ネオン君についていくってことね」

アンがそれに対し、「隊長の部下ですから」と言い切る前に、

「生・涯」

「……え、どういことですか!？」

どういことかと訊いているアンだが、慌てている様子から半ばアンの意味を理解していたようだった。

「ネオン君についていくんでしょ、生・涯」

「そ、そこまでは言ってますんよ！」

人差し指を立て、おちよくっているような顔をするルネに対し、顔を真っ赤にし、高ぶられる気持ちに乗せられるままに抗議するアン。

「ふふ、冗談よ。だって、ネオン君はあたしのものだもん」

「……え」

気さくに笑ったかと思えば、今度は唇を尖らせ、意地悪そうにドヤ顔をするルネ。子供っぽい部分を隠しもしない先輩ルネに、思わず冷めた反応をしてしまったアン。

「……んもう、アンちゃん冷たい！」

「え、いや……」

しばらく硬直していた両者だが、ルネがおばさんの『あらヤダ』のような手招きの動作をし、対するアンは困惑していた。

「じゃ、ブリーフィングルーム行くよ！」

ベッドに横たわったけだるげだった体を、打って変わって軽快に起こし、アンを促すルネ。ウェーブのかかったなだらかな黒い髪の毛をふわっと揺らしながら部屋を出るルネに続き、アンも部屋を出た。

〵  
〵

「今日からはこいつが入る。ぜひ切磋琢磨し合ってくれ」

フェブラルが連れてきたのは、白い髪の毛をした男の子だった。フェブラルの脇にちょこんと立つその男の子はこちらを見るなり、感情を殺した鋭い視線を浴びせてくる。きっと自分とそう年は変わらないであろうが、どうやら傭兵部隊の生き残りらしい。

「……………」

薄暗い夕方の湿った林の中、男の子はやはり口を開いてくれない。でも、その男の子に見つめられているティアは内気な性格だった。黙っている相手に話しかけるのは苦手だった。フェブラルが互いににらめっこしているティアと『レイジ』に焦れ、

「こら、初対面早々互いを敵視か。仲良くせんと」

気さくにティアとレイジの肩をたたき、二人を促す。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙の多いコミュニケーションの中、レイジがやっと声を出した。

「ちょいとわけありで気難しい奴だからな。まあ、適当に優しくしてやってくれ」

フェブラルはやっと二人が口を開いたのに安堵し、ティアにこう

付け足した。

適当とはどの程度だろう。生真面目なティアは、そんなフェブラルの些細な一言に対してまで真面目に考えていたのだった。

ティア・プライマ。これはフェブラルからもらった名前。ある目的のために造られた人間。生まれた時からフェブラルと一緒に。十一歳になったある日に、この男の子レイジを連れてきた。

この男の子はとても無口。他人とのコミュニケーションを知らない子と一言で言うには、目がまっすぐに異様にしっかりしている。逆に鋭いくらいだ。

「……どうして、ここへ来たの？」

日が暮れていよいよ暗くなった林の中、倒れた朽ち木に並んで腰掛けているティアとレイジ。先に口を開いたのはティアだった。

「知らない」

つつけんどんに、素っ気なく一言で突き放したレイジ。この心の壁を剥がすには時間がかかりそうだ。

くく

（あなたはやっぱり、あのレイジを知ってるのね）

ふと昔のことを思い出し、傍らで顔を覆って泣き止まないユキミの肩を抱くティア。

(あなたになら、できるかも……)

何か確信めいたことを心中で呟くティア。そこに、いつの間にも泣き止んでいたユキミが。

「……何で抱っこしてるの？」

慰めるつもりで抱いていたが、存外早く泣き止んだ。若干目は充血しているが、もう普通の声を出しているユキミだった。

「……じゃあ、行こう。ブリーフィングルームに」

泣き止んだユキミを促し、青に黄色いラインをした軍服を着たティアの小さな体がテトテトと廊下へ出てゆく。ユキミも続いて軍服を直し、廊下に出ると、人感センサーである部屋の照明が消えた。部屋を出ると、同じくブリーフィングルームに向かっているルネとアンに合流した。

「あら、ティアちゃん」

「こんにちは、エイブリー少佐」

この一連のやり取りを見ていたユキミは当然わからないわけで。ティアはそんなユキミの反応を察し、振り返りながら紹介した。

「この人、ルネ・エイブリー少佐」

「あ、こんにちは。ユキミ・サイナー一等兵です」

「あら、一等兵だったの」

「はい。MSは動かせるから、ということでも自動的に一階級特進しました」



もうスパイという自意識が身に染みたのか、彼女にしては機械的に事情を話した。

「そうなの。じゃあ、ブリーフィングルームに急いで」

ルネはほかの三人を促した。こうも女性軍人が多いのは、この時代では珍しいことではなかった。特に大きな女性運動などがあつたわけではないのだが、実力主義のUUでは男女の隔たりなく徴用していた。

北アメリカ大陸の南東端、フロリダ。かつてはスペイン領であつたこの州は気候が穏やかで、宇宙への玄関口『マストライバー』を備える。

今日も夏の陽差しが眩しいここ連邦軍領マストライバーフロリダ基地に、こんな報告が入った。

「何、鹵獲したガンダムが落下してきているのか」

「はい、現在北アメリカ大陸上空を高速落下中とのことですよ」

夏の陽差しが差し込むマストライバーの司令部。軍帽をかぶつた恰幅のいい司令官の座る席の前に、仕官が司令官の脇に立ちながら報告した。

「こちらに落下する可能性もないとは言えん。落下コースの算出は」  
「現在、CICの者がやっております」

「急いで算出させる」

「はっ」

仕官は自席に戻り、目の前に置かれたレーダーに目を向けた。U  
KNOWNと書かれたソナーはコロナ……もといガンダムヴァイ  
ズノートを指している。連邦軍側では、本機は正式登録されてい  
ないためだ。

「出ました！」

「算出が終わったのか？」

「ええ、予想落下地点は、アリゾナ州です」

CICは司令官と仕官に振り向きながら算出結果を述べた。その  
CICの声はどこか浮かなかつた。

「よりもよって厄介なところに……」

司令官も同じく顔を曇らせていた。アリゾナはグラントキャニオ  
ンの所在地。戦車や戦闘機が乗り入れづらい峡谷や山岳地帯は、U  
が幅を利かせていることが多い。このままでは、強奪したコロナ  
を奪われてしまうと司令室内がざわめいた。

「周辺の州に応援を要請しろ。あれをUUに奪われてはならん」

コロナの秘める力はソーラーキャノンで既に実証済み。まだ二発  
しか撃っていないが、一度に数十機ものMSを殲滅できるような超  
兵器を（一応）安定運用できるとなれば、敵に手放したくないのも  
当然である。

「ゲリック・アンダーソン氏にも連絡を入れる」

「は！」

「いっててて……」

：何や、何か視界がぐらんぐらんするんだけど。何となくぼんやりする意識の中、俺レイジは、モニターに移る青い景色に注意を向けた。

「ここは……地球？」

この澄みきったエメラルドグリーン。見慣れた大陸。間違いない、太平洋と北アメリカ大陸や。

「てか何？ 俺、大気圏突入してもうたんか？」

単機で大気圏突入できるとは。このガンダム、やっぱり半端じゃない。

「さて、師匠はどこへやら……」

キーボードを出し、適当に姿勢制御させた。更に、予想落下地点を割り出した。

「グランドキヤニオンか。確か、ボツ設定ではヴァイズノートの発見場所やったな」

ボツ設定。これに関しては後書きで。

「UUのたまり場か。気に食わんな。ルイジアナのニューオーリンズに行くか」

グランドキャニオンのあるアリゾナ州は事実上UU領となっている。ニューオーリンズは大きい都市だし、大陸横断鉄道もあるから、不測の事態が起きたときの移動手段にも困らない。

「土産にロブスターでも食べていくかね」

アメリカで有名な甲殻類の料理を引き合いに出し、降下体勢をとった。操縦桿を握り、ガンダムヴァイズノートを安定させる。

「しかし、気安く使えんな。頭がズキズキするわあ」

そうそう、さっきの戦い、この機体のコンソールに『VNG-X X』と表示されたのを確認した以降、記憶が曖昧だ。このズキズキは多分、この空白の時間内に原因があると見た。

「いざ、ニューオーリンズに」

アメリカ大陸がどんどん近くなる。アリゾナ州から、合衆国南部中央に位置するルイジアナ州に落下地点を変更したため、東寄りに姿勢制御バーニアを吹かせる。

「連邦のニューオーリンズ基地は」

連邦軍の回線に繋ぎ、ニューオーリンズ基地に連絡した。

「こちら出撃コードE-84、コロナガンダム。連邦軍ニューオーリンズ基地、応答されたし」

『こちらニューオーリンズ基地司令部です。どうされました？』

オペレーターの女性らしき声が返ってきた。

「先の宙域戦闘で新型敵機と交戦の末、自機は大気圏に落下。幸い、燃え尽きずに大気圏突入を果たし、現在同基地の上空を降下中。着陸の用地確保をお願いしたい」

『わかりました。司令に打診します』

一旦通信が切れた。あんまり猶予はないんだけどなー。

『レイジ・ヒイラギさんですね。指定座標を送りますので、そこに着陸して下さい』

「了解つす」

程なくして指定座標が届いた。座標は、海に面している基地の内陸側、つまりは裏側を指していた。

「基地の滑走路は使えないのか？」

『先ほど、出撃要請が出ましたので……』

「そうか。わかった」

滑走路は使えない。しゃあない。

通信を切り、指定座標に向かってヴァイズノートを降下させる。

「……ユキミ、大丈夫かな」

オペレーターの声は女だった。ふとユキミのことも思い出した。

今は彼女の持ち前のバイタリテイに頼って無事を祈るしかない。

「しかしよくよくツイてないなア、俺ア。なんでこんな面倒事によオ。よりもよってこいつの正体はヴァイズノートかよ」

師匠、フェブラル・デイドロンから聞かされていた。どうも、歴史に埋もれた幻のガンダムらしい。

「あれ、つーか俺、何でヴァイズノートってわかってたんだ？」

おかしいな、この辺の記憶は曖昧な筈や。

「……まいつか」

記憶喪失になったわけでもあるまいし、わかってても不思議やないか。

そう思い直したところで、ヴァイズノートは指定座標に着陸のしようとしていた。

「ヴァイズノート。ここが人類の生まれ故郷、地球や。俺達は、またここに帰ってきたんだ」

ヴァイズノートにとっては辺境の地だろう。だが、こいつも地球は初めてじゃない。

「ほれ。地球の、辺境の土や。しかと踏み締めな」

砂埃が立ち、ヴァイズノートは静かに着陸した。

「こちらガンダム。指定座標に着陸した」

回線を再度開き、司令部に繋いだ。

『ご苦労様です。係の者がそちらへ参ります。その場でお待ちを。あ、出来ればガンダムをしゃがませて下さい』

「何でや?」

『一応敵からの視認を避けたいということなので。お願いできますか?』

「了解」

目の前にある、三階建て程度の基地に隠れるように、ヴァイスノートに膝をつかせた。

「さて、降りるか」

ハッチを開けると、潮風がコクピット内に薫る。基地からは、あのオペレーターの言った通り、幾多のFDF-07戦闘機が、その武骨な灰色の機体が、地球の空へと出撃していた。

「あれは07（ゼロナナ）か」

次世代機であるトラヤヌスはまだ試作段階。量産には至っておらず、現在でも主力はこの07である。

「よっこらせつと」

コクピットから降りると、戦闘機のエンジン音などが建物越しに聞こえてくる。

「お待たせしました」

聞き覚えのある女性の声が聞こえると思ったら、オペレーターの女性だった。姿は初めて見るが、赤みの強い茶色い髪を適度に伸ばし、背は160cm後半と言ったところか。年齢は大体20半ばくらいだろうか。

「司令部のエレン・リエンです」  
「リエン？」

あれあれ。もしかして誰かさんのお姉ちゃんパターン？

「……失礼だが、姉妹はいてはるか？」  
「ええ、妹がいますけど。なぜ……？」  
「同級生に同じ名字の女子がいたんだが」  
「……その話は後にしましょう。さあ、こちらへ」

慌てる様子もなく、かといって呆れた様子もない何とも言えないような反応でこちらを基地に誘導した。

確かに、姉妹と言われれば髪の色は何となく似ているが、顔の印象はどうかよくわからん。何せ、カナリーの方は眼鏡かけとるし。

「母艦はシグヌスですね」  
「ああ、まあそうだな」  
「先ほど電報を送りましたので、ご安心を」

基地の司令部に入ると、司令官をはじめとした職員がこちらを向いて出迎えてくれた。

「おお、君かね。レイジという男は」



元氣そうな白髭のじいさん司令官が笑うその姿は、深い皺が印象的だった。改めてエレンの方を見る。こんないたいけな若い娘を部下に置くなんて、あいつはエロジジイかよ、とか思いながらそんなじいさんに向き直り、

「着陸許可を頂き、ありがとうございます」

エロジジイ疑惑が立っている（100%偏見）相手だが、礼はしつかりと。

「いやいや、構わんよ。アンダーソン君とは古い仲でね」

「アンダーソン？」

「君が降下してくると連絡を受けるや、決して手荒には扱つなと言われてな」

誰やねん、アンダーソンって。

「ともかく、多少は協力してもらうことになるが、ゆっくりしていつてくれ」

むむむ。虫が良すぎて釈然としないな。何か裏がありそうで。

「……あの、失礼ですがお名前は」

このモヤモヤ感を誤魔化すせめてものアガキだった。

「おお、これは済まない。ジェイクス・ジェライド中将だ」

軍帽を取り、名乗ったじいさん。一見礼儀正しいように見えるじ

いさんだが、それでも風格を残してはる。こいつ、ただ者とちやうで、きつと。

その頃、コロナの行方を見失ったシグナスにニューオーリンズ基地からコロナの無事を知らせる電報が届いた。

「無事だったか！」

「流石だな」

電報を読み上げたオペレーターのヘンリーと、その近くの操舵手アドルフをはじめとしたシグナスクルーは皆胸を撫で下ろした。

友軍のG1の充電も完了し、デッキから見送る姿。ビリーは次の作業に取りかかった。

「G1の04号機の修理はまだかい！」

「もうすぐで終わる！」

切迫状況の中、工場長とオーグが声を張り上げながら作業をしている。

レーダーが指す座標は、地球の低軌道上から北アメリカ大陸に移

った。ガンダムシルヴィアスのコクピットの中、アルバートはこれの正体が依然としてわからなかった。

「地球に落下したのか？」

そうとしか考えられない。そう呟こうとしたその瞬間、ブレストポケットにしまつてある携帯端末が呼び出し音を出した。取り出してみると、父親リチャード・スタンリーだった。

「もしもし」

「アルバートか。父さんだ。コロナが地球に落下したらしい。軍から追討命令は来ていないだろうが、ガンダムシルヴィアスはどうだ？」

「さっきやつと起動したよ。でも、一つ気になることが。さっきからガンダムシルヴィアスは何かを探しているみたいなんだ」

「探している？」

「多分、コロナかもしれない。地球に落下したんでしょ？」

「ああ、そうだ」

「だとしたら、落下地点は北アメリカ大陸。今ガンダムシルヴィアスはそこを指しているよ」

「本当か。アメリカのどこだ」

「合衆国南部、ルイジアナ州」

アルバートは、シルヴィアスの指す座標を見つつ、携帯端末を片手にリチャードに教えた。

「連邦のニューオーリンズ基地か。厄介な所に……」

「どうしたら？」

「ガンダムシルヴィアスで出撃しろ。これぞ、異端を排除する聖戦<sup>ジハード</sup>だ」

「了解！」

『気をつけるよ。敵はジェラル・ネルソンを追い詰めた相手だ』

「ネルソンさんが？」

『撃破はされていないが、機体は中破したらしい』

「……わかった。忠告ありがとう」

交信を切り、携帯端末をポケットにしまった。すぐさま、一旦コクピットの外に出た。

「ノーマルスーツはあるか？」

「出撃なさるのですか？」

外にいた整備兵が聞き返す。

「父からの命令だ。用意できるか？」

「あ、はい。ただ今」

急いで走って行く整備兵。アルバートはシルヴィアスの発進が待ち遠しい。

シルヴィアスも、旧き友の健在に大いに喜び、シルヴィアス自身もまた、まだ発進しないかと焦れているようだった。

アルバートのパーソナルカラー、白とネイビーのノーマルスーツが届き、装備の説明を受けていた。

「システム上、単機での大気圏突破は可能ですが、発動条件が不明なので、両腕にサブ・フライト・システムを備えたシールドを装備させて頂きました」

「発動条件？」

「私も詳しいことはわからないのですが、『発動』しないと耐熱皮

膜が生成されないそうです」

耐熱皮膜。おそらく、それを装甲表面に付着させることによって、本来ならば大気圏突破ができるというわけか。アルバートはそう推定した後、整備兵は説明を続けた。

「元々あった七本の放熱フィンには、うち六本はフィン・ビットに残りの一本はスタビライザーとなっています。なおフィン・ビットは重力下ではうまくオールレンジ攻撃はできません。推進力にも使えるので、そちらの運用をお勧めします」

「わかった。ありがとう」

モニターに移る整備兵の顔が消え、シルヴィアスを発着口に歩ませた。

天井が低く、幅と距離が広大な滑走路。宇宙戦艦の停泊を禁止するラグランジュ0を象徴する玄関口である。彼方に見える出入口から差し込む陽光は、青白く光る地平線のようだった。

「アルバート・スタンリー、SVG・XY……ガンダムシルヴィアス、出陣する！」

戦乱の二世紀の時を経て、ガンダムシルヴィアスの背部スラストー いっぱいに、力強く青白い炎が燃え上がる。

青白く光る地平線に向かって真っ直ぐに突き進んでゆく。アルバートは、地平線の光に照らされるコクピットの中、あてもない壮大な旅の出発の朝日を眺める思いで胸を躍らせる。

地平線を越え、一瞬の光に包まれた後、漆黒の宇宙に乗り込んだシルヴィアス。宇宙の最果てまで曇りなく照らすような、目を瞑りたくなるようなまばゆい金色を陽光に煌めかせていた。

「待っている、コロナ！」

Unit028：辺境の土（後書き）

レイジ「つーわけで」

ガルマン「ちよつと待った！ 当たり前の顔して出てきてるが無事なのか！？ 無事なら無事とちゃんと連絡を寄越せ！」

レイジ「オイオイ、ちゃんとUnit028読んでこいよ」

ガルマン「いや無茶言つなよ！」

ビリー「えー、このままだとなかなか始まりそうにないんで、俺が強引に始めちゃいたいと思いまーす」

レイジ「いえーい」

ガルマン「逃げた！」

ビリー「じゃあまずは、本編でレイジが呟いたボツ設定について補足をどうぞ」

レイジ「あ、すっかり忘れとったわ。当初のガンダムヴァイズノートの発掘場所はグランドキャニオンだったんだけど、設定練り直しの時点でラグランジュ0に変更されたんだ」

ビリー「そのアイロニーとしてグランドキャニオンをUUの前線基地にした、という話も」

ガルマン「へえ」

ビリー「あと、この話に関するボツ設定として、レイジが記憶喪失になることだって」

レイジ「あれま」

ビリー「ボツになった理由として、若干非現実的かつベタすぎるのではないか、ということもボツに。もう一つは、シリアス気味になつてる展開で鬱設定を挿入するのはいかななものか」

ガルマン「というわけでボツになったわけか」

ビリー「その名残として、本話でレイジは『記憶喪失になつたわけでもあるまいし』と呟いています」

レイジ「この作品はボツ設定がまだまだある。その都度紹介できないのになあと思いまーす」

ガルマン「無責任だなオイ」

ビリー「では、恒例の次回予告！」

ガルマン「恒例のつて何だよ。いつもしてねえじゃねえかよ」

レイジ「ガンダムシルヴィアスが出撃！ 以上」

ガルマン「そんな誰だつてわかるわ！ もうちょい内容に踏み込んだ予告しろよ！」

ビリー「そんなわけで」



レイジ「次回もI.Dガンダムを」

ガルマン「夜露死苦！」

.....

ガルマン「いや、漢字変換おかしいだろこれ！」

ビリー「こっ、めっちゃ ケ的な感じで」

ガルマン「ガンダムでこのネタかよ。パロディのジャンル広すぎるわ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0106h/>

---

新戦記IDガンダム～世紀末の復活者～

2011年11月16日14時39分発行